熊本県文化財調査報告　第１０３集

天道ケ尾遺跡（Ⅰ）

九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設に伴う埋蔵文化財調査

１９８９

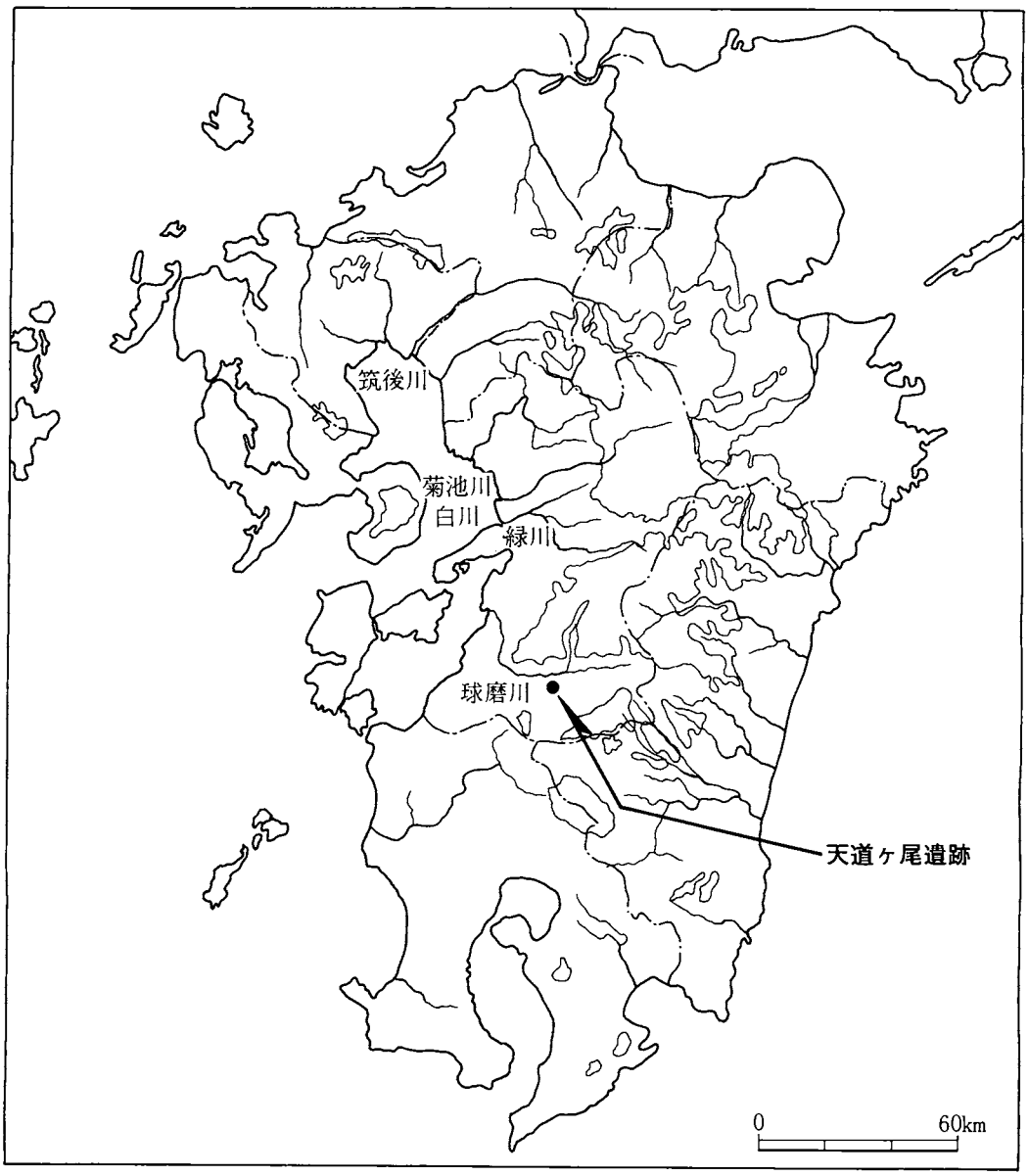
熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第１０３集

天道ケ尾遺跡（Ⅰ）

てんどうがお

九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設に伴う埋蔵文化財調査



１９８９

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、日本道路公団福岡建設局の依頼をうけて九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を進めております。

ここに報告する人吉市七地町天道ケ尾遺跡の発掘調査は、昭和60年度から昭和61年度に実施したものです。この調査は、先土器時代から平安・鎌倉時代にかけての遺構・遺物を検出し、人吉・球磨地方における遺跡の性格を知るうえで、貴重な資料を得ることができました。この報告書が広く活用され、文化財保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたりましては、専門調査委員の先生方の多大な御指導、御助言を賜り、また、日本道路公団人吉工事事務所をはじめ、人吉市教育委員会の御協力を受けました。ここに心から厚く御礼申し上げます。

平成元年３月31日

熊本県教育長　松　村　敏　人

例　言

1．本書は、九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書であり、昭和60年度～昭和61年度に実施した天道ケ尾遺跡の調査報告書の第１分冊である。

2．日本道路公団福岡建設局から委託をうけて、熊本県教育庁文化課が発掘調査を行ったもので、当初、原城跡としていたが、字名から天道ケ尾遺跡（人吉市七地町大字天道ケ尾）と改めた。

3．発掘現場での遺構の実測・写真撮影・遺物の取り上げは、各調査員で行った。遺物の実測は、主として西住欣一郎・本山千絵があたり、一部、網田龍生・岩崎充宏・山下志保が行った。遺構・遺物実測図のトレース、遺構・遺物分布図の作成・トレースは、西住・本山・小嶋由美子・深水美保子・加来恭子・岩根慶子が行った。その他、六田育子・吉内素子・赤木美文・瀬丸延子の協力があった。発掘現場で撮影した写真の焼きつけは白石　厳が、遺物の写真撮影は西住が行った。

4．本書の執筆は、下記の者が行った。

　　隈　昭志　（第Ⅰ章第１節）

　　本山千絵　（第Ⅲ章第４節２の①・第Ⅳ章第２節４）

　　西住欣一郎・本山千絵（第Ⅴ章第２節12）

　　西住欣一郎（上記以外の部分）

5．本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、西住が担当した。

凡　例

1．本書に使用した方位とグリッドは、国土地理方眼を用いた。国土地理方眼の基準点は、日本道路公団人吉工事事務所より提供を受けた。

2．遺物番号は、挿図ごとに１から順次付けており、挿図中の遺物番号は、遺物分布図中の番号と一致する。

3．黒色土器の黒色を呈する部分はSCREEN－TONEで表現した。土師器に付着したススの表現は、黒色の面・線を使った。

4．図版の遺物写真の縮尺は、江戸時代の１号土壙一括出土遺物、墨書土器が約1/2、空風輪が約1/4、板碑が約1/10であり、その他は約1/3である。

5．図版の遺物写真の中で、Ⅱｂ層・Ⅲ層出土土師器には、挿図番号と挿図中の遺物に付した番号を並記した（61－２は第61図で２の番号を付した遺物であることを意味する）。

本　文　目　次

要　旨

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経過……1

第２節　調査の組織……2

第３節　調査の方法……3

第４節　調査の進行状況……4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境……6

第２節　遺跡の歴史的環境……9

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　遺跡の層序について……14

第２節　層序横転について……15

第３節　江戸時代の調査

１．遺構について……21

２．遺物について……29

第４節　平安時代～鎌倉時代の調査

１．(1)の遺構群について……33

２．遺物について……40

３．(2)の遺構群について……44

４．遺物について……82

第Ⅳ章　まとめ

第１節　江戸時代の調査について……139

第２節　平安時代～鎌倉時代の調査について……140

第Ⅴ章　考察

第１節　江戸時代の調査について……147

第２節　平安時代～鎌倉時代の調査について……150

挿　図　目　次

第１図　グリッド配置図・
基本土層実測地点位置図…… 3
第２図　遺跡位置図…… 7
第３図　遺跡周辺地形図…… 8
第４図　周辺遺跡分布図……11
第５図　土層実測図……14
第６図　層序横転実測図……15
第７図　層序横転分布図……17
第８図　江戸時代の検出遺構分布図……19
第９図　１号土壙実測図……21
第10図　１号土壙出土遺物実測図……23
第11図　２号土壙実測図……24
第12図　１号不明遺構実測図……26
第13図　溝跡実測図……27
第14図　溝跡実測図……28
第15図　３号溝跡出土遺物実測図……28
第16図　空風輪実測図……29
第17図　板碑・台座実測図……30
第18図　遺構分布図……31
第19図　１号竪穴住居址実測図……34
第20図　１号竪穴住居址出土遺物実測図…35
第21図　１号土壙実測図……36
第22図　１号土壙出土土師器実測図……37
第23図　土壙実測図……38
第24図　１号炉穴実測図……39
第25図　IIａ層出土遺物分布図…… 41
第26図　土師器実測図…… 43
第27図　遺構分布図……45
第28図　建物跡・道路跡分布図…… 47
第29図　土師器実測図……48
第30図　２号建物跡実測図…… 49
第31図　礎石実測図……51
第32図　３号掘立柱建物跡実測図……52
第33図　４号掘立柱建物跡実測図……53
第34図　５号掘立柱建物跡実測図……54
第35図　６号掘立柱建物跡実測図……55
第36図　７号掘立柱建物跡実測図……56
第37図　８号掘立柱建物跡実測図……57
第38図　９号掘立柱建物跡実測図……59
第39図　10号掘立柱建物跡実測図……60
第40図　11号掘立柱建物跡実測図……61
第41図　12号掘立柱建物跡実測図……62
第42図　13号掘立柱建物跡実測図……63
第43図　14号掘立柱建物跡実測図……64
第44図　15号掘立柱建物跡実測図……65
第45図　16号掘立柱建物跡実測図……67
第46図　17号掘立柱建物跡実測図……68
第47図　18号掘立柱建物跡実測図……69
第48図　19号掘立柱建物跡実測図……70
第49図　20号掘立柱建物跡実測図……72
第50図　21号掘立柱建物跡実測図……73
第51図　22号掘立柱建物跡実測図……74
第52図　23号掘立柱建物跡実測図……75
第53図　１号ピット実測図……76
第54図　１号ピット出土土師器実測図……76
第55図　道路跡実測図……77
第56図　道路跡出土遺物実測図……77
第57図　土壙実測図……79
第58図　土壙実測図……81
第59図　土壙実測図……82
第60図　IIｂ層・III層出土ヘラ切り底の
土師器分布図…… 87

第61図　土師器実測図…… 89
第62図　土師器実測図…… 90
第63図　土師器実測図…… 91
第64図　土師器実測図…… 93
第65図　土師器実測図…… 94
第66図　土師器実測図…… 96
第67図　土師器実測図…… 98
第68図　土師器実測図…… 99
第69図　土師器実測図……101
第70図　土師器実測図……102
第71図　土師器実測図……104
第72図　土師器実測図……105
第73図　土師器実測図……106
第74図　土師器実測図……107
第75図　土師器実測図……108
第76図　土師器実測図……110
第77図　土師器実測図……111
第78図　土師器実測図……112
第79図　須恵器実測図……114
第80図　IIa層・IIb層・III層出土遺物分布図……115
第81図　黒色土器実測図……118
第82図　土師器（墨書）実測図……121
第83図　青磁・白磁実測図……122
第84図　土錘実測図……123
第85図　建物跡配置模式図（1）……151
第86図　建物跡配置模式図（2）……152
第87図　建物跡配置模式図（3）……153
第88図　建物跡配置と遺物接合関係図……155
第89図　気候区分図……168
第90図　熊本県の年平均降水量……168
第91図　天道ケ尾遺跡と河川関係図……170
第92図　ヘラ切り土師器タイプ別分布図（1）……174
第93図　ヘラ切り土師器タイプ別分布図（2）……175
第94図　ヘラ切り土師器タイプ別分布図（3）……176
第95図　ヘラ切り土師器タイプ別分布図（4）……177

表　目　次

第１表　調査進行表…… 5
第２表　周辺遺跡一覧表…… 13
第３表　１号土壙出土土師器法量表…… 37
第４表　土師器法量表…… 40
第５表　礎石一覧表…… 52
第６表　土師器法量表…… 84
第７表　土師器法量表…… 84
第８表　土師器法量表…… 85
第９表　土師器法量表…… 85
第10表　遺物観察表……124
第11表　土器・陶磁器類の組成表（1）…161
第12表　土器・陶磁器類の組成表（2）…162
第13表　土器・陶磁器類の組成表（3）…163
第14表　土師器坏・皿のススト付着状況観察表……165

図　版　目　次

図版１　遺跡航空写真
図版２　遺跡遠景・近景写真
図版３　基本土層と江戸時代の１号土壙・２号土壙・１号不明遺構・３号～５号溝跡
図版４　平安時代～鎌倉時代の調査　III・IV区の遺構検出状況と１号竪穴住居址
図版５　平安時代～鎌倉時代の調査　１号・

２号・５号・６号土壙、１号ピット、２号建物跡
図版６　平安時代～鎌倉時代の調査　Ⅰ区遺構検出状況、３号～12号掘立柱建物跡とピット群
図版７　平安時代～鎌倉時代の調査　３号～12号掘立柱建物跡
図版８　平安時代～鎌倉時代の調査　13号～22号掘立柱建物跡
図版９　平安時代～鎌倉時代の調査　23号掘立柱建物跡、７号～９号・11号～13号・16号土壙
図版10　平安時代～鎌倉時代の調査　17号・18号土壙、Ⅱｂ層・Ⅲ層遺物出土状況
図版11　平安時代～鎌倉時代の調査　Ⅱｂ層・Ⅲ層遺物出土状況
図版12　江戸時代の調査　１号土壙出土遺物
図版13　江戸時代の調査　３号溝跡出土遺物、空風輪・板碑
平安時代～鎌倉時代の調査　１号竪穴住居址・１号ピット・２号建物跡Ｐ３出土遺物
図版14　平安時代～鎌倉時代の調査　１号土壙・道路跡出土遺物、Ⅱａ層・Ⅱｂ層・Ⅲ層出土土師器（Ｄ－Ⅰ類）
図版15　平安時代～鎌倉時代の調査　Ⅱｂ層・Ⅲ層出土土師器（Ｄ－Ⅰ類・Ｄ－Ⅱ類・Ｄ－Ⅲ類）
図版16　平安時代～鎌倉時代の調査　Ⅱｂ層・Ⅲ層出土土師器（Ｄ－Ⅲ類・Ｄ－Ⅳ類・Ｄ－Ⅴ類）
図版17　平安時代～鎌倉時代の調査　Ⅱｂ層・Ⅲ層出土土師器（Ｄ－Ⅴ類・Ｅ－Ⅰ類－ａ・Ｅ－Ⅰ類－ｂ・Ｅ－Ⅰ類－ｃ・Ｅ－Ⅱ類）
図版18　平安時代～鎌倉時代の調査　Ⅱｂ層・Ⅲ層出土土師器（Ｅ－Ⅱ類・Ｅ－Ⅲ類・Ｆ－Ⅰ類・Ｆ－Ⅱ類－ａ）
図版19　平安時代～鎌倉時代の調査　Ⅱｂ層・Ⅲ層出土土師器（Ｆ－Ⅱ類－ａ・Ｆ－Ⅱ類－ｂ・Ｆ－Ⅲ類－ａ・Ｆ－Ⅲ類－ｂ・Ｆ－Ⅳ類－ａ）
図版20　平安時代～鎌倉時代の調査　Ⅱｂ層・Ⅲ層出土土師器（Ｆ－Ⅳ類－ａ・Ｆ－Ⅳ類－ｂ・Ｇ－Ⅰ類・Ｇ－Ⅱ類）
図版21　平安時代～鎌倉時代の調査　Ⅱｂ層・Ⅲ層出土土師器（Ｇ－Ⅲ類・Ｇ－Ⅳ類－ａ・高台付土師器）、須恵器
図版22　平安時代～鎌倉時代の調査　Ⅱｂ層・Ⅲ層出土須恵器、青磁・白磁
図版23　平安時代～鎌倉時代の調査　Ⅱｂ層・Ⅲ層出土黒色土器・墨書土器
図版24　平安時代～鎌倉時代の調査　Ⅱｂ層・Ⅲ層出土墨書土器・土錘

要　旨

江戸時代の調査

江戸時代の調査で、検出した遺構は、1号・2号土壙、1号不明遺構、1号～5号溝跡である。これらは、調査区のほぼ中央部の標高が最も高い箇所に分布する。1号・2号土壙は、Ⅰ層出土の空風輪・夫婦墓碑（夫が妻を供養するために建立したもの）と関連するもので、墓地的性格をもつと考えた。1号土壙より一括出土した遺物には、和鏡・銅製品・鉄製品・磁器・紙片・布片がある。これらの遺物は、女性の化粧道具であり、出土状態から鏡台等の箱状のものの中に収納された状態で燃やされたと想定できる。出土遺物の中に、歯黒めの時に使用する羽楊枝と思われるものがあり、化粧道具は既婚女性のものと考えた。このことより、1号土壙は夫婦墓碑と関連すると思われる。

平安時代～鎌倉時代の調査

検出した遺構は、覆土より大きく二つに分けることができる((1)・(2)の遺構群)。1号竪穴住居址・1号～6号土壙・1号炉穴・ピット79基は、Ⅱa層とほぼ同一か類似する覆土をもち、(1)の遺構群を構成する。(1)の遺構群はⅢ区・Ⅳ区に分布する。(2)の遺構群の殆どは、4142基のピットである。これらの中で、3号～23号の掘立柱建物跡が確認できた。その他の遺構には、2号建物跡（礎石を伴う）・7号～17号土壙・1号ピット・道路跡がある。(2)の遺構群を構成する遺構は、Ⅲ層とほぼ同一か類似する覆土をもち、Ⅰ区北東部の緩傾斜地に分布する。

(1)の遺構群　(1)の遺構群は、分布状況より2グループに分けることができる。また、1号土壙より9個体の糸切り底の土師器坏類が一括出土した。これらの土師器は、後述するⅡb層・Ⅲ層出土の土師器より後出するものである。

(2)の遺構群　2号建物跡・3号～23号掘立柱建物跡は、三方向の異なる建物主軸をもち、最多の重複が三棟である。このこととⅡb層・Ⅲ層出土遺物の分布状況を併せて考えると、建物跡には3時期の変遷があると思われる。それらの時期は、これらの建物跡に伴うと判断したⅡb層・Ⅲ層出土遺物より、9世紀～13世紀の前半頃と考えた。Ⅱb層・Ⅲ層出土遺物の主体になるのは、土師器の坏類である。日常生活に用いる煮炊具・調理具・貯蔵具が欠如していることより、検出した建物跡は日常生活に使用したものでないと考えた。土師器の坏類のスス付着率が高いこと、水に関係する文字を墨書した土師器、遺跡の立地・環境より判断して、建物跡の周辺では、遺跡の前方に流れる球磨川を信仰対象にした祭祀（洪水を恐れての祭祀）を行ったと推察した。

遺物について　Ⅱb層・Ⅲ層より出土したヘラ切り底の土師器坏類は、9世紀～13世紀の前半頃の時期幅に含まれると考えた。糸切り底の土師器坏類は、13世紀の前半頃に出現すると思われる。

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

九州縦貫自動車道建設予定の八代地区発掘調査中の県教育委員会に、日本道路公団福岡建設局から昭和52年３月29日付けで、八代～えびの間の分布調査の依頼があった。県教育委員会では体制を整えて同年８月４～６日及び８月10～12日の前後２回にわたる分布調査を行った。その結果下記の18遺跡が確認された。

八代市（東片町古墳群、上片町条里遺構）、球磨郡山江村（淡島遺跡、狸谷遺跡、本城遺跡、高城跡、大丸遺跡）、人吉市（笹栗山遺跡、梢山遺跡、佐無田狩所遺跡、石清水遺跡、七地条里遺構、尾丸横穴群、原城跡、尾丸古塔碑群、七地遺跡、人我胸遺跡、昼子遺跡）

上記の遺跡のうち東片町古墳群～大丸遺跡が八代インターチェンジ―人吉インターチェンジ間、笹栗山遺跡～昼子遺跡が人吉インターチェンジ―宮崎県境に存在する。

本報告書で取りあげる原城跡、尾丸古塔碑群は後半の調査でチェックした遺跡で、その際の調査は隈　昭志、杉村彰一、島津義昭、田添夏喜の４名であった。分布調査時の所見は、原城跡については「当該地は、伝原城（人吉城関連遺跡）の東岸に位置する丘陵先端部で「尾丸」という字名を残す。地理的にも地形的にも伝原城の一部をなしている可能性が強く、地元にも―この丘陵地の一隅に原城の殿様の休息地があって、しばしば殿様が訪れていた―という伝承がある。休息地には庭園も造られていたとの事である。尾丸には空堀形状の凹道も観察され、多量の土師質土器が散布している。」、尾丸古塔碑群については「原城跡と思われる尾丸台地のくびれ部のすぐ南に接する畑の畦に、板碑、五輪塔の残欠が積んである。碑には元禄年間の記銘のあるものがあり、おそらくこの周辺に墓地があったものを集積したものと思われる。」と記載されている。この結果を昭和52年９月９日付けで日本道路公団福岡建設局へ回答した。その後同公団から昭和53年４月11日付けで文化庁長官あての協議書が提出され、熊本県教育委員会の意見を付して同年５月19日付けで文化庁長官あてに具申した。文化庁からは、昭和53年６月12日付けで「熊本県教育委員会と協議の上事前に発掘調査を実施すること。なお、調査の結果、重要な遺構等が発見されたときは、設計変更等によるその保存に配慮すること。」という通知があった。昭和56年度から熊本県教育委員会は日本道路公団の依頼を受け、各遺跡の試掘を開始した。原城跡については昭和58年１月～３月に行い、文化課大田幸博、黒田裕司が担当した。試掘の結果は全面に縄文時代、平安時代の遺構が存在し、その下層に先土器時代の遺物を包含していることがわかった。日本道路公団と協議のうえ、本格的な発掘調査は昭和60年度から実施することになり、文化課西住欣一郎、黒田裕司、最上敏が担当することになった。

なお、「原城跡」の名称はその後の文献等の調査により適切でないので、字名をとって「天道（でんどう）ケ尾（かわ）遺跡」と改めた。

第2節　調査の組織

昭和60年度～昭和61年度・昭和63年度の調査組織は、次のとおりである。

昭和60年度～昭和61年度〔現地調査〕

調査責任者　森　一則（文化課長）・丸木保賢（文化課長）・林田敏嗣（文化課課長補佐）
隈　昭志（文化課課長補佐〔文化財調査係長〕）

調査主査　大田幸博（文化課文化財保護主事）

調査担当者　西住欣一郎（文化課文化財保護主事）・黒田裕司（文化課嘱託）・最上　敏（文化課嘱託）・松舟博満（文化課臨時）・永田　満（文化課臨時）

専門調査員　白木原和美（熊本大学文学部教授）・甲元真之（熊本大学文学部助教授）
賀川光夫（別府大学学長）・橘　昌信（別府大学文学部教授）・工藤敬一（熊本大学文学部教授）・大三輪龍彦（鶴見大学教授）・阿蘇品保夫（熊本県立美術館主幹）・田辺哲夫（元文化課課長）・三島　格（肥後考古学会会長）

調査事務局　柴田和馬（文化課主幹）・森　貴史（文化課参事）・谷喜美子（文化課主任主事）

道路公団　坂巻持千男（人吉工事事務所所長）・古賀文男（人吉工事事務所庶務課長）
岩永一男（人吉工事事務所庶務課長）・村田文敏（人吉工事事務所工務課長）
辻　正信（人吉工事事務所工務課長）・藤田重幸（人吉工事事務所工務課）

昭和63年度〔報告書作成〕

調査責任者　江崎　正（文化課長）・林田敏嗣（文化課課長補佐）・隈　昭志（文化課課長補佐）・桑原憲彰（文化財調査第2係長）・松本健郎（文化財調査第1係長）

報告書担当者　西住欣一郎（文化課文化財保護主事）・本山千絵（文化課嘱託）・小嶋由美子（文化課臨時）・深水美保子（文化課臨時）・岩根慶子（文化課臨時）

調査事務局　松崎厚生（文化課主幹）・上村裕司（文化課主事）・泉野順子（文化課主事）

調査協力者〔昭和60年度～昭和61年度・昭和63年度〕

球磨教育事務所・人吉保健所・人吉市教育委員会

河口貞徳・高田素次・戸崎勝洋・中村耕治・池畑耕一・木﨑康弘・前川清一・鶴島俊彦・高木恭二・菖蒲和弘・石工みゆき・溝口真由美・村山清子・高場一郎・加来恭子・六田育子・吉内素子・綱田龍生・岩崎充宏・山下志保・赤木美文・瀬丸延子

第３節　調査の方法

（第１図）

調査区は試掘（大田・黒田担当）の成果により、設定した。

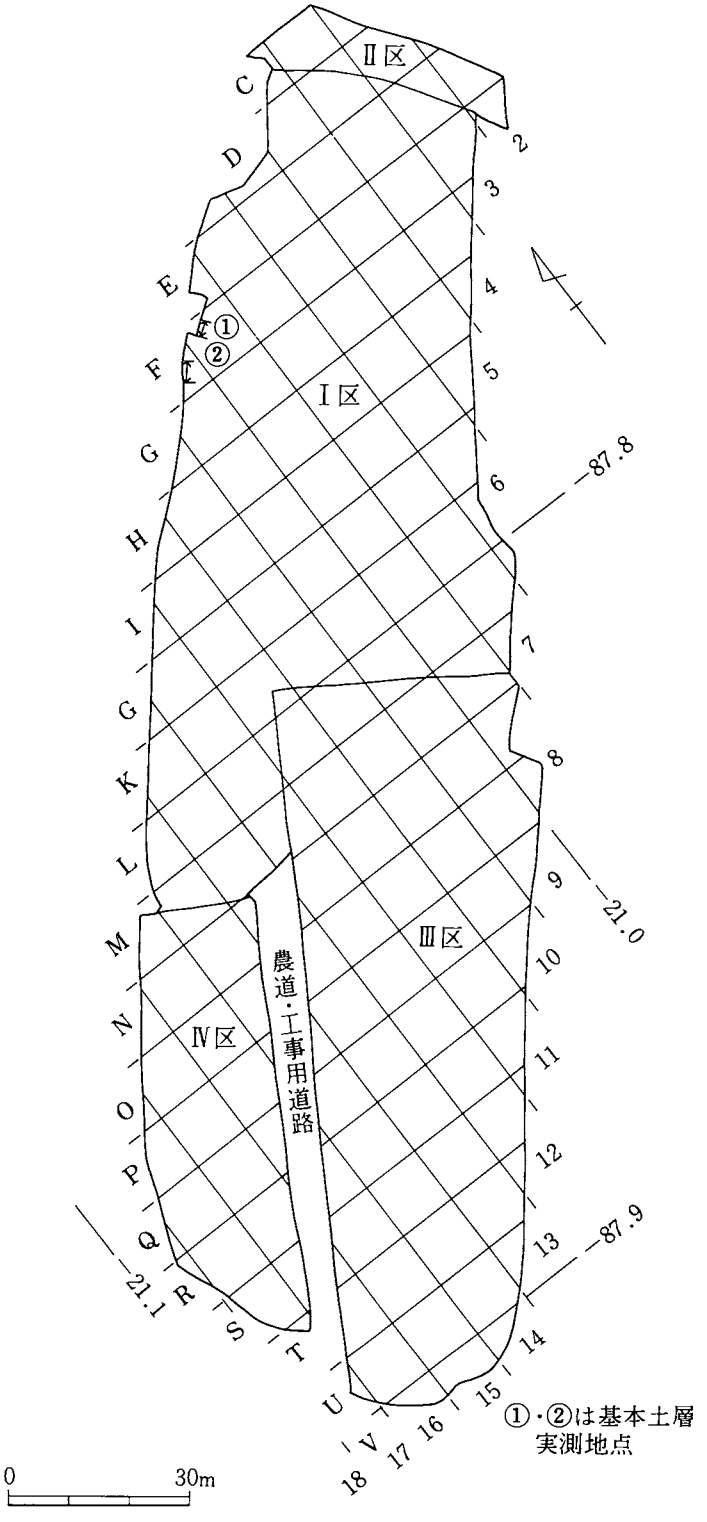
農道及び工事用道路は、農作物や橋脚工事の進入路のために必要であり、調査区に含めなかった。

調査区の呼称は、北東隅より南西方向にII区・Ⅰ区とし、農道及び工事用道路の北西側をⅣ区、南東側をⅢ区とした。

日本道路公団人吉工事事務所から、国土地理方眼の基準杭の提供を受けて、グリッドは、調査区全体に国土地理方眼による10m×10mのグリッドを設定した。

グリッドの区画は、北から南へC～Vとし、東から西へ２～18とした。

Ⅰ層は重機で剝ぎとり、II層～Ⅷ層は、順次発掘調査を行った。II層～Ⅶ層の調査では、10m×10mのグリッドを用い、必要に応じてグリッドの壁を外して拡張した。Ⅷ層（先土器時代）の調査では、５m×５mの小グリッドを設定し、全調



第１図　グリッド配置図・基本土層実測地点位置図

査区の各グリッドに、小グリッドによる調査を最低1箇所行い、遺物・遺構を検出した際に、その小グリッドの周囲を調査した。

各遺物包含層で検出した遺物は、1点ずつ出土地点を記録して取り上げた。各遺物包含層での掘り下げは、基盤面と考えられる所まで行い、各層での旧地形を復原することに努めた。

出土した遺物の水洗と注記は、発掘調査と並行して、文化課人吉事務所で行った。発掘調査終了後、熊本県文化財収蔵庫で、残りの出土遺物の水洗と注記、遺物の接合等の整理作業と報告書作成を行った。出土遺物は、熊本県文化財収蔵庫に保管している。

第4節　調査の進行状況（第1図・第1表）

天道ケ尾遺跡の発掘調査は、昭和60年7月から昭和62年3月まで行った。調査区の総面積（約13000㎡）と調査全体の進行上の理由により、発掘調査は、Ⅰ区～Ⅳ区に分けて実施しなければならなかった。各調査区の調査進行状況と調査担当者は、下記の通りである。

Ⅲ区　昭和60年7月から同年9月まで、黒田・永田がⅢ区の調査を担当した。

Ⅱ区　Ⅱ区の範囲は、橋脚工事の進入路としての必要性から、昭和60年9月から同年10月にかけて調査を実施した。調査は松舟が担当した。

Ⅲ区
Ⅳ区　鼓ケ峰遺跡[1]の調査終了後の昭和60年10月から、西住・最上が先にⅢ区の調査に入っていた黒田・永田に合流した。Ⅲ区・Ⅳ区の調査は、昭和61年5月まで行い、Ⅲ区は主に黒田・永田が、Ⅳ区は主に西住・最上が担当し、調査の必要上、西住・最上・黒田・永田の四者が合同で調査を行う箇所もあった。

Ⅰ区　Ⅰ区の調査は、昭和61年5月から昭和62年3月まで行った。西住・最上が調査を担当した。発掘調査以外の仕事として、膨大な量の排土流失を防止するために、昭和61年6月に行った排土場の防災工事があった。

各調査区の詳細な調査進行状況は、調査日誌を整理した第1表の通りである。

調査期間中、各専門調査員の方々より調査の御指導を受けた。また、河口貞徳・戸崎勝洋・中村耕治・池畑耕一・松本健郎の各氏からは、地下式横穴墓や鹿児島県内の土器のことで、また、高田素次氏より相良氏関連のことで御教示を受けた。

また、県文化課文化財調査係の現地検討会が昭和62年3月に行われ、文化財調査係員によって、調査成果の検討を行った。

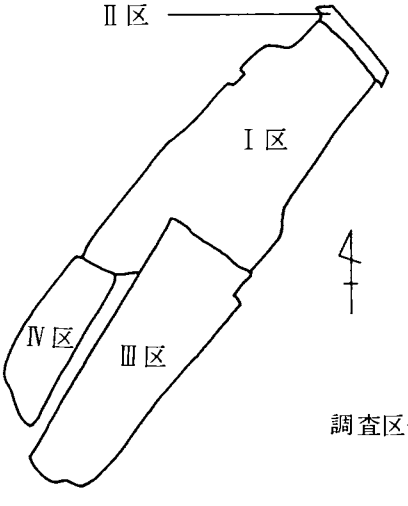
註（1）　西住欣一郎　『鼓ケ峰遺跡』　熊本県文化財調査報告　第96集　1988年

第１表　調査進行表

	昭和60年7月	8月	9月	10月	11月	12月	昭和61年1月	2月	3月
調査内容	Ⅱ区の調査 Ⅱa層～Ⅷ層の調査 Ⅱ区北東部の斜面調査 Ⅴ層の調査 Ⅵ層の調査 表土剝ぎ　抗打ち、Ⅱa層・Ⅲ層の調査 Ⅳa層・Ⅳb層の調査 Ⅲ区の調査 ピット群の調査 Ⅶ層掘り下げ Ⅷ層の調査 Ⅳ区の調査 表土剝ぎ　抗打ち、Ⅱa層・Ⅲ層の調査 Ⅳa層・Ⅳb層の調査 ピット群の調査 Ⅴ層の調査 Ⅶ層掘り下げ Ⅵ層の調査								
備考					○白木原先生調査指導 ○三島先生調査指導 ○甲元先生調査指導 ○森課長・隈課長補佐・柴田主幹調査指導 ○橘先生調査指導 ○賀川先生調査指導			○工藤・田辺・阿蘇品先生調査指導	

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
調査内容	Ⅷ層の調査 Ⅲ区の調査 Ⅰ区の調査 集石01調査 ピット群調査 排土場防災工事 Ⅷ層の調査 Ⅱb層・Ⅲ層の調査 Ⅴ層の調査 Ⅳ区の調査 表土剝ぎ Ⅳa層・Ⅳb層の調査 Ⅵ層の調査								
備考								○東間小六年生見学研究会見学 ○人吉・球磨社会科 ○渡小立野分校見学	

	昭和62年1月	2月	3月
調査内容	Ⅵ層の調査 Ⅶ層掘り下げ Ⅷ層の調査		
備考	○隈課長補佐・桑原参事調査指導 ○人吉・球磨校長会見学 ○甲元先生調査指導 ○賀川・橘先生調査指導 ○林田課長補佐調査指導 ○白木原先生調査指導		



調査区位置図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境（第２・３図）

天道ケ尾（てんどうがお）遺跡は、熊本県人吉市大字天道ケ尾に位置する。

熊本県は九州のほぼ中央部にあり、西側は八代海に面した天草の上島・下島などの島嶼地域で構成され、北東から南東にかけての端部は、九州山地の山岳地帯である。その九州山地に囲まれた球磨盆地は熊本県の南東部に存在し、遺跡の所在する人吉市が球磨盆地の西側に位置する。人吉市の南端部には、鹿児島県・宮崎県との県境があり、人吉市のほぼ中央部を球磨川が西流する。

球磨川は、緑川・氷川・水俣川等とともに、熊本県南部の代表的河川であり、日本三大急流の一つとして名高い。球磨川は、その源を九州山地に発し、球磨盆地の北側から発する川辺川・万江川や球磨盆地の南側山地より流れ出る小支流と合流し、八代海に至るまで殆どが山岳地帯を流れている。

球磨川の南部・北部には、広大な台地が形成される。南部の台地は、主として白髪岳に由来する古扇状地が重なってできた複合扇状地であり、北部の台地は、阿蘇熔結凝灰岩及びシラスを基盤とする。沖積平坦面は、球磨川及びその支流沿いに細長く存在する。

球磨川は、中流域で川辺川と合流し人吉市にはいると大きく北側に屈曲し、さらに、下流にいくと西側に再び流路を変える。この球磨川の流路が大きく変更する箇所とさらに下流で球磨川と合流する胸川とに挟まれたシラス及び阿蘇熔結凝灰岩を基盤とする台地上に、数々の遺跡が存在する。

この台地は、現在、肥薩線が通っている谷部によって大きく東西二つの台地に分けられる。

東側の台地は、さらに数箇所の平坦面をもつ台地に細分できる。数箇所ある台地の平坦面の中で、天道ケ尾遺跡が立地する台地は、北東端部に位置し、北東方向の球磨川に向かってのび、ほぼ長方形に突出している。

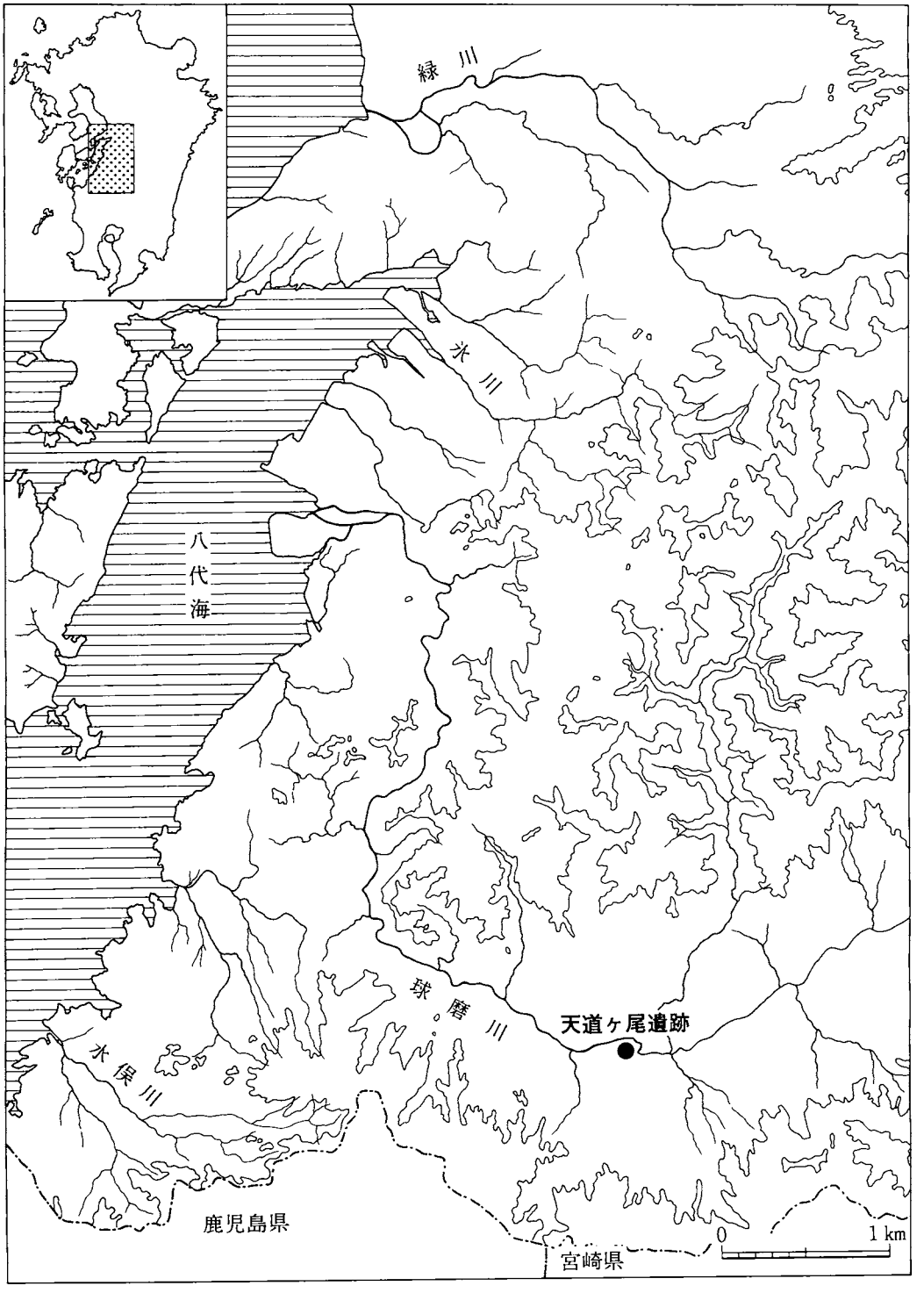
台地の先端部に立てば、下方に水田が広がり、その先前方に北西方向及び西側に流れる球磨川や球磨川右岸の台地が見える。台地の平坦面は、標高約140.0～145.0mあり、東から北東側の水田面との比高差は約12.0～16.0m、北側の水田面との比高差は約36.0～40.0mを測る。

台地の南から南東方向の下方約18.0～20.0mには、現在の七地の集落がある。

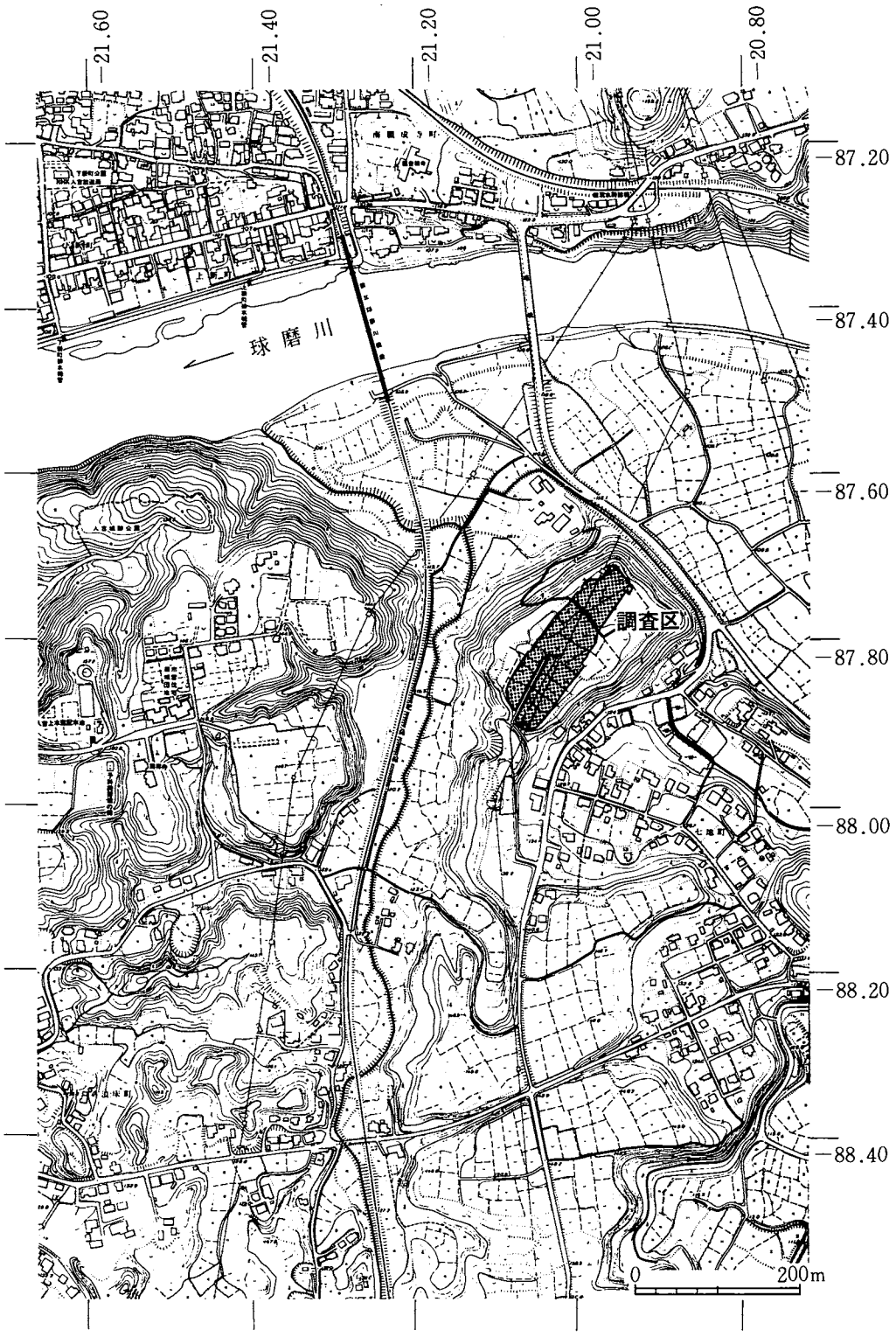
天道ケ尾遺跡の調査区は、ほぼ長方形を呈する台地平坦面のほぼ中央部を北東から南西方向に横切る状態で細長く存在する。調査区の南西端部付近より、台地の平坦面は、極端に狭くなり、入り込んだ谷に沿って背後の台地に続く。

参考文献

『あるいて見る九州の土壌』　土壌研究会　1982年



第２図　遺跡位置図


21.60
21.40
21.20
21.00
20.80
87.20
87.40
87.60
87.80
88.00
88.20
88.40
球磨川
調査区
0
200m

第３図　遺跡周辺地形図

第２節　遺跡の歴史的環境（第４図・第２表）

天道ケ尾遺跡が位置する人吉市の周辺には、各時代の遺跡が分布している。ここでは、天道ケ尾遺跡の周辺に分布する遺跡を、(1) 球磨川左岸の天道ケ尾遺跡近接地域、(2) 球磨川右岸の (1) 地域の対岸地域、(3) 山田川流域の３地域に分けて見てみる。

(1) の地域に分布する遺跡

天道ケ尾遺跡が立地する台地の北東端部には、凝灰岩の崖面に穿たれた天道ケ尾横穴群がある。天道ケ尾横穴群の分布地点は、石切り場として後世に利用してあり、現在露出している２基の横穴墓が奥壁や奥壁付近を残すだけである。横穴墓の奥壁部分と思われるものがもう１箇所あるが、残存状況が悪く、横穴墓の正確な基数は不明である。確認できた２基の横穴墓の間は、数十ｍあり、10基前後の横穴墓が存在したことが想定できる。

また、現在露出している横穴墓より下段に、横穴墓が埋没している可能性もある。天道ケ尾遺跡で検出した地下式横穴墓は台地上にあり、先述のように、横穴墓が同じ台地の崖面に分布する。両者の異なった墓制が近接して存在しており、相互の関連性が注目できる。

この天道ケ尾横穴群の道路を隔てた北東方向には、七地（ひちち）水田遺跡が存在する。この遺跡では、ほぼ南北の畦畔をもった中世の水田跡・洪水層、縄文時代後期・晩期の土器や多量の打製石斧が検出されている[1]。

また、天道ケ尾遺跡が位置する台地のほぼ北側裾部から低地にかけての所に、御薬園（おやくえん）がある。この御薬園は、江戸時代、相良家の別邸であったが、本来は岡本河内守頼真の屋敷跡とされている。岡本河内守頼真は、天文６年（1537年）に生まれ、相良家18代の領主、相良義陽の家臣であった。先述した七地水田遺跡範囲内の低い独立丘陵上に、岡本河内守頼真の墓である五輪塔と先妻と後妻の墓と思われる自然石の板碑と五輪塔がある[2]。御薬園（河内守の屋敷跡）の敷地内の南東隅にある大木の傍らには、正和６年の銘をもった角塔婆が立っている[3]。

天道ケ尾遺跡の南西方向の低地には、常秀寺（しようしゆうし）跡があり、天道ケ尾遺跡の背後にある台地上には、七地（ひちち）遺跡がある。常秀寺跡には、中世末～江戸時代の墓地群が存在した。七地遺跡では、縄文時代・弥生時代の土器片、中世の土師器片などの資料が表採された[4]。また、七地遺跡より南東方向で、球磨川が大きく流路を北側に変える地点の左岸には、花立（はなたて）遺跡がある。花立遺跡は、縄文時代中期・後期の遺跡である。

天道ケ尾遺跡の西側には、谷が形成されており、現在その谷部を肥薩線が通っている。その谷部の西方で、西流する球磨川と球磨川の支流である胸川とに挟まれた台地上に、近世の人吉城跡と中世の人吉城である原城（はらしよう）跡が立地する。原城跡は、人吉市教育委員会により発掘調査が行われ、次のことが判明している。原城跡は、急峻な自然地形を利用して空堀・堀切を作り、上原城・中原城・下原城・内城・三の丸・出丸で構成されていた。本丸に相当する上原城の中

央部では、一辺が約100m、高さ約1.5mを測る方形の区画内に掘立柱建物跡２棟と半地下式の小型な建物跡が検出された。掘立柱建物跡は、城主の館の一部であり、半地下式の小型な建物跡は、家臣の建物であると考えられている。また、上原城の西側部分には、礎石をもつ建物跡が検出され、その他にも礎石をもつ建物跡の存在が想定され、倉庫群と思われる。近世の人吉城の築造の際には、その前身である原城跡の施設を利用していることが城門の位置より考えられている[5]。

(2) の地域に分布する遺跡

球磨川を挟んで、天道ケ尾遺跡の対岸の台地上に分布する代表的な遺跡として、鼓ケ峰遺跡・石清水遺跡・二本松遺跡・上ノ寺遺跡・新山不動堂跡などが挙げられる。 鼓ケ峰遺跡は、先土器時代から鎌倉・室町時代にかけての複合遺跡である。先土器時代の石器は、ＡＴの上位層より出土し、その石器組成はこの遺跡と近接する大丸・藤ノ迫遺跡・狸谷遺跡Ⅱ文化層より出土したものと類似する[6]。縄文時代の遺物では、早期の手向山式土器、前期の曽畑式土器・轟式系の土器、中期の船元式系の土器、後期の南福寺式土器・出水式土器、晩期前半の土器がある。縄文時代の遺構としては、早期の集石、前期～中期の竪穴住居址・土壙・炉穴、後期～晩期の土壙・小土壙群・ピット群などが検出された。前期～中期の遺構配置状況には、広場的な場の利用の萌芽が感じられる。さらに、後期～晩期での環状を呈した遺構配置状況より、中央部を広場として利用したことが考えられる。弥生時代では、後期～終末の竪穴住居址・土壙などが検出された。鎌倉・室町時代の遺構には、道路跡・掘立柱建物跡・溝跡などがある。２・３号掘立柱建物跡は、平行型二棟造の民家構造に類似する[7]。

二本松遺跡・上ノ寺遺跡には、先土器時代・縄文時代～中世の表採遺物があり、鼓ケ峰遺跡と同じ台地上にある点を考えると、両遺跡は鼓ケ峰遺跡と一連の遺跡であることが想定できる。また、石清水遺跡は、鼓ケ峰遺跡が位置する台地の南端裾部にあり、押型文土器が高田素次氏により、道路拡張工事の際に採集されている。この土器は、底部が弱い上げ底で、胴部に僅かな屈曲が見られる[8]。

新山不動堂跡は「相良家文書」の中で、蓮花王院領人吉庄が下地中分される際に、第１の傍示を打った地点を説明する場所として記載がなされている[9]。新山不動堂跡は、鼓ケ峰遺跡から南西方向に約400m下った所にある。鼓ケ峰遺跡で検出された鎌倉時代・室町時代の道路跡の中で、最古の道路跡は、下地中分された頃のものであり、道路がのびる方向より、新山不動堂跡と接続する可能性がある[10]。

(3) の地域に分布する遺跡

山田川流域に分布する代表的な遺跡には、右岸に位置する村山遺跡、大村横穴群や左岸に位置する大丸・藤ノ迫遺跡、高城跡などがある。村山遺跡は、山田川と球磨川との合流地点の北西側にある裾周りがほぼ円形を呈する独立した台地上に立地する。台地の平坦面や傾斜が緩や

第４図　周辺遺跡分布図

かな所が村山遺跡の範囲であり、遺跡の広がりとしては広大である。人吉市教育委員会がこの遺跡の一部分を調査し、縄文時代早期の集石が多数確認された[11]。

大村横穴群は、村山遺跡が立地する台地の裾部にある凝灰岩の崖面に築造されている。大村横穴群では、幅約550mの所で26基の横穴墓が確認されている。第4・5・7・11・13・14・15b号横穴墓には、浮き彫り・線刻や彩色による装飾が見られる。装飾図文は、盾・靫・剣・刀子・弓・三角文・円文・馬などである。これらの装飾が施されるのは、15b号横穴墓以外はすべて横穴墓の外壁である。このような横穴墓の外壁に装飾をもつ横穴墓は、県北の菊地川流域に多く分布しており、それとの関連が注目できる。また、大村横穴群は、同地域の京ガ峰横穴群や小原横穴群と共に装飾をもつ横穴墓の南限である[12]。大丸・藤ノ迫遺跡は、山田川の支流である鬼木川に面した丘陵地に位置する。丘陵地の平坦面より、先土器時代、縄文時代早期・前期・後期・晩期、弥生時代後期、歴史時代の遺物が出土した。中でも、縄文時代早期の塞ノ神式土器が良好な状態で多量に出土した[13]。

高城跡は、山田川左岸の南西方向にのびる丘陵上にある。高城跡は8郭よりなる中世城で、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ郭の調査が行われ、38棟の掘立柱建物跡が検出された。城の存続年代は、出土遺物より15世紀末～16世紀前半の短い時期が考えられている[14]。

註（1）　大田幸博　『七地水田遺跡』　熊本県文化財調査報告　第101集　1988年

（2）　渋谷　敦　『岡本河内守頼真小傳』　1987年

（3）　前川清一　「球磨の石塔拾遺」『歴史考古学』　第17号　1986年

（4）　西住欣一郎　『鼓ケ峰遺跡』　熊本県文化財調査報告　第96集　1988年

（5）　鶴嶋俊彦　「原城跡の調査」『熊本史学会・肥後考古学会例会発表要旨』　1988年

（6）　木﨑康弘　『大丸・藤ノ迫遺跡』　熊本県文化財調査報告　第80集　1986年

木﨑康弘　『狸谷遺跡』　熊本県文化財調査報告　第90集　1987年

（7）　註（3）に同じ。

（8）　高田素次氏の御教示による。

（9）　村上豊喜　「人吉庄の下地中分について」『鼓ケ峰遺跡』　熊本県文化財調査報告　第96集　1988年

（10）　註（3）に同じ。

（11）　鶴嶋俊彦氏の御教示による。

（12）　高木正文　『熊本県装飾古墳総合調査報告書』　熊本県文化財調査報告　第68集　1984年

（13）　註（6）に同じ。

（14）　大田幸博　『高城跡』　熊本県文化財調査報告　第95集　1988年

第2表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	備考	典拠文献
1	井口寺跡	人吉市井口町荒宗田		①
2	志登山遺跡	〃　〃　志登山		〃
3	源内遺跡	〃　〃　源内		〃
4	奥山入遺跡	〃　〃　奥山入		〃
5	鍋ノ迫遺跡	〃　合原町鍋ノ迫		〃
6	白鳥遺跡	〃　瓦屋町白鳥		〃
7	施無畏堂跡	〃　〃　後田		〃
8	独慎庵跡・石塔群	〃　〃　鷹木	住職墓	〃
9	村山遺跡	〃　城本町村山台地一帯		〃
10	城本城跡	〃　〃　城本	中世城・青磁	〃
11	大村横穴群	〃　〃　城本・鳥岡	国指定・装飾	〃
12	坂本焼窯跡及灰原	〃　〃　鳥岡	近世陶器窯	〃
13	永国寺古塔群	〃　土手町永国寺境内	市指定	〃
14	北野遺跡	〃　西間下町落水	小玉・石鏃	〃
15	境ヶ谷遺跡	〃　〃　境ヶ谷		〃
16	十君畑遺跡	〃　〃　十君畑		〃
17	高見遺跡	〃　〃　高見	縄文土器・磨製石斧	〃
18	畑遺跡	〃　西間上町畑		〃
19	茂田遺跡	〃　〃　茂田		〃
20	蓑野遺跡	〃　蓑野町小椎原・射場迫・洲脇	蔵骨器出土	〃
21	白山寺跡	〃　〃　射場迫		〃
22	土丈原遺跡	〃　赤池水無町土丈原	縄文土器	〃
23	島廻遺跡	〃　赤池水無町島廻	縄文土器	〃
24	上の平遺跡	〃　東漆田町上の平	石鏃・縄文土器・土師器	〃
25	赤池城跡	〃　赤池原町原村	市指定、中世城跡	〃
26	赤池原遺跡	〃　〃　西中通・東中通	縄文土器	〃
27	白鳥平遺跡	〃　〃　窯作・立山・永谷・永迫	縄文土器	〃
28	今見堂遺跡	〃　東間上町今見堂・永谷	縄文土器・磨製石斧	〃
29	矢瀬主馬佑供養塔	〃　〃　下町矢瀬ヶ津留	市指定	〃
30	増音寺跡	〃　〃　〃		〃
31	東林寺岩壁画	〃　田町	市指定、仏・菩薩・神像等の彫刻	〃
32	東林寺古塔碑群	〃　浪床町東林寺境内	一字一石塔・勧縁石・墓碑	〃
33	長毎公骨塔	〃　南町	河川改修で消滅、瑞祥寺保管	〃
34	了清院跡	〃　田町富ヶ尾		〃
35	常楽寺跡	〃　〃		〃
36	麓遺跡	〃　麓町字麓	縄文	③
37	人吉城跡	〃　〃	国指定	①
38	原城跡	〃　原城町	中世相良氏の居城	〃
39	瑞祥寺	〃　〃　上原		〃
40	七地遺跡	〃　七地町七地・南田・赤池原	縄文土器・石器	〃
41	御桑園及下屋敷	〃　〃　天道ヶ尾	市指定	〃
42	**天道ヶ尾遺跡**	**〃　〃　〃**	**旧石器・縄文・古墳・中世・近世**	
43	天道ヶ尾横穴群	〃　〃　〃		①
44	常秀寺跡	〃　〃　尾丸	中世末～江戸	〃
45	七地水田遺跡	〃　〃　迫田・里田・清田	縄文・中世	④
46	清明寺跡	〃　〃　清明		①
47	阿弥陀三尊石塔	〃　〃　清明菅原神社	市指定	〃
48	大堀五輪塔群	〃　〃　大堀		〃
49	釜屋遺跡	〃　願成寺町釜屋	縄文土器	〃
50	梨木原・蛇田遺跡	〃　〃　梨木原・蛇田	石鏃・土師器	〃
51	上石清水遺跡	〃　〃　上石清水	縄文土器・土師器・青磁	〃
52	二本松遺跡	人吉市願成寺町二本松	旧石器時代の黒曜石石核	①
53	鼓ヶ峰遺跡	〃　〃　鼓ヶ峰	旧石器・縄文・弥生・中世	⑤
54	石清水遺跡	〃　〃　上の寺・釜屋	押型文土器、石清水式標式遺跡	①
55	鬼松古墳	〃　〃　鬼松	円墳推定地	〃
56	上の寺遺跡	〃　〃　上の寺・鬼松	石鏃・石匙	〃
57	新山不動堂跡	〃　〃　上の寺		〃
58	大村平家城跡	〃　〃　〃	中世城	〃
59	観音寺	〃　〃　〃		〃
60	相良家墓地	〃　〃　956	県指定	〃
61	願成寺石塔群	〃　〃　願成寺境内	県・市指定	〃
62	願成寺	〃　〃　辻・六坊・上の寺・高野		〃
63	前田遺跡	〃　〃　前田・狩所		〃
64	杉園遺跡	〃　北泉田町杉園		〃
65	鬼木古墳	〃　鬼木町鬼木の上	直刀出土	〃
66	善正院遺跡	〃　〃　善正院		〃
67	塩井川遺跡	〃　〃　塩井川・於坪	縄文土器	〃
68	梢山遺跡	〃　〃　梢山	縄文土器	〃
69	南打水遺跡	〃　〃　南打水	弥生土器	〃
70	寺尾遺跡	〃　願成寺町寺尾		〃
71	一本松遺跡	山江村大字山田字一本松	縄文	③
72	下原遺跡	〃　〃　下原	縄文	〃
73	漬谷遺跡	〃　〃　漬谷	縄文	〃
74	山江中学校遺跡	〃　〃　辻・中辻	縄文	〃
75	味園遺跡	〃　〃　味園		〃
76	林田遺跡	〃　〃　林田		〃
77	手石方遺跡	〃　〃　手石方	縄文	〃
78	長ヶ峰遺跡	〃　〃　長ヶ峰	縄文	〃
79	本城遺跡	〃　〃　高城		〃
80	高城跡	〃　〃　〃		⑥
81	合戦嶺遺跡	〃　〃　合戦嶺	弥生	②
82	大丸・藤ノ迫遺跡	〃　〃　大丸	旧石器・縄文・弥生・歴史	③
83	屋敷下遺跡	〃　〃　屋敷下	縄文	〃
84	京塚古墳	〃　〃　京塚		〃
85	京塚遺跡	〃　〃　〃	縄文	〃
86	東浦（鬼の城）古墳群	〃　〃　東浦	縄文・古墳	②
87	塚原遺跡	〃　〃　塚原	縄文	③
88	別府古墳群	〃　〃　別府		②
89	別府遺跡	〃　〃　〃	縄文	③
90	蓑原遺跡	〃　〃　蓑原	縄文	〃
91	〃	人吉市蓑原町	縄文	〃
92	三石遺跡	相良村大字柳瀬字三石	縄文・弥生	②
93	三石横穴群	〃　〃　〃		〃
94	平家城原跡遺跡	〃　〃　中原	弥生	③
95	〃	〃　〃　〃	縄文	〃
96	覚井古墳	〃　〃　覚井		②
97	藏城（柳瀬城）跡	〃　〃　藏城		〃
98	人吉ゴルフクラブ遺跡	〃　〃　十島	縄文	③
99	十島遺跡	〃　〃　〃	縄文	②
100	陣の内横穴群	〃　〃　陣の内		〃
101	平家城原跡	〃　〃　中原	中世城	〃
102	花立遺跡	人吉市七地町花立・藤平	石器製作址、縄文中・後期	①

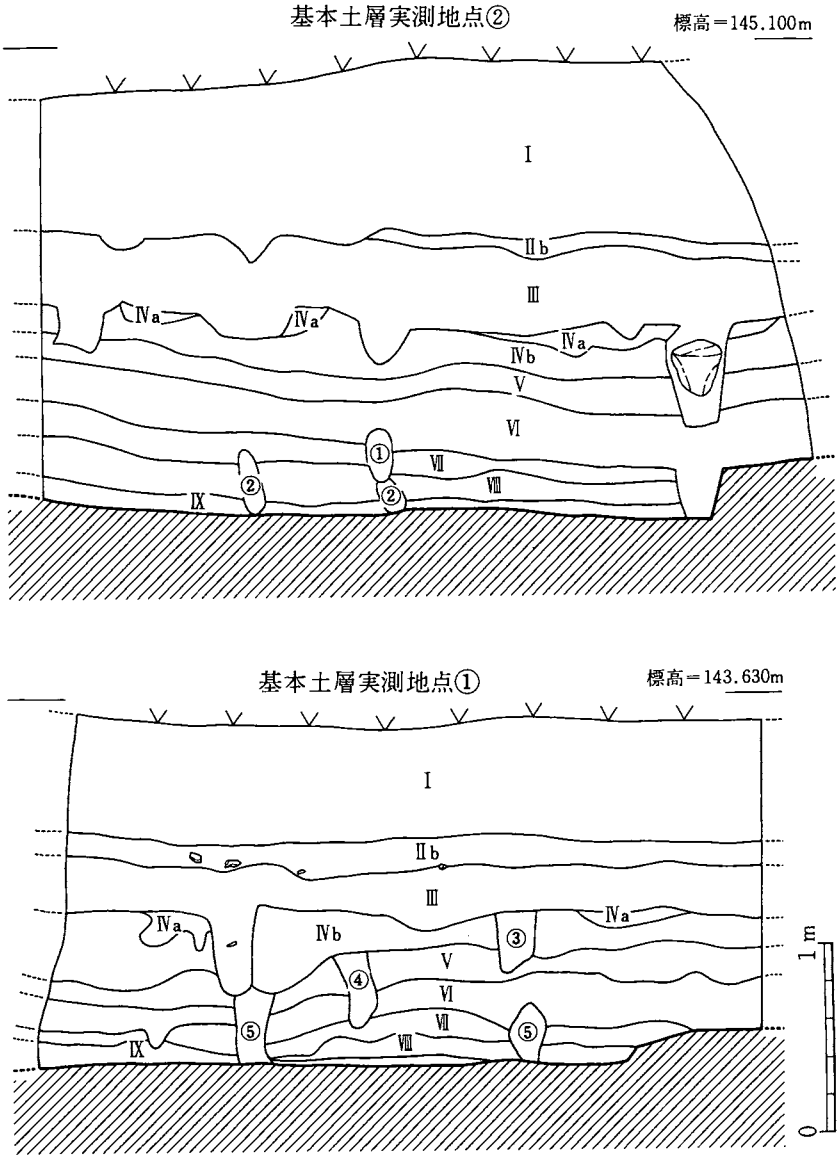
典拠文献一覧

① 人吉市教育委員会社会教育課「人吉遺跡分布地図」1987年
② 文化庁文化財保護部「全国遺跡地図 熊本県」1981年
③ 熊本県教育委員会「狸谷遺跡」熊本県文化財調査報告第90集 1987年
④ 熊本県教育委員会「七地水田遺跡」熊本県文化財調査報告第101集 1989年
⑤ 熊本県教育委員会「鼓ヶ峰遺跡」熊本県文化財調査報告第96集 1988年
⑥ 熊本県教育委員会「高城跡」熊本県文化財調査報告第95集 1988年

第Ⅲ章　　調査の成果

第１節　遺跡の層序について（第１図・第５図）

天道ケ尾遺跡の基本的な層序は、Ｆ－８・Ｆ－９グリッドの調査区北端部で確認できる。Ｆ－８グリッドの基本土層実測地点を①（第１図―①）、Ｆ－９グリッドの基本土層実測地点を②（第１図―②）とする。ここでは、①・②地点で確認した土層を用いて、遺跡の層序の説明を行う。



第５図　土層実測図

Ⅰ層　Ⅰ層は耕作土である。層の厚さは約60～90cmを測る。この層は非常に厚い。

Ⅱ層　Ⅱ層はａ・ｂに細分できる。

Ⅱａ層　Ⅱａ層は、黒色を呈する砂質土である。Ⅱａ層は部分的に存在する層であり、Ⅳ区とⅢ区の南西部で確認できた。糸切り底の土師器がⅡａ層に包含される。

層の厚さは、約５～10cmを測る。

Ⅱｂ層　Ⅱｂ層は淡黒色をした砂質土である。Ⅱｂ層はⅠ区・Ⅱ区に存在し、ヘラ切り底の土師器を主体に包含し、糸切り底の土師器が少量混じる。層の厚さは約８～20cmを測る。

Ⅲ層　Ⅲ層は暗褐色土である。Ⅲ層はヘラ切り底の土師器・Ⅲ類を主体に包含する。Ⅲ層は約20～40cmの厚さである。

Ⅳ層　Ⅳ層はａ・ｂの２層に分けることができる。

Ⅳａ層　Ⅳａ層は黄褐色砂質土で、Ⅳｂ層の二次堆積層である。層の厚さは約10～15cmを測るが、部分的にこの層が確認できない箇所もある。Ⅳａ層は縄文時代後期・晩期の遺物包含層である。

Ⅳｂ層　Ⅳｂ層は黄褐色粘質土で、アカホヤのパミスをブロック状に含む。層の厚さは約10～40cmを測る。Ⅳｂ層は無遺物層である。

Ⅴ層　Ⅴ層は黒褐色土で、やや粘性がある。層の厚さは約10～30cmを測る。Ⅴ層は縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅵ層　Ⅵ層は黒色土で、僅かに粘性を帯びる。層の下部にいくにつれて、粘性が強くなる。層の厚さは約10～30cmある。Ⅵ層はⅤ層と同様に縄文時代早期の遺物を包含する。

Ⅶ層　Ⅶ層は灰褐色土で、厚さ約10～18cmを測る。Ⅶ層は無遺物層である。

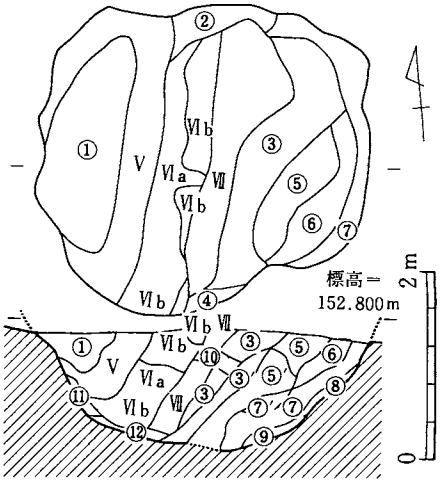
Ⅷ層　Ⅷ層は茶褐色土で、層の上部は弱粘性、下部は砂質である。Ⅷ層より、先土器時代の遺物が出土した。遺物出土量は層の上部より下部の方が多い。層の厚さは約５～20cmを測る。

Ⅸ層　Ⅸ層はシラスの層で、無遺物層である。この層は最下部まで掘っていないので、厚さは判らない。

第２節　層序横転について（第６図・第７図）

平坦地での土層は、本来、水平かそれに近い状態を呈している。しかし、この遺跡では、深いⅢ状の凹みの中で、土層が横位または斜位状態になっているのが確認できた。このような土層の状況を層序横転と呼ぶことにする。

層序横転の原因については、不明であるが、倒木の結果とする考え方もある。ここでは、天道ケ尾遺跡と近接する鼓ケ峰遺跡の層序横転の例を用いて説明をする[1]。第６図は鼓ケ峰遺跡で確認した第３号層序横転の実測図である。Ⅴ層～Ⅶ層・③



第６図　層序横転実測図

層・⑤層が横転している。①層・②層・④層・⑥層～⑫層は、横転後に流入した土である。

Ⅴ層は黒褐色砂質土で、縄文時代後期～晩期の遺物包含層である。Ⅵａ層は黄褐色砂質土でアカホヤの二次堆積層。Ⅵａ層は縄文時代前期～中期の遺物包含層である。Ⅶ層は暗褐色粘質土で、縄文時代早期の遺物包含層である。③層・⑤層は第３号層序横転の周辺に存在する層である。③層は暗褐色粘質土でⅦ層より粘性が弱い。⑤層は黄褐色砂礫土である。

横転している層序の中で、Ⅴ層が最上層であり、Ⅴ層の上位層であるⅣ層（弥生時代後期～終末の遺物包含層）が見られない。つまり、層序横転が起こった時期は、Ⅴ層形成以後で、Ⅳ層形成以前ということになる。縄文時代後期～晩期から弥生時代後期～終末の間に、層序横転が起こったと考えられる。

天道ケ尾遺跡での層序横転は、Ⅴ層を最上層とするものが３箇所、Ⅳａ層を最上層とするものが88箇所で確認できた。Ⅴ層形成以後～Ⅳｂ層形成以前とⅣａ層形成以後～Ⅲ層形成以前に、層序横転があったことになる。縄文時代早期～アカホヤ堆積以前に３基の層序横転が起こり、縄文時代後期・晩期～平安時代・鎌倉時代に88基の層序横転が起こったと考えられる。

鼓ケ峰遺跡のⅣ層と天道ケ尾遺跡のⅢ層の時期が違うために、層序横転が起こった時期幅の下限が異なる。このことは、二つの遺跡で横転した土層の最上層の上位層が異なったと理解し、天道ケ尾遺跡のⅤ層を最上層とする３基の層序横転を除けば、鼓ケ峰遺跡と天道ケ尾遺跡との層序横転は、ほぼ同じ時期に起こった可能性もある。

天道ケ尾遺跡の層序横転は、標高が最も高い平坦部分とその箇所より南東方向に低くなった部分に少なく、その周囲の緩傾斜地に多い。層序横転がある場所には、規則性や集中性はなく、むしろ、雑然としている。

第７図の層序横転箇所の矢印の向きは、土層が横転した方向を示している。Ⅴ層を最上層とする層序横転は、ほぼ西方向の同じ向きに横転している。Ⅳａ層を最上層とする88箇所の層序横転の中で、北～西方向に横転しているものが最も多く63箇所を数える。北～東方向に横転しているものが６箇所、南～西方向に横転しているものが15箇所、南～東方向に横転しているものが４箇所ある。

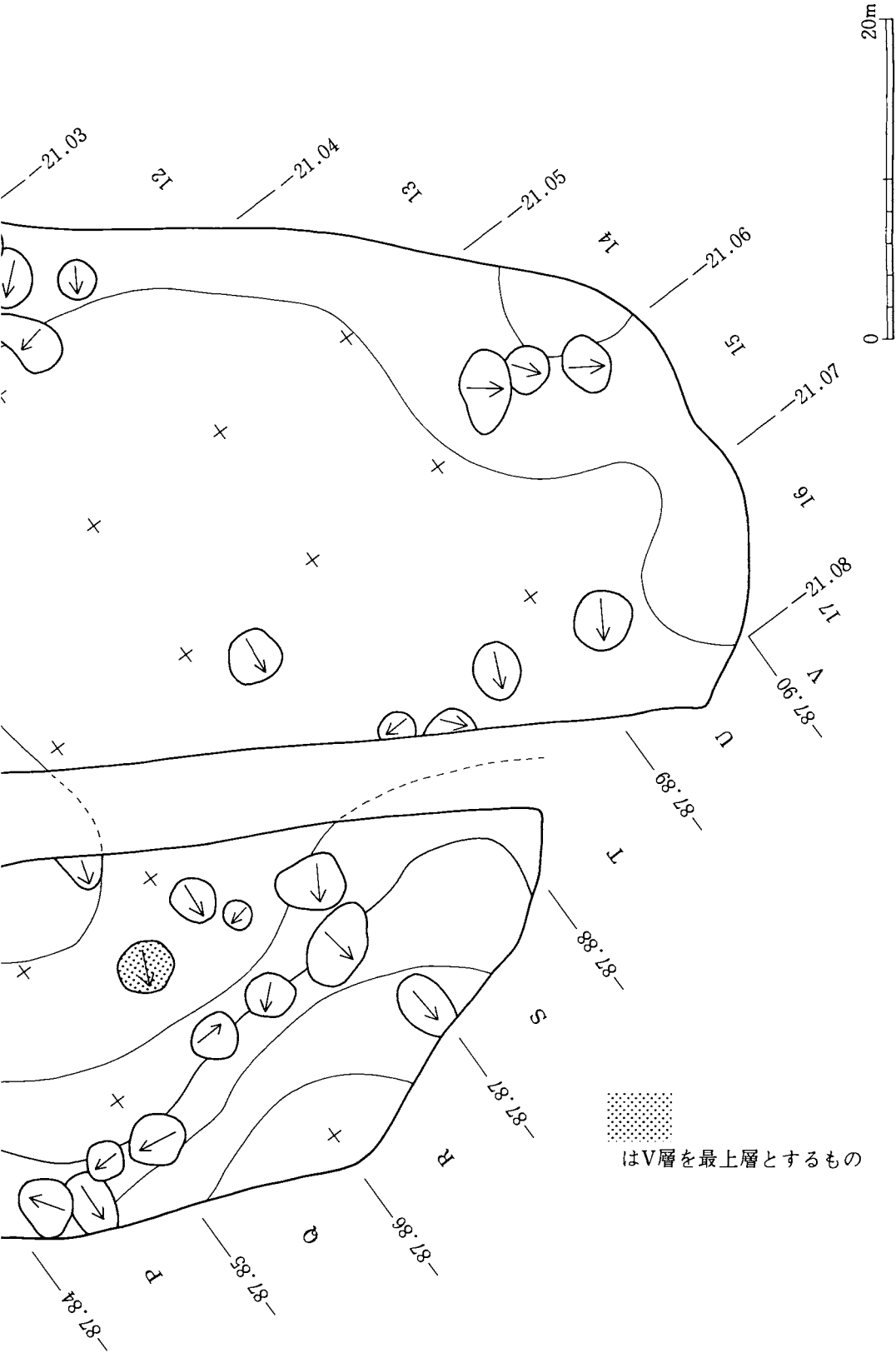
この層序横転と関連したことに、出土遺物の中で、本来出土すべき層より上位層で遺物が出土したことが挙げられる。層序横転が起こった時に、遺物が移動したものと考えられる。また、後述する古代～中世のピットは、検出面より下の遺物包含層まで掘り込まれている。このピットも層序横転と同様に、遺物の移動に関与したと考えられる。

註（1）　西住欣一郎　『鼓ケ峰遺跡』　熊本県文化財調査報告　第96集　1988年

20.94
20.95
2
3
4
87.72
87.73
87.74
C
D
E

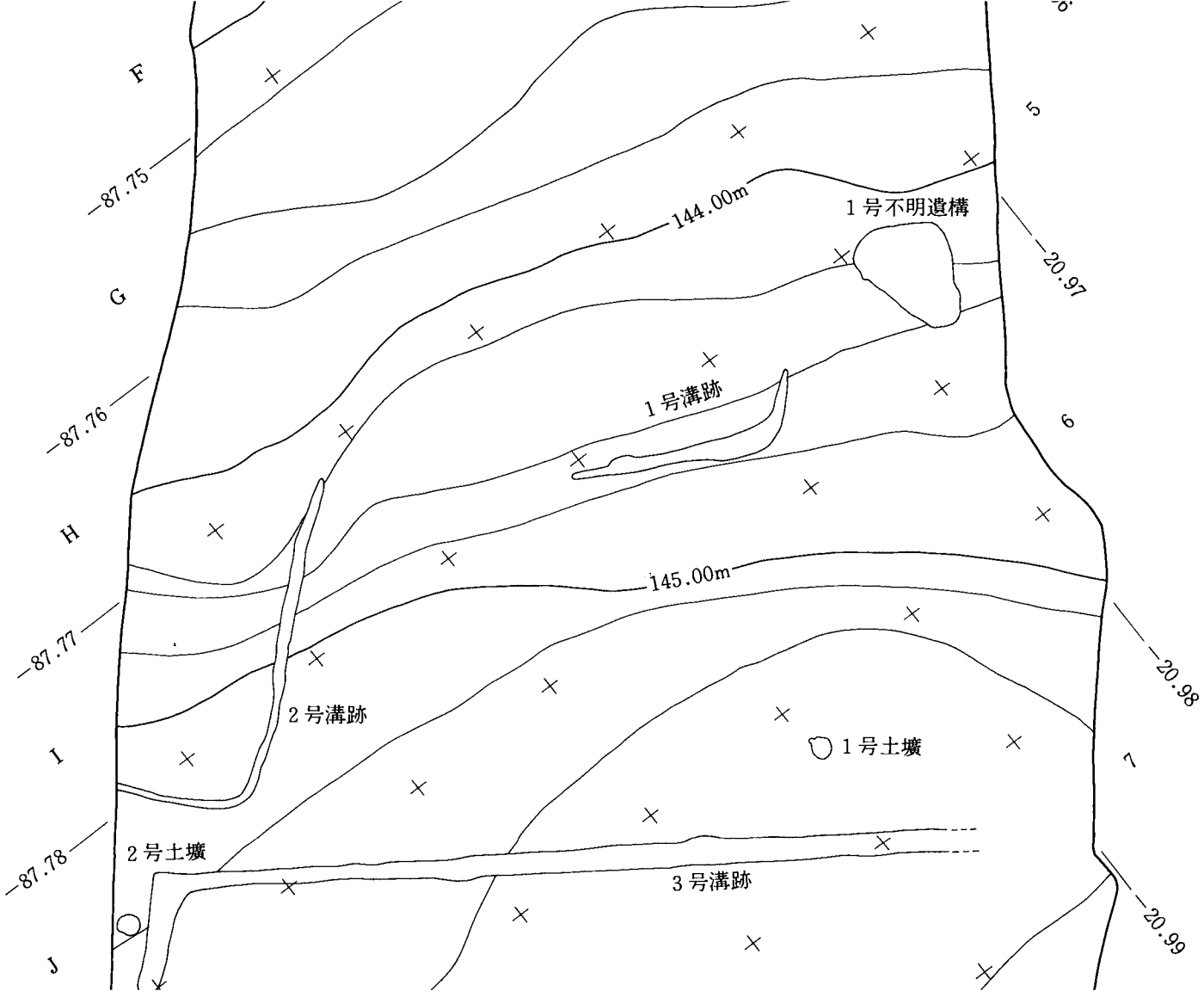
20.96
5
20.97
6
20.98
7
20.99
143.00m
144.00m
145.00m
F
87.75
G
87.76
H
87.77
I
87.78
J

87.79
K
87.80
L
87.81
M
87.82
N
87.83
O
8
9
10
11
21.00
21.01
21.02
145.00m
144.00m
143.25m
143.50m
143.00m

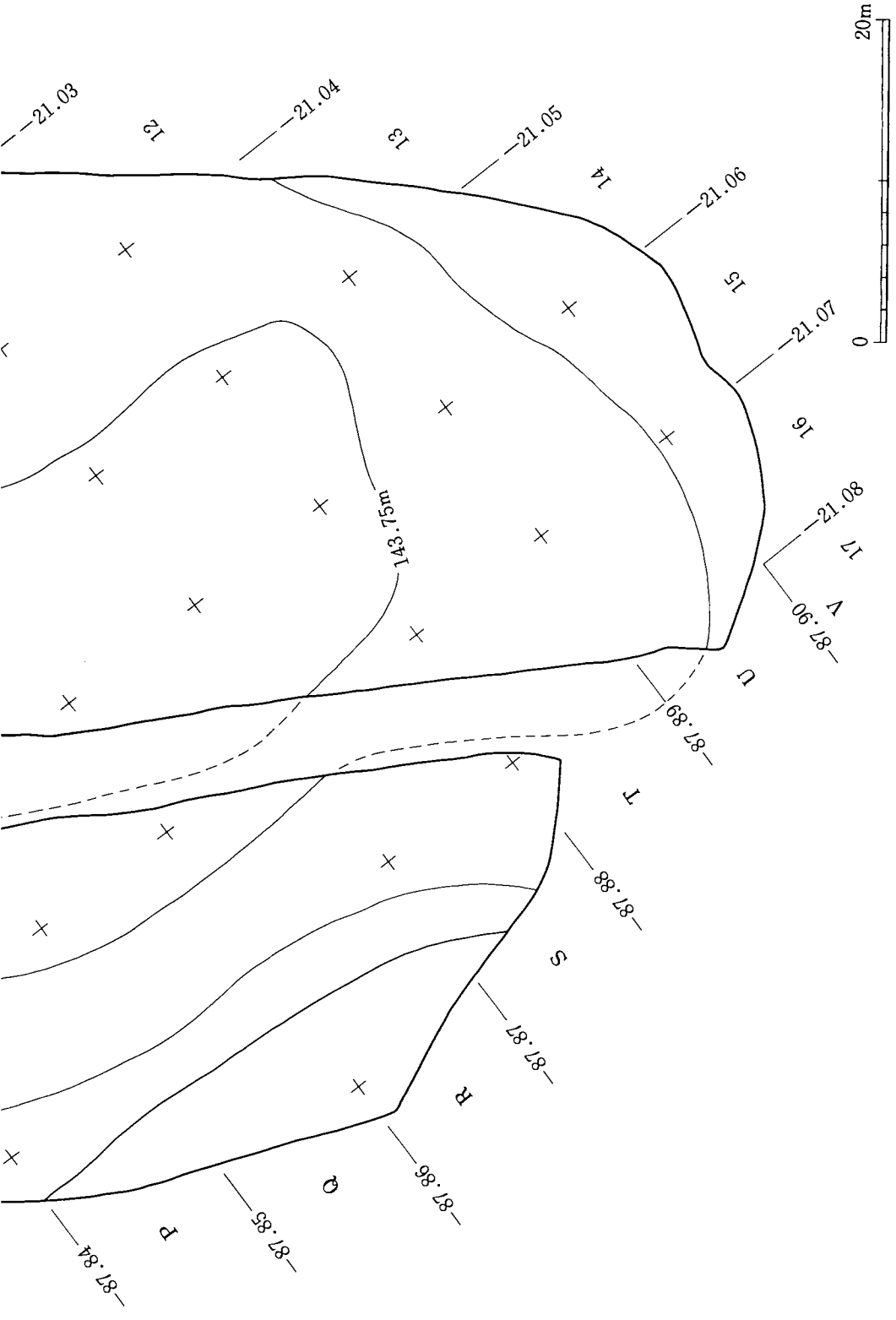

20m
0
21.03
21.04
21.05
21.06
21.07
21.08
12
13
14
15
16
17
V
U
T
S
R
Q
P
87.90
87.89
87.88
87.87
87.86
87.85
87.84
はV層を最上層とするもの

第７図　層序横転分布図

20.94
20.95
2
3
4
143.00m
87.12
87.13
87.14
C
D
E


F
G
H
I
J
-87.75
-87.76
-87.77
-87.78
5
6
7
-20.97
-20.98
-20.99
144.00m
145.00m
1 号不明遺構
1 号溝跡
2 号溝跡
3 号溝跡
1 号土壙
2 号土壙

21.00
21.01
21.02
8
9
10
11
145.00m
144.00m
5号溝跡
4号溝跡
87.79
87.80
87.81
87.82
87.83
K
L
M
N



第８図　江戸時代の検出遺構分布図

第３節　江戸時代の調査

１．遺構について（第８図）

検出した遺構には、１号・２号土壙、１号不明遺構、１号～５号溝跡がある。これらの遺構は、標高144.25～145.50mの部分に位置し、調査区の中で標高が最も高い箇所にある。

１号土壙は、標高145.50mの楕円形を呈する平坦面の北東隅にある。２号土壙は、１号土壙が位置する平坦面より北側に僅かに低くなった緩傾斜地で、調査区の端部に存在する。３号溝跡は、標高が最も高い平坦面のほぼ中央部を北東から北西方向に横切り、北西端部で南西方向にほぼ直角に折れ曲がる。４号溝跡は、３号溝跡の屈曲部の南西側に近接して位置する。５号溝跡は、楕円形を呈する平坦面の西側隅より西方向に向かってのびる。１号・２号溝跡は、３号溝跡の北東方向の緩傾斜地にあり、２号溝跡は、３号溝跡に近接している。１号溝跡は、３号溝跡の北東方向約23.0mの地点にあり、３号溝跡とほぼ同じ方向にのびる。１号不明遺構は、１号溝跡端部より北東側に約8.0m離れた箇所に位置する。

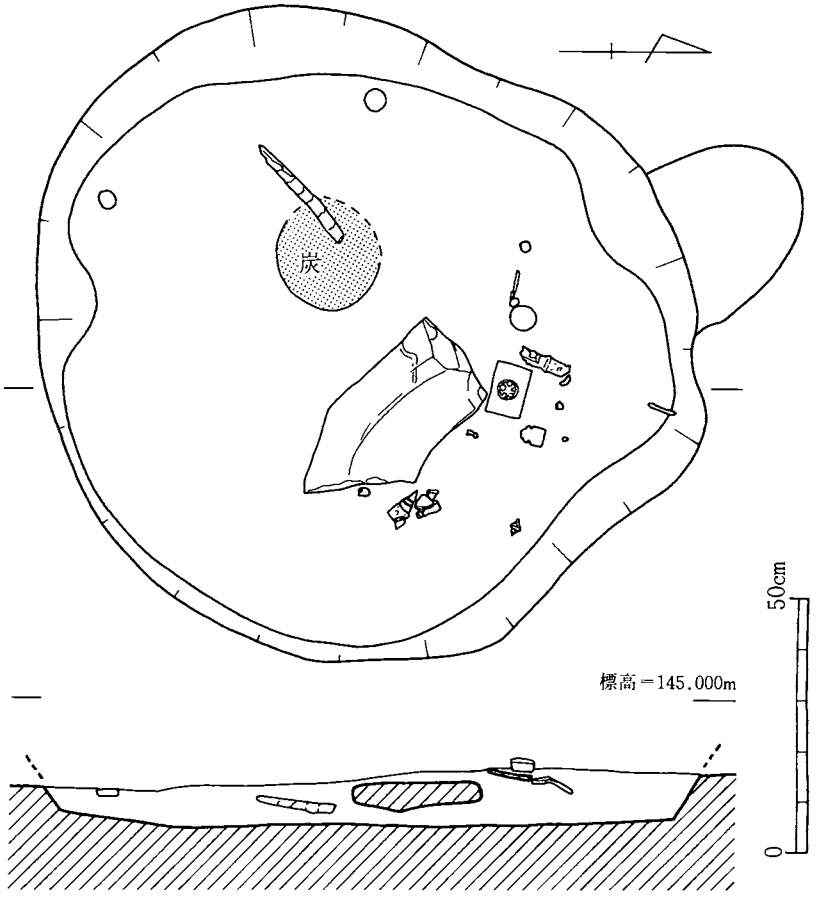
１号土壙

（第９図）

１号土壙は、ほぼ円形を呈する部分の北側が半円形状に張り出した平面形である。ほぼ円形を呈する部分は、径約1.3m、深さ約0.05～0.10mを測る。

土壙の覆土は灰褐色土で、微細な炭化物を多量に含む。

土壙内のほぼ中央部から北東側に寄った箇所



第９図　１号土壙実測図

から約0.40×0.20mの自然石が据わった状態で出土し、その北東前面に遺物が集中していた。

また、自然石の南西側に近接して木炭と炭化物が出土した。和鏡・磁器・金具類・紙片などの出土遺物には、火を受けた痕跡が認められ、金具類に木質が付着している。このことより、土壙内において、小箱の中に出土遺物を収めた状態で燃やしたと考えられる。

〔出土遺物〕

和鏡（第10図１）

１は長方形（約10.0×７.0cm）を呈する懐中鏡である。鏡は無縁で、端部の断面中央部が僅かに突出する。火を受けているために、全体に反りが見られる。背面には、部分的に布が付着している。鏡の中央部には、丸に剣梅鉢の相良家家紋があり、その上下の中心線上に花弁状の飾りをもつ小さな鈕がつく。鏡の左端に「木瀬大和守藤原信喜」の鏡師銘がある。この鏡師銘に類似したものに「同信善」(1)、「同信嘉」(2)（明暦年間）がある。

銅製品（第10図２～14）

２・３・14は蝶番片である。２は両片とも先端部を欠き、内側に曲がった状態で、鋲が１個ずつ残る。３は蝶番の片方で、先端部はやや尖り、そこから先端部寄りの抉り部分に向かって波打ちながら弧状になる。表面には花文様の装飾を施す。３個の鋲には木質が付着している。

14は３と同様な形状を呈し、３よりやや大型である。２個の鋲があり、木質が残っている。

４・５は上面が円形を呈し、下面が鉤状に曲がった金具である。

６・11は縁金具であろう。６の先端部は３と同様な形状になると思われる。２個の小さな鋲がある。11は先端の両角を面取りした方形を呈し、火熱のため全体が反る。四隅に小さな鋲がある。

７～９は菊花文の装飾を施した金具で、上面に環状の把手がつく。把手を固定する金具の下端は、先割れになっている。

10・12は鍵金具である。10は下端部が僅かに尖り、抉り部分まで丸くなりながら波打ち、上端の二隅に向かってまっすぐのびる。右上端部付近に鍵穴があり、それと連結した棒状金具が上下に動くようになっている。二つの抉り部分をつないだ線上の中央部に鈕状の飾りがあり、その周囲に点描を地文とした花文様を施す。全体に５個の鋲がある。12は10と同様の形状を呈し、10よりやや小型のもので、４個の鋲をもつ。下端右寄りの鍵穴と連結した棒状金具は、左右に動く仕掛けになっている。

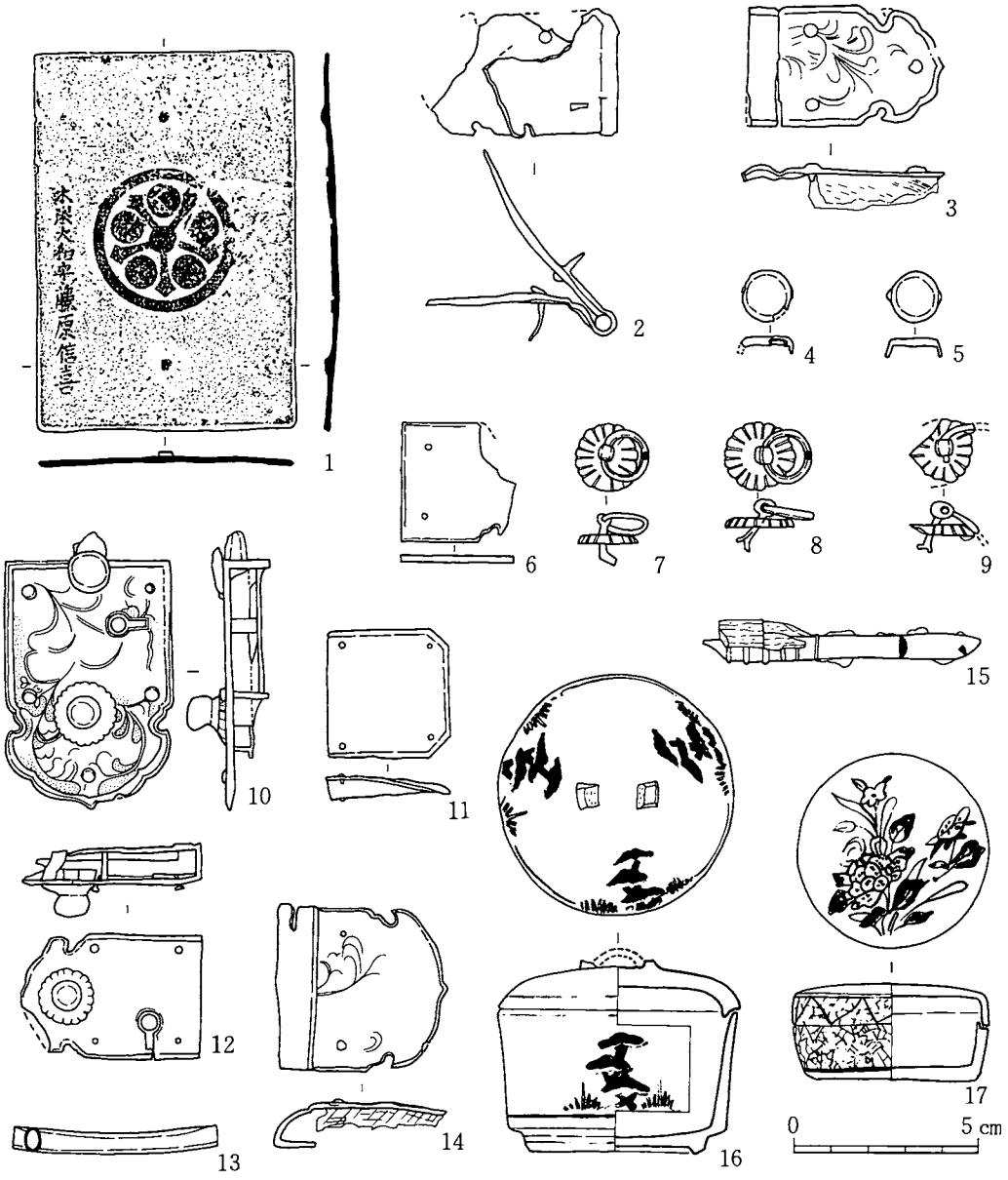
13は薄い銅板を曲げて環状にした棒状の製品で、僅かに反りがある。内部は空洞になっているため、端部にものを挿入して使用したのであろうか。

鉄製品（第10図15）

15は片丸造りの小刀である。先端部はやや尖り、丸くなりながら刃部とつながる。茎部には帯状の突起が６本巡り、その部分に木質が付着している。

磁器（第10図16・17）

16は蓋付の小碗で、染付けである。身・蓋の外器面には松木・草木を三箇所に等分し、身の体部上下両端、高台中央部、蓋の円周に沿っては、横線を青紺色の呉須で描く。身体部の外器面には、貫入が部分的にある。身の体部と高台部との境に段があり、体部は口縁部までほぼ直線的にのび、口縁端部で僅かに外反する。高台は内器面側で接地する。蓋は口縁端部に蓋受けが付き、ほぼ平らな天井部から丸くなって口縁部にいたる。天井部の中央には欠損した撮みが



第10図　１号土壙出土遺物実測図

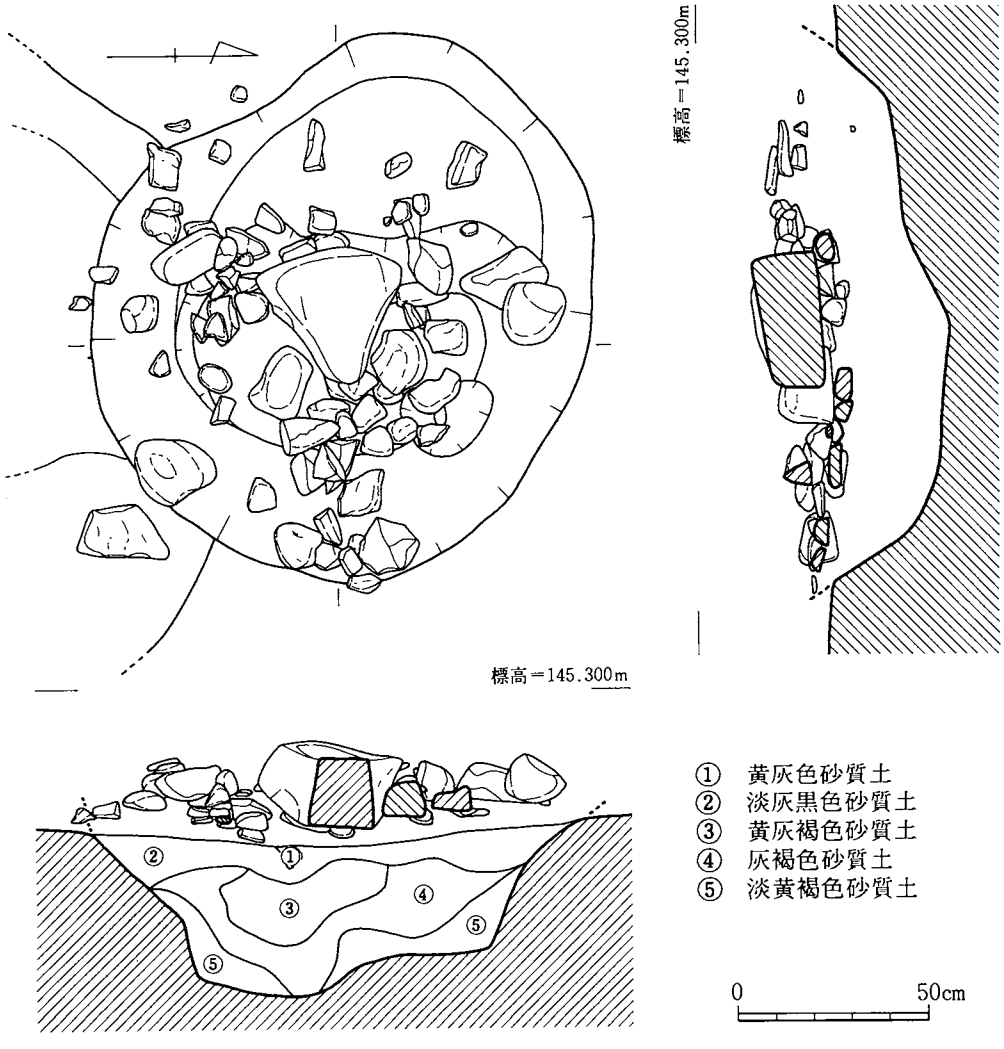
あり、撮みは半円状になると思われる。17は染付けの合子で、呉須は青紺色である。蓋体部上端と身体部下端の外器面に横線を描き、その横線に挟まれた蓋・身の外器面に貫入を模した文様を施す。蓋の天井部には、花文を描く。身体部は丸くなってのび、端部に蓋受けがつく。蓋の口縁端部は角をもつ。16・17は江戸時代初期の製品であろう。

註（1）　中野政樹　『和鏡』　日本の美術　第42号　1969年

（2）　広瀬都巽　『和鏡の研究』　角川書店　1974年

2号土壙（第11図）

2号土壙は、層序横転の箇所を切って掘り込んでいる（第Ⅲ章第3節参照）。平面形はほぼ円



第11図　2号土壙実測図

形を呈し（径約1.30～1.40m）、断面形は深い皿状で、二段掘りになっている（最深部約0.80m）。土壙の上面には、ほぼ一定の高さで礫を配置してある。その配置状況は、中心部に平面形が三角形をした大型の礫（一辺約0.30～0.40m）を上面がほぼ水平になるように下面に礫を敷き、その周囲に小型の円礫（0.02～0.20m）を置く。礫の配置状態より、中央部の大型の礫は台座として用いたのであろう。

土壙内の覆土は５層に分かれる。②層より煙管の雁首と思われる小破片が出土した。⑤層には土壙の壁土を含む。④層は１号土壙の覆土に類似しており、２号土壙の時期は、１号土壙とほぼ同時期と考える。

１号不明遺構（第12図）

１号不明遺構は、平面形が略三角形をした大型の掘り込みである（東西の長辺約６.0～6.50m、北側の短辺約5.0m）。北側の壁は弱い三段掘りになり、南側の壁は二段掘りである。遺構のほぼ南北中央軸線上の床面端部に２基のピットが掘られ、北端部のピットから２基のピットを結んだ線よりほぼ直角に振った位置の西壁斜面部にピット１基がある（ピットの径約0.20～0.28m、深さ約0.18～0.32m）。縦断面形でみると、床面の位置は南端で深さ約0.32m、北端で深さ約0.78mを測り、南側から北側に向かって傾斜する。

遺構の覆土は灰黒褐色土で、１号土壙の覆土に類似する。床面より浮いた状態で覆土中より、土師器や江戸期の陶磁器の小破片が出土した。また、南端部の壁から床面にかけての上面で、床面より浮いた状態で大型の石（約0.20～0.50×0.20～0.30m）や小型の石（約0.06～0.10×0.04～0.10m）が密集していた。礫は凝灰岩の切り石と安山岩の自然石である。

この遺構は、調査中ごみ捨て場とも考えたが、ごみ捨て場とするには出土遺物の量が少ない。遺構の性格を充分に把握することができず、この遺構は性格不明な遺構とした。

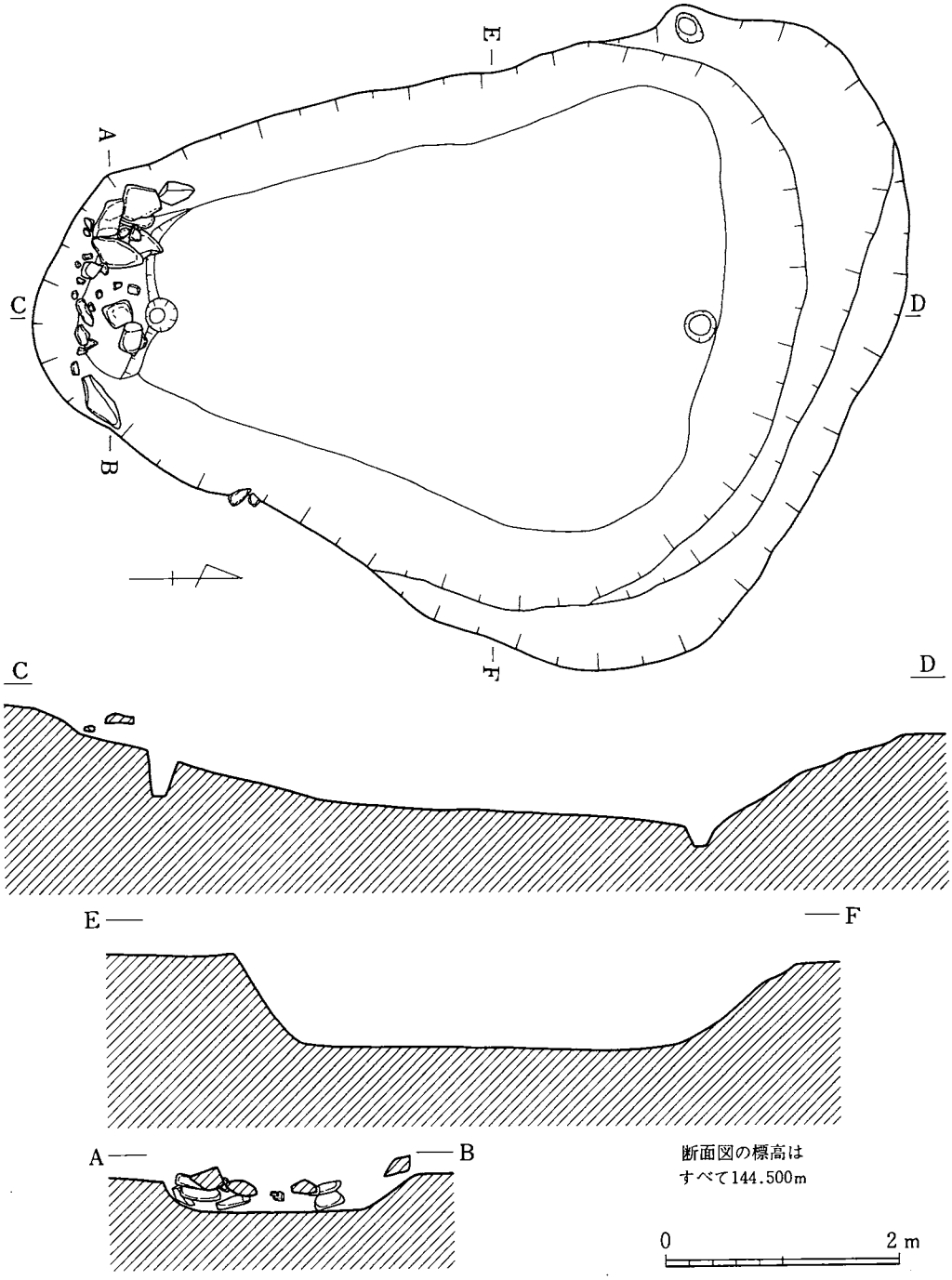
１号溝跡（第13図）

１号溝跡の平面形は略Ｌ字形を呈し、屈曲部が広く、先端部が細くなる。屈曲部より西側の長さ約11.5m、屈曲部より北東側の長さ約4.0mを測る。溝上面の幅は屈曲部で約1.5m、先端部で約0.30～0.35m、それ以外の箇所で約0.70～1.10mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ約0.15～0.20mを測る。覆土は１号土壙に類似した灰褐色砂質土である。

２号溝跡（第13図）

２号溝跡は北西端部が調査区外にのび、逆Ｌ字形を呈すると思われる。ほぼ直角な屈曲部より北東側は、長さ約20.5mを測り、端部が狭くなる。屈曲部より北西側は、長さ約7.5mの地点まで確認している。溝上面の幅は屈曲部より北東方向約8.0mの箇所より端部にかけて僅かに広

くなる。溝上面の幅は、広い箇所で約0.70～0.80m、狭い箇所で約0.30～0.45m、先端部で約0.30mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは約0.15～0.20mある。屈曲部より北東側の壁から床にかけての一部分は、二段掘りになっている。覆土は灰褐色砂質土で、1号土壙の覆土

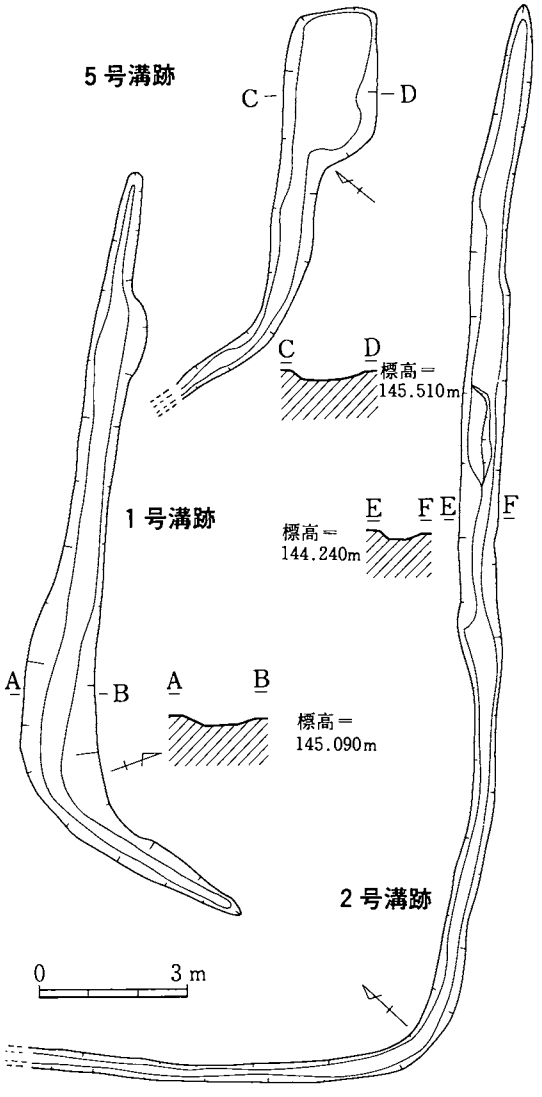


第12図　1号不明遺構実測図

に類似する。

５号溝跡（第13図）

５号溝跡は、長方形（約2.45×1.55m）の平面形を呈した広い部分とそれにつながる狭い溝部分よりなる。狭い部分は逆くの字形に屈曲し、途中でなくなる。長方形を呈した部分の断面形は、浅い皿状になり、深さ約0.06～0.20mを測る。狭い部分の上面の幅は、約0.35～0.85mで、断面形は浅い皿状を呈し、深さ約0.15mを測る。５号溝跡の覆土は、灰褐色砂質土であり、１号土壙の覆土に類似する。



第13図　溝跡実測図

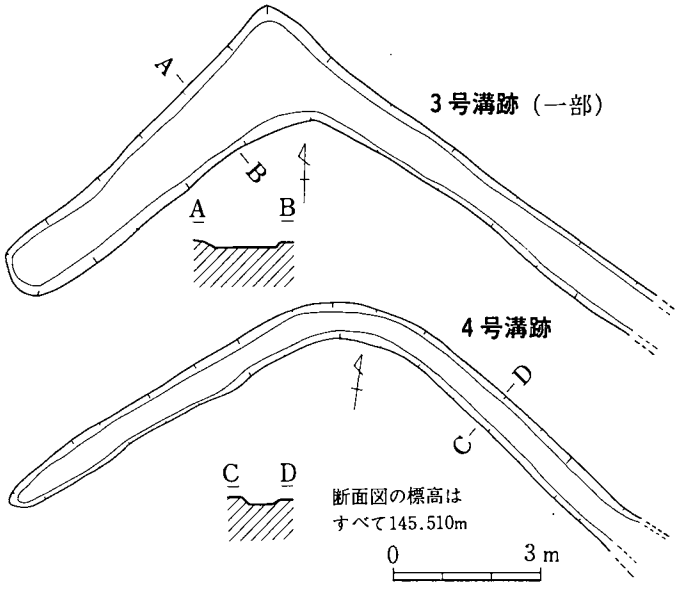
３号溝跡（第14図）

３号溝跡は、北西から南東方向にほぼ直線的にのび、長さ約48.0m、上面の幅約0.80～1.0mを測る。南東部の端は途中で消失する。北西方向にのびた端部で、溝はほぼ直角に南西方向に屈曲する。

屈曲部から先端部にかけては、長さ約7.0m、上面の幅約1.35～2.0mを測り、先端部はやや丸くなる。屈曲部から南西方向にのびる溝先端部にかけての部分が幅広い。断面形は浅い皿状で深さ約0.15～0.20mを測る。３号溝跡の覆土は、１号土壙の覆土に類似した灰褐色砂質土である。

４号溝跡（第14図）

４号溝跡はＬ字形を呈する。溝跡は南西から北東方向に約7.0mのび、ほぼ直角に屈曲して約6.0mの地点まであり、その先は無くなる。南西端部はやや尖り気味に丸くなる。溝上面の幅は約0.75～0.85mある。溝の断面形は浅い皿状で、深さ約0.15～0.20mを測る。４号溝跡は灰褐色砂質土の覆土であり、１号土壙の覆土に類似する。



第14図　溝跡実測図

〔出土遺物〕（第15図）

3号溝跡の覆土より、遺物が出土した。1・2は磁器である。1は灰白色の釉を施す小碗片である。高台部畳付は先端がやや尖る。器壁は底部が厚く、体部は薄い。2は染付の皿片で、呉須は青紺色を呈している。内底見込部と体部との境に弱い段をもつ。高台部畳付は露胎である。

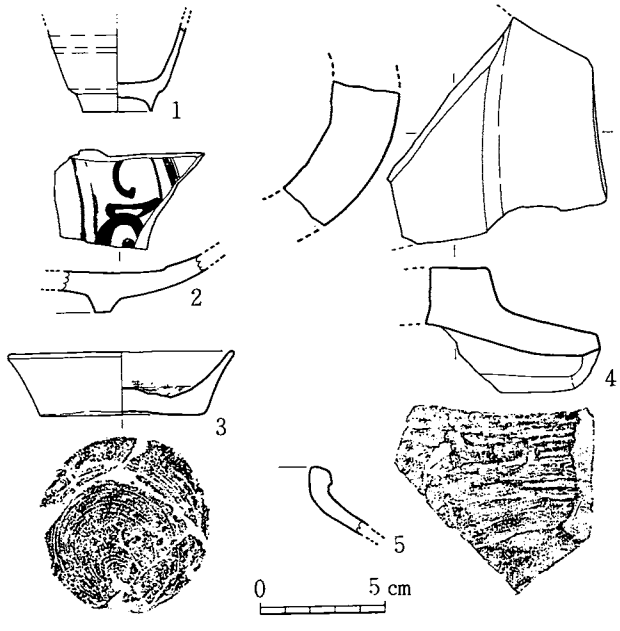
3は土師器の皿で、回転糸切りの底部をもつ。底部は厚く、内器面側に僅かに盛り上がる。体部は中程まで厚く、口縁部に向かって急激に薄くなり、口縁端部は丸くおさまる。内器面の底部から体部中位にかけてススが付着しており、灯明皿として使用している。

4は丸瓦片である。玉縁部の裏面には、部分的なケズリが行われており、布目の圧痕が一部に認められる。

5は壺の陶器片である。器壁は茶褐色の発色をしている。口縁端部は肥厚し、短い頸部との境に弱い段を作る。体部内器面の口縁部直下には、弱い面取りがある。

3号溝跡の覆土からは図示した以外に瓦器・土師器などの小破片が出土した。これらの中には、中世～近世までの遺物が含まれる。

第15図に示した遺物が3号溝跡覆土より出土した遺物の中で、最も新しいものである。これらの遺物の時期は、江戸時代中期～後期頃であろう。



第15図　3号溝跡出土遺物実測図

２．遺物について

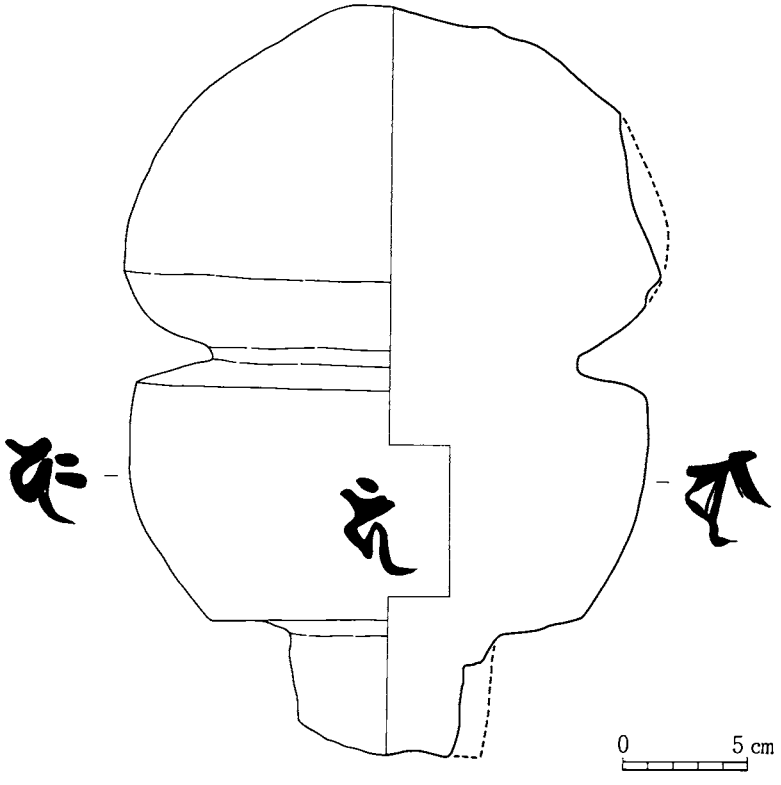
ここでは、遺構に伴わないで出土した五輪塔・板碑・板碑の台座を取り上げる。

五輪塔の空風輪　（第16図）

空風輪は凝灰岩製で、調査区内のＩ層より出土した。空輪の肩部と差し込み部の一部分が欠損している。空輪は丸い頂部から腰部まで緩やかに丸くなり、腰部で弱い段をつくり、最大径となる。空輪と風輪との境には、深い抉り込みがある。風輪は肩部で最大径となる。肩部から胴部の中程まで僅かに外に張り出しながらほぼ垂直な面を形成して下がり、腰部に向かって急激にほぼ直線的に窄まる。腰部と差し込み部との境には明確な段があり、差し込み部は下端部に行くほど徐々に径が小さくなる。

風輪胴部のほぼ垂直な面から腰部に向かって窄まる部分にかけて、墨書きの梵字が認められる。確認できた梵字は「カー」「カン」「カク」の３字である。「カ」の字は確認できないが、本来は墨書きしてあったと考えられる。

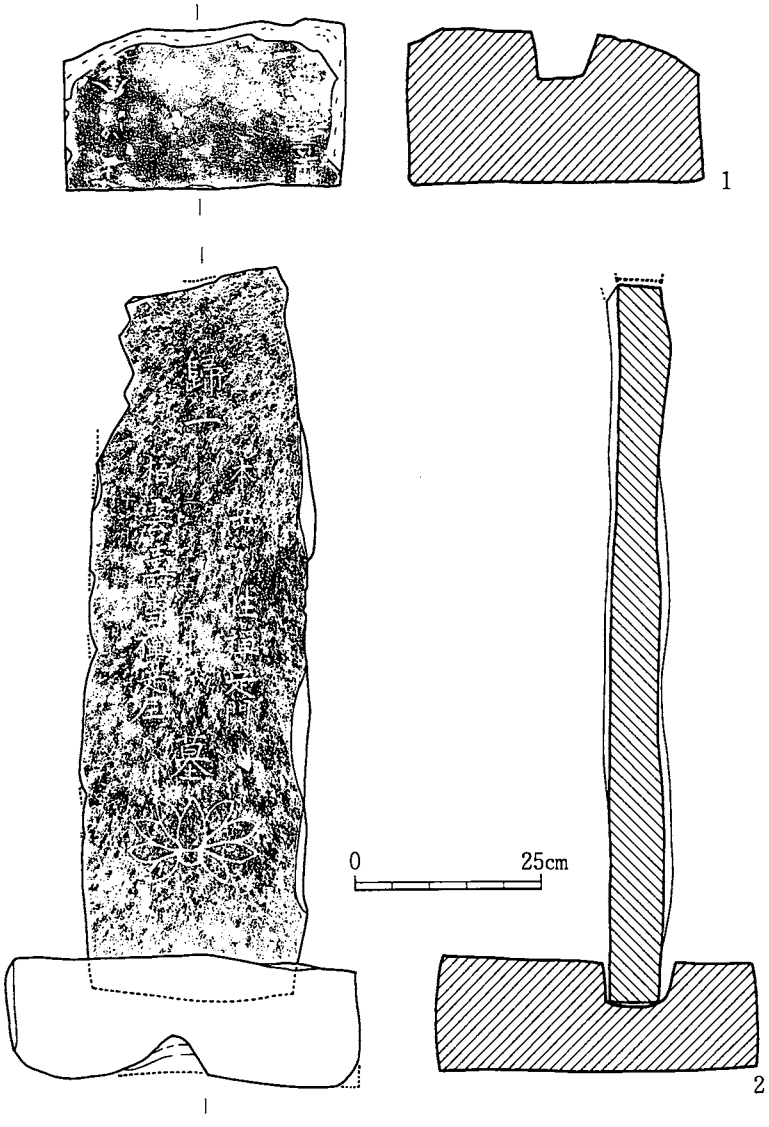
この空風輪の明確な時期は決めがたいが、室町時代～江戸時代の幅の中にはおさまるであろう。



第16図　空風輪実測図

板碑・板碑台座　（第17図１・２）

１・２は、調査区が位置する台地平坦面の南西端部のくびれ部付近で発見された。これらは横倒しの状態で近接して出土し、原位置を移動していた。



第17図　板碑・台座実測図

1は凝灰岩製で、五輪塔の地輪を板碑の台座として再利用したものである。地輪を逆にしてその上面に溝を穿つ。

五輪塔の地輪としてみれば、右端部に「■去浄金■」、左端部に「図明六釋囮月」と陰刻してある。

板碑の台座とすれば、1は2と同様の台座であり、2とほぼ同時期と考える。

2の碑部分と台座は安山岩製である。碑部分は正面だけをほぼ平らになるように加工してあり、背面は自然石の状態を呈している。碑部分は上端部と左端部の一部分に欠損箇所があるが、正面形はほぼ長方形である。碑の正面の上下両端には、それぞれ中央線上に上文字である「歸一」と蓮花を陰刻する。

「歸一」と蓮花とに挟まれた間には、右端部に「本岳了性禪定門」、左端部に「栢雲壽雪禪定尼」の文字を刻む。さらに、左端部の文字の右側に「元禄十五壬年」、左側に「十月晦日」と陰刻する。台座部分は、全面を加工したものであり、下面のほぼ中央部と右端部に欠損箇所がある。台座の上面は、碑の下端部を嵌め込むように凹部を作っている。

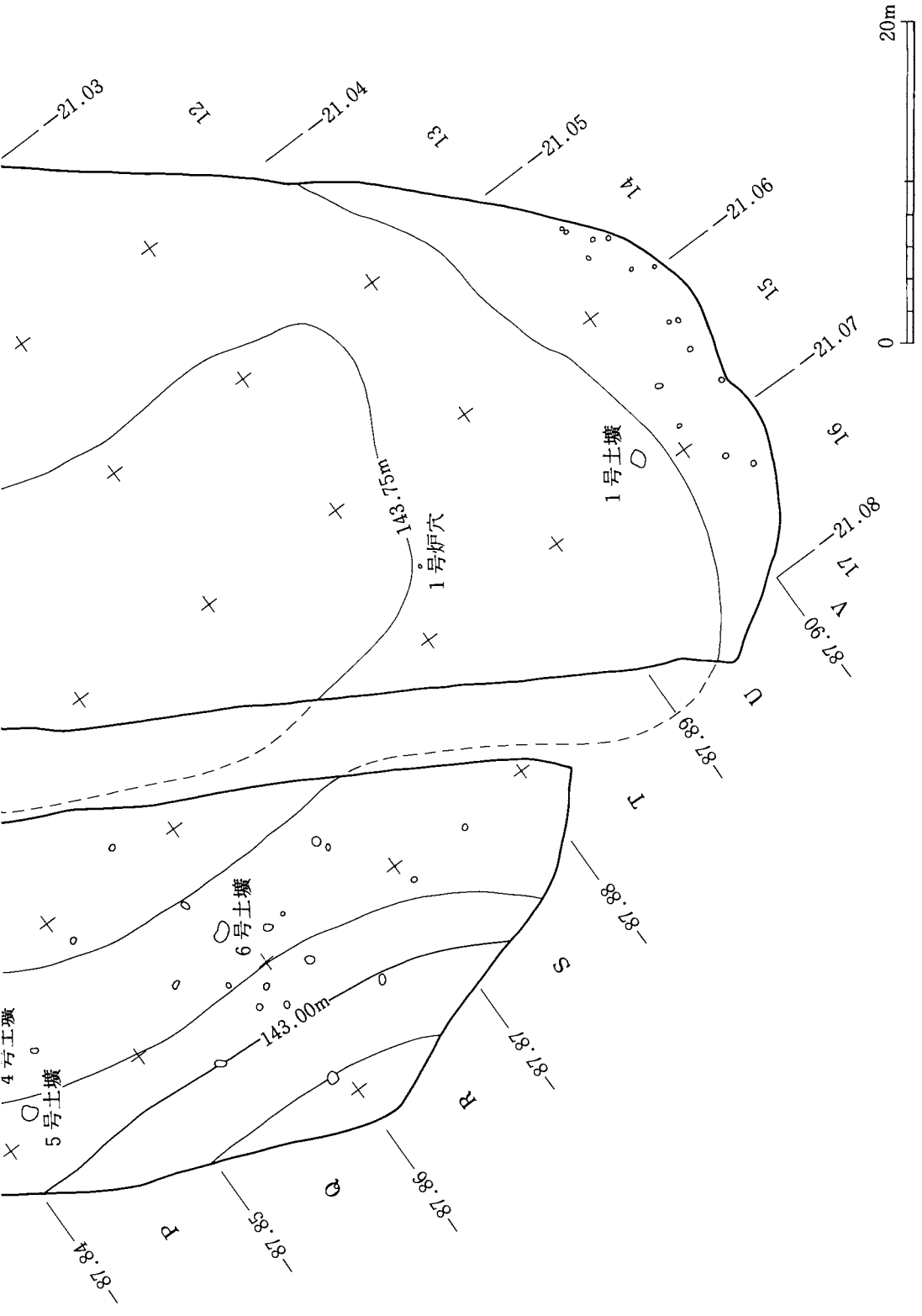
この板碑は、先に亡くなった妻を供養するために夫が建てた夫婦墓碑である。

（五輪塔・板碑に関しては、前川清一（文化財保護主事）氏の御教示があった。）

2
20.94
3
20.95
4
143.00m
区Ⅱ
87.72
C
D
87.73
E
87.74

20.96
5
20.97
6
20.98
7
20.99
区I
144.00m
145.00m
F
87.75
G
87.76
H
87.77
I
87.78
J

21.00
21.01
21.02
8
9
10
11
Ⅲ区
Ⅳ区
144.00m
145.00m
1号竪穴住居址
2号土壙
3号土壙
87.79
87.80
87.81
87.82
87.83
K
L
M
N
O


20m
0
21.03
21.04
21.05
21.06
21.07
21.08
12
13
14
15
16
17
1号土壙
1号炉穴
143.75m
143.00m
4号土壙
5号土壙
6号土壙
87.90
87.89
87.88
87.87
87.86
87.85
87.84
V
U
T
S
R
Q
P

第18図　遺構分布図

第４節　平安時代～鎌倉時代の調査

遺構について

検出した遺構は、大きく二つに分けることができる。それは、(1) IIａ層とほぼ同一の黒色砂質土やIIａ層に類似した淡黒色砂質土を覆土にする遺構とIIａ層をベースとした覆土をもつ遺構（以下、(1) の遺構群とする。)、(2) III層とほぼ同じ暗褐色土やIII層に類似した黒褐色土を覆土にする遺構（以下、(2) の遺構群とする。）である。

１．(1) の遺構群について（第18図）

(1) の遺構群は、調査区の南西部であるIII区・IV区にあり、Ｉ区・II区には分布しない。遺構が分布する範囲は、IIａ層が存在する範囲とほぼ重なる。

この遺構群は、１号竪穴住居址・１号～６号土壙・１号炉穴・ピット79基よりなる。IV区の南東壁付近に１号竪穴住居址がある。その１号竪穴住居址を中心とし、西側から南西側にかけての周囲に２号～６号土壙やピットが分布する。１号竪穴住居址南側のIII区の部分には、１号竪穴住居址と近接しては遺構が存在しない。１号竪穴住居址より南側に約34.0m離れた地点に１号炉穴が位置し、III区の南西端部に１号土壙とピットが分布する。

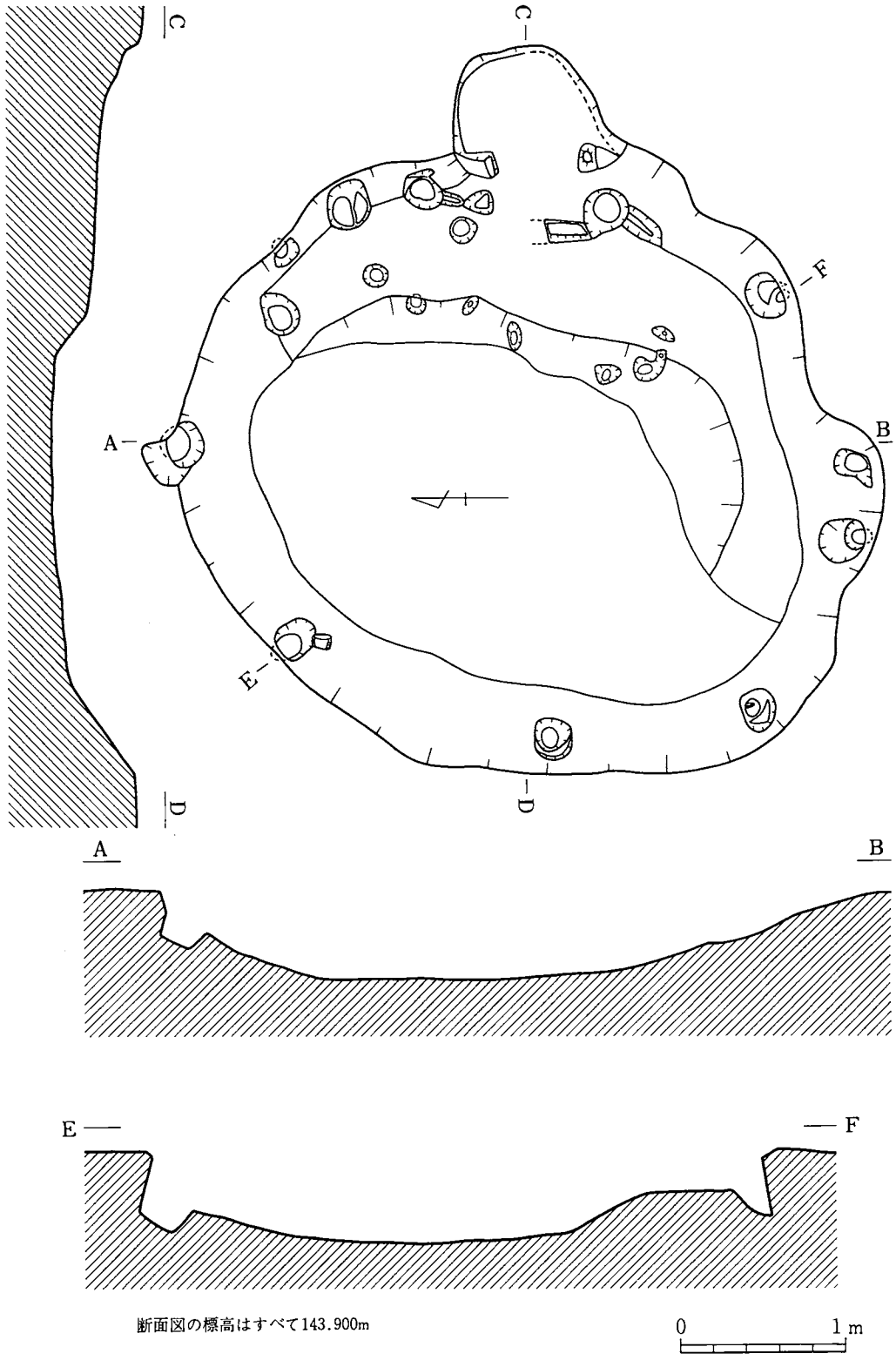
(1) の遺構群は、その分布状況より２グループに分けることができる。一つは１号竪穴住居址とそれを中心にして分布する土壙やピットで構成されるグループで、もう一つはIII区の南西端部に位置する炉穴・土壙・ピットで構成されるグループである。

１号竪穴住居址（第19図）

１号竪穴住居址は、略楕円形（長軸約4.30m、短軸約3.60m）の平面形を呈し、東壁部のほぼ中央にカマドが付く。カマドの内部には多量の焼土とカーボンがあり、壁が崩れ落ちた状態であった。住居址の斜めに立ち上がる壁には、11基のピットがほぼ楕円形に並ぶ。ピットは上面が住居址の中央に向かって、斜めに掘り込まれる（ピットの深さ約0.20m)。住居址のほぼ東側半分には、壁に沿って平らな面が巡り、その面や床面に向かう斜面部に小ピット(深さ約0.09～0.15m）が掘り込まれる。住居址の南北断面形は、床面中央に平坦面があり、平坦面の端部より壁に向かって緩やかに高くなる深い皿状を呈す（最深部約0.50m)。床面の硬化状況は、中央部で認められるが、全体的にあまり顕著でない。

住居址の覆土は大きく上下２層に分かれる。上層はIIａ層に類似した淡黒色砂質土である。住居址はIVｂ層まで掘られており、壁土であるIVｂ層・IVａ層と覆土上層とが混じった暗褐色土が下層になる。

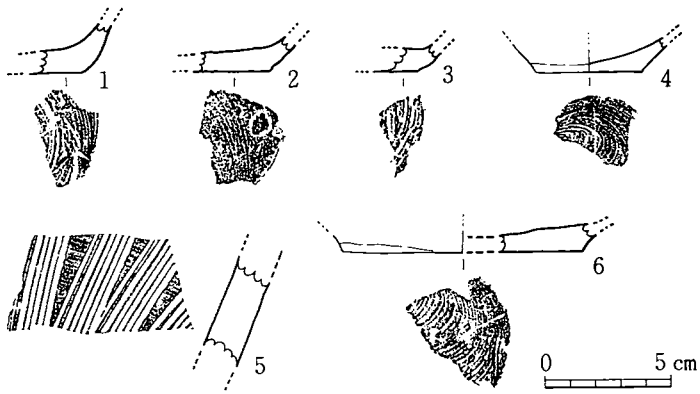
遺物の殆どは覆土の上層より出土し、小破片が多い。



第19図　1号竪穴住居址実測図

〔出土遺物〕（第20図）

１～４・６は糸切りの底部をもつ土師器の坏・皿類片である。４・６の底径はそれぞれ約4.2cm、約9.5cmに復原できる。これらの復原底径は後述する１号土壙のＡ・Ｂ類の底径とほぼ同じである。３の内器面にはススが付着する。



第20図　１号竪穴住居址出土遺物実測図

５は須恵器質のすり鉢片である。内器面には、断面がＵ字形を呈する幅約２～３㎜の条線を５～６本単位で施す。

１号土壙（第21図）

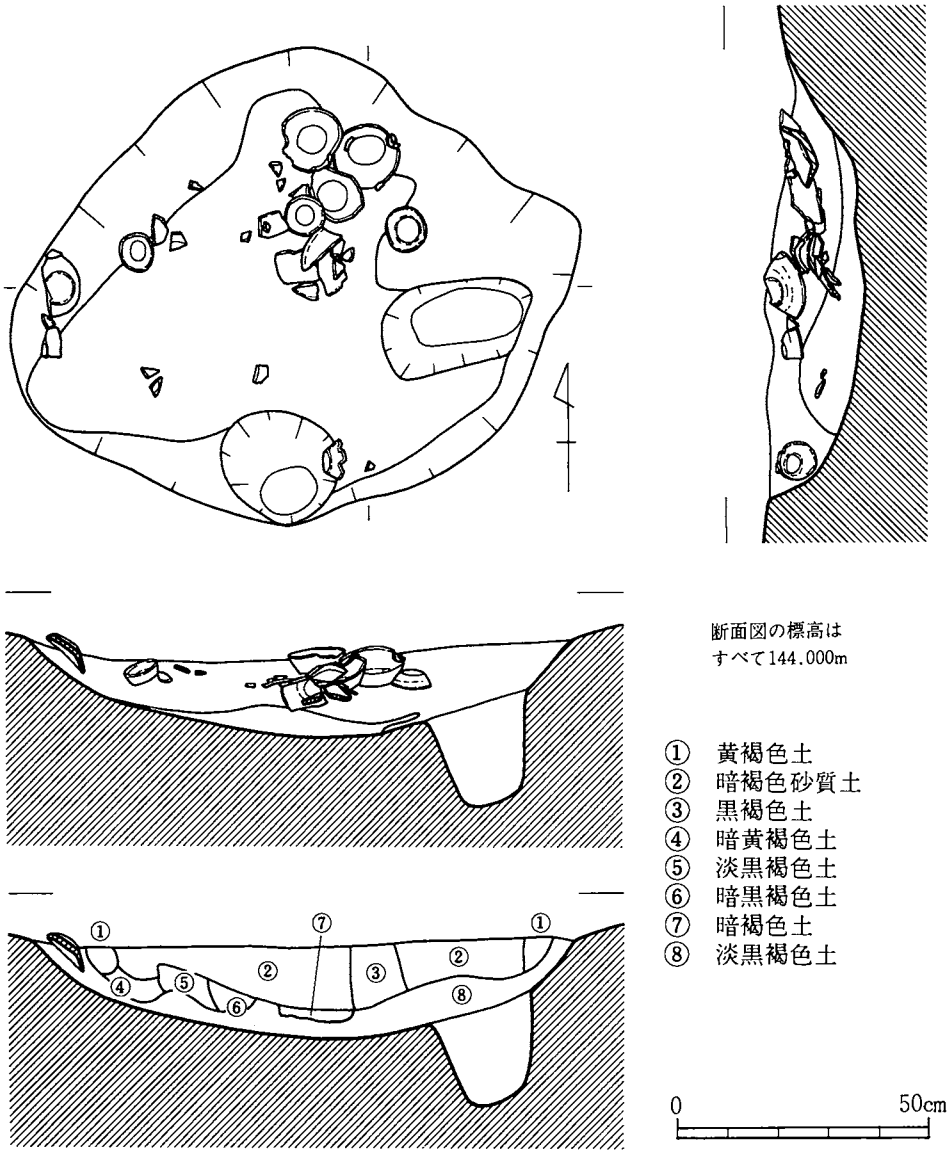
１号土壙は、不整な楕円形（長径約1.10m、短径約0.90m）の平面形を呈し、深い皿状の断面形になる（最深部約0.17m）。さらに、土壙内の南壁・東壁付近には、ピットが掘り込まれる。東壁付近にあるピットは、楕円形（長径約0.30m、短径約0.15m）の平面形で、断面形は筒形を呈する（深さ約0.20m）。南壁付近にあるピットは、ほぼ円形（径約0.20m）の平面形を呈し、断面形は筒形になる（深さ約0.35m）。２基のピットは、上面が土壙の中央部寄りに傾いた状態で掘られている。

土壙内の覆土は①層～⑧層に分けることができる。覆土は基本的に②層（暗褐色砂質土）と⑧層（淡黒褐色土）の上下層であり、②層・⑧層にブロック状に入り込んだのが①層（黄褐色土）・③層（黒褐色土）・④層（暗黄褐色土）・⑤層（淡黒褐色土）・⑥層（暗黒褐色土）・⑦層（淡黒褐色土）である。②層～⑧層はⅡａ層をベースにした層である。

土壙内の壁から床面にかけての底面直上の⑧層より、９個体の土師器の坏・皿類が一括出土した。出土地点は、土壙内の北側・西側・南側の３箇所に大きく分かれる。土壙北側部分の出土状況は、坏３点と小型の坏・皿類１点が口縁部を上に、小型の坏・皿類１点が底部を上にした状態であり、坏１個体がつぶれた状況を呈する。土壙西側では、坏１点が底部を上に、小型の坏・皿類１点が口縁部を上にした状態で出土した。土壙南側のピット上面に、体部を下にして斜位状態の小型の坏・皿類１点がある。

〔出土遺物〕（第22図・第３表）

１号土壙より一括出土した土師器の坏・皿類は、すべて糸切りの底部をもつ。土師器の坏は、その法量からＡ類・Ｂ類に分けることができる。



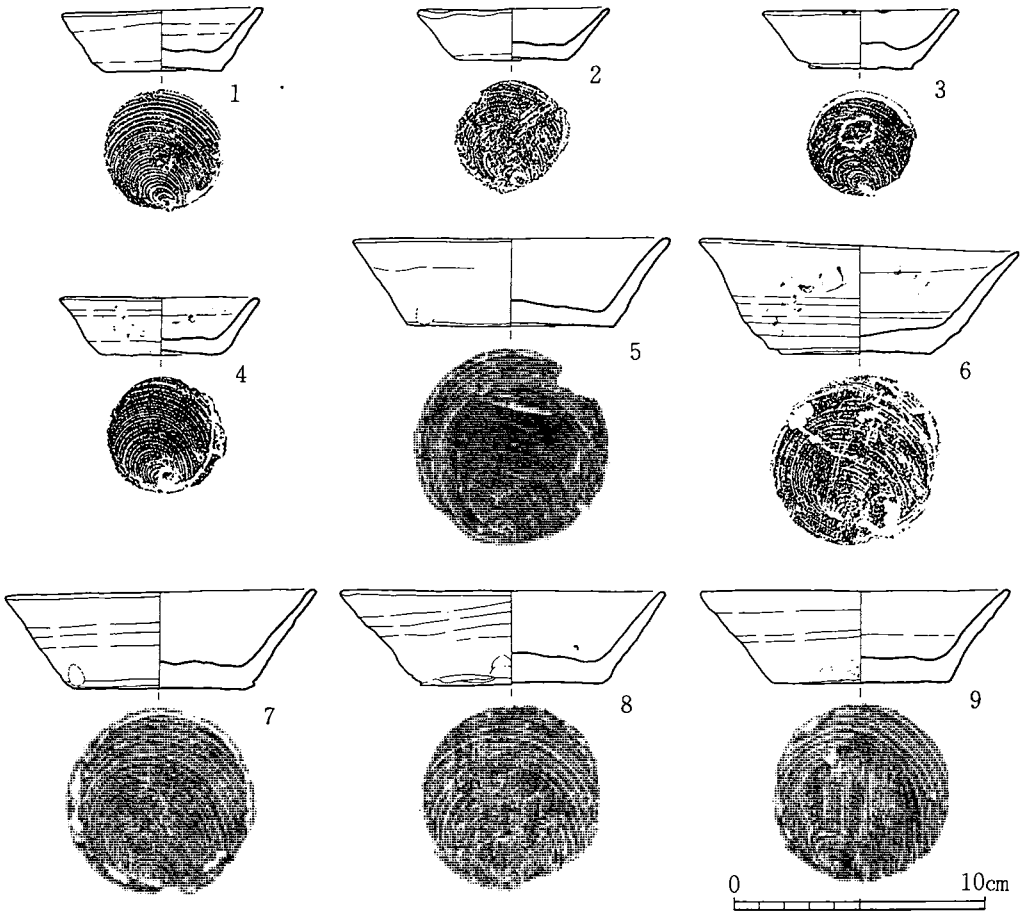
第21図　1号土壙実測図

A類；口径約12.35～13.20cm、底径約6.0～8.40cm、器高約3.65～4.60cmを測る（第22図5～9）。

B類；口径約7.80～8.10cm、底径約3.80～4.80cm、器高約2.20～2.55cmを測る（第22図1～4）。

A類

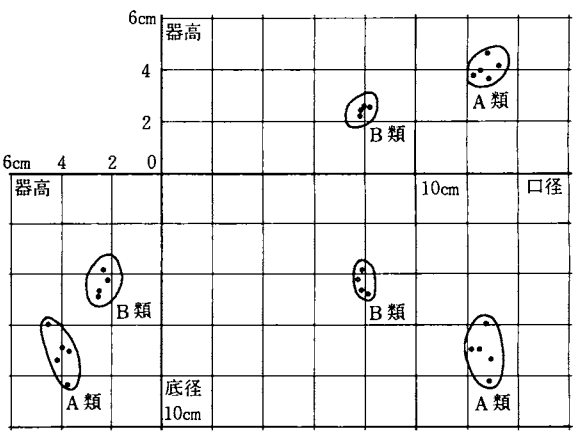
A類の体部は、内外器面とも横ナデ調整を施す。5・6・9の体部は、僅かに外反しながら口縁部までのび、7・8の体部は、ほぼ直線的に口縁部までのびる。5・7～9の内底面は、



第22図　１号土壙出土土師器実測図

回転ナデによる凹線が渦巻き状になっており、凹凸が見られる。６は内底面のほぼ中央部に凹みが見られる。５・６・９の外底部に板状の圧痕が残っている。８の底部には、切り離し後に、部分的にナデを施している。６・８は内外器面に、９は外器面に、ススが付着しており、灯明皿として使用したものである。

第３表　１号土壙出土土師器の法量表



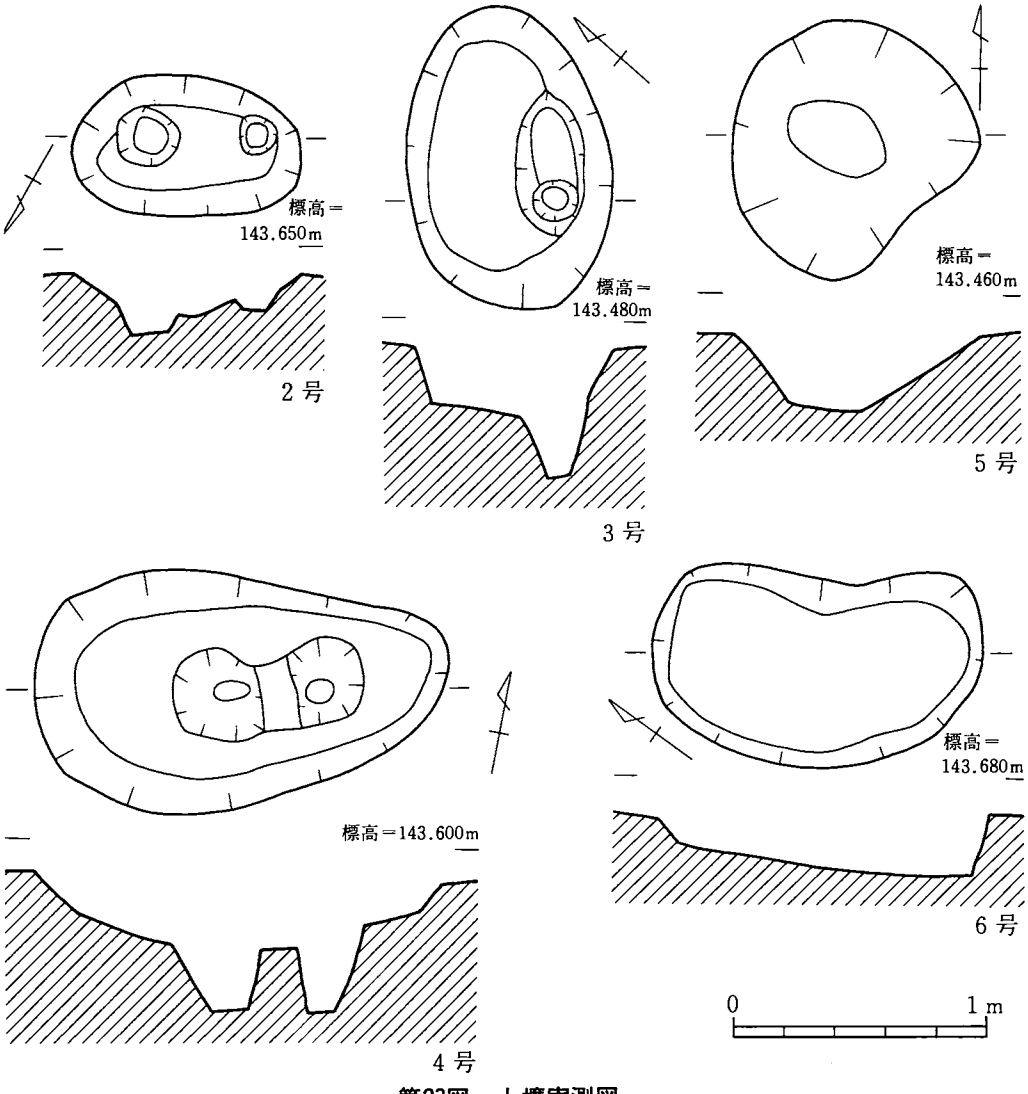
Ｂ類

Ｂ類の坏・皿類は小型で、体部の内外器面は横ナデを施す。１～４は、ほぼ直線的に口縁部までのびる体部をもち、回転ナデによる凹凸が内底部にある。２の底部に板

状圧痕が残る。3の底部には薄い粘土の塊が付着している。3・4は灯明皿として使っており、内外器面にススが付く。

2号土壙（第23図）

2号土壙は楕円形の平面形を呈する（長径約0.90m、短径約0.54m）。床面の南端部寄りに円形をした深さが異なる大小2基のピットがある（東側のピットは径約0.22m、深さ約0.10m。西側ピットは径約0.14m、深さ約0.06m。）。2号土壙は黒色砂質土の覆土をもつ。土壙に伴う遺物は出土していない。



第23図　土壙実測図

３号土壙（第23図）

３号土壙の平面形は楕円形である（長径約1.18m、短径約0.80m）。床面の東端部には楕円形をした二段掘りのピットがある（長径約0.56m、短径約0.28m、最深部約0.22m）。３号土壙は、黒色砂質土の覆土であり、土壙に伴う出土遺物はない。

４号土壙（第23図）

４号土壙は楕円形の平面形（長径約1.60m、短径約0.95m）で、床面のほぼ中央部には円形のピット２基がある（東側のピットは径約0.30m、深さ約0.26m。西側ピットは径約0.36m、深さ約0.26m）。４号土壙は淡黒色砂質土の覆土で、土壙に伴う遺物は出土していない。

５号土壙（第23図）

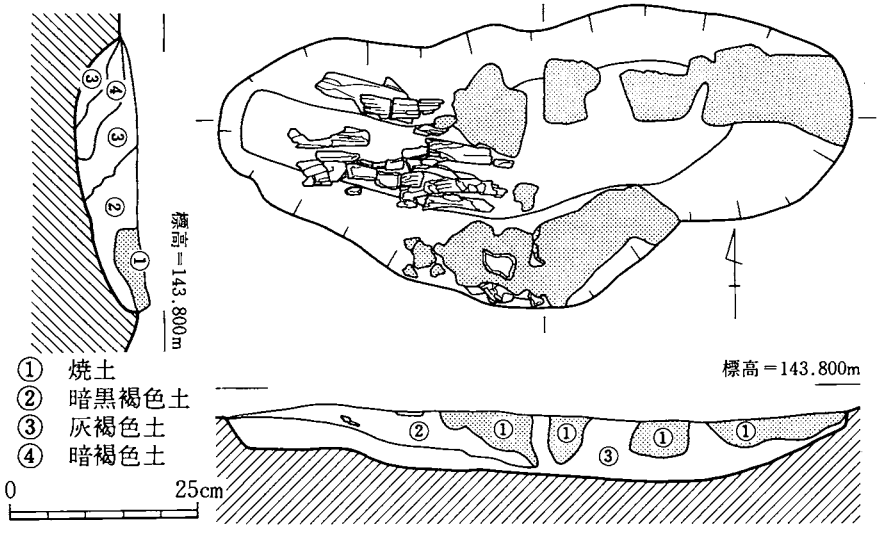
５号土壙の平面形は略円形である（最大径約１m）。断面形は深い皿状を呈する（深さ約0.30m）。３号土壙は、淡黒色砂質土の覆土であり、土壙に伴う出土遺物はない。

６号土壙（第23図）

６号土壙は楕円形の平面形（長径約1.30m、短径約0.72m）で、深い皿状の断面形になる（最深部約0.24m）。６号土壙の覆土は黒色砂質土で、土壙に伴う遺物は出土していない。

１号炉穴（第24図）

１号炉穴は不整な楕円形を呈する（最大長径約0.84m、最大短径約0.35m）。断面形は浅い皿状になる（深さ約0.08m）。覆土は①層～④層に分層できる。覆土最上位の東側半分に④層の焼土がブロック状に入る。



第24図　１号炉穴実測図

土壙内の焼土西側部分には、焼土とほぼ同じ高さで木炭片が検出できた。

ピット（第18図）

大小79基のピットが検出された。ピットは、ほぼ円形の平面形で（径約0.10～0.40m）、断面形は筒状を呈する（深さ約0.10～0.80m）。検出したピットの中で、掘立柱建物の柱列になるものは確認できなかった。ピットの覆土には、黒色砂質土と淡黒色砂質土の二種類ある。

2．遺物について（第25図・第26図）

(1) の遺構群の覆土は、IIａ層に類似したものやIIａ層をベースにしたものである。ここでは、IIａ層を中心に包含される糸切り底の土師器坏・皿類を取り上げる。

IIａ層出土の土師器を見ると、すべて糸切り底の土師器坏・皿類である。IIｂ層出土の土師器は、ヘラ切り底の土師器坏・皿類が主体であり、糸切り底の土師器坏・皿類は少ない。

IIａ層より出土した308点の糸切り底の土師器の分布は、大きく次の四つに分けることができる。(1) １号竪穴住居址の北側部分であるO—14・15グリッド。(2) Ⅳ区の南西隅であるQ—17・18グリッド、R—17・18グリッド。(3) Ⅰ区の南西部で標高約145～145.5mの最も高い部分。(4) Ⅲ区の北東部を除いたほぼ全域。これらの中で、出土遺物の密度が高いのが (1) と (2) の部分である。(3) ・ (4) 部分の遺物出土状況は、密集したものではない（第18図・第25図）。IIｂ層出土の糸切り底の土師器坏・皿類は、Ⅰ区のほぼ中央部に分布している（第25図）。

糸切り底の土師器坏・皿類（第26図・第４表）糸切り底の土師器坏・皿類は、小破片で実測可能なものは少ない。IIａ層より出土したものは３～10・12～14・16・17・19・22・23で、１・２・11・15・18・20・21・24はIIｂ層より出土した。25～32はⅠ層出土のものである。これらの中で、法量計測可能な５点を分類した。

Ｂ類（第26図10・30・32）

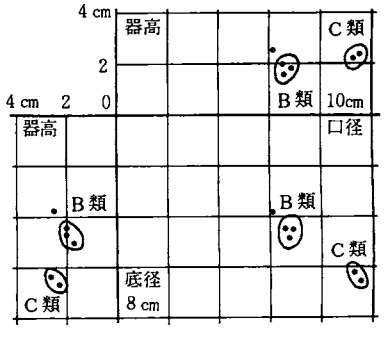
このＢ類は、１号土壙出土の土師器Ｂ類とほぼ同じであるが、口径が僅かに小さい。10・30・32の体部はほぼ直線的にのび、口縁端部は丸くなる。

10は底部に板状圧痕が残り、口縁部の内外器面にススが付着する。

Ｃ類（第26図26・28）

Ｃ類；口径約9.1～9.6cm、底径約6.2～6.6cm、器高約2.3～2.5cmを測る。26は底部の中央部が盛り上がり上げ底気味になる。体部はほぼ中央部で僅かに凹み、丸い口縁端部にいたる。28は平らな底部よりほぼ直線的な体部を経て僅かに角ばる口縁端部までのびる。

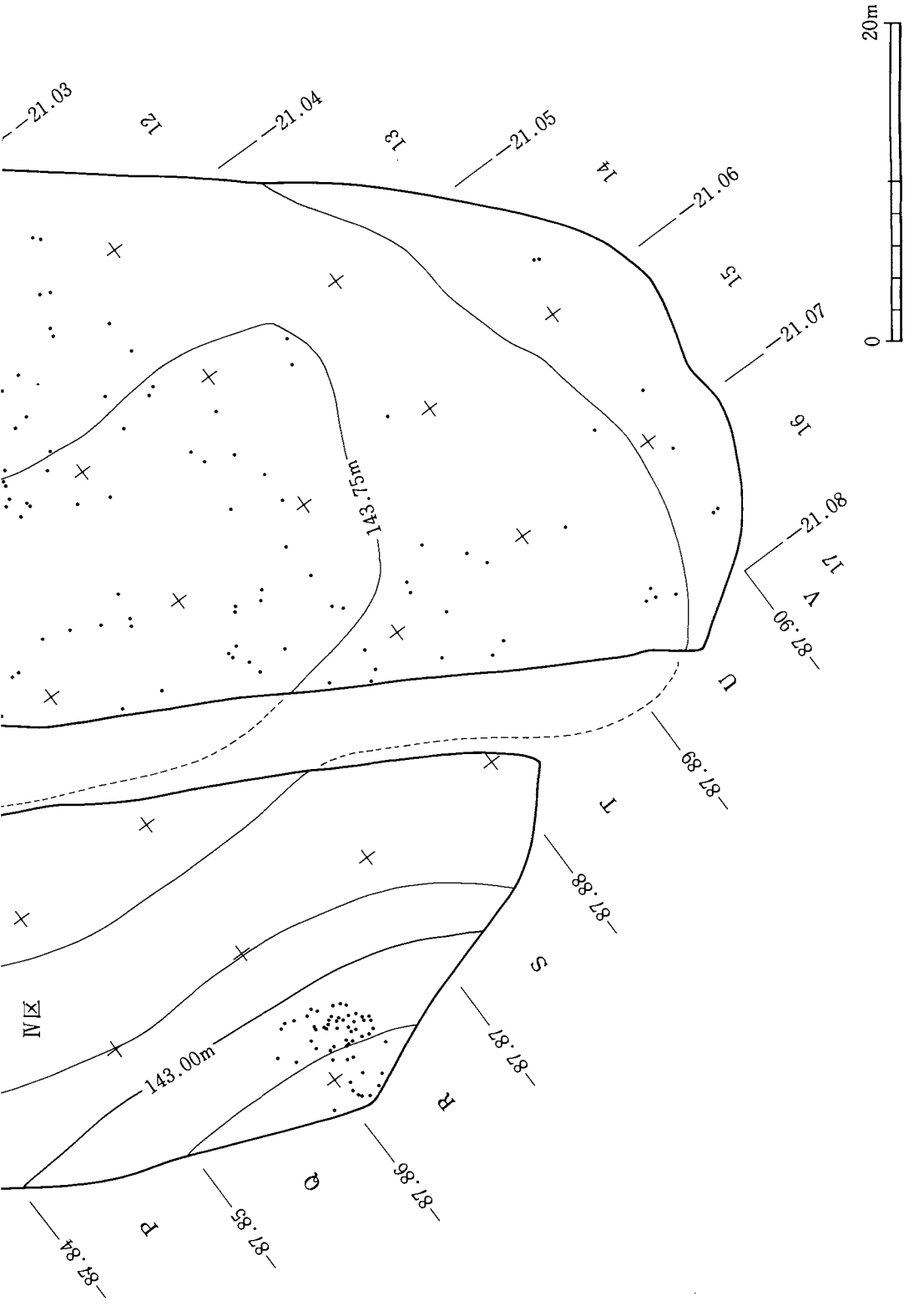
第４表　土師器法量表



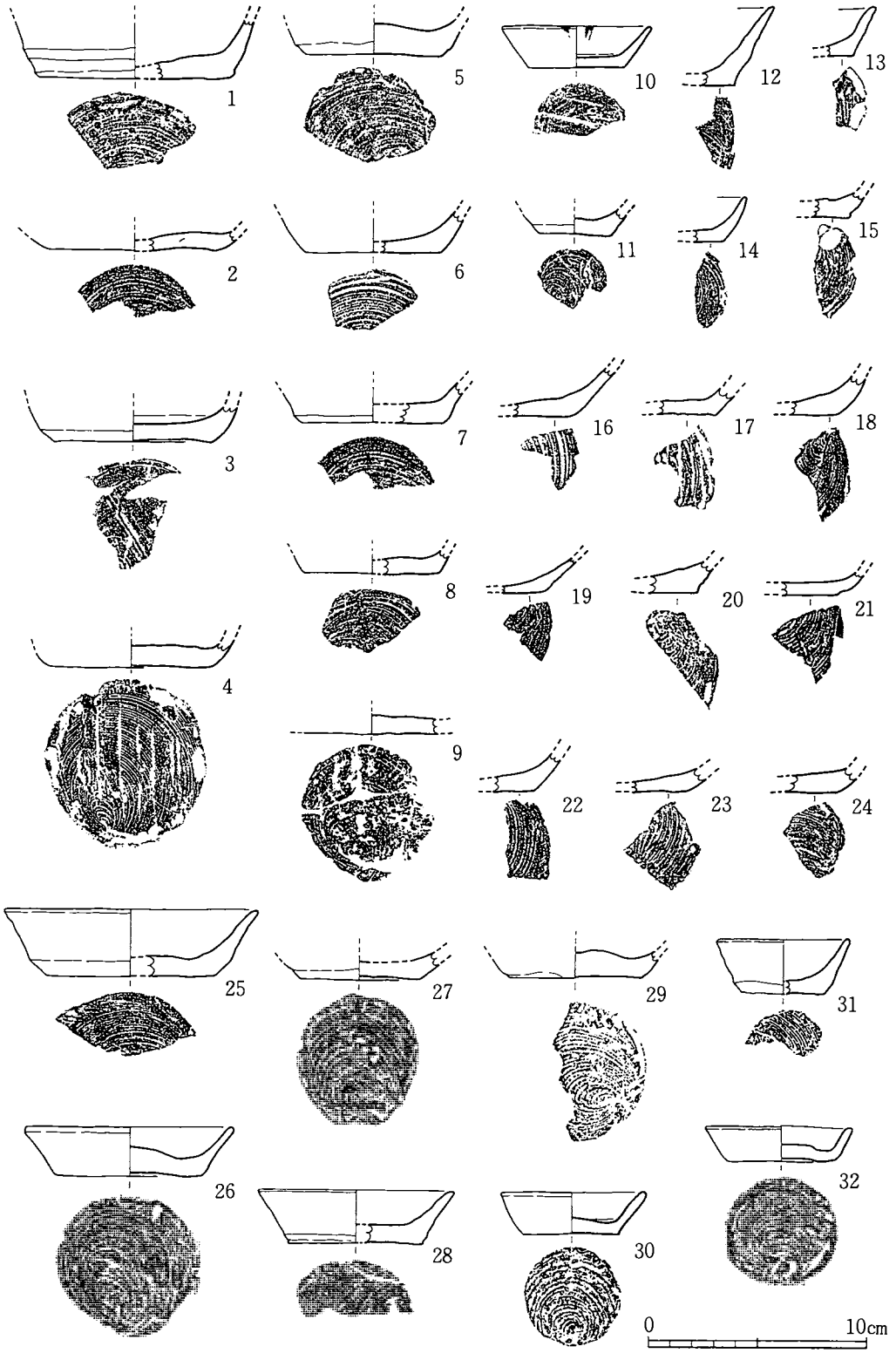
20.94
20.95
2
3
4
143.00m
87.72
87.73
87.74
C
D
E

図 I

8
21.00
9
21.01
10
21.02
11
145.00m
144.00m
区Ⅲ
K
87.79
L
87.80
M
87.81
N
87.82
O
87.83



第25図　Ⅱa層出土遺物分布図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
10cm

第26図　土師器実測図

31はB類より底径が小さく、器高が高い。

次に、底径（復原底径も含む）と器高が計測できたものを見てみる。

底径が計測可能なものの中で、2～8・27・29は1号土壙出土土師器A類の底径とほぼ同じである（底径約5.80　～7.6cm）。2・3・4・27は上げ底様の底部である。5～8・29は平らな底部で、5・29の内底部は盛り上がる。11は1号土壙出土土師器B類とほぼ同様な底径である（底径約3.4cm）。1はA類に近い底径をもつが、やや大きい（底径約9cm）。

器高が計測できたものの中で、12の器高（器高約4.4cm）はA類の器高と、13・14の器高（器高約2～2.2cm）はB類の器高とほぼ同一である。12・13はナデによる凹凸がある体部で、丸い口縁端部をもつ。14の体部は内湾しながら立ち上がり、丸い口縁端部までのびる。

その他の土師器は小破片であるため詳細は不明である。

3．(2) の遺構群について（第27図・第28図）

(2) の遺構群の大多数を占めるのは、4142基のピットである。これらのピットは、調査区のほぼ全域に広がるが、Ⅰ区のピット分布密度が最も高い。Ⅰ区の中でも北東部の緩傾斜地にピットが集まり、標高約145.00～145.50mの最高部では、ピットの分布密度は低い。Ⅰ区の北東部の緩傾斜地に分布するピットの中で、掘立柱建物跡として確認できたのが3号～23号の掘立柱建物跡である。Ⅰ区の他に、Ⅱ区・Ⅲ区にもピットが存在する。しかし、Ⅱ区・Ⅲ区のピットは、Ⅰ区のピットより密集度は低く、掘立柱建物跡の柱穴列は確認できなかった。

これらのピットの他に、土師器坏をピットの底に置いた状態で検出した1号ピットがある。1号ピットは、掘立柱建物跡の柱穴でなく、E－7グリッドの南端部に位置する。

掘立柱建物跡が分布する範囲のほぼ中央部である18号・19号掘立柱建物跡と重複する状態で礎石を伴う2号建物跡がある。

2号建物跡、18号・19号掘立柱建物跡と22号掘立柱建物跡とのほぼ中間地点に、道路跡が北西方向から南東方向にのびる。

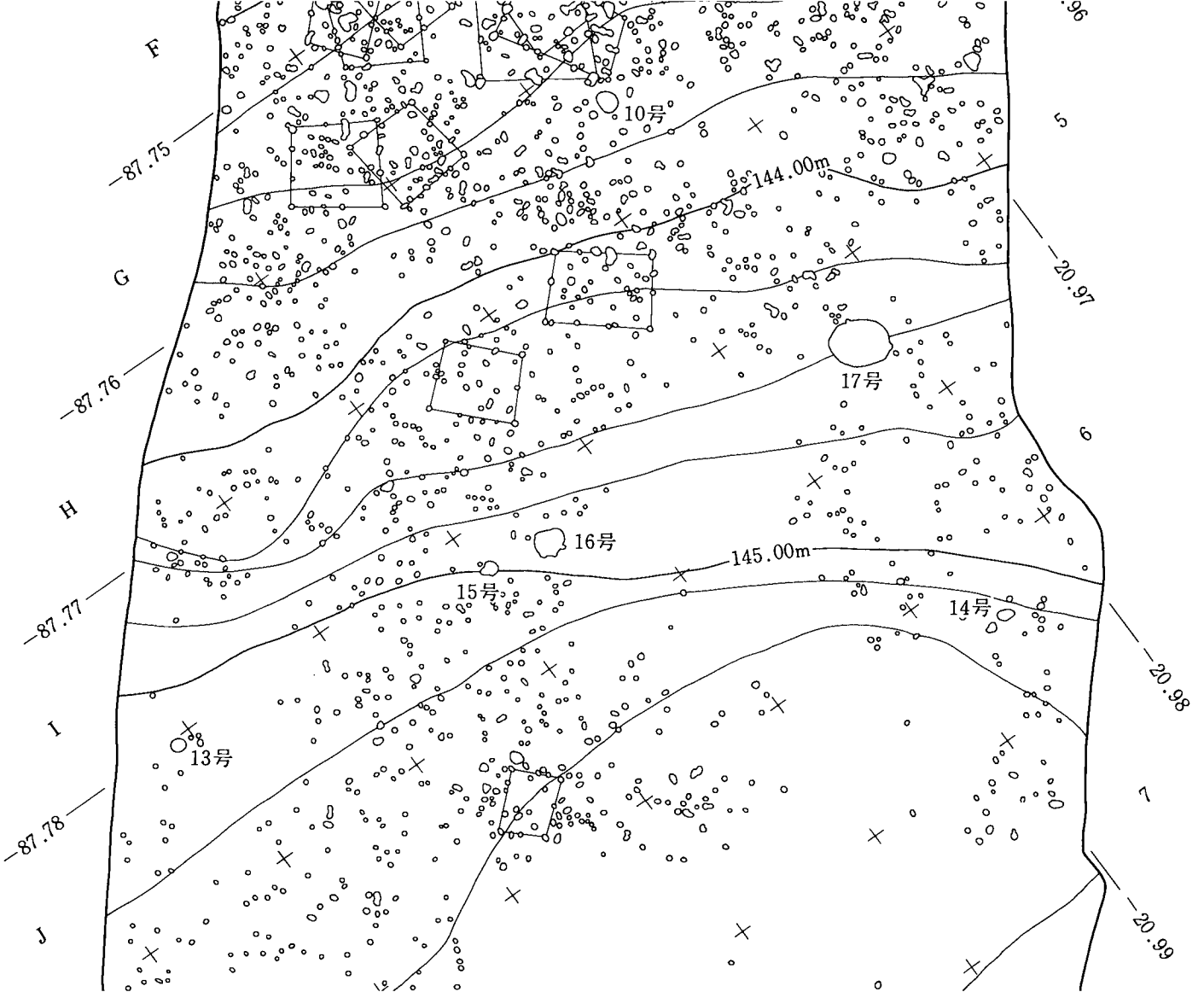
また、7号～17号の11基の土壙は、Ⅰ区で確認した掘立柱建物跡が分布する範囲内に存在する。

建物跡について（第28図）

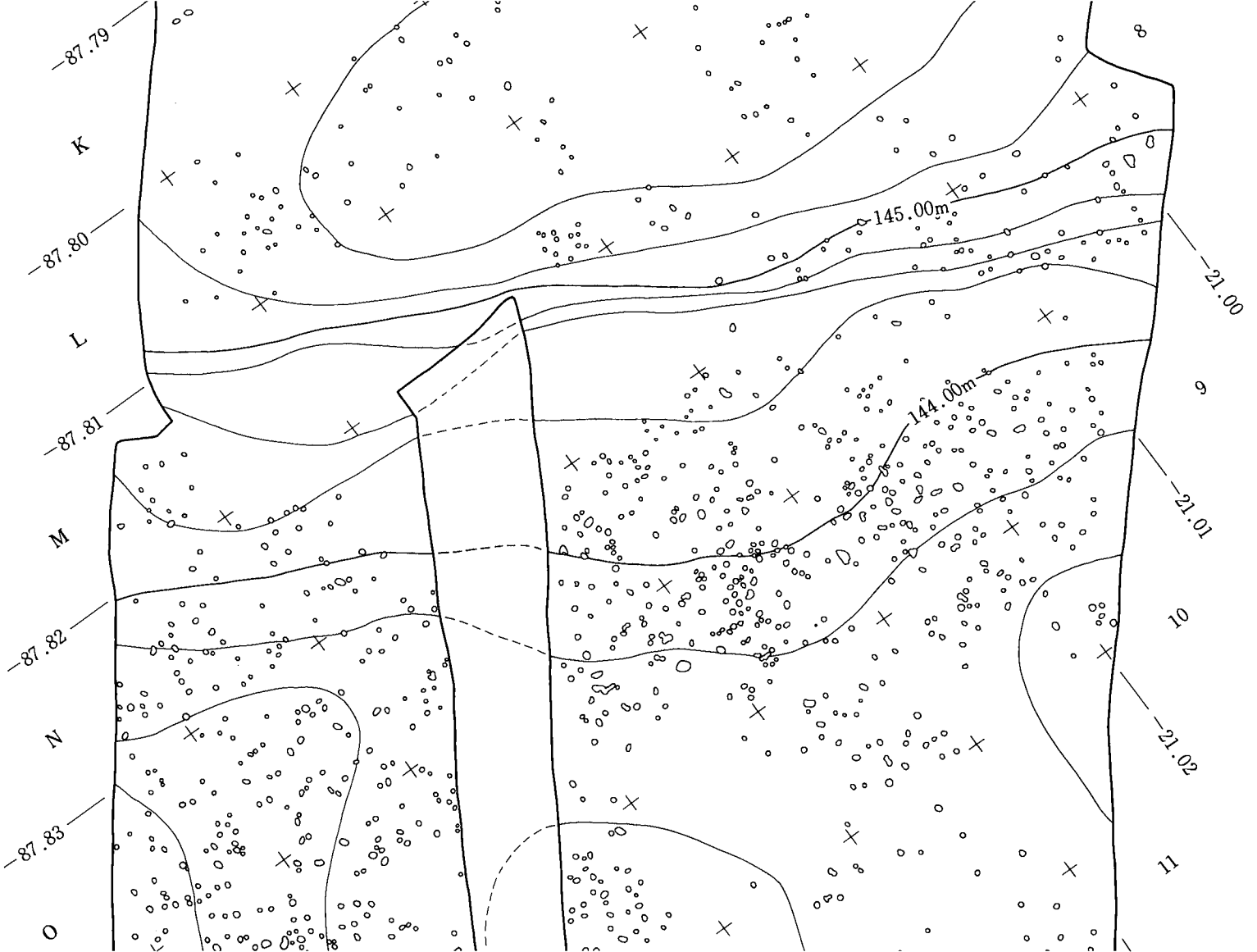
建物跡に付した号数が2号から始まっているのは、調査中1号とした掘立柱建物跡がその後の調査で掘立柱建物跡とするには無理があることに気がつき、1号を欠番としたためである。

建物跡全体の配置状況を見ると、2号～22号の建物跡は、北東方向から南西方向に帯状にまとまって分布する。これらの建物跡の中で最も南西側に位置する17号建物跡と直線距離にして約21m離れた箇所に、23号建物跡が一棟だけある。

C
D
E
2
3
4
-87.72
-87.73
-87.74
-20.94
-20.95
-20
7号
8号
9号
11号
12号
18号
1号ピット
143.00m



F
G
H
I
J
-87.75
-87.76
-87.77
-87.78
-20.97
-20.98
-20.99
5
6
7
10号
144.00m
17号
16号
145.00m
15号
14号
13号

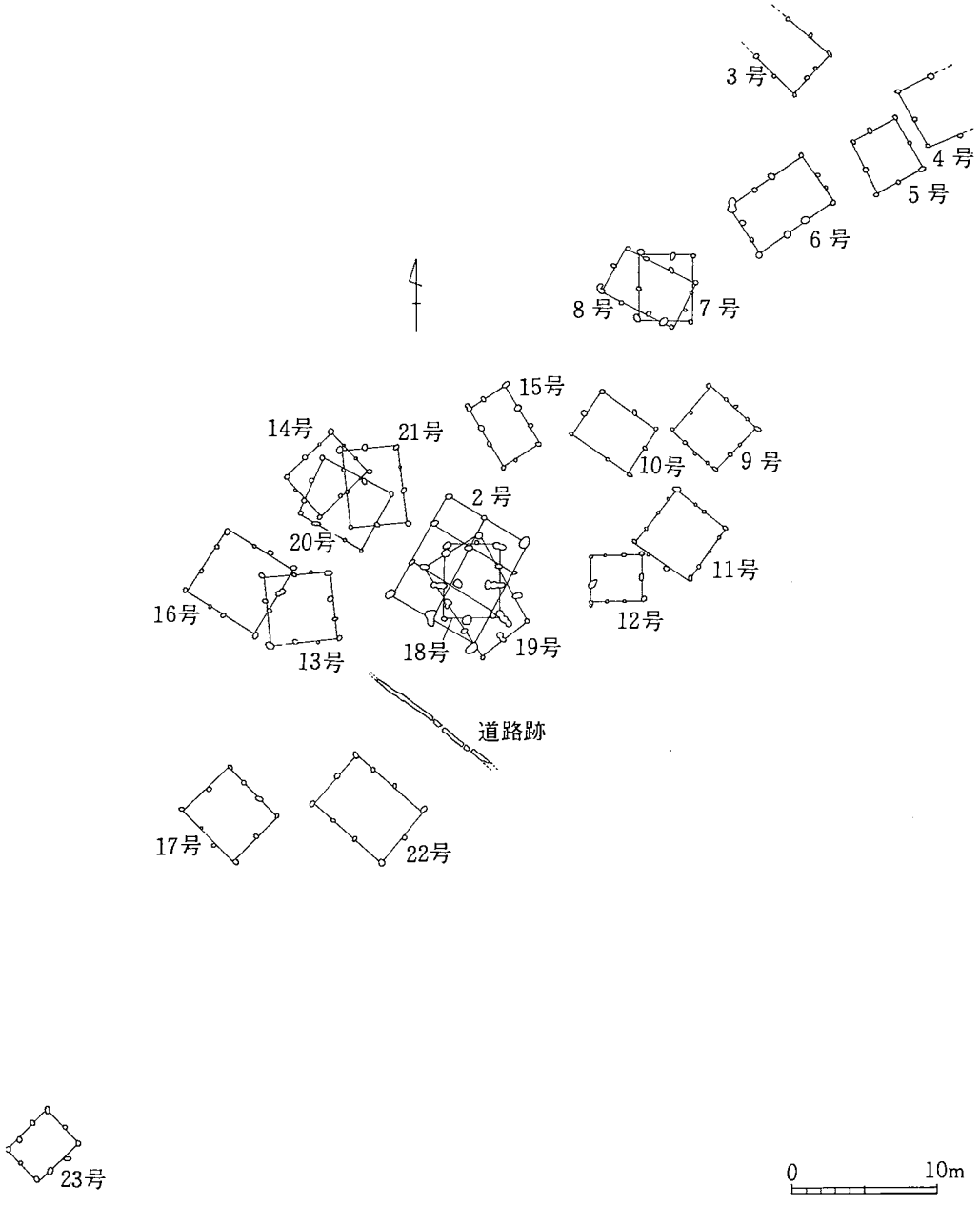

-87.79
K
-87.80
L
-87.81
M
-87.82
N
-87.83
O
145.00m
144.00m
8
9
10
11
-21.00
-21.01
-21.02

20m
0
21.03
21.04
21.05
21.06
21.07
21.08
12
13
14
15
16
17
143.75m
143.00m
87.90
87.89
87.88
87.87
87.86
87.85
87.84
U
V
T
S
R
Q
P

第27図　遺構分布図

２号建物跡（第30図）

２号建物跡は礎石を伴う建物跡である。２号建物跡は、礎石を据えたと考えられる穴より判断すると、３間×２間の総柱のほぼ南北棟建物跡であり、建物の北側がやや東に振れる。礎石を据えたと考えられる穴の平面形は、Ｐ２・Ｐ５が円形（径約0.34～0.44m）、Ｐ１・Ｐ４・Ｐ



第28図　建物跡・道路跡分布図

9・P10・P11が小楕円形（約0.38～0.58×0.18～0.36m）、P3・P6・P8・P12が大楕円形（約0.62～0.92×0.44～0.62m）、P7が不整形（最大長約1.18m、最大幅約0.79m）を呈する。穴の断面形は、すべて浅い皿状である（深さ約0.06～0.20m）。穴の覆土は、周囲より検出されているピットに類似した淡暗褐色土である。

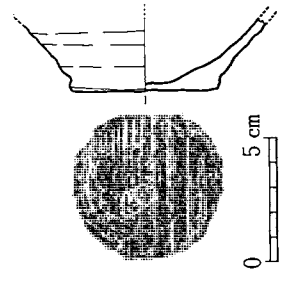
P3の穴より検出した礎石はほぼ据わった状態で、P6・P7・P8の穴では礎石が多少動いた状態であった。P2のほぼ南側、P4の南側、P5の西側、P7の北側、P9の東側では、穴に近接して礎石を検出した。第30図に示した範囲外で2号建物跡の周囲には、3基の礎石と考えられる自然石があった。

礎石を据えたと考えられる穴による建物の大きさは、次のようになる。P3～P6が約8.40m（約28尺）で、柱間は北より約2.10m（7尺）、約3.30m（11尺）、約3.0m（10尺）を測る。P2～P7は約8.10m（約27尺）で、柱間は北より約2.25m（7.5尺）、約2.70m（9尺）、約3.15m（10.5尺）である。P1～P8が約7.95m（26.5尺）で、柱間は北より約2.10m（7尺）、約3.0m（10尺）、約2.85m（9.5尺）を測る。P1～P3が約6.15m（約20.5尺）で、柱間は西より約2.85m（9.5尺）、約3.30m（11尺）である。P10～P4は約6.60m（22尺）で、柱間は西より約3.0m（10尺）、約3.60m（12尺）を測る。P9～P5が約6.60m（22尺）で、柱間は西より約2.60m（12尺）、約3.0m（10尺）である。P8～P6は約6.75m（22.5尺）で、柱間は西より約3.45m（11.5尺）、約3.30m（11尺）を測る。

P1～P8とP8～P6の2箇所を深掘りして、礎石の下部の土層状態を調べた。礎石を据えるための穴は、Ⅲ層から掘り込まれており、P6・P7の下部の状況をみると、同じくⅢ層から掘り込まれているピットの肩部よりやや上部に位置することが判る。また、礎石を据えるための穴の下部や周囲の土層には、版築などの人工的な堆積状態は認められない。P8の下部のⅤ層・Ⅵ層・Ⅶ層が斜めの状態になっているのは、層序横転（第Ⅲ章第2節）によるものである。

〔出土遺物〕（第29図・第5表）

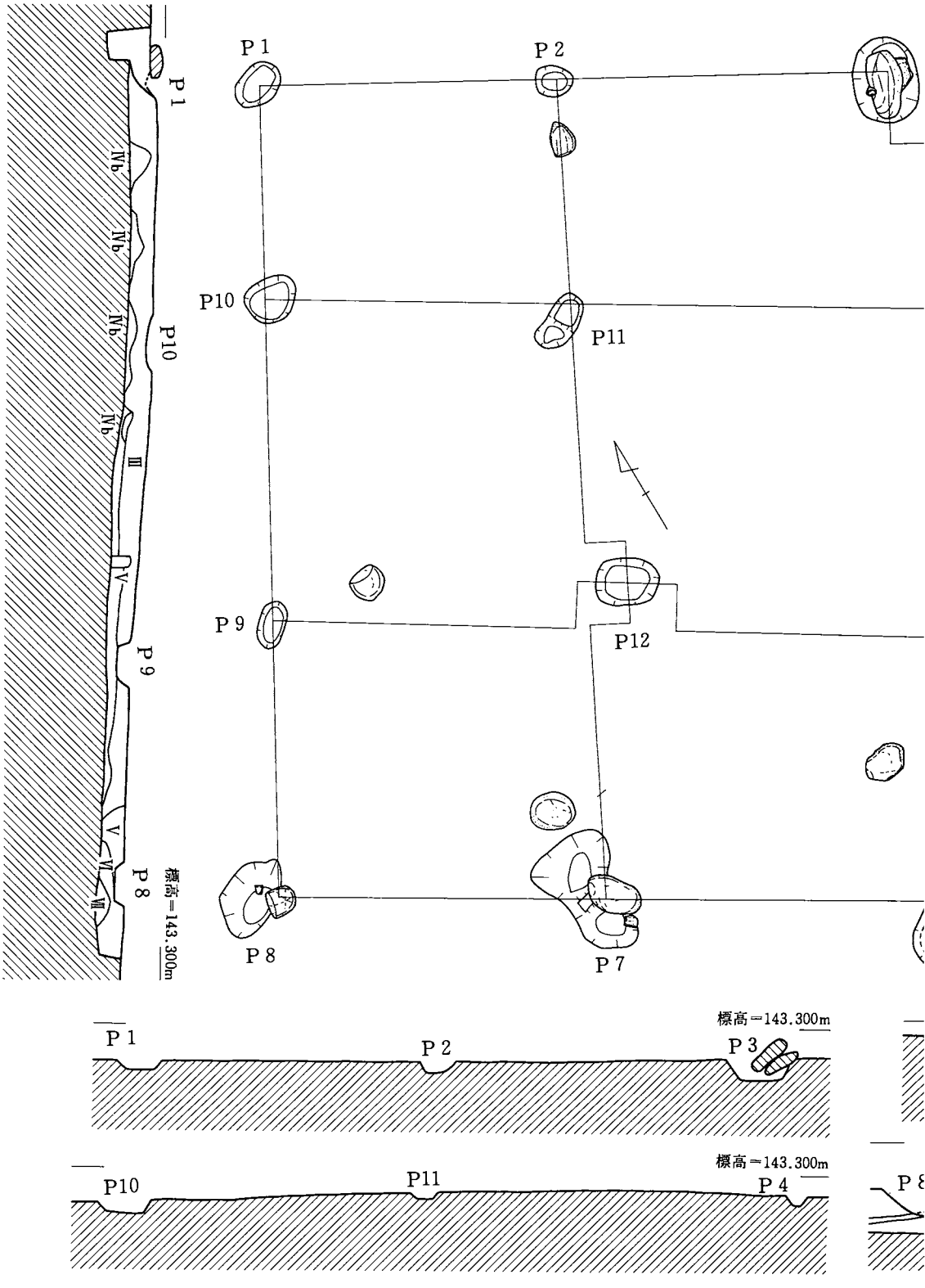
P3とP11の底面より、土師器片が出土した。P11より出土した土師器は、小破片であるため詳細は不明である。P3で検出した土師器坏は、ヘラ切りで、板状圧痕が残る底部をもつ。内底部の中央にはナデを施し、その部分が僅かに窪む。体部の内外器面には、横ナデを行う。底部と体部の境には、弱い段がありほぼ直線的にのびる体部につながる。

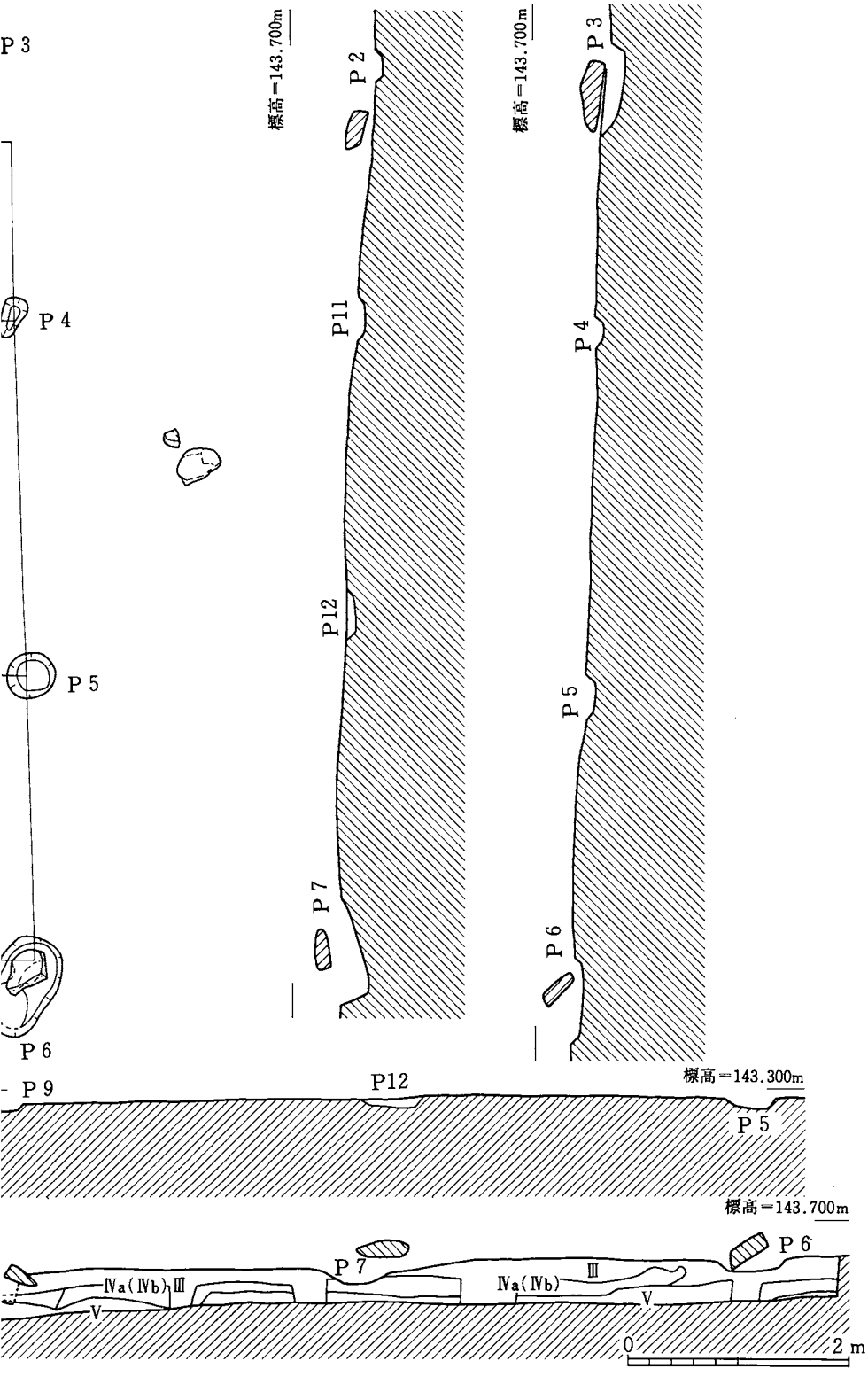


第29図　土師器実測図

〔礎石〕（第31図・第5表）

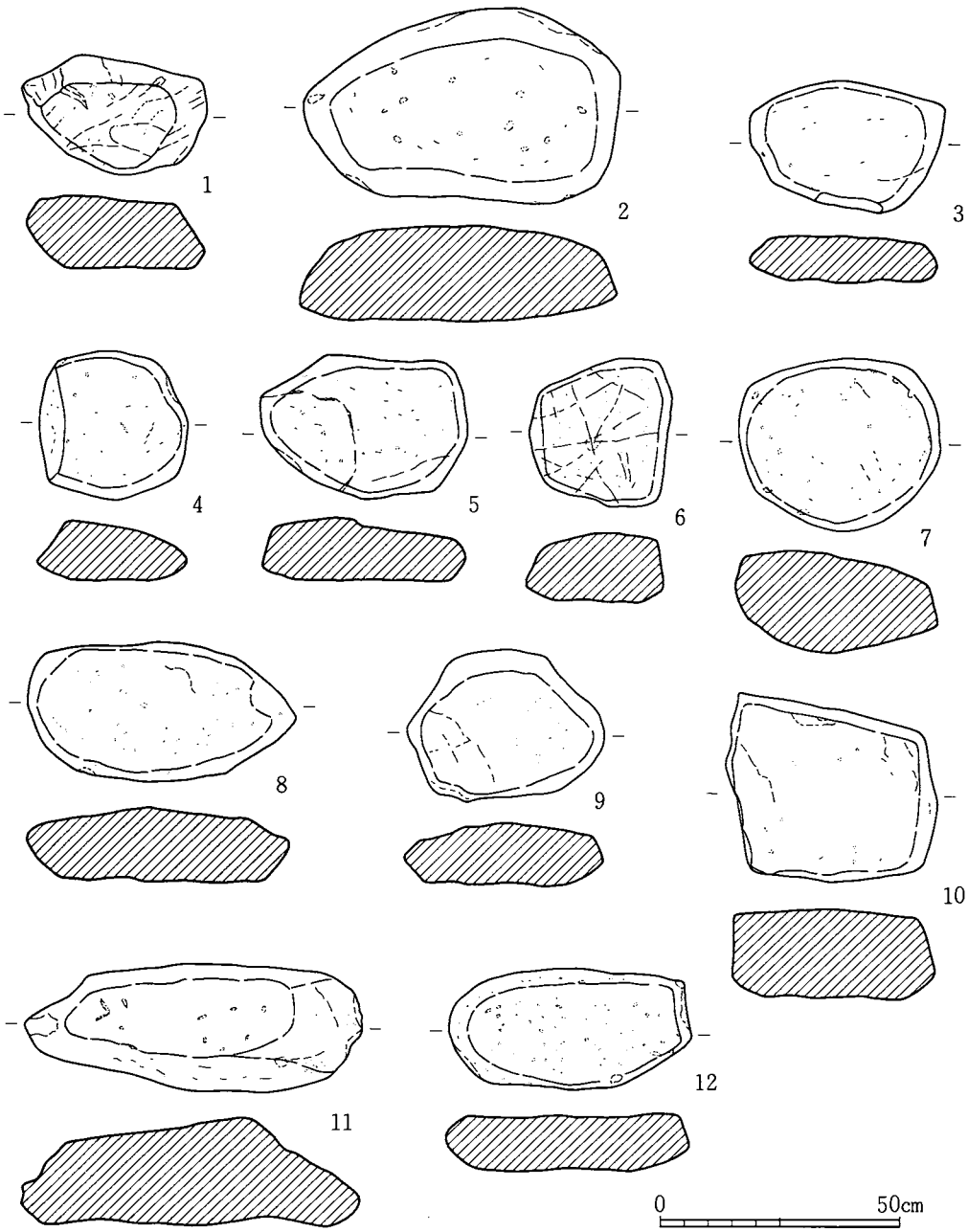
1～12は2号建物跡に伴う礎石である。2はP3、6はP8、8はP7、10はP6より検出した。1はP2の南側、4はP9の東側、5はP4の南側、7はP7の北側、9はP6の北側で出土


P 1
P 2
P10
P11
P 9
P12
P 8
P 7
P 3
P 4
IV b
III
V
VI
VII
標高＝143.300m



第30図　2号建物跡実測図

した。３・11・12は、２号建物跡に近接した箇所にあった。この３・11・12以外には、２号建物跡の周囲、及び調査区のⅢ層中より出土した大型の石はない。２号建物跡に近接した出土状況より、３・11・12は２号建物跡に伴うものと考える。１～４・７・10は砂岩で、それら以外は安山岩である。１～３・８～10・12の上下面は、ほぼ平坦である。４・６・７は、上下面の



第31図　礎石実測図

第5表　礎石一覧表

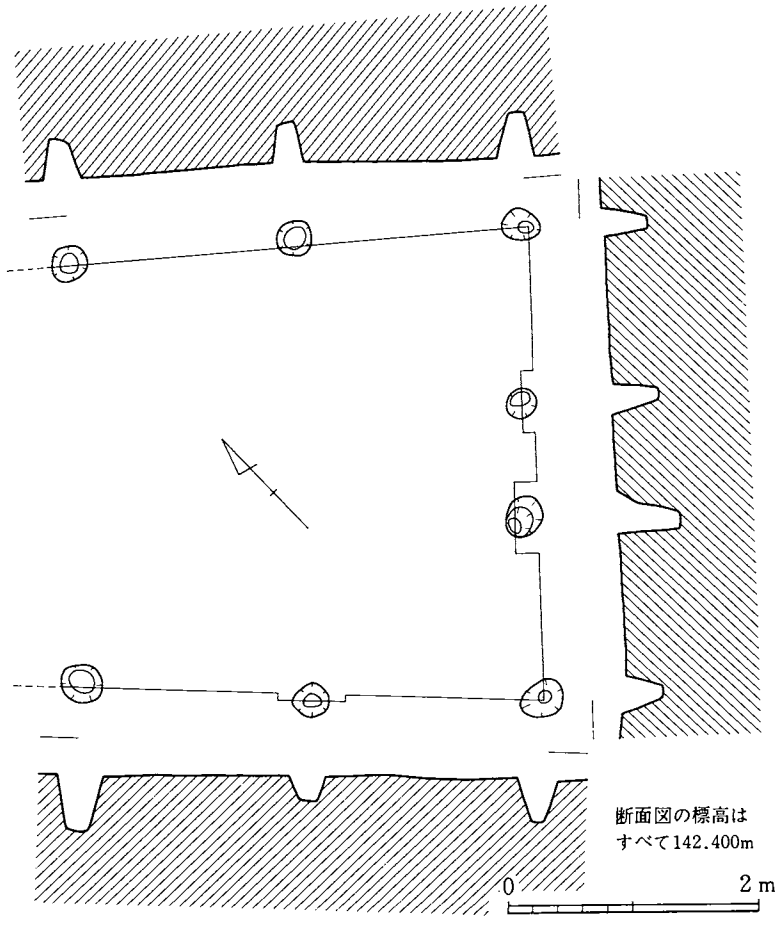
No.	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(kg)
1	38.5	24.5	19.6
2	67.0	40.5	55.1
3	40.5	27.25	17.9
4	31.0	31.0	18.6
5	43.5	29.5	23.6
6	30.0	30.75	17.5
7	42.0	35.5	41.4
8	56.0	29.0	35.2
9	42.0	31.75	24.3
10	44.25	39.0	44.9
11	70.5	26.5	55.1
12	51.0	25.5	28.2

両方か片方が丸くなる。5の上面はほぼ中央で段をもち、下面はほぼ平らである。11は上面が斜めになり、下面が多少凸凹する。左右の側面は上面より下面に向かって斜めに下がる。4～7・11は、上面が平らになるように据えれば礎石として充分に活用できるものである。

礎石の大きさ・重量は、第5表の通りである。

3号掘立柱建物跡（第32図）

3号掘立柱建物跡は、調査区外にのびるために、桁行が不明であり確認した妻部分が南東方向にのびる3間以上×3間の建物跡である。南北の確認した桁行は、それぞれ約3.60m（12尺）を測り、柱間寸法は約1.80m（6尺）の等間である。東側梁行は約3.45m（11.5）尺）で、柱間は北より約1.35m（4.5尺）、約0.90m（3尺）、約1.20m（4尺）を測る。妻部中央の2基のピットは、両端のピットを結んだ線よりやや西側に入り込む。ピットは、ほぼ円形の平面形（径約0.22～0.32m）を呈し、断面形は筒状になる（深さ約



第32図　3号掘立柱建物跡実測図

0.20～0.50m)。

4号掘立柱建物跡（第33図）

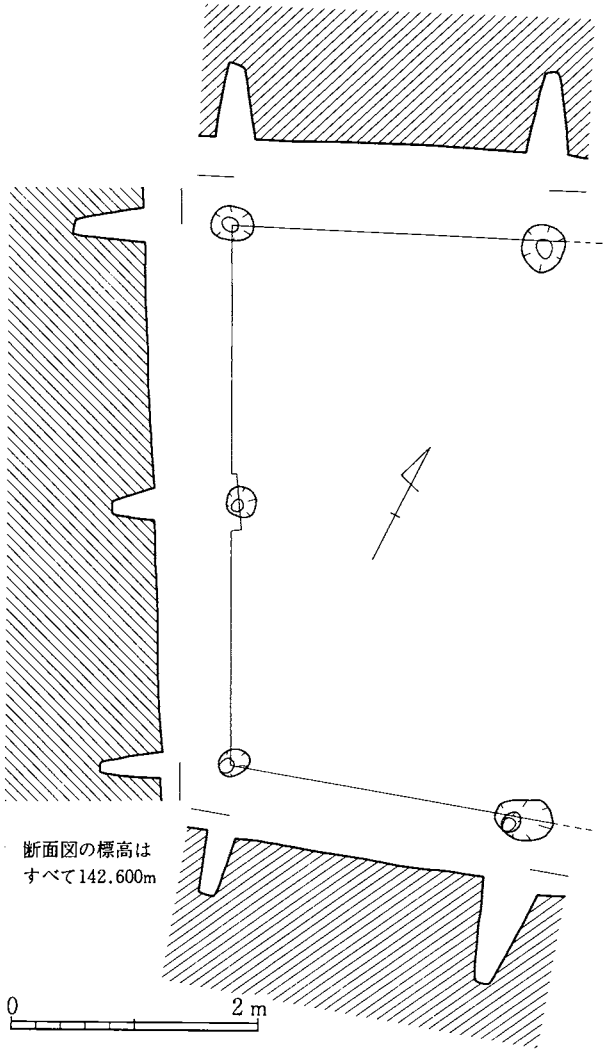
4号掘立柱建物跡は、西妻部と側柱1間分を確認した2間以上×2間の建物跡である。建物跡の主軸は南西方向から北東方向にのびるものと考えられる。

西側梁行は約2.25m（11.5尺）で、柱間は北より約1.20m(4尺)、約1.05m（3.5尺）を測る。

北側桁部は約1.50m（5尺)、南側桁部は約1.20m（4尺）の1間分を検出した。南側桁部は、僅かに南側に開く。

ピットの平面形は、南側桁部の1基が楕円形を呈し(約0.46×0.32m)、その他のピットはほぼ円形である（径約0.22～0.36m)。

ピットの断面形は、深い筒状を呈する。ピットの深さは、西妻部の中央ピット（深さ約0.34m）が他のピット(深さ約0.52～0.84m)に比べて極端に浅い。

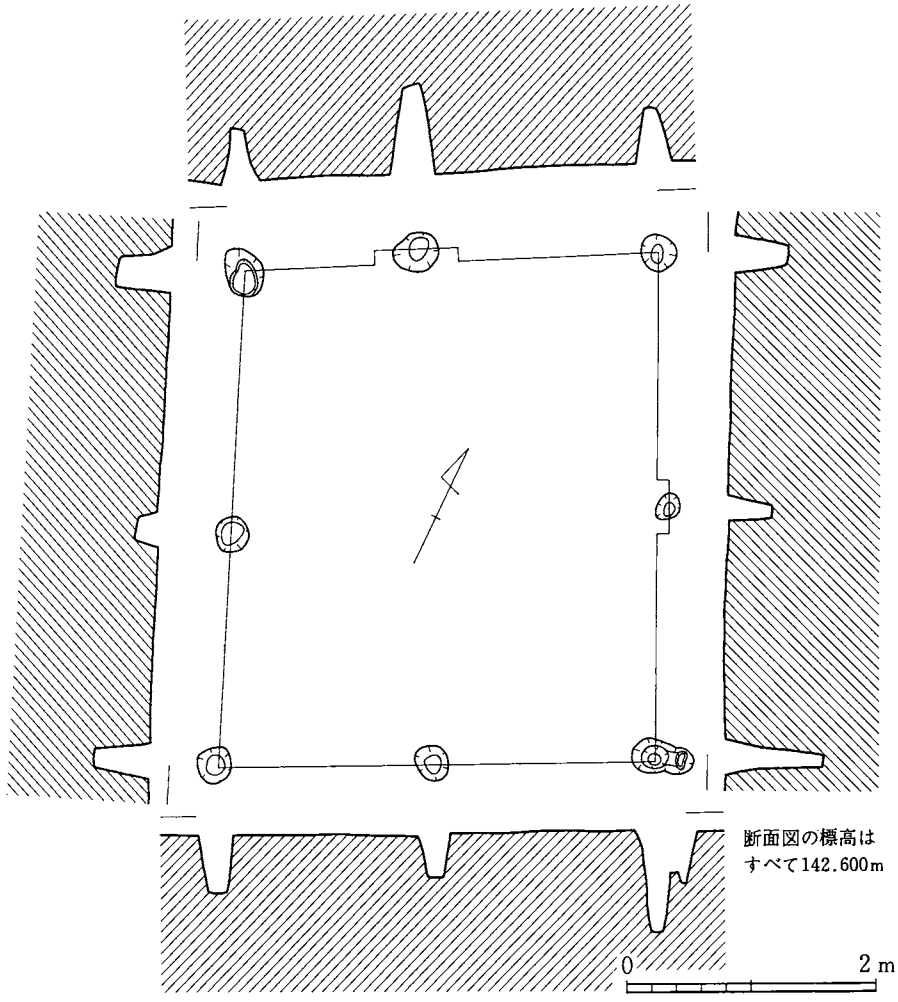


第33図　4号掘立柱建物跡実測図

5号掘立柱建物跡（第34図）

5号掘立柱建物跡は、2間×2間のほぼ南北棟の建物跡で、建物の北側が東側に振れる。東側桁行は約3.90m（13尺）で、柱間は約1.95m（6.5尺）の等間である。東側桁部の中央ピットは、僅かに東側に張り出す。西側桁行は約3.90m（13尺）で、柱間は北より2.10m（7尺)、約1.80m（6尺）を測る。西側桁部は南側で僅かに西側に開く。北側梁行は約3.30m（11尺）で、柱間は東より1.95m（6.5尺)、約1.35m（4.5尺）である。北側梁部の中央ピットは、やや北側にずれる。南側梁行は約3.60m（12尺）で、柱間は東より約1.65m（5.5尺)、約1.95m（6.5尺）を測る。

ピットの平面形は1基を除いてほぼ円形である（径約0.20～0.34m）。南側梁部の東端部のピットだけ楕円形を呈する(約48×24m)。ピットの断面形は深い筒状になる。ピットの深さは、東西桁部・南側梁部の中央ピットが浅く（約0.20～0.34m）、その他のピットは約0.42～0.72mを測る。



第34図　5号掘立柱建物跡実測図

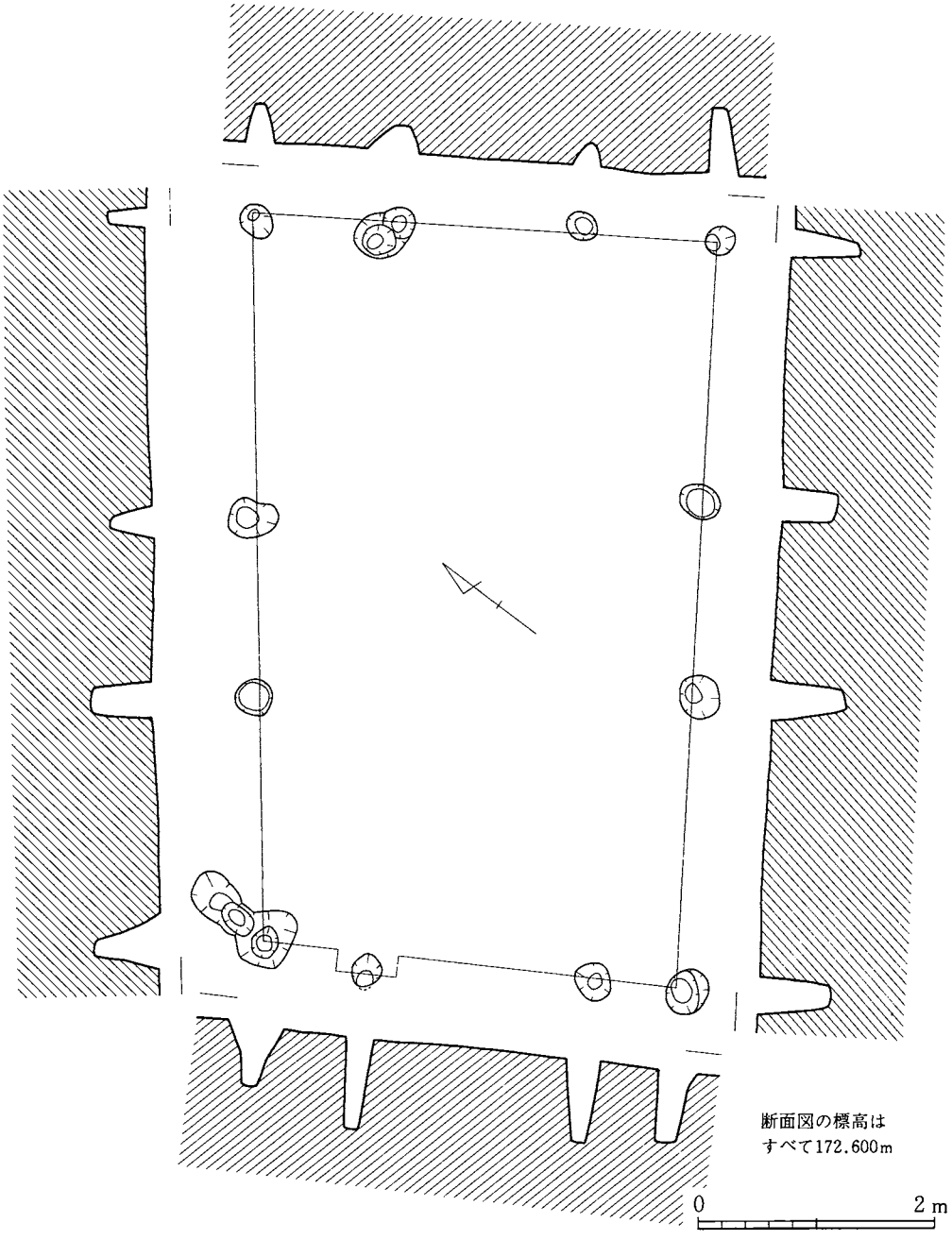
6号掘立柱建物跡（第35図）

6号掘立柱建物跡は、3間×3間で、北東方向～南西方向の建物主軸をもつ。北側桁行は約6.15m（20.5尺）で、柱間は東より約2.55m（8.5尺）、約1.50m（5尺）、約2.10m（7尺）を測る。南側桁行は約6.15m（20.5尺）で、柱間は東より約2.10m（7尺）、約1.65m（5.5尺）、約2.40m（8尺）になる。南北桁部は西側に行くほど建物の内側に振れる。東側梁行は約3.90m（13尺）で、柱間は北より約1.20m（4尺）、約1.65m（5.5尺）、約1.05m（3.5尺）を測る。西側梁行は約3.60m（12尺）で、柱間は北より約0.90m（3尺）、約1.95m（6.5尺）、約0.75m（2.5尺）になる。西側梁部の北から2基めのピットは、梁部両端のピットを結んだ線よりやや西側にずれた位置にある。ピットの平面形はほぼ円形である（径約0.22～0.46m）。ただし、東

側梁部の北から2基目と西側梁部の北端部のピットは、二つのピットが重なる。ピットの断面形は、東側梁部中央の2基のピットが浅い筒状で（深さ約0.18～0.22m）その他のピットは深い筒状を呈する（深さ約0.40～0.80m）。西側梁部両端のピットは、二段掘りになっている。

7号掘立柱建物跡（第36図）

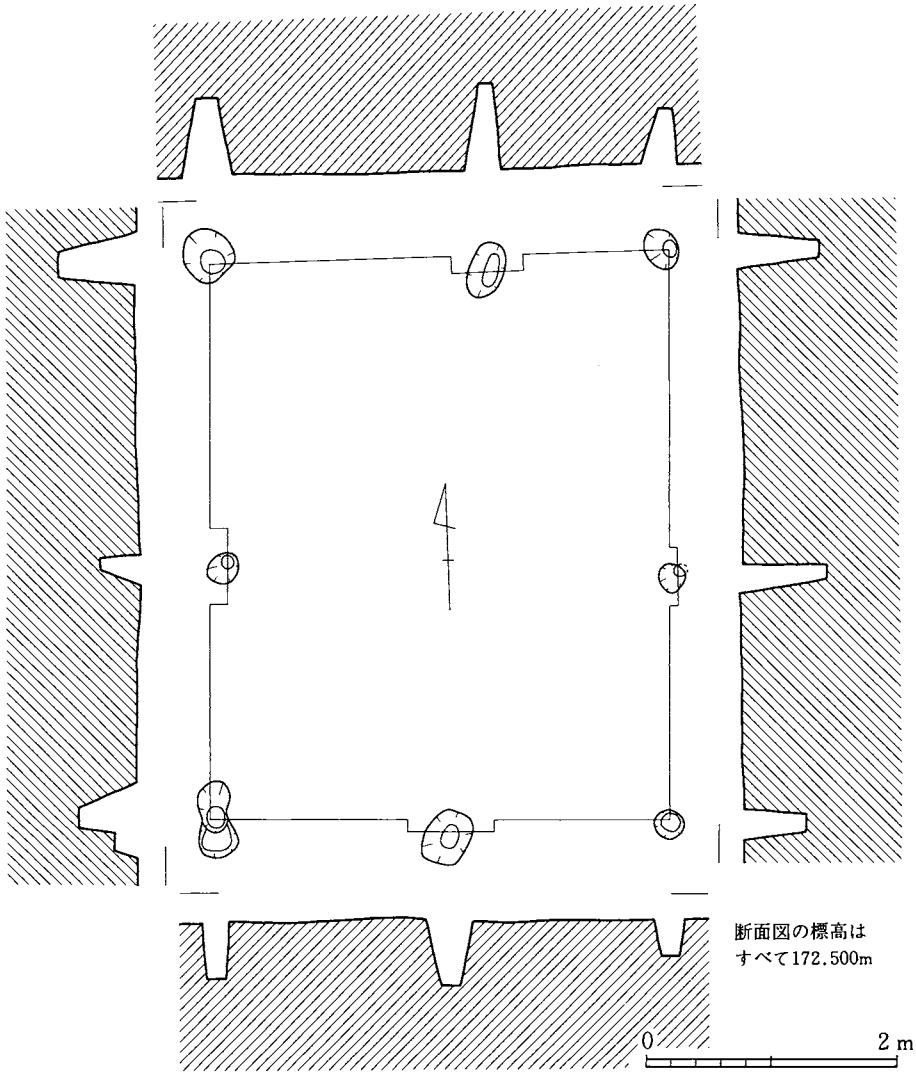
7号掘立柱建物跡は2間×2間の南北棟建物跡である。東側桁行は約4.50m（15尺）で、柱



第35図　6号掘立柱建物跡実測図

間は北より約2.55m（8.5尺）、約1.95m（6.5尺）を測る。東側桁部の中央ピットは、僅かに東側にずれる。西側桁行は約4.35m（14.5尺）であり、柱間は北より約2.40m（8尺）、約1.95m（6.5尺）になる。西側桁部の中央ピットは、建物の内側に僅かに入り込む。北側梁行は約3.60m（12尺）で、柱間は西より約2.25m（7.5尺）、約1.35m（4.5尺）を測る。南側梁行は約3.75m（12.5尺）で、柱間は西より約1.95m（6.5尺）、約1.80m（6尺）になる。

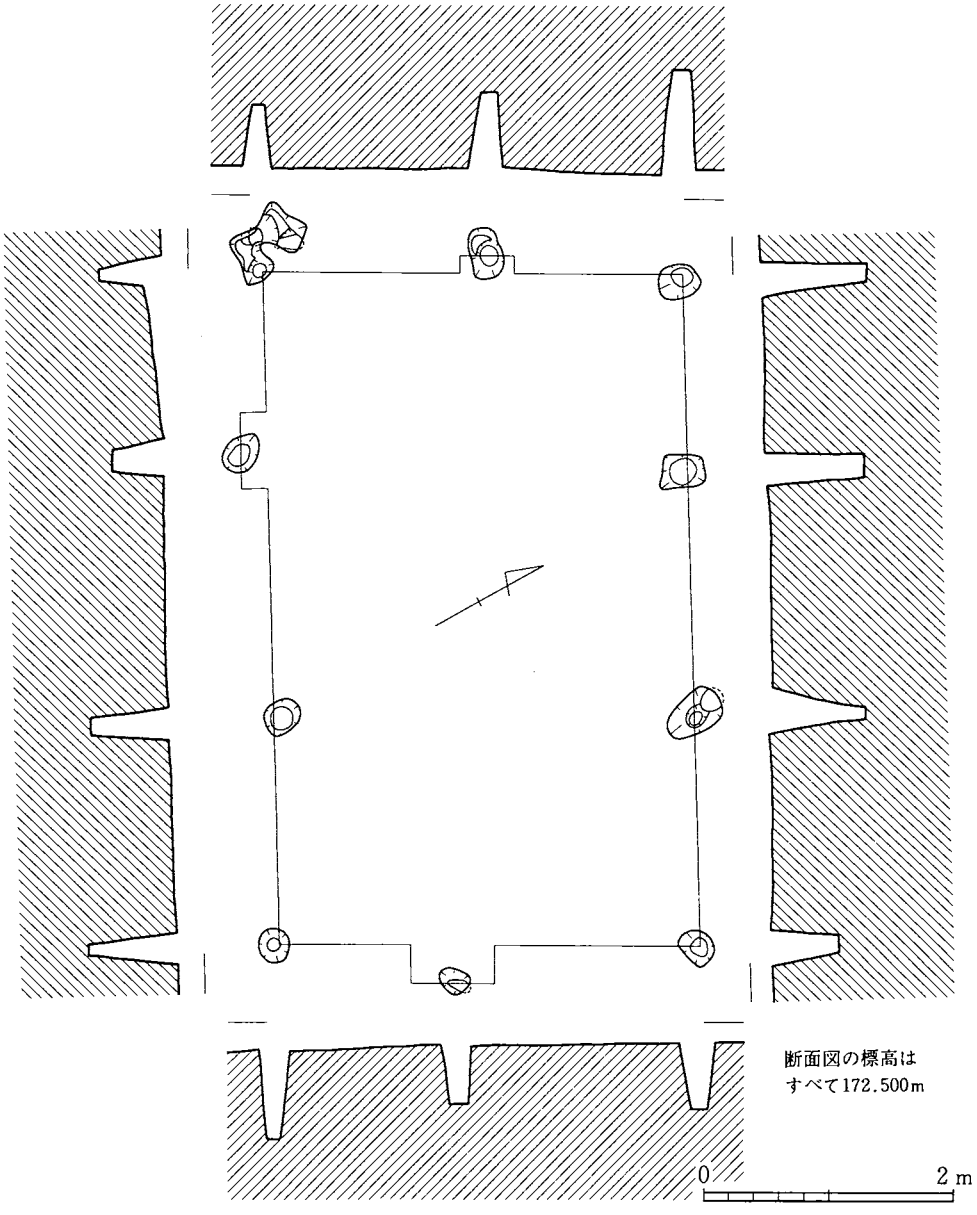
南北梁部の中央のピットは、やや南側にずれた位置にある。ピットの平面形は、北側梁部の中央のピットが楕円形（約0.44×0.26m）、南側梁部の東端部のピットが不整形（最大長約0.60m、最大幅約0.32m）で、その他のピットはほぼ円形を呈する（径約0.18～0.40m）。ピットの断面形は、西側桁部の中央のピットが浅い筒状で（深さ約0.32m）、その他のピットは深い筒状である（深さ約0.48～0.74m）。



第36図　7号掘立柱建物跡実測図

８号掘立柱建物跡（第37図）

８号掘立柱建物跡は、３間×２間の北西方向～南東方向の主軸をもつ建物跡である。北側桁行は約5.25m（17.5尺）で、柱間は西より約1.50m（５尺）、約1.95m（6.5尺）、約1.80m（６尺）を測る。南側桁行は約5.40m（18尺）であり、柱間は西より約1.50m（５尺）、約2.10m（７尺）、約1.80m（６尺）になる。南側桁部の西端部より２基めのピットは、南側に少しずれた位置にある。西側梁行は約3.30m（11尺）で、柱間は南より約2.80m（６尺）、約1.50m（５尺）



第37図　８号掘立柱建物跡実測図

を測る。西側梁部の中央のピットは、両端のピットを繋いだ線から僅かに西側に外れる。東側梁行は約3.30m（11尺）で、柱間は南より約1.35m（4.5尺）、約1.95m（6.5尺）になる。東側梁部の中央のピットは、両端のピットを結んだ線からやや南側にずれた位置にある。

ピットの平面形は、西側梁部の中央と北側梁部の中央2基が楕円形（約0.40×0.22m、約0.38～0.48m×0.26～0.30m）、西側梁部の南端部が3基のピットが重なって不整形になり（最大長約0.60m、最大幅約0.38m）、その他はほぼ円形を呈する（径約0.20～0.30m）。

ピットの断面形は、深くて細長い筒状を呈する（深さ約0.50～0.80m）。北側桁部の西側から2基目のピットが二段掘りになる。

9号掘立柱建物跡（第38図）

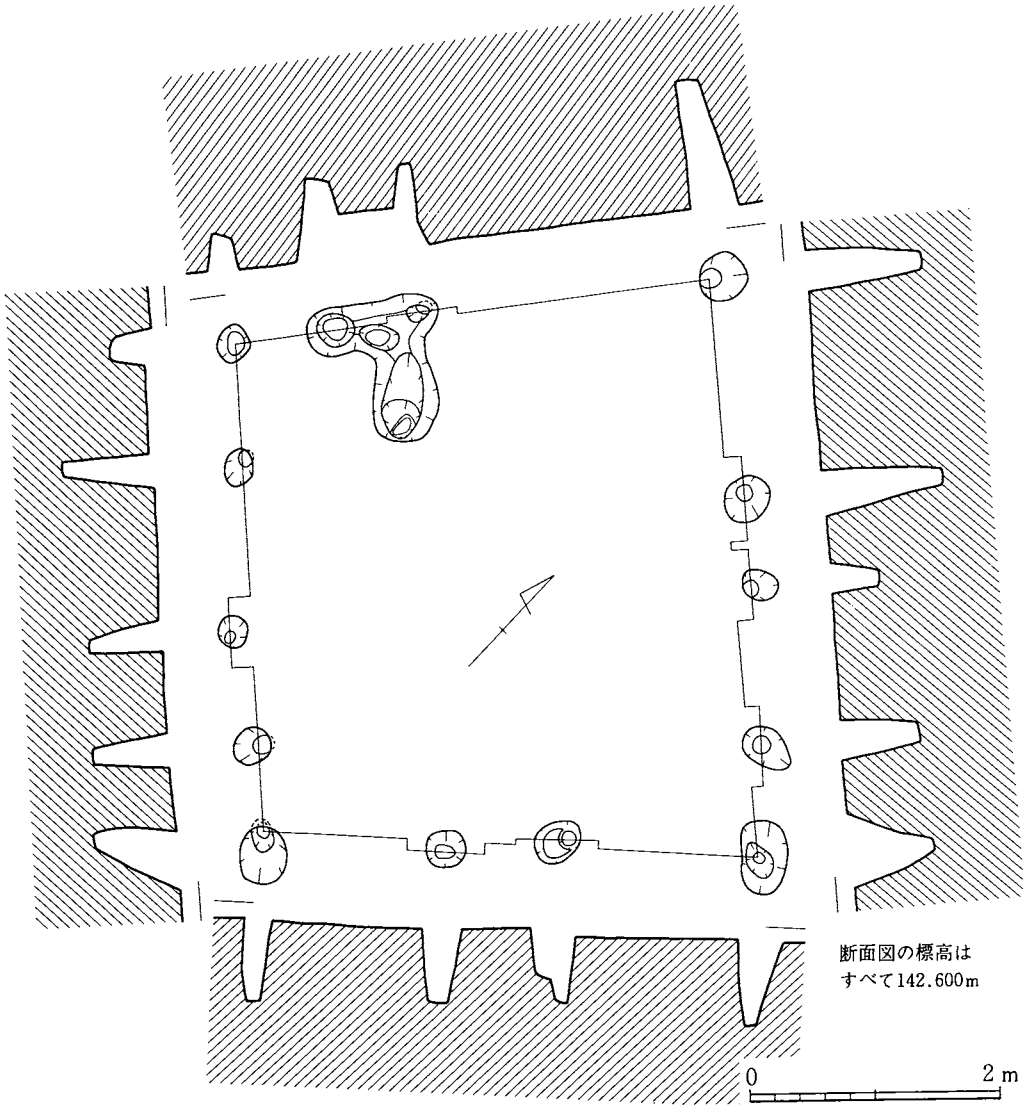
9号掘立柱建物跡は、4間×3間の北西方向～南東方向の主軸をもつ建物跡である。北側桁行は約4.50m（15尺）で、柱間は西より約1.65m（5.5尺）、約0.75m（2.5尺）、約0.90m（3尺）を測る。北側桁部ピットの中で、両端を除いた3基が両端を繋いだ線よりやや北側にある。南側桁行は約3.90m（13尺）であり、柱間は西より約0.90m（3尺）、約1.35m（4.5尺）、約0.90m（3尺）、約0.75m（2.5尺）になる。南側桁部の東から3基目のピットは両端のピットを結んだ線より僅かに南側にずれる。西側梁部の南より2基目のピットは、4基のピットが重複する。その中で、梁行の方向に並んだ2基のピットの北側のものが建物跡に伴うと考えられる。西側梁行は約3.75m（12.5尺）で、柱間は南より約1.50m（5尺）、約2.25m（7.5尺）を測る。西側妻部では1基のピットが遺存しない。東側梁行は約4.05m（13.5尺）で、柱間は南より約1.50m（5尺）、約1.05m（3.5尺）になる。東側梁部では、両端のピットを結んだ線より、中央の2基のピットのうち北側のものはやや西側に、南側のものはやや東側にずれた位置にある。

ピットの平面形は、北側桁部の東端部、東端部から2基めと東側梁部の南端部のピットが楕円形で（約44～58cm×約30～38cm）、その他はほぼ円形を呈する（径約22～38cm）。

ピットの断面形は筒状である。ピットの深さは、北側桁部の中央のピットと南側桁部の西側端部ピットが浅く（深さ約0.28～0.36m）、その他のピットは深い（深さ約0.62～0.98m）。

10号掘立柱建物跡（第39図）

10号掘立柱建物跡は、2間×2間の北西方向～南東方向の主軸をもつ建物跡である。北側桁行は約4.50m（15尺）で、柱間は西より約2.70m（9尺）、約1.80m（6尺）を測る。南側桁行は約4.95m（16.5尺）で、柱間は西より約3.15m（10.5尺）、約1.80m（6尺）になる。西側梁行は約3.60m（12尺）で、柱間は約1.80m（6尺）の等間である。東側梁行は約3.60m（12尺）で、柱間は南より約2.10m（7尺）、約1.50m（5尺）を測る。東側梁部の南端部は僅かに東側に振れる。

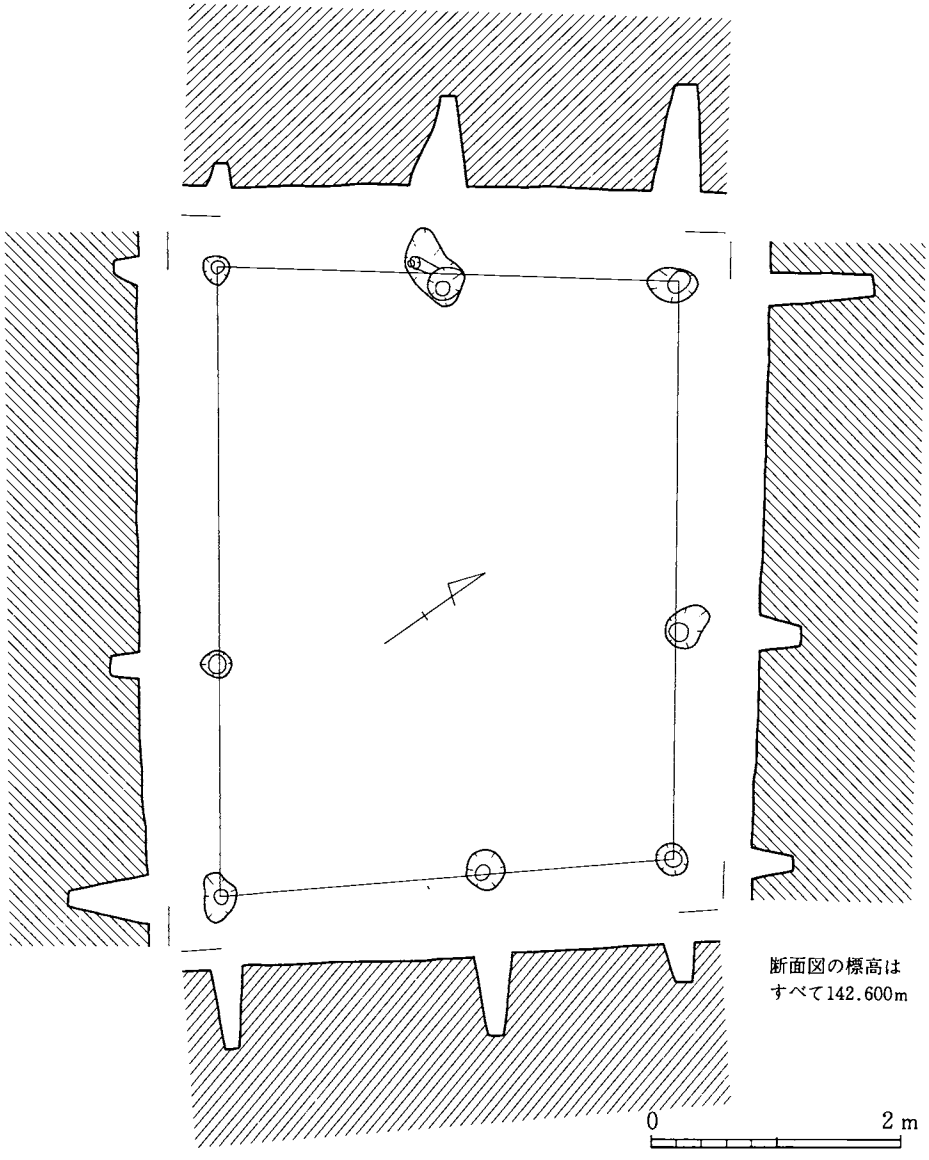


第38図　９号掘立柱建物跡実測図

ピットの平面形は、北側桁部の中央、西側梁部の中央と北端部、東側梁部の南端部が楕円形を呈し（約0.38～0.58m×約0.24～0.32m）、その他はほぼ円形である（径約0.18～0.30m）。ピットの断面形は筒状で、ピットの深さは北側桁部の東端部と中央、南側桁部の北端部と中央が浅く（深さ約0.18～0.28m）、その他は深い（深さ約0.62～0.82m）。

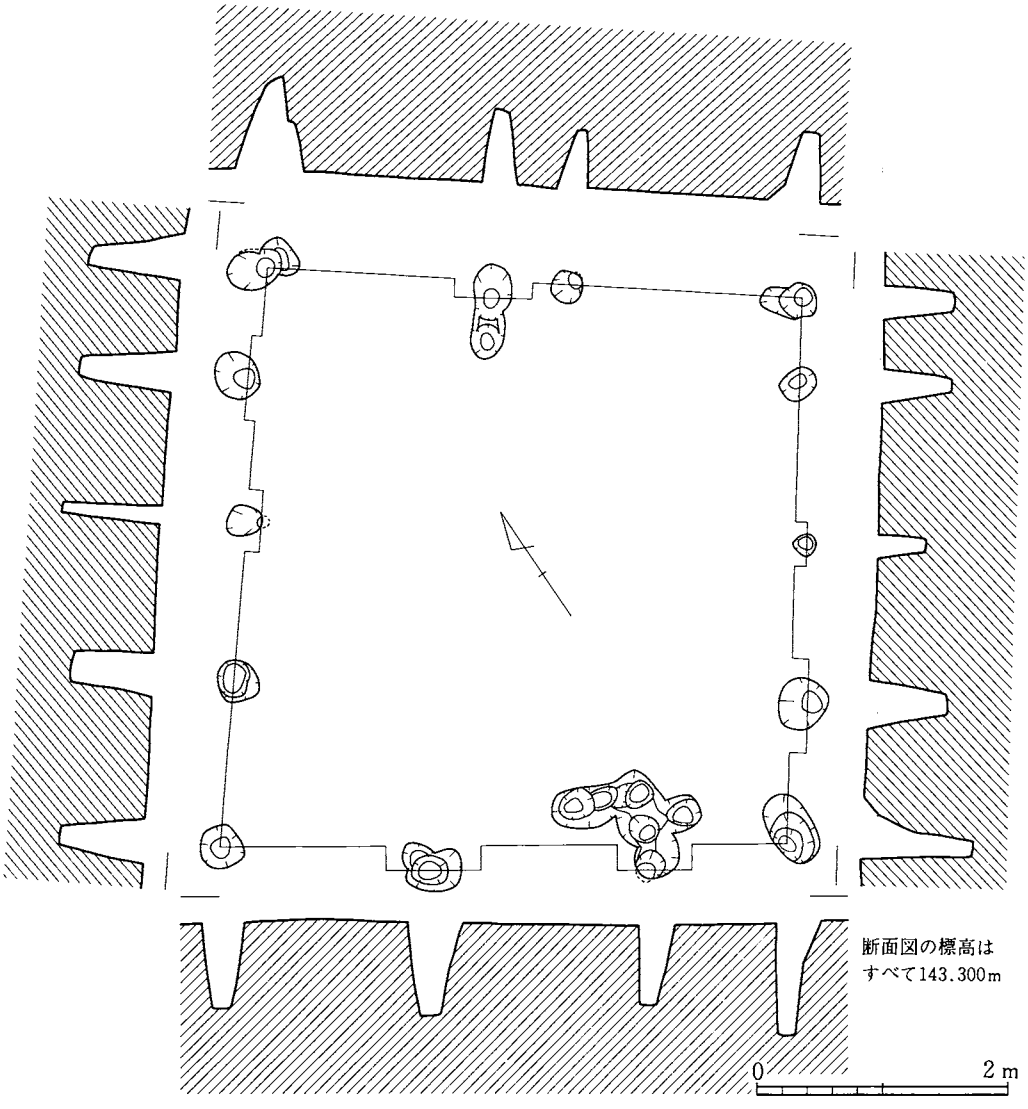
11号掘立柱建物跡（第40図）

11号掘立柱建物跡は、４間×３間の北西方向～南東方向の主軸をもつ建物跡である。東側桁行は約4.35m（14.5尺）で、柱間は北より約0.60m（２尺）、約1.35m（4.5尺）、約1.20m（４尺）、約1.20m（４尺）になる。東側桁部の南より２基目と３基目のピットは、両端のピットを



第39図　10号掘立柱建物跡実測図

繋いだ線よりやや東側にずれた位置にある。西側桁行は約4.65m（15.5尺）で、柱間は北より約0.90m（3尺）、約1.20m（4尺）、約1.20m（4尺）、約1.35m（4.5尺）を測る。西側桁部は南側に向かうほど外に開く。北側梁行は約4.35m（14.5尺）で、柱間は西より約1.80m（6尺）、約0.75m（2.5尺）、約1.80m（6尺）である。北側梁部の西から2基目のピットは、両端のピットを繋いだ線よりやや建物の内側に入る。南側梁行は約4.95m（16.5尺）を測り、柱間は西より約1.95m（6.5尺）、約1.95m（6.5尺）、約1.05m（3.5尺）である。南側梁部の中央2基のピットは、両端のピットを結んだ線より僅かに建物の外側方向に出る。ピットの平面形は、北側梁部の西端、南側梁部の西から2基目、東側桁部の南端が楕円形を呈し（約0.44～0.58m×

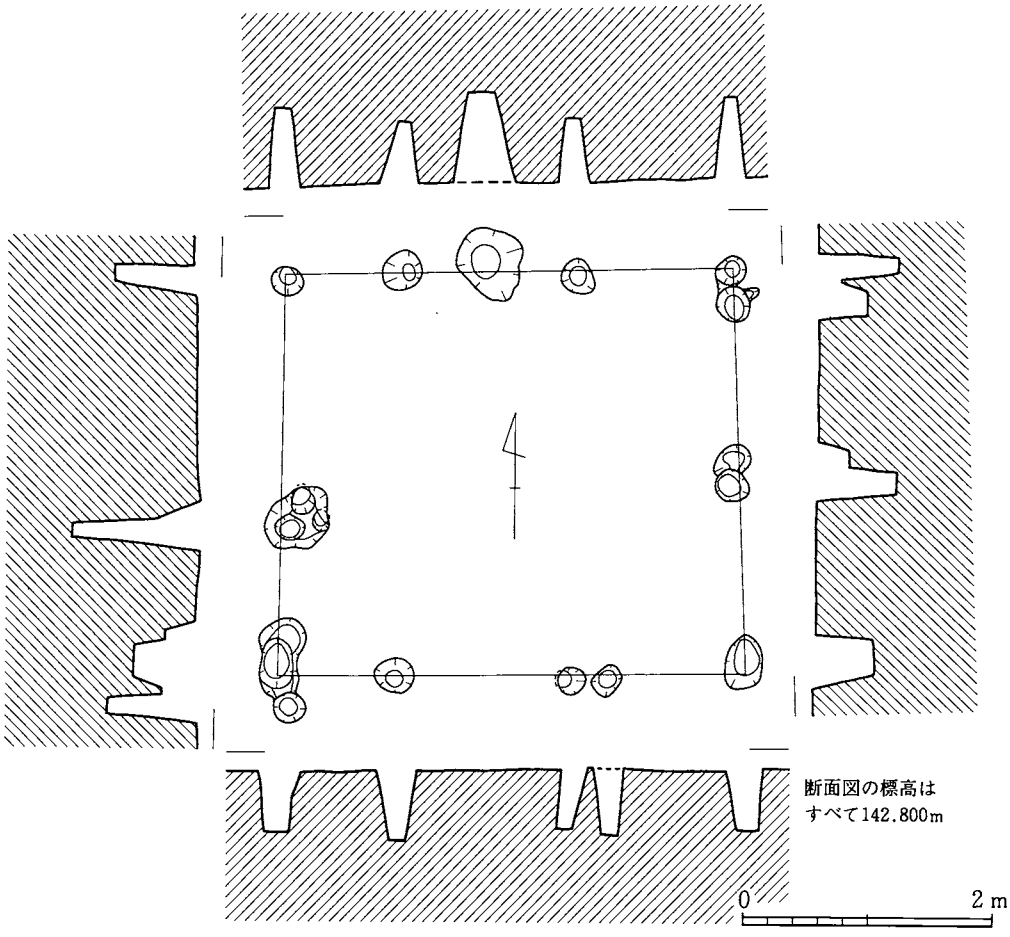


第40図　11号掘立柱建物跡実測図

約0.30～0.34m)、その他はほぼ円形である（径約0.18～0.40m)。ピットの断面形は筒状である（深さ約0.40～0.88m)。東側桁部南端、西側桁部の南から２基目、南側梁部の西から２基目のピットは、二段掘りである。北側梁部の東西両端、北側梁部の西から２基目、南側梁部の西から２基目のピットは、二つのピットが重なる。南側梁部の西から３基目のピットは、六つのピットが重複する。

12号掘立柱建物跡（第41図）

12号掘立柱建物跡のピットが並ぶ中で、北側桁部の線上にある中央のピットと南側桁部の線上にある東から２基目のピットは、12号掘立柱建物跡に伴うものでないと考える。12号掘立柱建物跡は、３間×２間の南北棟の建物跡である。北側桁行は約3.60m（12尺）で、柱間は西より



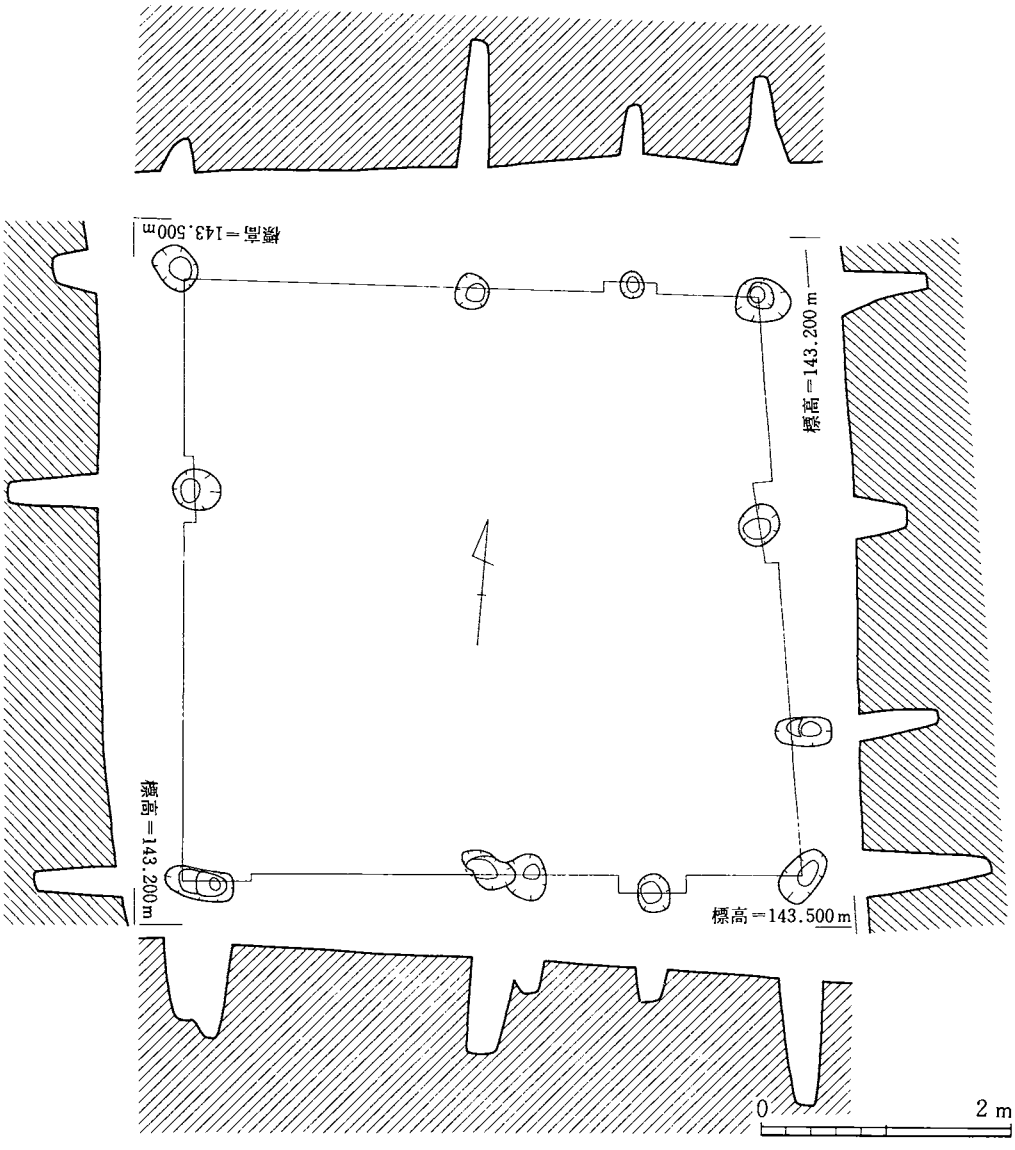
第41図　12号掘立柱建物跡実測図

約1.05m（3.5尺）、約1.35m（4.5尺）、約1.20m（4尺）を測る。南側桁行は約3.75m（12.5尺）で、柱間は西より約1.05m（3.5尺）、約1.35m（4.5尺）、約1.35m（4.5尺）になる。東側梁行は約3.15m（10.5尺）で、柱間は北より約1.80m（6尺）、約1.35m（4.5尺）である。西側梁行は約3.15m（10.5尺）で、柱間は北より約1.95m（6.5尺）、約1.20m（4尺）を測る。

ピットの平面形は、南側桁部の両端が楕円形で（約0.40～0.42m×約0.26～0.30m）、その他はほぼ円形を呈する（径約0.12～0.32m）。北側桁部の東端、東側梁部の中央ピットは、二つのピットが重複する。西側梁部の南端と中央のピットは、三つのピットが重なる。ピットは筒状の断面形をもつ（深さ約0.50～1.0m）。西側桁部の中央ピットは、二段掘りである。

13号掘立柱建物跡（第42図）

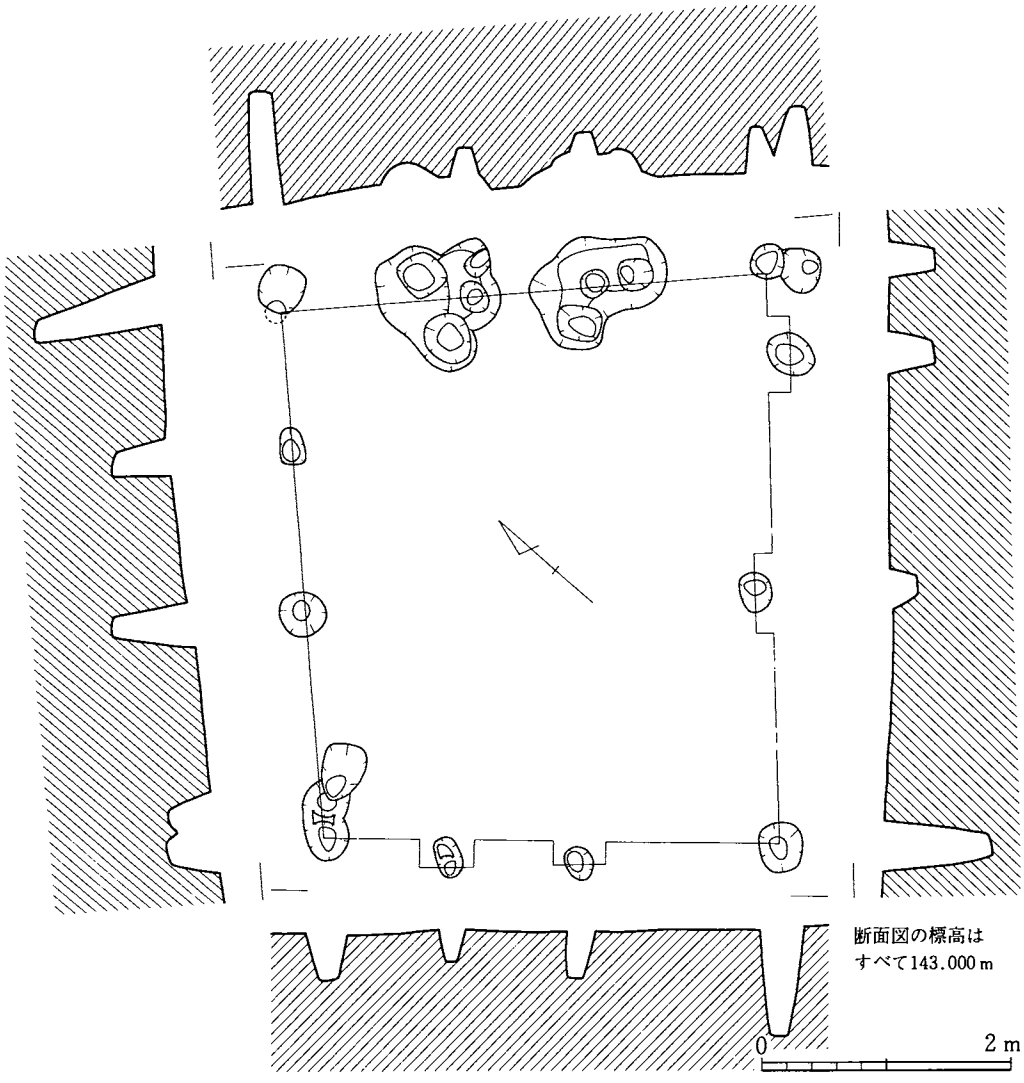
13号掘立柱建物跡は、3間×3間の南北棟の建物跡である。東側桁行は約4.35m（14.5尺）で、柱間は北より約1.80m（6尺）、約1.50m（5尺）、約1.05m（3.5尺）を測る。東側桁部は、南側にいくにつれて建物の外側方向に振れる。西側桁行は約4.80m（12.5尺）で、柱間は北より約1.80m（6尺）、約3.0m（10尺）になる。西側桁部の南から2基目のピットは、遺存しな



第42図　13号掘立柱建物跡実測図

い。東西両桁部の北から２番目のピットは、両端のピットを結んだ線より建物の内側方向に入る。北側梁行は約4.65m（15.5尺）で、柱間は西より約2.40m（８尺）、約1.20m（４尺）、約1.05m（3.5尺）である。南側梁行は約4.65m（15.5尺）を測り、柱間は西より約2.10m（７尺）、約1.35m（4.5尺）、約1.20m（４尺）である。南北両梁部の東から２基目のピットは、両端のピットを繋いだ線より僅かに建物の外側方向にずれた位置にある。

ピットの平面形は、東側桁部の両端と南から２番目、南側梁部の西端と西から２番目が楕円形で（約0.42～0.56m×約0.22～0.36m）、その他はほぼ円形を呈する（径約0.18～0.38m）。南側梁部の西端と西から２番目のピットは、二つのピットが重複する。ピットの断面形は筒状で、深さは、南北両梁部の東から２基目と北側梁部の西端部が浅く（深さ約0.30～0.40m）、その他のピットは深い（0.64～1.04m）。北側梁部東端のピットは、二段掘りである。



第43図　14号掘立柱建物跡実測図

14号掘立柱建物跡（第43図）

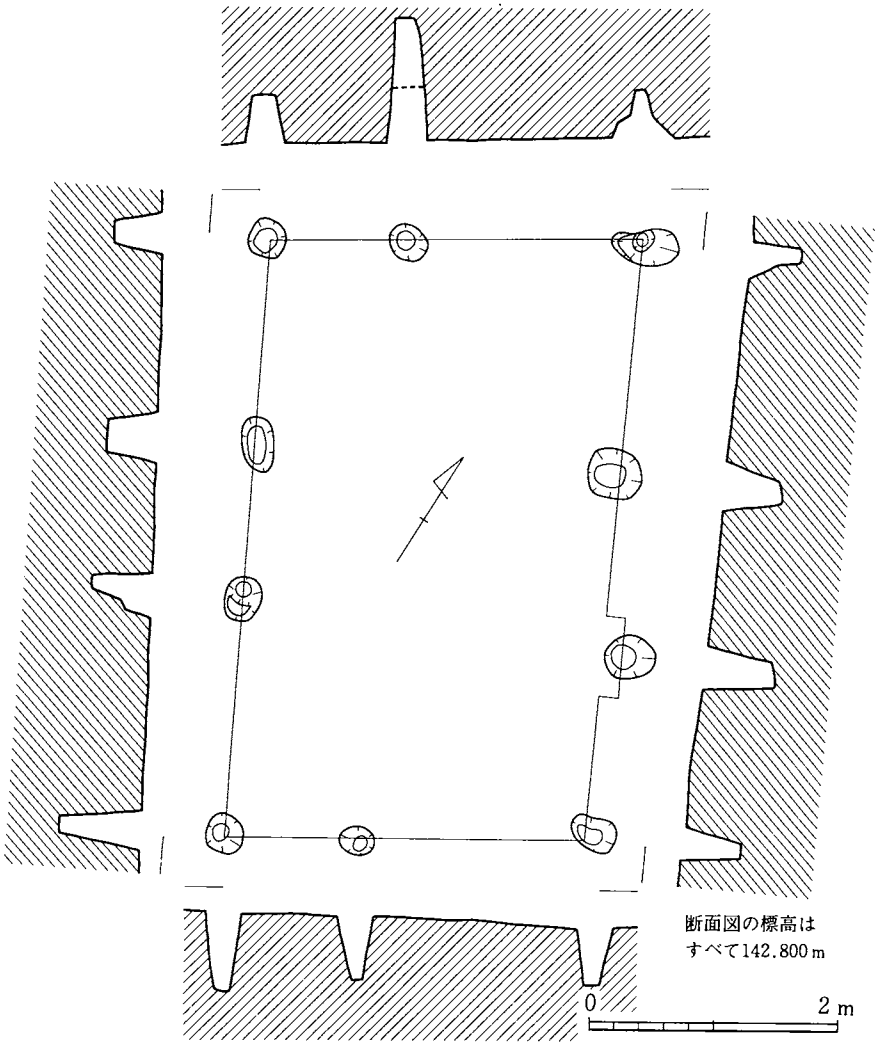
14号掘立柱建物跡は、３間×３間の北東方向～南西方向の主軸をもつ建物跡である。南側桁行は約4.65m（15.5尺）で、柱間は東より約0.75m（2.5尺）、約1.80m（６尺）、約2.10m（７尺）になる。南側桁部両端のピットを繋いだ線を基準にすれば、南側桁部の北から２基目と３基目のピットは、それぞれ南側と北側にずれた所にある。北側桁行は約4.20m（14尺）を測り、柱間は東より約1.20m（４尺）、約1.20m（４尺）、約1.80m（６尺）になる。北側桁部のピットの配列は、東側が北方向に振れる。東側梁行は約3.90m（13尺）で、柱間は北より約1.65m（5.5尺）、約0.90m（３尺）、約1.35m（4.5尺）になる。西側梁行は約3.75m（12.5尺）を測り、柱間は北より約1.05m（3.5尺）、約1.05m（3.5尺）、約1.65m（5.5尺）である。西側梁部中央の２基のピットは、両端のピットを結んだ線よりやや西側の方向にずれた位置にある。

ピットの平面形は、南北両桁部の東から２番目と西側梁部の北から２番目が楕円形で(約0.32～0.40m×約0.20～0.30m)、その他はほぼ円形を呈する（径約0.22～0.38m)。東側梁部の南端のピットは二つのピットが重複する。北側桁部西端と東側梁部の南から２基目のピットは、三つのピットが重なる。東側梁部の北から２番目のピットは、四つのピットが重複する。

ピットの断面形は筒状である。ピットの深さは、南側桁部の東から３基目まで、北側桁部の東から２基目、東側梁部の北から２基目と３基目、西側梁部の北から３基目までが浅く（深さ約0.22～0.44m)、その他のピットは深い（深さ約0.70～1.02m)。

15号掘立柱建物跡（第44図）

15号掘立柱建物跡は、３間×２間の北西方向～南東方向の主軸をもつ建物跡である。東側桁行は約4.80m（16尺）を測り、柱間は北より約1.95m（6.5尺)、約1.35m（4.5尺)、約1.50m



第44図　15号掘立柱建物跡実測図

（5尺）になる。東側桁部の南から2基目のピットは、両端のピットを結んだ線よりやや東の方向にずれた位置にある。西側桁行は約4.65m（15.5尺）で、柱間は北より約1.65m（5.5尺）、約1.05m（3.5尺）、約1.95m（6.5尺）を測る。北側梁行は約3.0m（10尺）で、柱間は西より約1.05m（3.5尺）、約1.95m（6.5尺）である。南側梁行は約3.0m（10尺）を測り、柱間は西より約1.05m（3.5尺）、約1.95m（6.5尺）になる。南北両梁部のピット配列全体は、南側が大きく北側に振れ、北側が僅かに北側に振れる。

ピットの平面形は、西側桁部の北から2番目と3番目、北側梁部の東端部が楕円形で（約0.34～0.50m×約0.24～0.30m）、その他はほぼ円形を呈する（径約0.28～0.42m）。ピットの断面形は筒状である。ピットの深さは、どれもほぼ同じで大きな差はない（深さ約0.50～0.60m）。北側梁部中央のピットは、底面が把握できずに掘り過ぎ、壁面に底面と考えられる痕跡を確認した。北側梁部東端と西側桁部の北から3番目のピットは、二段掘りになっている。

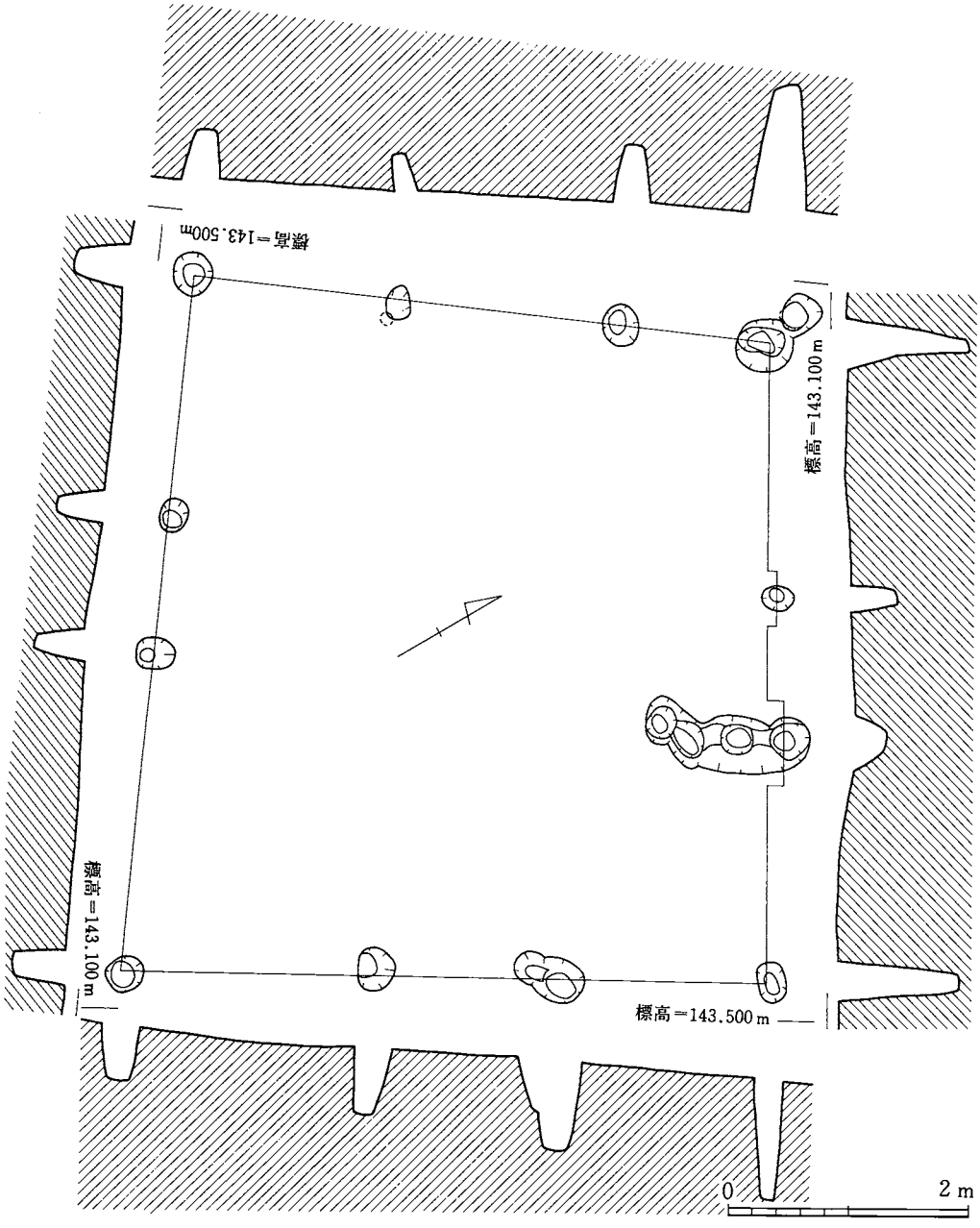
16号掘立柱建物跡（第45図）

16号掘立柱建物跡は、3間×3間の北西方向～南東方向の主軸をもつ建物跡である。北側桁行は約4.20m（17尺）を測り、柱間は西より約1.95m（6.5尺）、約1.20m（4尺）、約1.95m（6.5尺）である。北側桁部の中央2基のピットは、両端のピットを繋いだ線よりやや北側にずれた位置にある。南側桁行は約5.70m（19尺）で、柱間は西より約1.95m（6.5尺）、約1.20m（4尺）、約2.55m（8.5尺）になる。南側桁部は全体が北方向に振れる。西側梁行は約4.80m（16尺）で、柱間は南より約1.80m（6尺）、約1.80m（6尺）、約1.20m（4尺）を測る。西側梁部のピット配列は全体が西側に振れる。東側梁行は約5.40m（18尺）で、柱間は南より約2.10m（7尺）、約1.65m（5.5尺）、約1.65m（5.5尺）である。

ピットの平面形は、東側梁部の北端と北から2基目、南側桁部の東から2基目が楕円形（約0.32～0.60m×約0.22～0.34m）で、その他のピットはほぼ円形である（径約0.24～0.46m）。北側桁部の北端のピットは二つのピットが重なり、北側桁部の東から2基目のピットは四つのピットが重複する。ピットの断面形は筒状で、深さは北側桁部の両端と東側梁部の北から2基目が極端に深く（約1.02～1.04m）、その他はほぼ同じである（深さ約0.35～0.52m）。北側桁部の東から2基目と東側梁部の北から2基目のピットは、二段掘りになっている。

17号掘立柱建物跡（第46図）

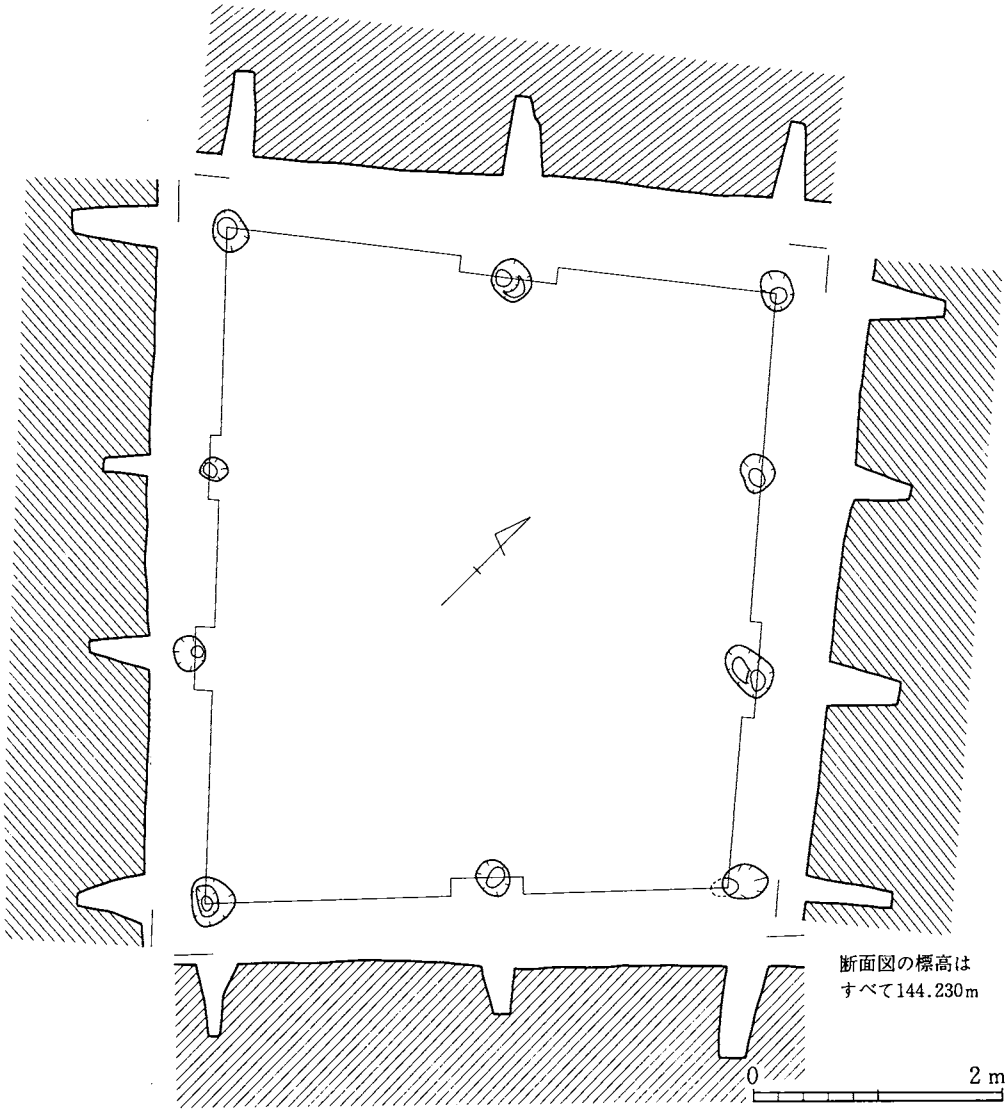
17号掘立柱建物跡は、3間×2間の北西方向～南東方向の主軸をもつ建物跡である。北側桁行は約4.65m（15.5尺）で、柱間は西より約1.50m（5尺）、約1.50m（5尺）、約1.65m（5.5尺）である。北側桁部の東から2基目のピットは、両端のピットを繋いだ線よりやや北側にずれた箇所にある。南側桁行は約5.40m（18尺）で、柱間は西より約1.95m（6.5尺）、約1.50m



第45図　16号掘立柱建物跡実測図

（５尺）、約1.95m（6.5尺）になる。南側桁部の中央２基のピットは、両端のピットを結んだ線よりやや建物の外側方向にずれる。西側梁行は約4.50m（15尺）で、柱間は南より約2.20m（7.5尺）の等間である。東側梁行は約4.35m（14.5尺）で、柱間は南より約2.25m（7.5尺）、約2.10m（７尺）、約1.65m（5.5尺）を測る。西側梁部と東側梁部の中央のピットは建物の内側方向にずれた位置にあり、両梁部の全体が建物の内側方向に振れる。

ピットの平面形は、北側桁部の東端と東から２基目のピットが楕円形（約0.32～0.42m×約



第46図　17号掘立柱建物跡実測図

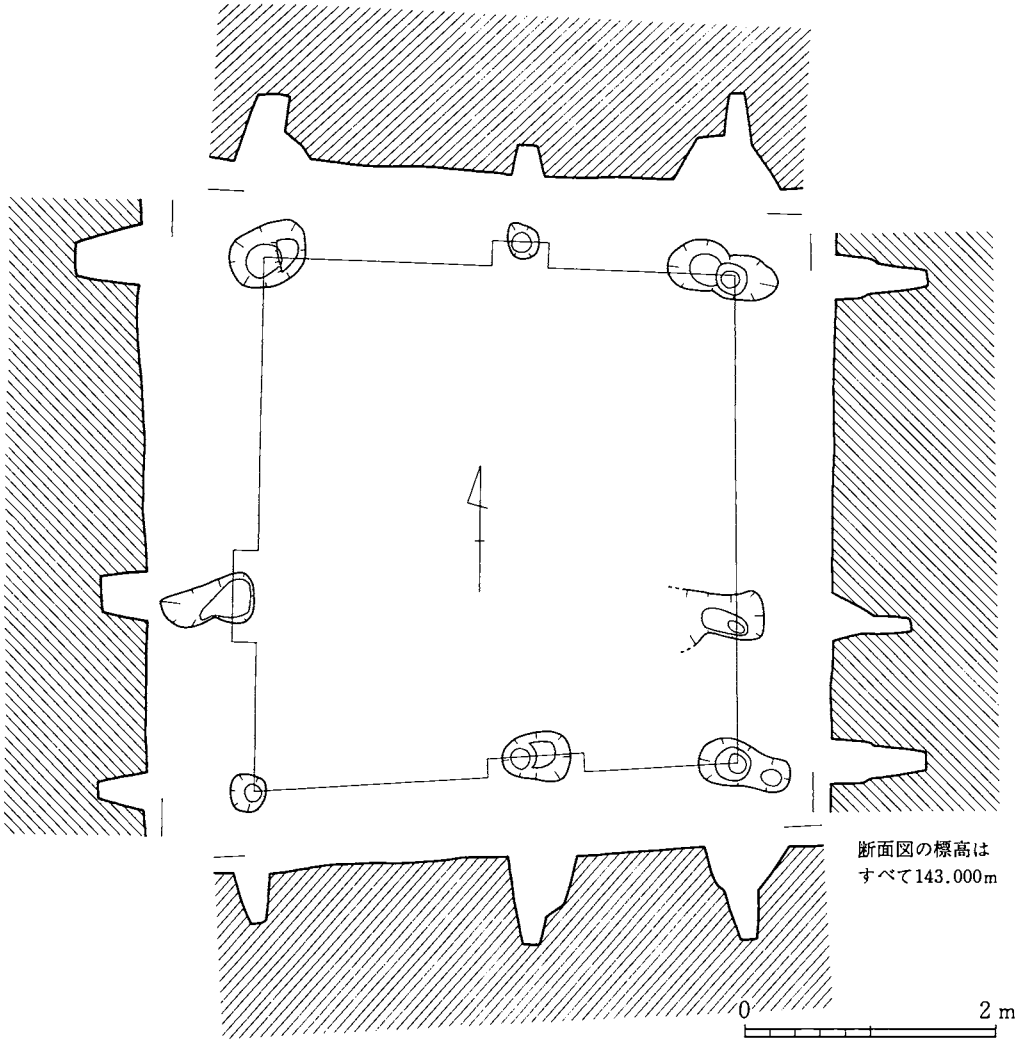
0.24～0.28m）で、その他のピットはほぼ円形である（径約0.22～0.34m）。ピットの断面形は筒状を呈する。ピットの深さは、南側桁部の西から２基目が浅く（深さ約0.32m）、その他は深い（深さ約0.46～0.68m）。北側桁部の東から２基目、東側梁部の南端、西側梁部中央のピットは、二段掘りになっている。

18号掘立柱建物跡（第47図）

18号掘立柱建物跡は、２間×２間の南北棟建物跡である。東側桁行は約3.90m（13尺）で、柱間は北より約2.70m（９尺）、約1.20m（４尺）を測る。西側桁行は約4.20m（14尺）で、柱間は北より約2.70m（９尺）、約1.50m（５尺）である。西側桁部の中央ピットは、両端のピッ

トを結んだ線より僅かに西側にずれた地点にある。北側梁行は約3.75m（12.5尺）で、柱間は西より約2.10m（７尺）、約1.65m（5.5尺）になる。北側梁部の中央ピットは、両端のピットを繋いだ線よりやや北方向にずれる。南側梁行は約3.90m（13尺）で、柱間は西より約2.40m（８尺）、約1.50m（５尺）を測る。南側梁部中央のピットは、僅かに北側にずれた箇所にある。両梁部は全体が建物の内側方向に僅かに振れる。

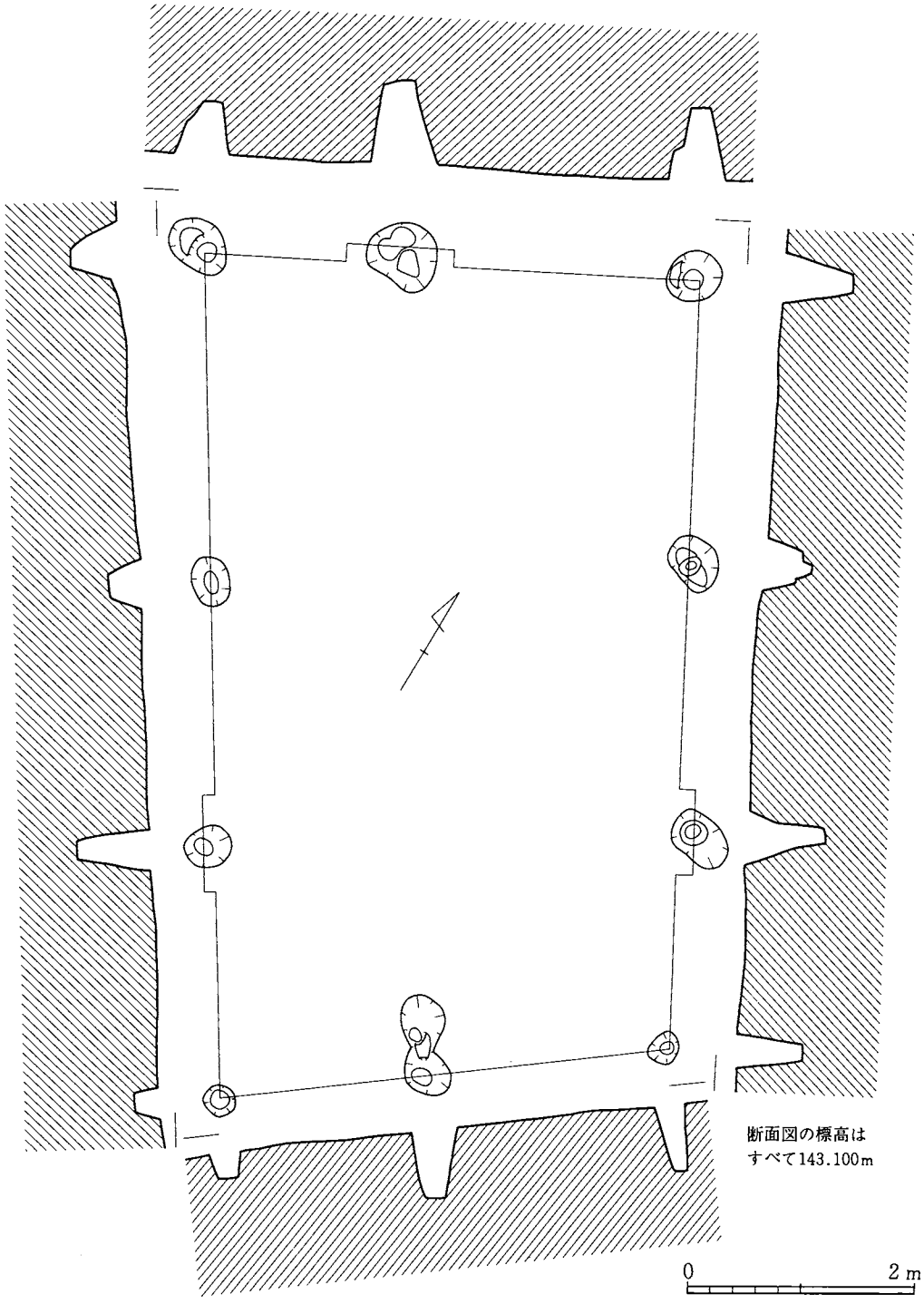
ピットの平面形は、北側桁部の中央と南側桁部の西端部がほぼ円形で（径約0.26～0.28m）、その他は楕円形である（約0.54～0.86m×約0.30～0.48m）。東側梁部に並ぶピット、北側桁部の西端部、南側桁部中央のピットは、二つのピットが重複する。ピットの断面形は筒状である。ピットの深さは、北側桁部の中央、南側桁部の西端、西側桁部の南から２基目までが浅く（深さ約0.24～0.36m）、その他は深い（深さ約0.50～0.76m）。東側梁部を構成するピット、北側桁部の西端部、南側梁部の東から２基目までのピットは、二段掘りである。



第47図　18号掘立柱建物跡実測図

19号掘立柱建物跡（第48図）

19号掘立柱建物跡は、３間×２間の北西方向～南東方向の主軸をもつ建物跡である。東側桁行は約6.60m（22尺）で、柱間は北より約2.40m（８尺）、約2.40m（８尺）、約1.80m（６尺）



第48図　19号掘立柱建物跡実測図

である。東側桁部の南側はやや西方向に振れる。東側桁部の南から２基目のピットは、両端のピットを繋いだ線よりやや東側にずれた箇所にある。西側桁行は約7.35m（24.5尺）で、柱間は北より約2.85m（9.5尺）、約2.40m（８尺）、約2.10m（７尺）になる。西側桁部の南から２基目のピットは、両端のピットを結んだ線より僅かに西側にずれる。北側梁行は約4.35m（14.5尺）で、柱間は西より約1.80m（６尺）、約2.55m（8.5尺）を測る。北側梁部の中央ピットは、両端のピットを繋いだ線よりやや北方向にずれた地点にある。南側梁行は約4.05m（13.5尺）で、柱間は西より約1.80m（６尺）、約2.55m（8.5尺）になる。南北両梁部の全体は、建物の内側方向に振れる。

ピットの平面形はほぼ円形である（径約0.26～0.62m）。北側梁部の中央ピットは二つのピットが重なる。ピットの断面形は筒状を呈する。ピットの深さは、南側桁部の西端部、西側桁部の北から２基目のピットが浅く（深さ約0.22～0.28m）、その他は深い（深さ約0.46～0.70m）。北側梁部を構成するピットと東側桁部の中央２基のピットは、二段掘りになっている。

20号掘立柱建物跡（第49図）

20号掘立柱建物跡は、３間×２間の北西方向～南東方向の主軸をもつ建物跡である。北側桁行は約5.70m（19尺）で、柱間は西より約1.95m（6.5尺）、約1.65m（5.5尺）、約2.10m（７尺）を測る。北側桁部の西より２基目のピットは、両端のピットを結んだ線よりやや南側にずれた地点にある。南側桁行は約4.95m（16.5尺）で、柱間は西より約1.35m（4.5尺）、約2.55m（8.5尺）、約1.05m（3.5尺）である。南側桁部の西より２基目のピットは、両端のピットを繋いだ線より僅かに南側にずれた箇所にある。西側梁行は約4.20m（14尺）で、柱間は南より約2.40m（８尺）、約1.80m（６尺）になる。西側梁部全体は西方向に振れる。東側梁行は約4.35m（14.5尺）で、柱間は南より約2.70m（９尺）、約1.65m（5.5尺）を測る。東側梁部中央のピットは、やや北側にずれる。

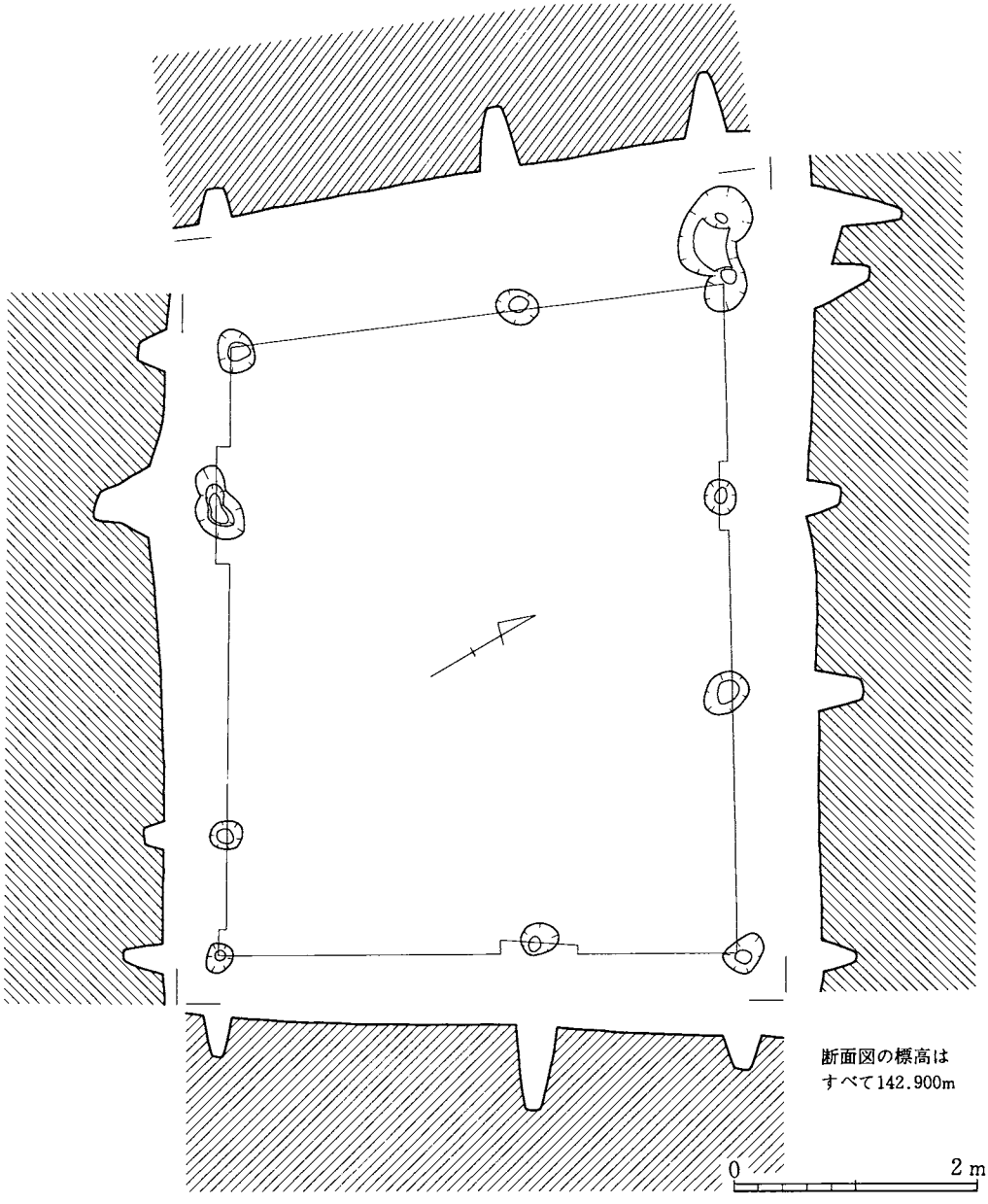
ピットの平面形は、南側桁部の西から２基目が不整形で（最大長約0.60m、最大幅約0.38m）、その他はほぼ円形である（径約0.22～0.38m）。西側梁部の北端部のピットは、二つのピットが重複する。ピットの断面形は筒状である。ピットの深さは、西側桁部の北から２基目まで、東側桁部の中央、南側梁部の西から２基目が深く（深さ約0.44～0.70m）、その他は浅い（深さ約0.16～0.34m）。南側梁部の西から２基目のピットは、二段掘りである。

21号掘立柱建物跡（第50図）

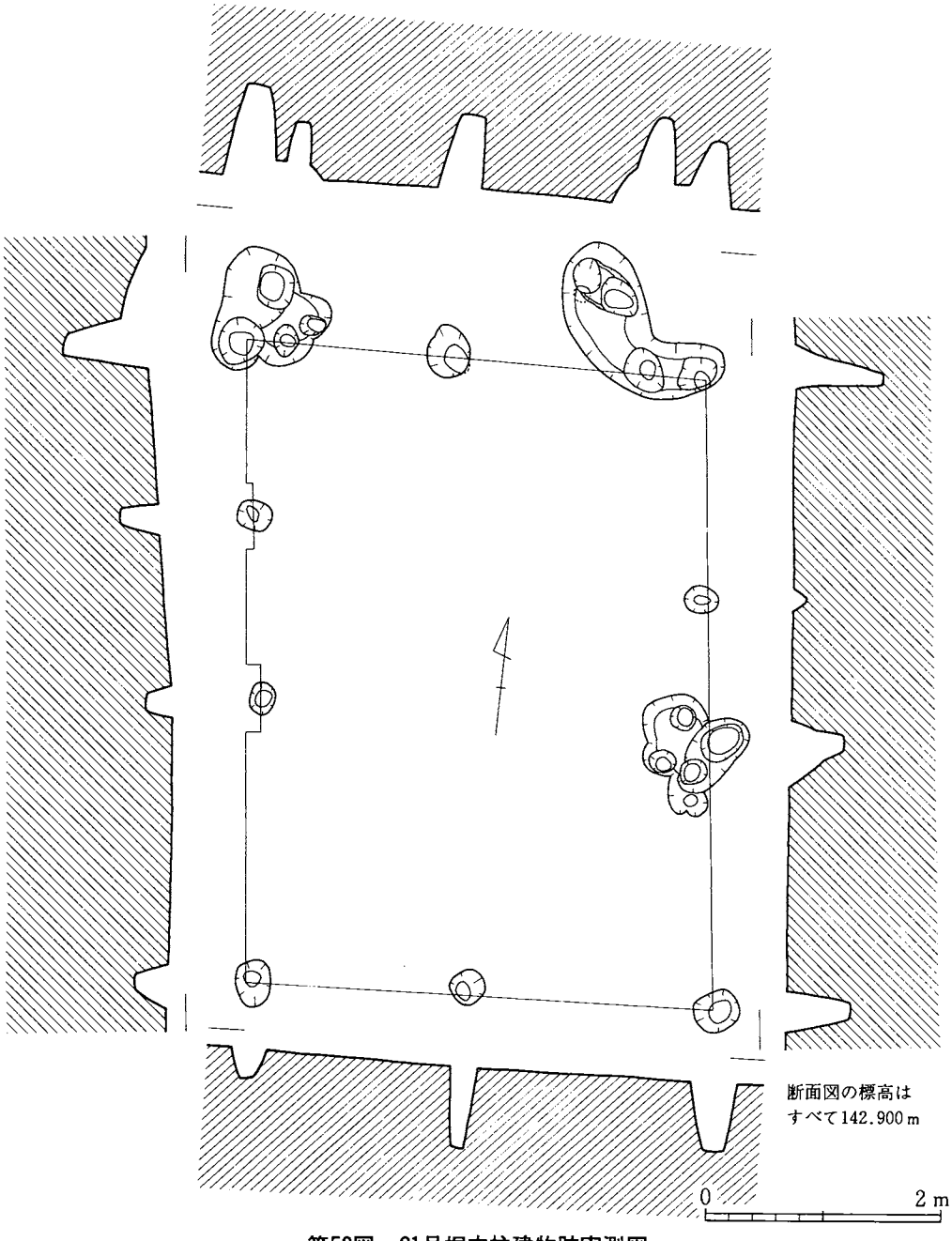
21号掘立柱建物跡は、３間×２間の南北棟建物跡である。東側桁行は約5.25m（17.5尺）で、柱間は北より約1.80m（６尺）、約1.20m（４尺）、約2.25m（7.5尺）を測る。西側桁行は約5.40m（18尺）で、柱間は北より約1.50m（５尺）、約1.50m（５尺）、約2.40m（８尺）である。

南側桁部の中央２基のピットは、両端のピットを繋いだ線より僅かに東方向にずれた箇所にある。北側梁行は約3.90m（13尺）で、柱間は西より約1.80m（６尺）、約2.10m（７尺）になる。北側梁部全体は北方向に僅かに振れる。南側梁行は約4.05m（13.5尺）で、柱間は西より約1.80m（６尺）、約2.25m（7.5尺）を測る。西側梁部は全体が南方向にやや振れる。

ピットの平面形はほぼ円形である（径約0.22～0.38m）。北側梁部両端のピットは四つのピットが重複し、東側桁部の南から２基目のピットは五つのピットが重なる。ピットの断面形は、東側桁部の北から２基目を除いて筒状を呈する。東側桁部の北から２基目のピットの断面形は、



第49図　20号掘立柱建物跡実測図



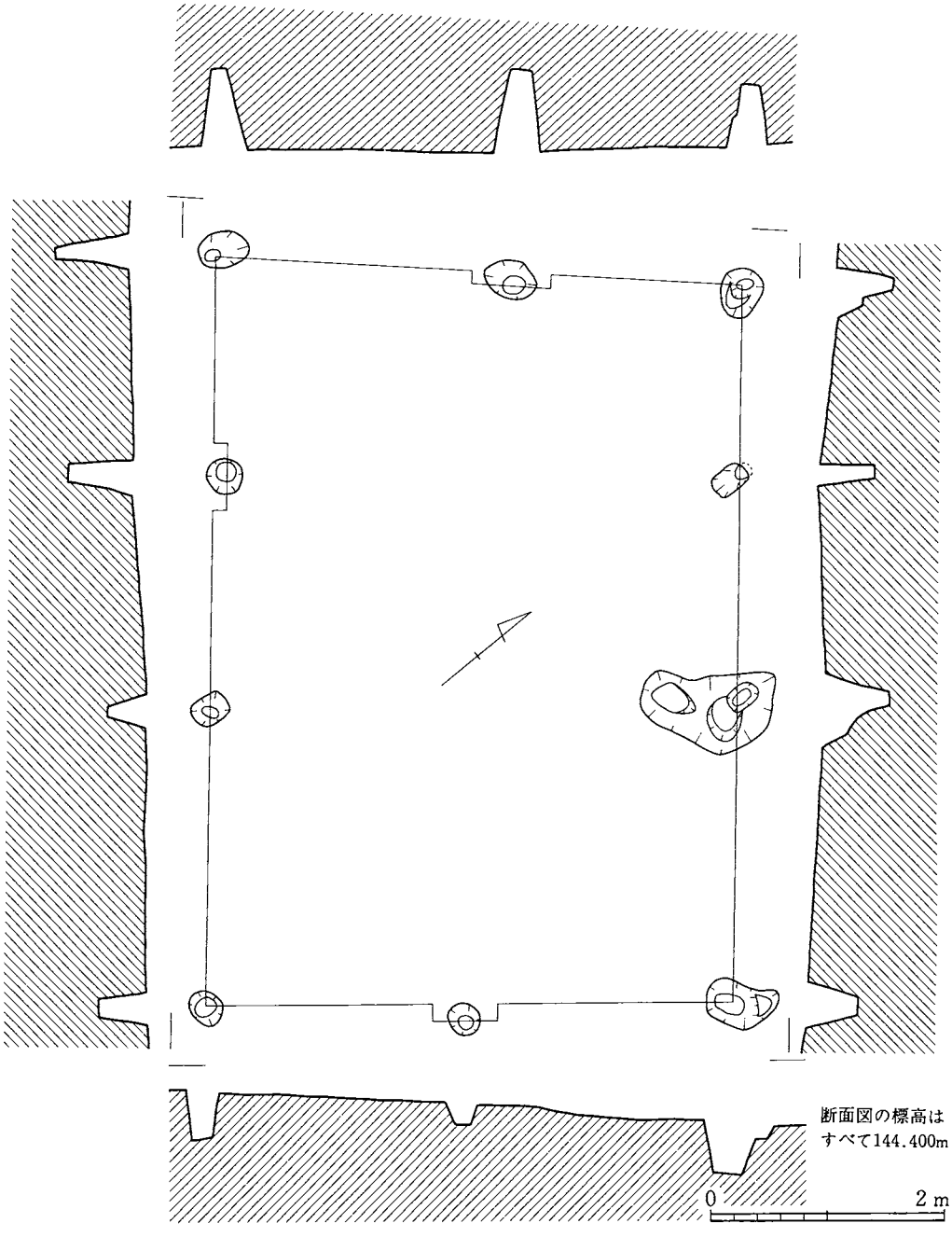
第50図　21号掘立柱建物跡実測図

浅い漏斗状である（深さ約0.10m）。このピット以外の深さは、西側桁部の南から３基目までが浅く（深さ約0.24～0.32m）、その他は深い（深さ約0.58～0.72m）。東側桁部の南から２基目のピットは、二段掘りになっている。

22号掘立柱建物跡（第51図）

22号掘立柱建物跡は、３間×２間の北西方向～南東方向の主軸をもつ建物跡である。北側桁

行は約６.0m（20尺）で、柱間は西より約1.65m（5.5尺）、約1.80m（６尺）、約2.55m（8.5尺）になる。南側桁行は約6.30m（21尺）を測り、柱間は西より約1.80m（６尺）、約2.10m（７尺）、約2.40m（８尺）である。南側桁部の西より２基目のピットは、両端のピットを繋いだ線より僅かに北方向にずれた地点にある。西側梁行は約4.65m（15.5尺）で、柱間は南より約2.55



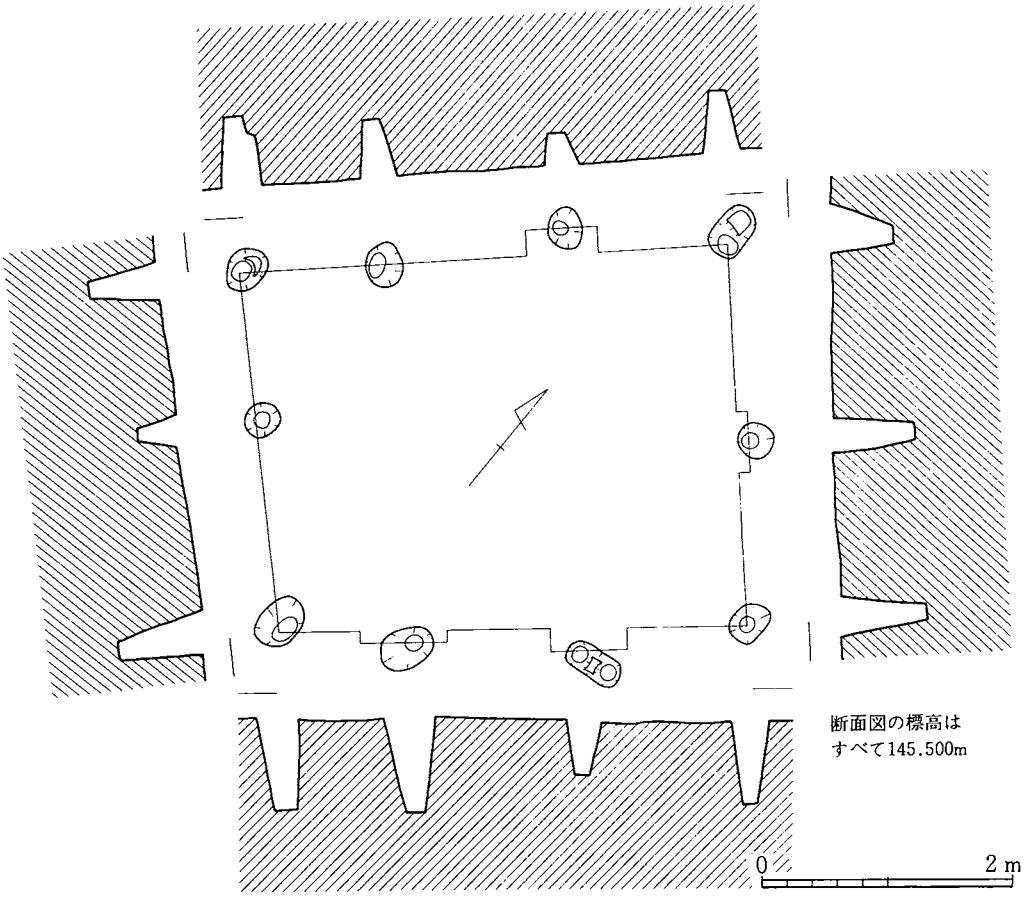
第51図　22号掘立柱建物跡実測図

m（8.5尺）、約2.10m（７尺）である。西側梁部の中央ピットは、両端のピットを結んだ線よりやや東側にずれる。東側梁行は約4.50m（15尺）を測り、柱間は約2.25m（7.5尺）の等間である。東側梁部の中央ピットは、両端のピットを結んだ線よりやや東側にずれた箇所にある。

ピットの平面形は、西側梁部を構成するもの、東側桁部の西より２基目が楕円形で（約0.30～0.44m×約0.20～0.32m）、東側梁部の北端が不整形を呈し（最大長約0.60m、最大幅約0.36m）、その他はほぼ円形である（径約0.28～0.30m）。北側桁部の東から２基目のピットは三つのピットが重複する。ピットの断面形は筒状になる。ピットの深さは、南側桁部の西から２基目と東側梁部の中央部が浅く（深さ約0.20～0.32m）、その他は深い（深さ約0.46～0.70m）。北側桁部両端のピットは、二段掘りである。

23号掘立柱建物跡（第52図）

23号掘立柱建物跡は、３間×２間の北東方向～南西方向の主軸をもつ建物跡である。西側桁行は約3.90m（13尺）で、柱間は南より約1.20m（４尺）、約1.50m（５尺）、約1.20m（４尺）



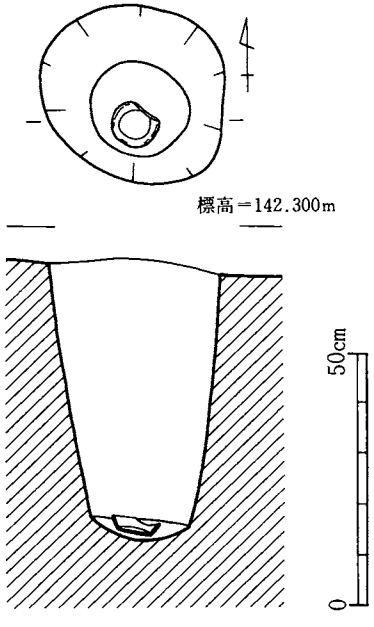
第52図　23号掘立柱建物跡実測図

を測る。東側桁行は約3.90m（13尺）で、柱間は南より約1.20m（４尺）、約1.35m（4.5尺）、約1.35m（4.5尺）である。東西両桁部の北から２基目のピットは、両端のピットを繋いだ線より僅かに建物の外側方向にずれた箇所にある。北側梁行は約３m（10尺）で、柱間は西より約1.65m（5.5尺）、約1.35m（4.5尺）になる。北側梁部中央のピットは、両端のピットを結んだ線よりやや北方向にずれる。南側梁行は約2.85m（9.5尺）で、柱間は西より約1.20m（４尺）、約1.65m（5.5尺）を測る。西側梁部は全体が北側に振れる。

ピットの平面形は、西側桁部の南から２基目と東西両梁部の中央部がほぼ円形で（径約0.28～0.30m）、その他は楕円形を呈する（約0.32～0.44m×約0.22～0.30m）。東側桁部の北から２基目のピットは、二つのピットが重複する。ピットの断面形は筒状を呈する。ピットの深さは、西側桁部の北から２基目と南側梁部の中央部が浅く（深さ約0.24～0.30m）、その他は深い（深さ約0.44～0.74m）。西側桁部両端のピットは二段掘りである。

１号ピット（第53図）

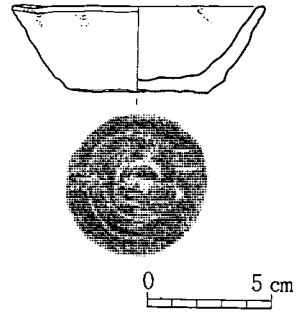
１号ピットは底部に土師器坏を伴う。土師器は他のピットの覆土よりも出土するが、底部より出土したのは１号ピットだけである。１号ピットより出土した土師器は、口縁部を上にしてピット底面のほぼ中央部に据わった状態であった。この土師器の口縁部は、一部分を欠いている。１号ピットは、ほぼ円形の平面形で、深い筒状の断面形を呈する（上面径約0.35m、底面径約0.19m、深さ0.約55m）。



第53図　１号ピット実測図

〔出土遺物〕（第54図）

１号ピットより出土した土師器坏は、ヘラ切りの底部をもつ。底部には板状圧痕が残る。体部外器面の底部近くに、ヘラ調整による段がある。その他の体部は、横ナデによる僅かな凹凸をもちながら、ほぼ直線的に口縁部までのびる。口縁部は丸くおさまる。内底面には、ナデによる弱い凹凸が観察できる。体部・底部の内外器面には、丹塗りの痕跡が部分的に認められることより、土師器全体に丹塗りを施したと考えられる。口唇部から口縁部直下にかけての一部分に、ススが付着している。



第54図
１号ピット出土土師器実測図

道路跡（第55図）

道路跡は２号建物跡、18号・19号掘立柱建物跡と22号掘立柱建物跡とのほぼ中間地点を北西方向から南東方向にかけてのびている。検出できた道路跡は、６箇所で欠損しているが、１本の道路跡である（長さ直線距離で約12.0m、幅約0.20～0.40m）。道路跡がのびる方向より考えると、この道路跡は遺跡が立地する台地を横切る状態で存在していたと思われる。

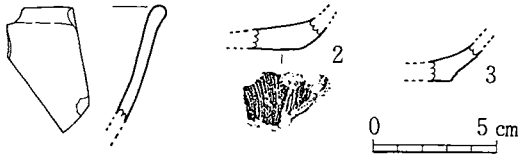
道路跡はⅢ層上に形成されており、硬化面が顕著に認められる（硬化面の厚さ約0.04～0.08m）。道路跡の上面は僅かに傾斜し、南東隅から北西隅に向けて低くなる（南東隅と北西隅との比高差約0.20m）。

道路跡の覆土はⅢ層とほぼ同一である。道路跡の硬化面上より遺物が５点出土した。

〔出土遺物〕（第56図）

道路跡の硬化面上から出土した遺物は５点あるが、うち２点は極小破片であるため図化していない。１は龍泉窯系青磁椀片である。口縁端部は丸くなりながら外に開く。内外器面とも貫入が目立つ。

２は糸切りの底部をもつ土師器片、３は底部がヘラ切りされた土師器片である。２・３は小片であるため詳細は不明である。



第56図　道路跡出土遺物実測図

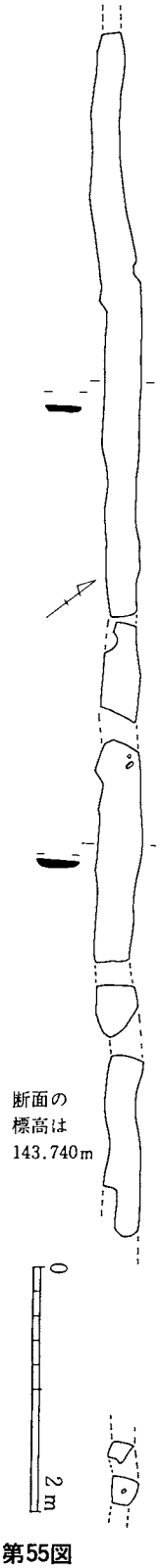
７号土壙（第57図）

７号土壙の平面形は略楕円形を呈する（約１.0m×0.75m）。断面形は壁の中位で段をもつ深い筒状で、床面は二段になる（深さ約0.70～0.85m）。

土壙の覆土はⅢ層に類似した黒褐色土で、分層できない。

８号土壙（第57図）

８号土壙は、楕円形の長軸側が丸く突出した平面形を呈する（最大長約2.05m、最大幅約1.45m）。土壙内には壁に沿った３箇所で、さらにピットが掘り込まれる。断面形は北側が二段になり、その部分は南側の深い筒状を呈する掘り込みに続く（上段床面までの深さ約0.15m、下段床面までの深さ約0.85m）。上段の床面にピット１基が穿たれる。土壙の覆土は①層～⑧層に分けることができる。①層は茶褐色砂質土。②層は黒褐色砂質土。③層は褐色弱粘



第55図
道路跡実測図

質土。④層は黒色砂質土。⑤層は淡暗褐色弱粘質土。⑥層は茶褐色弱粘質土。⑦層は暗褐色砂質土。⑧層は淡暗褐色砂質土。含まれる量の違いはあるが、①層・②層・④層・⑤層・⑦層には、カーボンが混入する。⑦層・⑧層はⅢ層を基本とした層である。

9号土壙（第57図）

9号土壙は二つの土壙が重複している。東側の土壙が西側の土壙を切っている。西側の土壙は、ほぼ円形の平面形を呈していたと思われる（推定径約0.65m）。断面形を見ると、浅い皿状の掘り込みに、さらに西壁部分に筒状をしたピットが掘り込まれている（浅い皿状の掘り込みの深さ約0.15m、ピットの深さ約0.34m）。東側の土壙の平面形は不整形を呈する（最大長約1.30m、最大幅約1.15m）。断面形は二段掘りになり、皿状の掘り込みのほぼ中央をさらに深く掘り込んだ状態になっている（上段の床面までの深さ約0.22m、下段の床面までの深さ約１.0m）。東と西の土壙覆土はⅢ層に類似した黒褐色土で、分層できない。

10号土壙（第57図）

10号土壙は楕円形の平面形を呈する（約1.40m×約1.15m）。土壙内の東側床面はさらに掘り込まれ、その部分の平面形が楕円形になる（約0.90m×約0.35m）。断面形は皿状の掘り込みの東側部分をさらに筒状に掘り込んだ形を呈する（上段の床面までの深さ約0.20m、下段の床面までの深さ約0.40m）。土壙の覆土はⅢ層とほぼ同一の暗褐色土であり、分層できない。

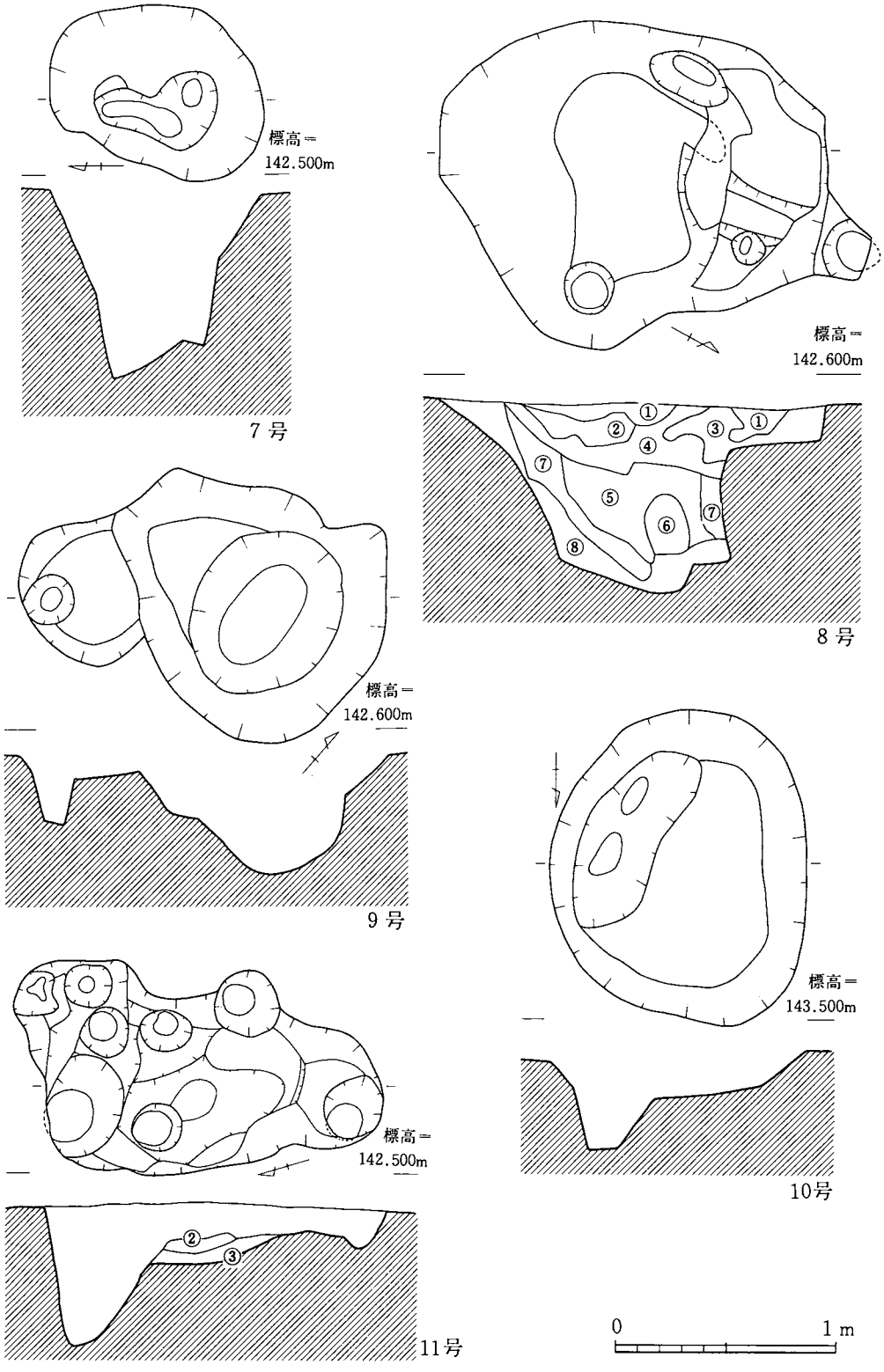
11号土壙（第57図）

11号土壙は不整形の平面形を呈する（最大長約1.70m、最大幅約0.95m）。土壙内にはさらに8基のピットが掘り込まれる。土壙のほぼ中央部を南北で切った断面形で見ると、南側の皿状になる部分と北側の深い筒状を呈する部分との二段になる（上段の床面までの深さ約0.10～0.30m、下段の床面までの深さ約0.65m）。土壙の覆土は①層～③層に分層できる。①層は暗褐色土。②層は灰褐色砂質土。③層は黄褐色土。①層はⅢ層とほぼ同一である。

12号土壙（第58図）

12号土壙は他の土壙と比べると、大型の不整形の平面形を呈する土壙である（最大長約3.30m、最大幅約1.90m）。土壙内の壁や床面にはさらに大小7基のピットが掘り込まれている。

東西方向の断面形は、東側の床面が深く西側の床面が浅い二段になり、筒状をしたピットがある（東側床面までの深さ約0.45～0.60m、西側床面までの深さ約0.14～0.22m、ピットの深さ約0.25～0.40m）。土壙内の覆土は①層～⑤層で、①層～③層は、④層・⑤層の堆積後に掘り込まれたピットの覆土である。①層は黒褐色土。②層は黒色土で、ブロック状にはいる。③層


標高＝
142.500m
7号
標高＝
142.600m
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
8号
標高＝
142.600m
9号
標高＝
143.500m
10号
標高＝
142.500m
②
③
11号
0
1 m

第57図　土壙実測図

は暗褐色土。④層は淡黒褐色土。⑤層は淡暗褐色土。④層はⅢ層が覆土化したものである。

13号土壙（第58図）

13号土壙はほぼ円形の平面形を呈する（径約0.85m）。土壙内の北側と西側の床面から壁にかけての部分には、略楕円形の平面形をしたピットがさらに掘り込まれる（約0.22～0.30m×約0.18～0.23m）。南北断面形を見ると、深い皿状の掘り込みの北側部分に筒状をしたピットがある（深い皿状掘り込みの深さ約0.20m、ピットの深さ約0.40m）。土壙の覆土はⅢ層とほぼ同一の暗褐色土であり、分層できない。

14号土壙（第58図）

14号土壙は南東部分が内側に入り込んだ略楕円形の平面形を呈する（約1.05m×約0.70m）。断面形は深い皿状になる（深さ約0.20m）。土壙の覆土は暗褐色土で、Ⅲ層とほぼ同一であり、分層できない。

15号土壙（第58図）

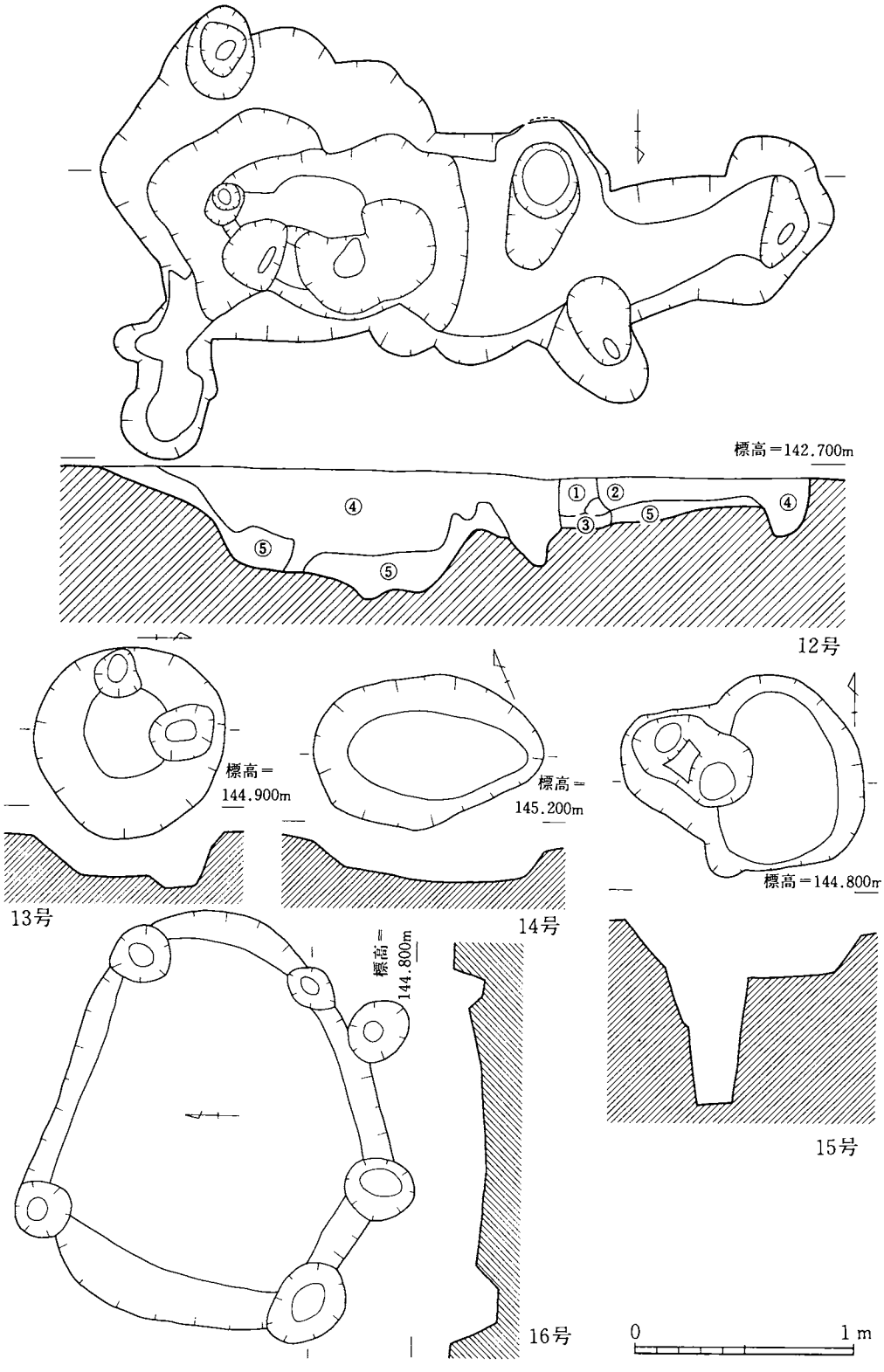
15号土壙は不整形の平面形を呈する（最大長約1.10m、最大幅約0.90m）。土壙内の西側部分にはさらに2基のピットが掘り込まれている。東西方向の断面形を見ると、深い皿状の掘り込みの西側に筒状をしたピットがあり、二段になる（皿状掘り込みの深さ約0.20m、ピットの深さ約0.85m）。土壙内の覆土はⅢ層とほぼ同一の暗褐色土で、分層できない。

16号土壙（第58図）

16号土壙の平面形を見ると、略楕円形（約1.90m×約1.55m）をした部分の床面から壁にかけての箇所に、6基のほぼ円形をしたピットがある（径約0.20～0.35m）。南側隅の断面形は、皿状の掘り込みの東西両端をさらに筒状に掘り込んでいる（皿状掘り込みの深さ約0.15m、両端ピットの深さ約0.15～0.22m）。土壙の覆土は暗褐色土でⅢ層とほぼ同一であり、分層できない。

17号土壙（第59図）

17号土壙は略楕円形の平面形を呈する（約3.90m×約2.90m）。土壙内の床面や床面から壁にかけての部分には、17基のほぼ円形をしたピットがある（径約0.20～0.50m）。さらに、土壙内の南西隅寄りの2箇所を不整形に掘り込む（最大長約1.20～1.80m、最大幅約0.40～0.80m）。土壙の西側約半分に礫が集まる。礫は床面に着いた状態か床面よりやや上位で浮いた状態である。東西方向の断面形を見ると、全体の掘り込みは皿状を呈し、床面に凹凸があり、ピットは

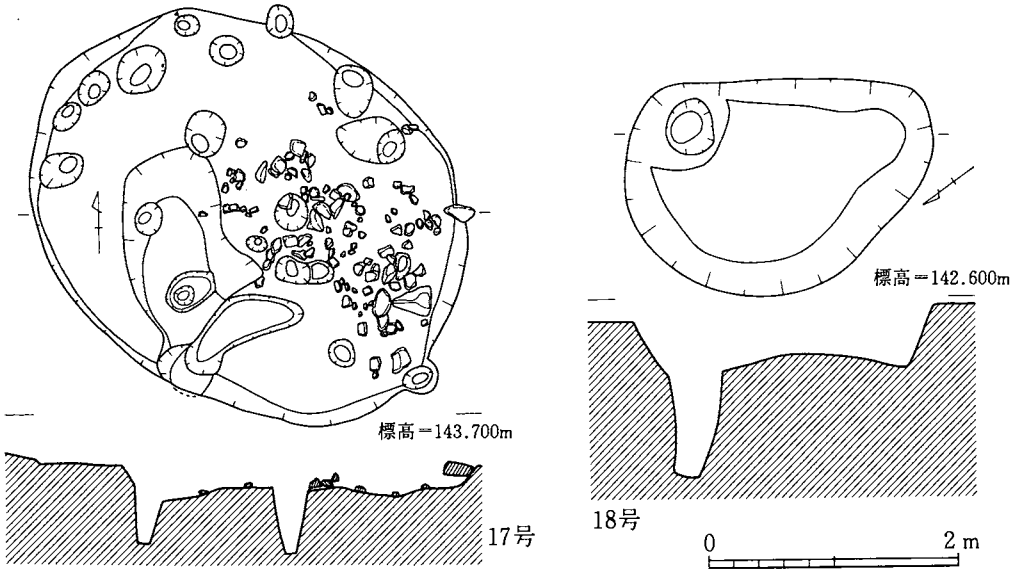

標高＝142.700m
①
②
③
④
⑤
12号
標高＝
144.900m
13号
標高＝
145.200m
14号
標高＝144.800m
15号
標高＝
144.800m
16号
0
1 m

第58図　土壙実測図

深い筒状になる（皿状掘り込みの深さ約0.15m、両端ピットの深さ約0.15～0.22m）。土壙の覆土は暗褐色土でⅢ層とほぼ同一であり、分層できない。

18号土壙（第59図）

18号土壙の平面形は略楕円形を呈する（約2.50m×約1.80m）。土壙内西側の床面から壁にかけての部分に、ほぼ円形をしたピット１基がある（径約0.40m）。土壙の西側に寄った箇所での断面形は、皿状を呈した掘り込みの部分とそれに続く北側端部を筒状に深く掘り込んだ部分よりなる。（皿状掘り込みの深さ約0.50m、ピットの深さ約1.20m）。土壙の覆土はⅢ層とほぼ同一である暗褐色土で、分層できない。



第59図　土壙実測図

4．遺物について（第60図）

ここでは、Ⅱｂ層・Ⅲ層より出土した遺物を取り上げる。Ⅱｂ層・Ⅲ層出土遺物の主体となるのは、ヘラ切り底の土師器壙・皿類であり、その中には墨書土器が少数ある。その他は、黒色土器（坏・鉢・台付鉢）、青磁（椀）、須恵器（坏・甕）、糸切り底の土師器坏・皿類がヘラ切り底の土師器坏・皿類に少量混在する状態で出土した。Ⅱｂ層では、ヘラ切り底の土師器坏・皿類と糸切り底の土師器坏・皿類が共伴している。

Ⅱｂ層・Ⅲ層出土遺物の分布状況は、次のようになる。

Ⅱｂ層・Ⅲ層出土遺物は、調査区のほぼ中央の標高が最も高い部分と調査区の北西端部との

中間地点に集中する。この地点は北～北西方向に向かって緩やかに低くなる（標高約142.75m～約144.00m）。遺物が集中する箇所は、建物跡・土壙・道路跡（(2) の遺構群）が分布する範囲とほぼ重なる（第27図）。

①土師器

ヘラ切り底の土師器（第60図）

今回の調査で出土した土師器のうち、底部が明確に回転ヘラ切り（以下ヘラ切りと呼ぶ）されており、器形は坏・椀あるいは皿形で、口径、底径が復元できたものは359点であった。これらの土器は、すべてⅡb層とⅢ層から出土している。土器の接合状況を見ると、Ⅱb層出土のものとⅢ層出土のものが接合している事例がかなり多い。

これらの土師器の法量を表にしたものが第6表～第9表である。口径によって大きく4つのグループ（D～G類）に分けることができた。D類は、ほぼ口径約12.0～14.0cm、E類は口径約11.0～12.0cm、F類は口径10.0cm前後、G類は口径約8.0～9.0cmのものである。また、各グループ内で、口径と底径の関係より、4つのグループ（Ⅰ～Ⅳ類）に細分を試みた。Ⅰ類は口径と底径の差が著しく、口縁が大きく開くもの、Ⅲ類は口径と底径の差が少なく、体部は直立気味のもの、Ⅱ類はその中間タイプのものである。Ⅳ類は体部が丸味を持ち底部と体部の境が不明瞭なものである。またこれらの分類以外に、形態的には多少の差異はあるが、明らかに調整等に類似点が認められたものは、1つのグループとして分類した。

この分類は、あくまでも単に形態的差異により機械的に行ったもので、これらが直接時期差や形式差を示すものではない。

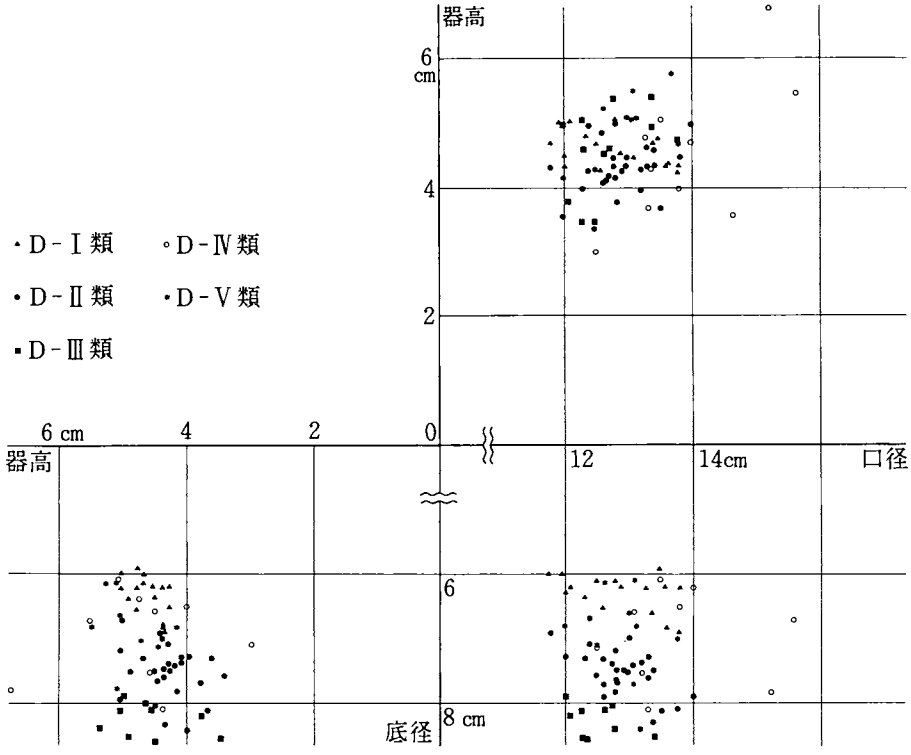
D－Ⅰ類（第61図）

口径約12.0cm以上、底径約6.0～7.0cmで、器高により三つのグループに細分できる。

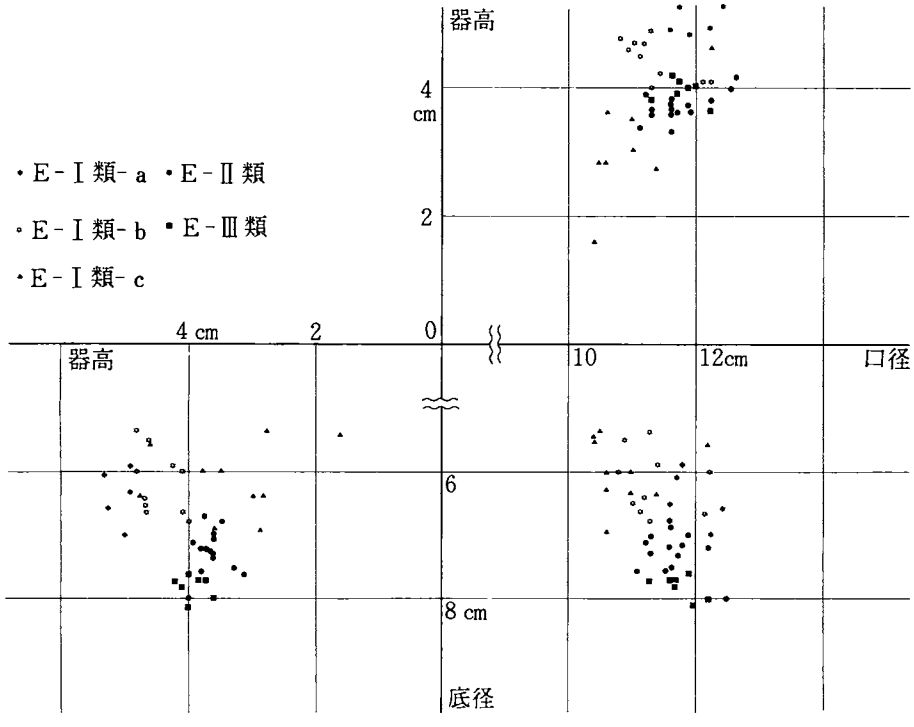
1～6は、D類の中では口径が小さめで、その割に器高が高く、底部はやや厚い。1～3・5・6は外器面体部の底部との境の部分を回転ヘラ削り（以下ヘラ削りと呼ぶ）している。内底部はナデられている。1・6は内底を中心から外へ放射状にナデている。2・4は底部の中央がやや膨らんでおり、不安定なすわりである。

7～20は口縁は大きく開いており、器壁が薄く口縁端部が尖るもの（9・11・12・14・16・17）と器壁は厚目で、口縁端が丸いもの（7・8・10・13・15・18～20）がある。7～9はヘラ削りが施され、内底部全体を指先かヘラ先で、渦巻き状に力強く深くナデている。10～18の内底部はナデられている。18は土器自体を回しながら内底部を数度ナデており、内底部には中心から外に向かってナデの跡が、外底部には板状圧痕が、放射状に観察される。14・17はヘラ

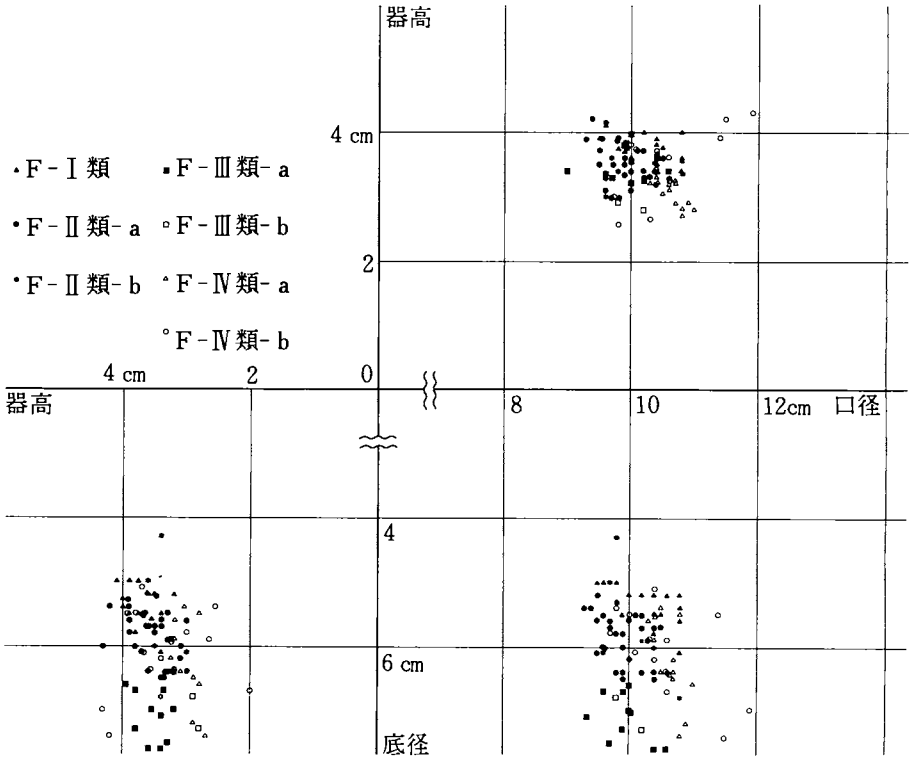
第6表　土師器法量表



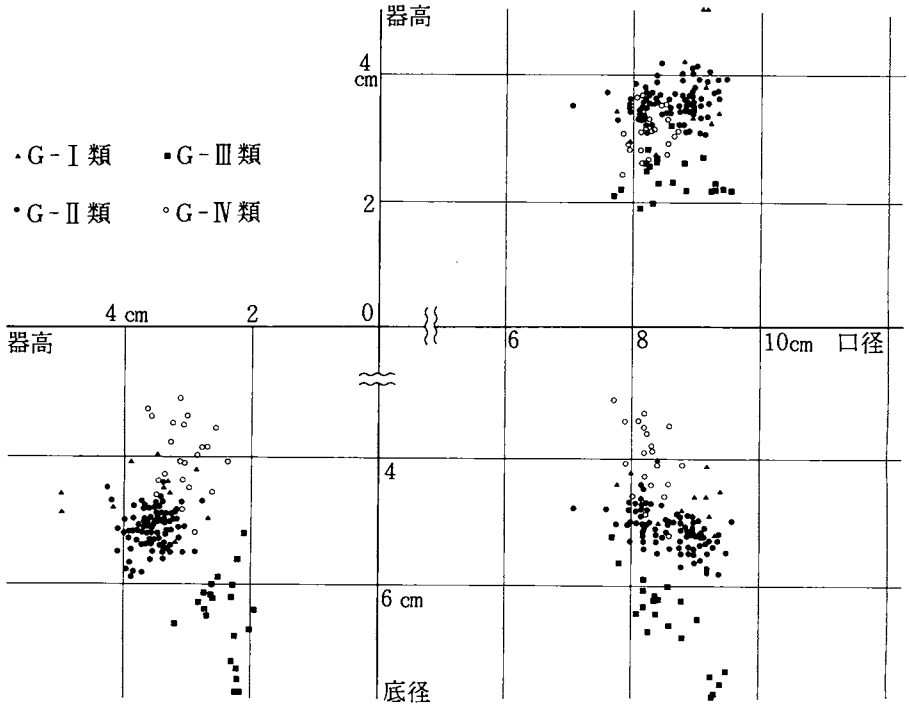
第7表　土師器法量表



第８表　土師器法量表



第９表　土師器法量表



削りされ、15・17は上げ底である。20は底部中央がやや外に膨らみ不安定な形で、底部にはヘラ記号↑がある。

21は胎土・焼成ともに良好で、口縁端が丸く膨らみ、外底部は粘土が外にやや広がっている。内底部の調整は不明であるが、D—Ⅰ類の中では他に類例がない。

22はD－Ⅰ類の中では特に器高が低い。内底部はナデ調整されている。

4・6・9・11・13・15・16・18にはススが付着している。

D－Ⅱ類（第62図）

口径約12.0cm以上、底径約7.0～8.0cmであり、器高により三つのグループに細分できる。

1～5の器高は5.0cm前後と高く、ヘラ削りを施している。4を除き口縁端部はやや尖り気味である。1～4の内底部の調整はナデであり、5はロクロを用いた回転ナデ（以下回転ナデと呼ぶ）である。

6～20は、器高約4.0～4.5cmである。器壁が薄く口縁端部が尖るもの（8・11～15・18・19）と、丸いもの（7・9・10・16・17・20）がある。ヘラ削りのあるものは6・7・8・12である。6～12・18・19の内底部はナデが施されており、13～17・20の内底部は回転ナデのみであると思われる。17はヘラ切り未調整である。18は胎土・焼成とも特に良く、外器面は丹が塗られていた可能性がある。

21～24は器高は低く、3.5cm前後である。21は口径約13.5cm、24は口径約14.6cmと大型である。ヘラ削りの施されているものはない。21は内底部全体を指先かヘラ先で渦巻状に強く深くナデており、22・24の内底部は回転ナデ調整である。

8・10・14・15・18・24を除きススが付着している。

D－Ⅲ類（第63図）

口径約12.0cm以上、底径約8.0～9.0cmで、器高により三つのグループに細分できる。

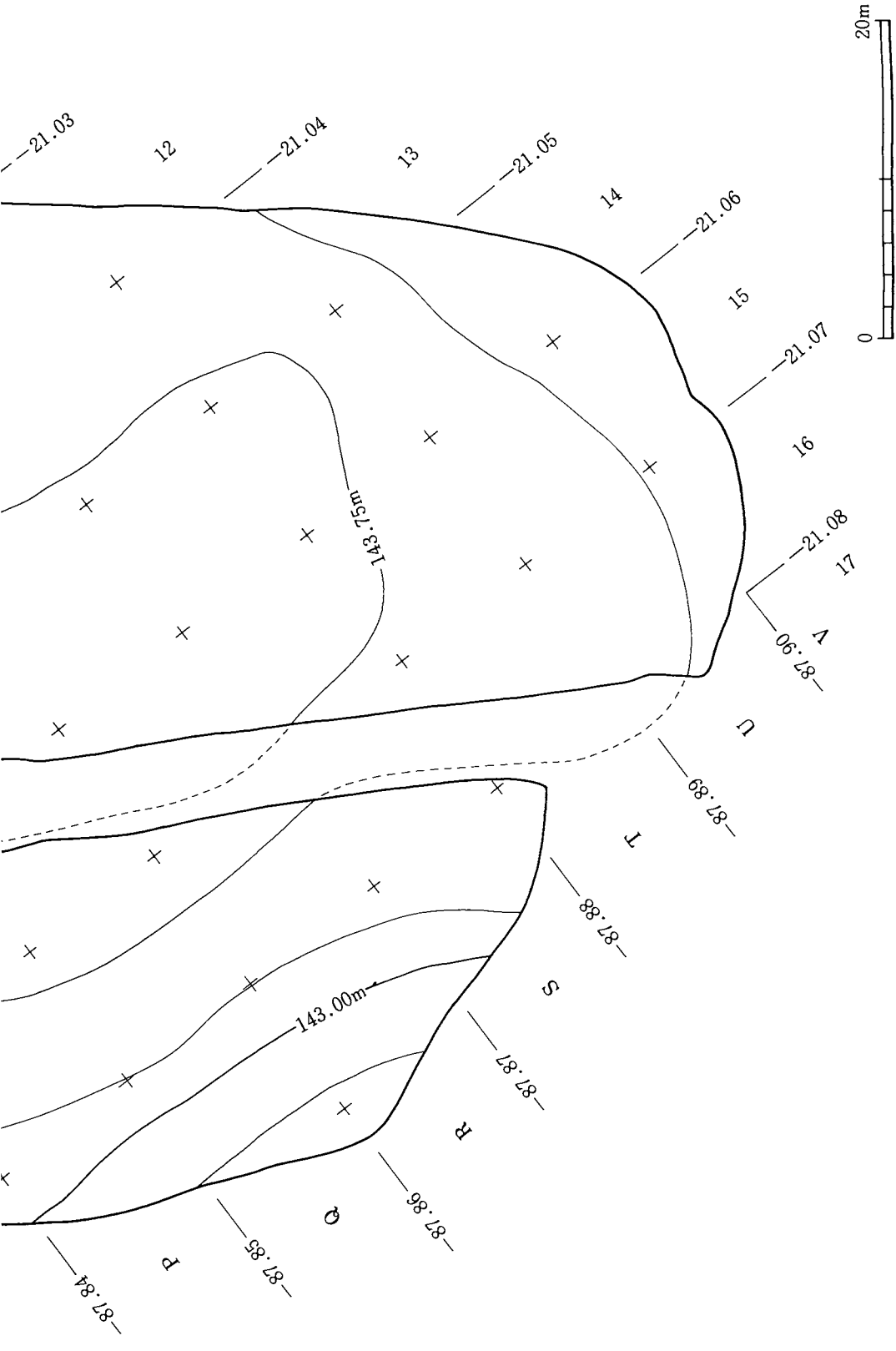
1～4は器高約5.0～5.5cmで高いものである。底部は厚く、器壁もかなり厚く、口縁端部は尖らない。内底部の調整はナデと思われ、2・3はヘラ削りされている。

5～12は器高約4.5～5.0cmである。7・8は口径が各々約13.8cm、約13.4cmでやや大型である。7は外器面に、8は全面に丹が塗られた跡があり部分的に赤褐色を呈している。ともに内底部はナデ調整され、8はヘラ削りが施されている。5・6も内底部はナデ調整で、5には指あとが4ヵ所、内底部の各隅に十文字の位置で残っている。6は底部より体部の方が厚く、特に底部と体部の境目付近が厚い。9はヘラ削りされ、外底部はヘラ切りされたままである。内底部は周囲を丸く指でナデている。10～12は胎土・焼成ともに良く、内底部の調整は回転ナデのみではないかと思われる。11は口縁端部のみ大きく外反する。12は器壁が薄く、口縁端部は

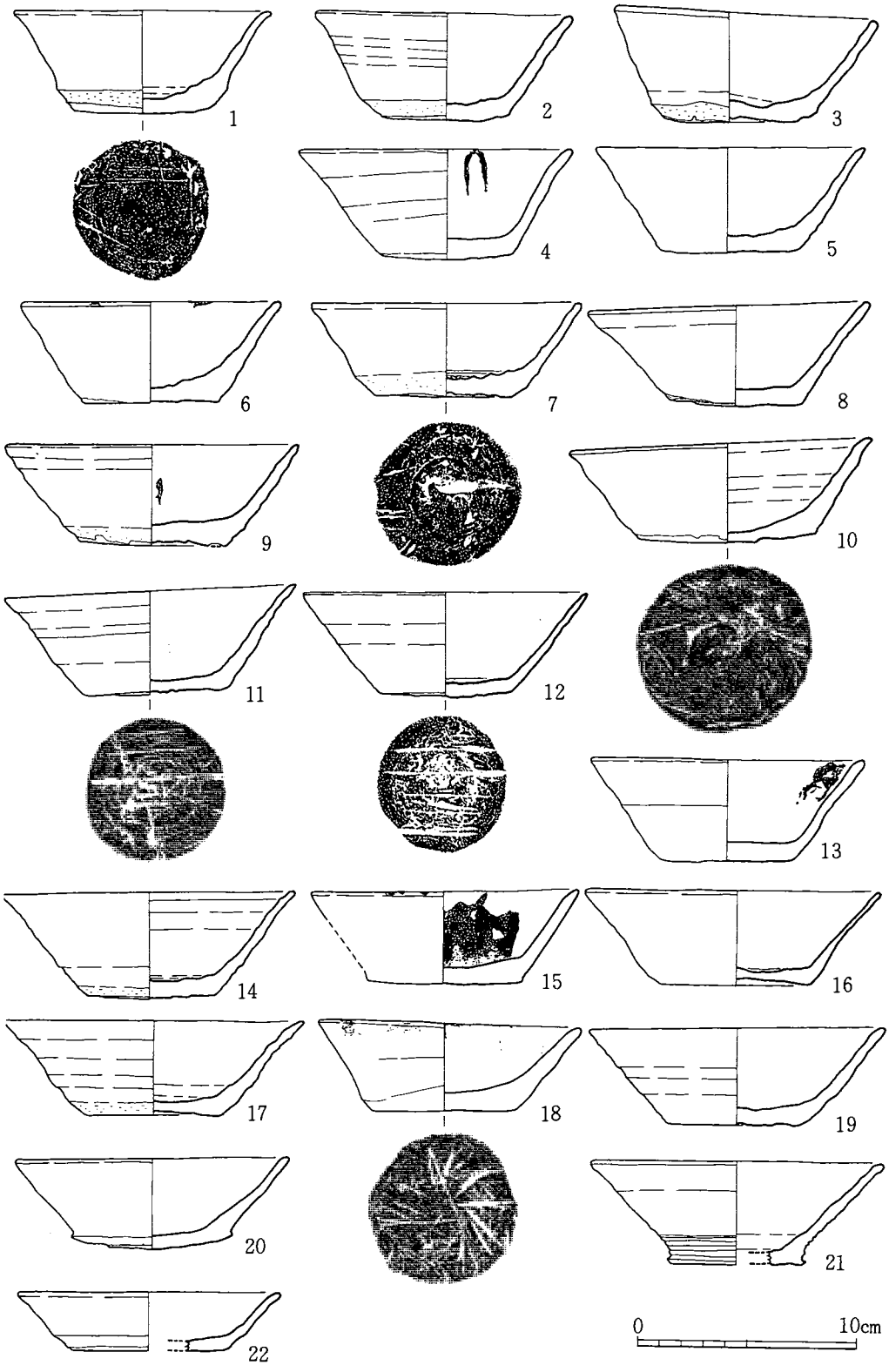
2
20.94
3
20.95
4
143.00m
87.72
C
D
87.73
E
87.74

20.99
7
20.98
6
20.97
5
145.00m
144.00m
87.78
J
87.77
I
87.76
H
87.75
G
E

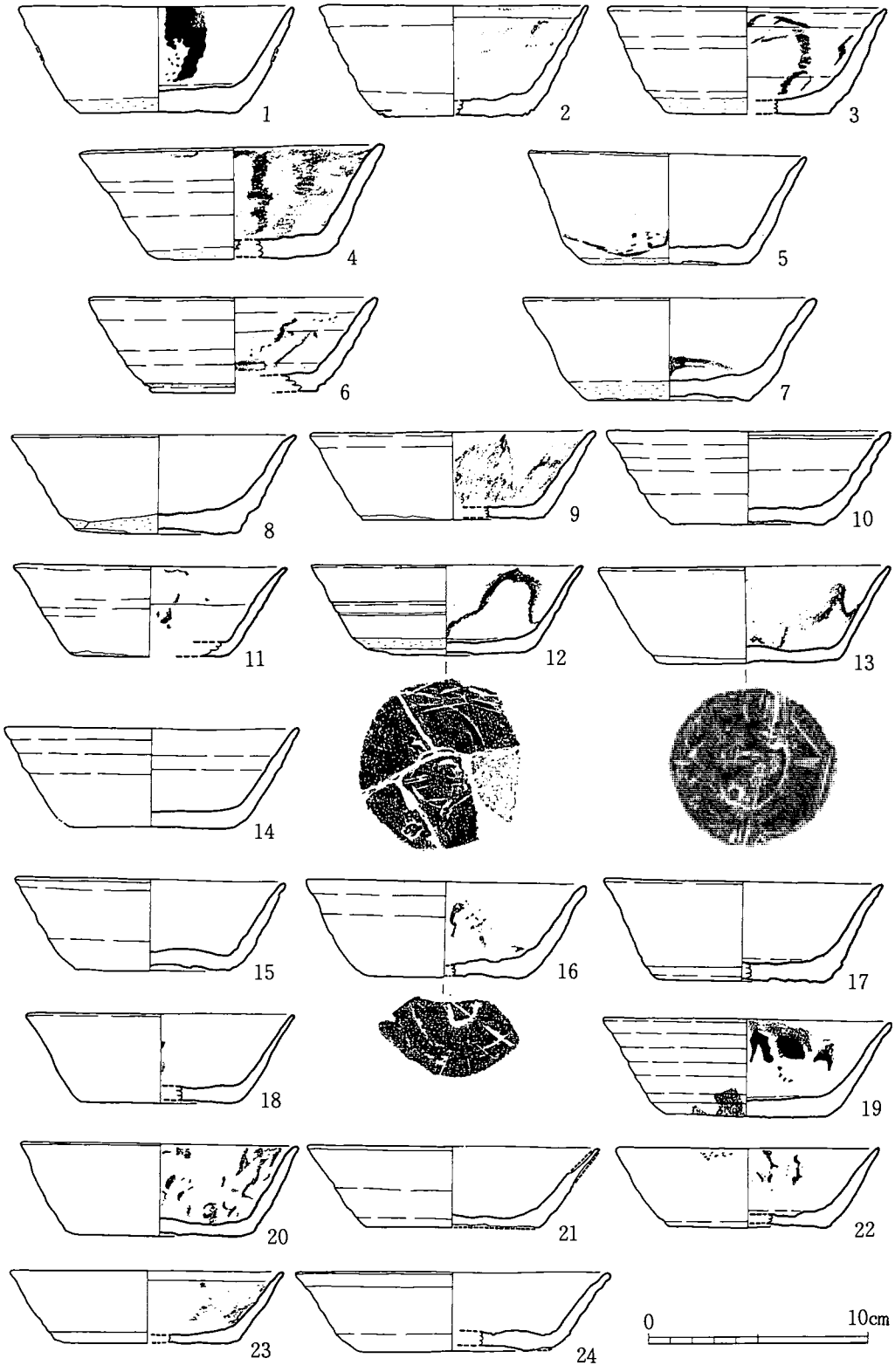
8
21.00
9
21.01
10
21.02
11
145.00m
144.00m
87.79
K
87.80
L
87.81
M
87.82
N
87.83
O



第60図　Ⅱb層・Ⅲ層出土ヘラ切り底の土師器分布図



第61図　土師器実測図



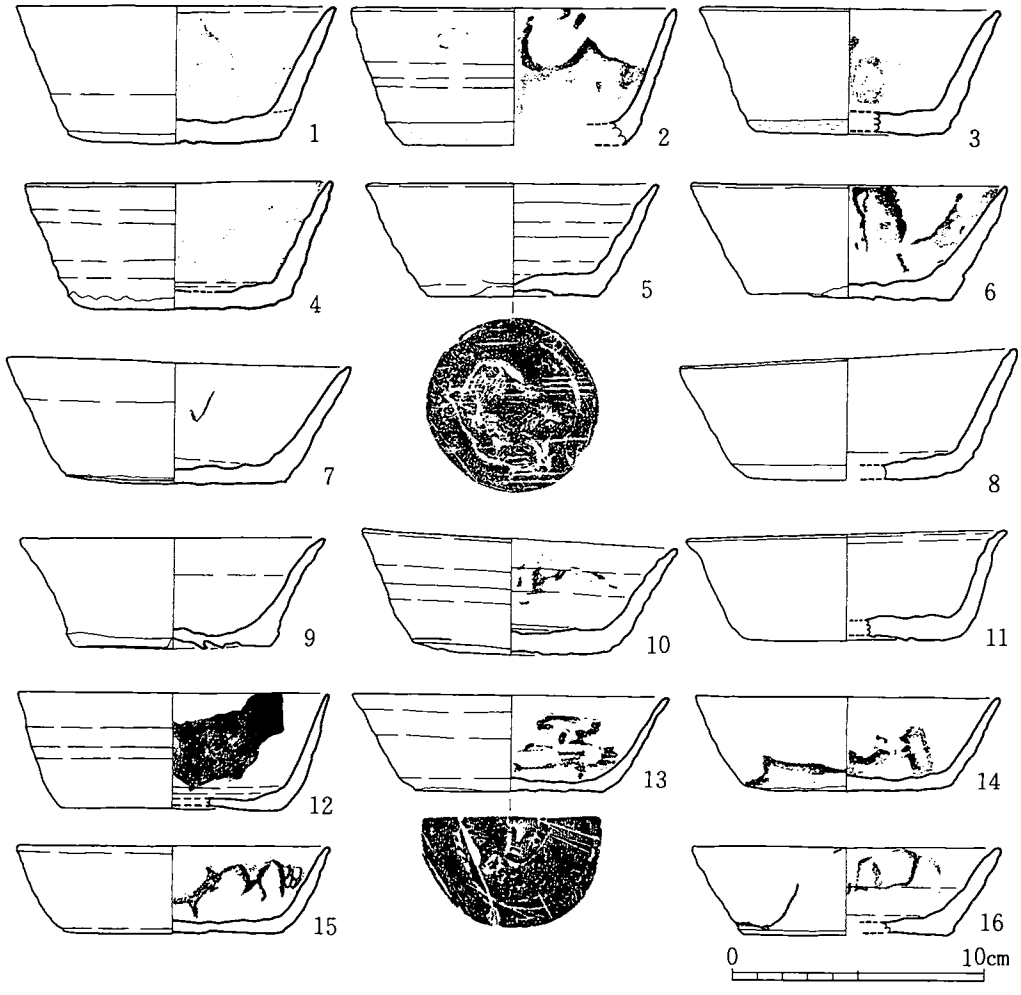
第62図　土師器実測図

尖る。13～16は器高約3.5～3.8cmで低い。13～15は器壁が薄く口縁端部が尖る。16は器壁は厚く口縁端部は丸い。14は内底部周囲を指で丸くナデられており、15は不定方向のナデが施されている。５・８・９・11を除いてススが付着している。

Ｄ－Ⅳ類（第64図１～10）

口径、底径、器高ともかなりばらつきがあるが、体部が内弯気味で丸い。内底部はすべて不定方向のナデで調整されている。

１は口径約15.2cm、底径約7.7cm、器高約6.8cm、２は口径約15.7cm、底径約6.7cm、器高約6.4cmで大型である。ともに胎土も焼成も良好である。外器面は広くヘラ削りされ、そののち丁寧にナデて仕上げられている。２は上げ底で底部と体部との境付近が厚く膨らんでいる。



第63図　土師器実測図

3～5は口径約13.0～14.0cm、器高が5.0cm前後とやや高い。3・4は底径が小さくやや上げ底気味で、体部は丸く、大きく外に開いている。4はヘラ削りののちナデられている。5は底部に比して体部は薄く、口縁端はわずかに膨らむ。

6～9は器高がやや低い。6・7は器壁が厚く、体部は口縁近くで再度外に開く。8は器壁が薄く、体部は大きく開く。

10は器高約3cmと低いものである。底部に比して体部は厚く、特に底部と体部の境目付近が厚い。

1・2・4～6・9・10にはススが付着している。

D－V類（第64図11～19）

形態的にはⅠ～Ⅲ類に分けることも可能であるが、調整上同じグループであると考えられる。

調整上の大きな特徴は、器壁がやや薄めで、ロクロによるナデの痕跡が特に顕著である点にある。そのため、特に外器面は凸凹がはげしい。11～17と18・19は焼成、色調が全く異なる。

11・12・14の底部は丸底気味で厚く、口縁部は尖り、大きく外反している。内底部はナデ調整である。11・12はヘラ削りが施されている。13・15の底部は薄く体部がやや丸味を帯び、口径に比して底径がやや小さい。内底部はナデられている。13はヘラ削りが施される。16は底部が厚く、ヘラ削りされ、内底部の調整はナデである。17はやや大型であり、体部は直立気味で、底部が欠損しているため、内底部の調整はよくわからない。

18・19は、11～17に比してやや小型である。器高も低く、口縁部がやや外反しており、内底部は、中央を指でおさえた後に、回転ナデが施されている。緑がかった淡褐色を呈し、須恵質である。

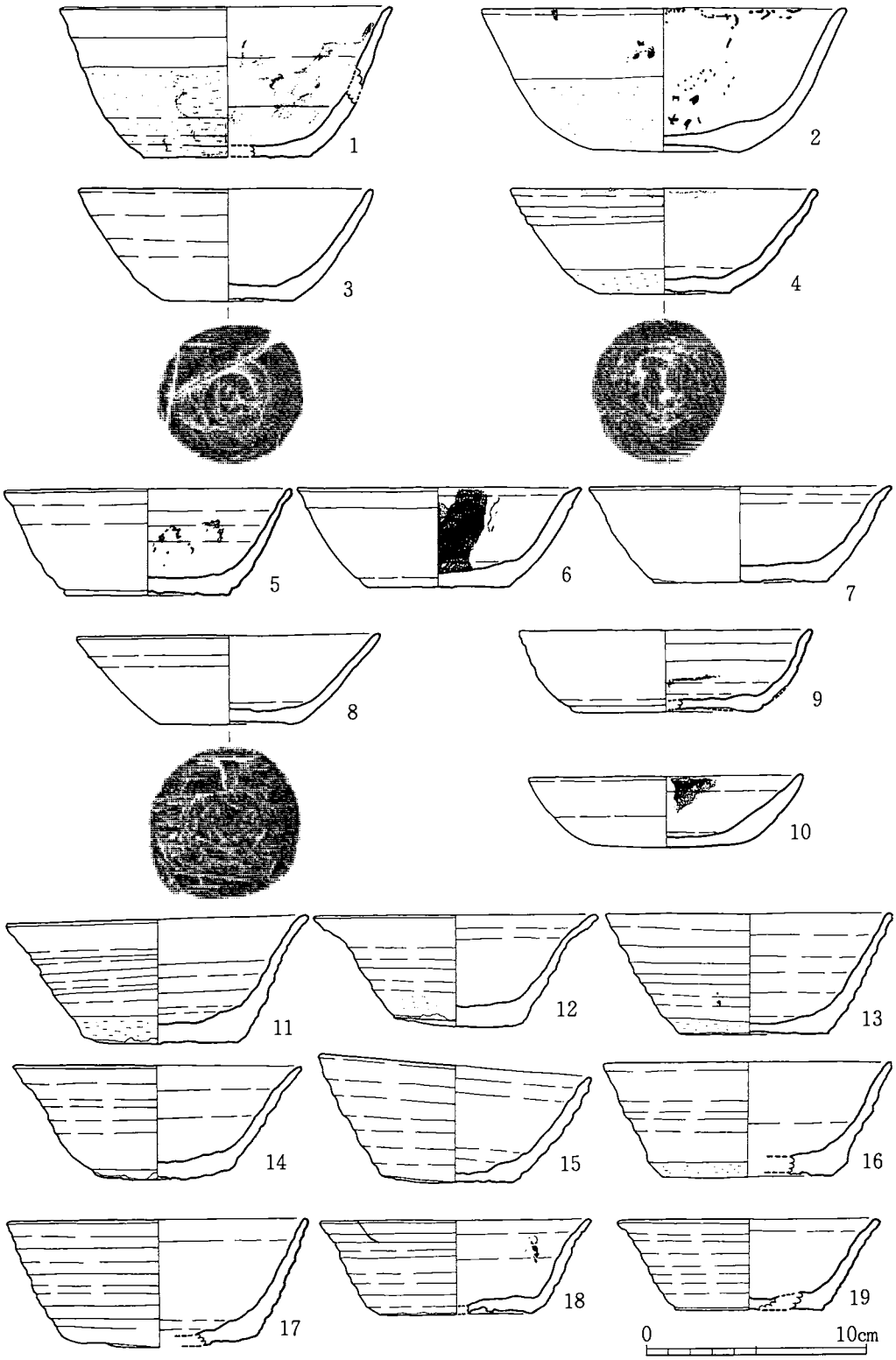
11・13・14・16・18にはススの付着が認められる。また、18の外器面には、口縁部から墨汁の流れたような痕跡がある。

E－Ⅰ類

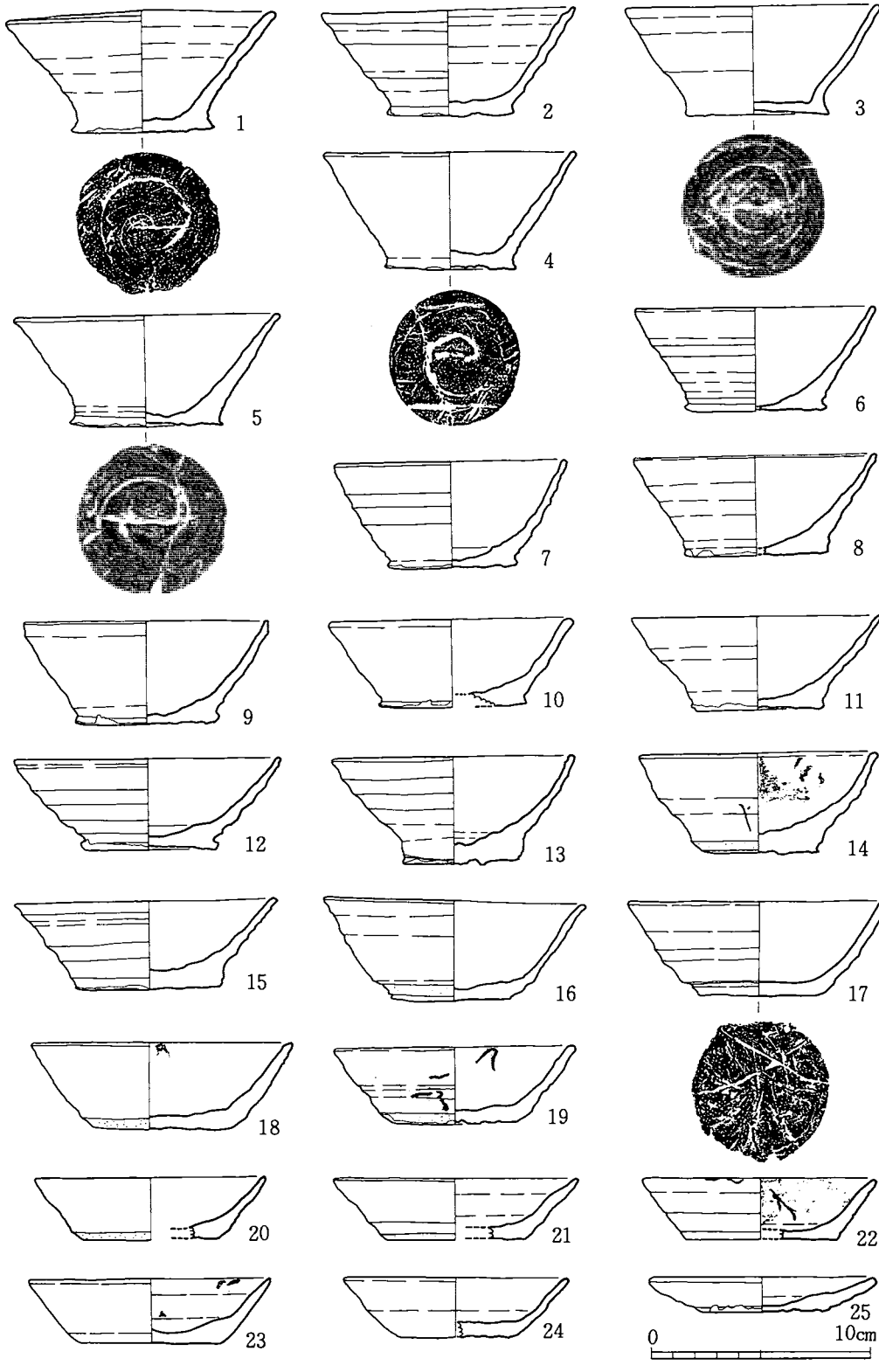
E－Ⅰ類は、器形・調整等により、a～cに細分した。

E－Ⅰ類－a（第65図1～5）

口径12cm前後、底径約6.0～7.0cm、器高5.0cm前後であり、E－Ⅰ類の中では器高が高いグループである。体部は外へ直線的に開き、口縁端部は丸い。底部と体部の境目がやや厚くなり、体部の接地面は裾広がりになっている。胎土は良く、焼成もかなり良い。ヘラ削りは行われず、ススも認められない。内底部の調整はまちまちで、1は不定方向のナデ、2・4はヘラ状のものによる渦巻状ナデ、3は内底部周囲を丸くナデ、5は回転ナデのみである。1・4はヘラ記号❗を有する。



第64図　土師器実測図



第65図　土師器実測図

Ｅ－Ⅰ類－ｂ（第65図６～15）

口径、底径にはややばらつきがあるが、器高は、約4.0～4.8cmであり、Ｅ－Ⅰ類の中ではＥ－Ⅰ類－ａに次ぐ高いグループである。体部は若干の丸味を持ち、内底部と内体部との境がない。底部と体部の境目は厚く、粘土が外に広がり出ており、底部中央が極端に薄いもの（６～９・11・12）と、極端に厚いもの（10・13～15）がある。胎土に赤色粒が混じるもの（７～９・11・12・15）が多い。９・13の外底はヘラ切りのままで、底部の製作痕が明瞭に観察できる。14のみヘラ削りが認められる。内底部の調整は、６～12はナデである。８は中心から外へ放射状にナデられている。13・14は底部全体をヘラ先状のもので渦巻状にナデており、15は回転ナデのみである。10・14はススが付着している。

Ｅ－Ⅰ類－ｃ（第65図16～25）

口径、底径ともややばらつきがある。器高により三つに細分できる。

16・17は口径12.0cm前後、器高4.5cm前後でＥ－Ⅰ類－ｂのうちの低いものと同じ位の高さである。ヘラ削りを施し、内底部はナデられている。17は内底部中心から外へ放射状にナデた跡が見られる。

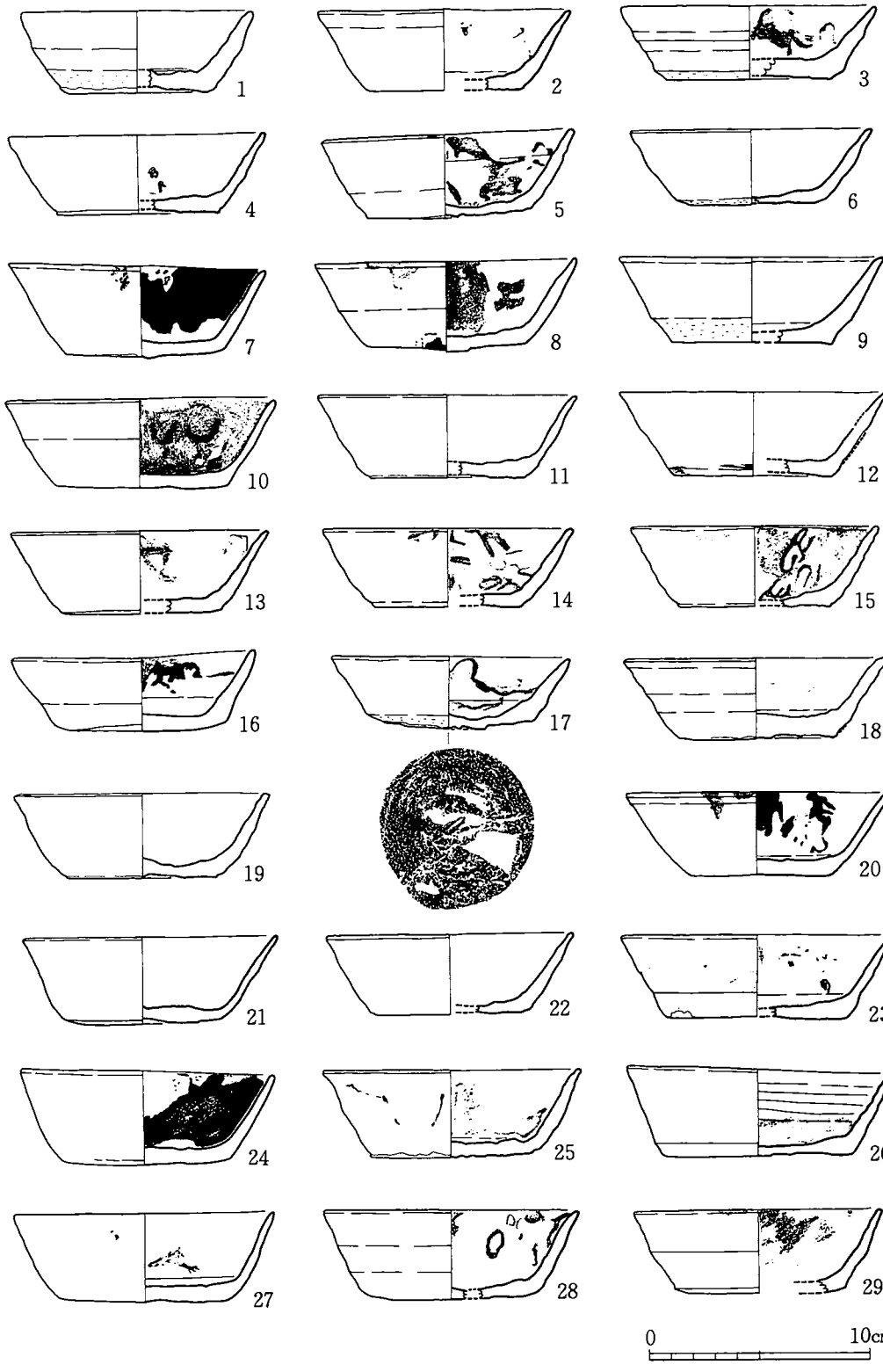
18・19は器高約3.5～4.0cm。ヘラ削りされており、内底部は中央部のみナデられている。ススが付着している。

20～24は器高は３cm程度で低い。20・21はヘラ削りされ、内底部はナデ調整である。焼成は良好である。23は内底部の中央を不定方向にナデ、周囲を丸くナデており、24は内底部全体を外から内に渦巻状に強くナデている。23・24はススが付着している。

25は器高は約1.6cmであり、特に低い。外底部はヘラ切りのままで、底部は薄く、底部と体部の境が膨れ、体部は厚い。内底部はナデ調整されている。

Ｅ－Ⅱ類（第66図１～23）

口径約11.0～12.0cm、底径７.0cm前後で器高約3.5～4.0cmである。10のみ口径約12.5cm、底径約8.0cmとやや大きめである。器壁がやや厚目のもの（１・３・９・18）と薄いもの（４・10・11・13・20・21・23）がある。１・10は口縁端部が丸く、他のものは細いか尖っている。１・３・６・９・17はヘラ削りが施されている。１は内底部全体を指先かヘラ先で渦巻状にナデている。２は内底部の周囲を丸くナデており、３・４は周囲を丸くナデるのとは別に、中央部分もナデられている。５～８・10～12・15～18は内底部にナデが施され、19～23は回転ナデのみである。16・17はやや低く、底部は外に膨らみ気味で、すわりが不安定である。17は底部と体部の境が厚くなっている。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm

第66図　土師器実測図

１・６・９・11・12・19を除き、ススが付着している。

Ｅ－Ⅲ類（第66図24～29）

口径12.0cm前後、底径８.0cm前後、器高約４.0cmである。Ｅ－Ⅱ類に比すと若干器高は高めである。

26は底部が薄く、口縁端部が尖っている。他のものは底部は厚目で口縁端部は丸い。ヘラ削りのされているものはない。内底部の調整は24～28はナデである。29は底部が欠損しているため、調整はわからない。

すべてススが付着している。

Ｆ－Ⅰ類（第67図）

口径約9.5～10.5cm、底径約５.0～６.0cm、器高約3.0～4.0cmのものである。底部と体部の厚さはバランスが取れており、口縁端部は丸い。

２・５を除き、すべてヘラ削りが施されている。１は底部全体が力強く渦巻状にナデられており、ナデの両端の断面は稜をなしている。２は内底部中央から口縁端部までロクロを用いてナデられている。３～５は内底部中央が指先かヘラを用いて外から内に一周半ほど強く深く渦巻状にナデられている。４はヘラ記号 ! を有す。６～８は内底部の調整は３～５と似ているが、ヘラの幅が広い。８は底部と体部の境が厚くなっており、大きくかたむいたいびつな形態である。９は内底部から口縁端部までロクロを用いてナデ上げたあと、内底中心部のみ軽くおさえた痕がある。10～14はやや上げ底で内底部はナデ調整である。11～13は体部のヘラ削りされた部分と、されない部分との間が凹んでいる。15はやや上げ底となると思われるが、底部が欠損しているため明確ではない。16の内底は回転ナデ調整のみである。13～16は丹を塗った痕跡があり、部分的に赤褐色を呈している。

１・８・９・12・15を除き、ススが付着している。

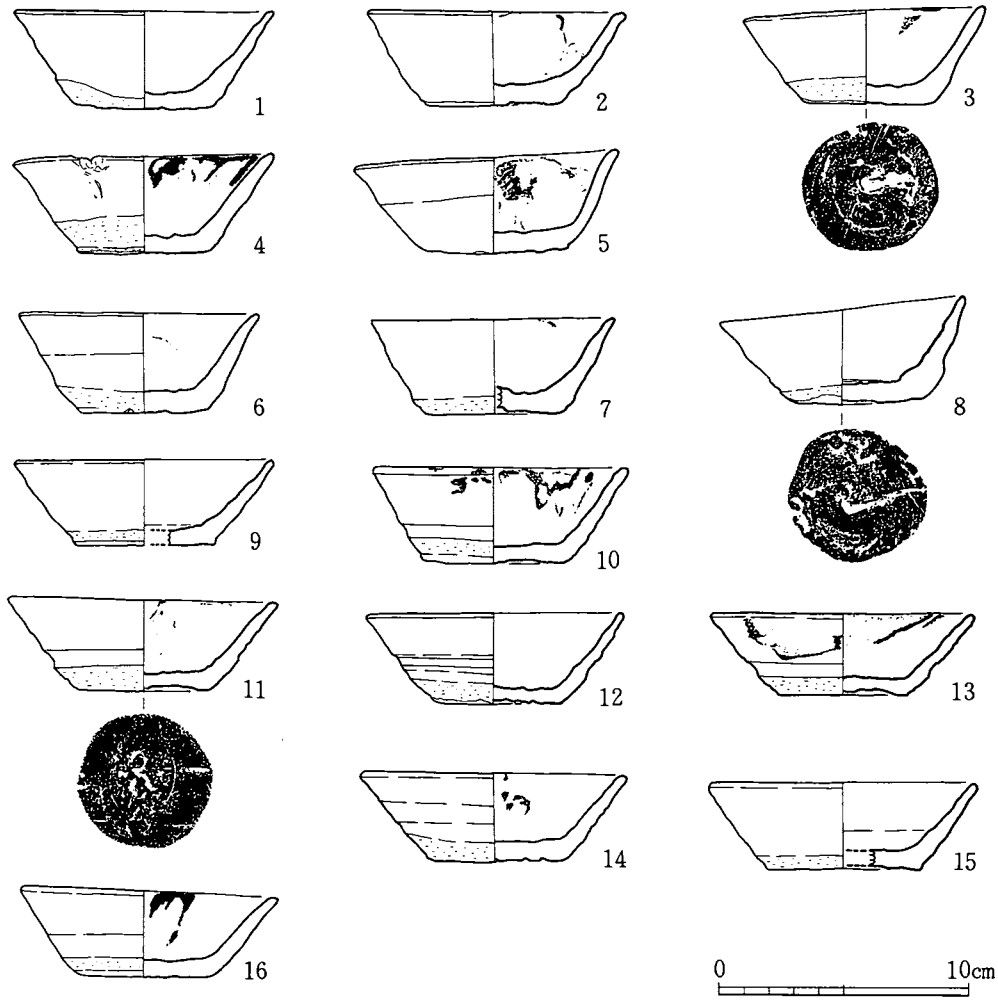
Ｆ－Ⅱ類

Ｆ－Ⅱ類はａ・ｂに細分した。

Ｆ－Ⅱ類－ａ（第68図、第69図１・２）

口径約9.5～10.5cm、底径約5.5～6.5cm、器高約3.0～4.0cmのものである。第68図１・25は器高が約4.2cmとやや高く、８・９・18・21・22はやや低い。器形にはかなりバリエーションが見られる。底部が厚いもの（２・３・４・10・18・25)、底部も体部も厚いもの（１・５・６・７・８・９)、底部と体部の境が厚いもの（12・14・17・21・22・24・26）がある。

３・22・23・第68図２を除きヘラ削りが施される。



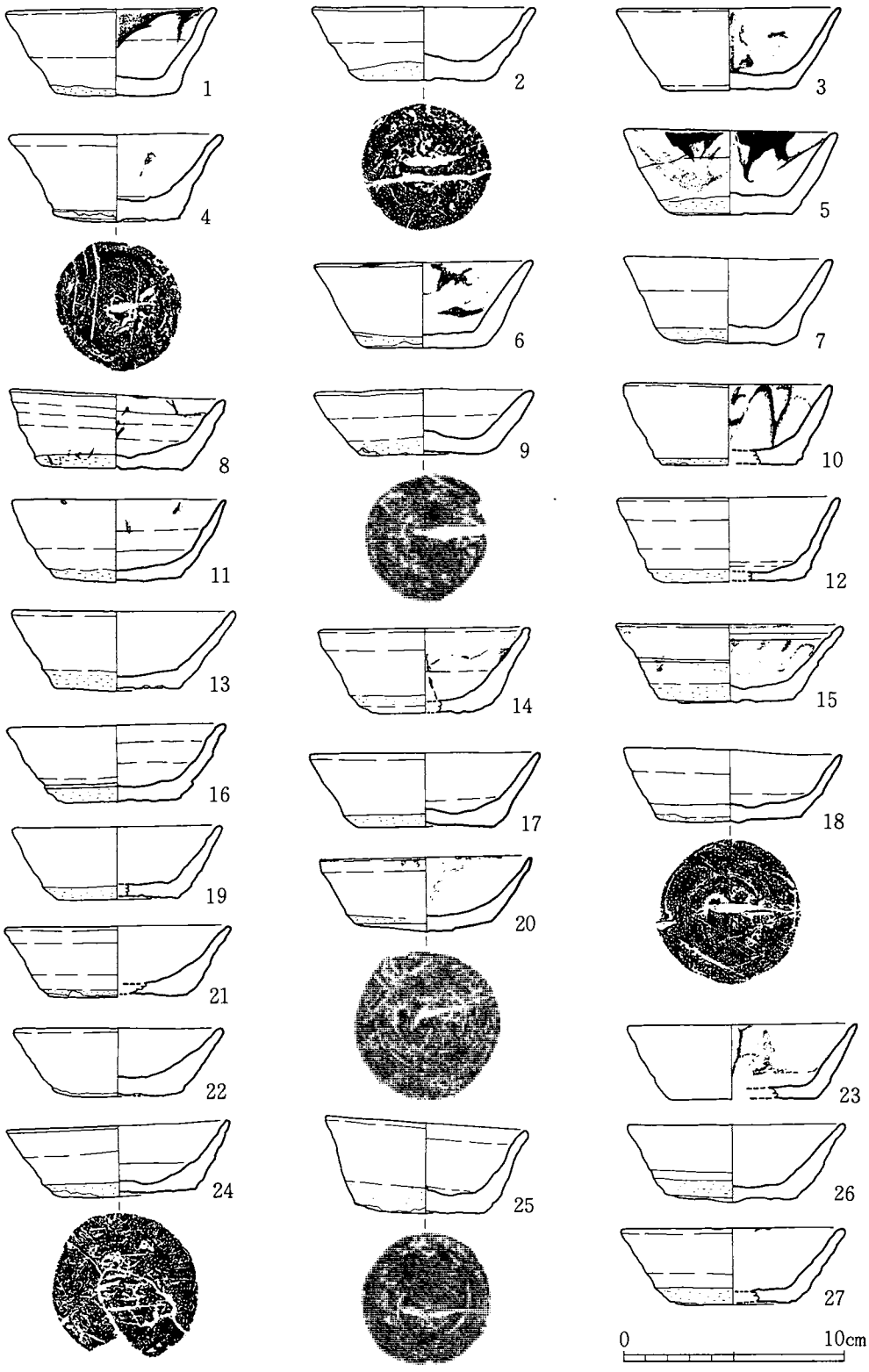
第67図　土師器実測図

第68図１～３は内底部中央から口縁端部まで、ロクロを用いてナデ上げられている。１は丹塗りの痕跡がある。４は、内底部中央をヘラ先状のもので外から内に一周半ほど強く深くナデている。ナデの断面の両端は稜となっている。５・６は内底部全体が渦巻状に強くナデられている。７～９は内底部の周辺を指で丸くナデており、12～24は内底部を不定方向にナデている。12・13は底部のみ丹を塗った痕が残る。20・22は底部中央がやや外に膨らんでいる。25・26・第69図１・２は内底部は回転ナデである。第69図１・２はそののち中央部のみナデを施している。

第68図２・４・９・17・18・20・25にはヘラ記号↑が認められる。第68図１・８・９・12・15・第69図１を除きススが付着している。

Ｆ－Ⅱ類－ｂ（第69図３～７）

口径10.0cm前後、底径にはややばらつきがあり、器高は3.5cm前後のものである。形態にはバ


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

第68図　土師器実測図

ラエティーがみられるが、外底部から粘土がやや外に広がり、体部は丸味を持ち、体部下方がやや膨らみ、口縁端部が丸く膨らむ等、製作上の共通点がある。

3はヘラ削りをされた可能性があるが、4～7はヘラ削りされていない。3・4・6の内底部は回転ナデの後に中央部のみを横ナデしている。5は回転ナデのみであり、底部はヘラ切り未調整である。7は内底部中央を渦巻状にナデたと思われる。

4～7にはススが付着している。

F－Ⅲ類

F－Ⅲ類はa・bに細分した。

F－Ⅲ類－a（第69図8～18）

口径約10cm前後、底径約6.5～7.5cm、器高は4.0cm前後のもの（8～15）と3.0cm前後のもの（16～18）がある。形態的な特徴は以下である。9・11・12は口縁がやや大きく外に開くが、他のものは体部は直立気味である。内面は丸くなり、体部と底部の境が明瞭でない。底部は中央が尖り気味で不安定なすわりをしている。器壁は全体的に厚く、中でも底部と体部の境は最も厚く、底部から口縁部に向かい器壁は次第に薄くなり、口縁端部が尖る。

8～12・18はヘラ削りが施されている。内底部の調整は不定方向のナデである。12は内底部の中心から外へ放射状にナデられている。

10～12・14～18にはススが付着している。

F－Ⅲ類－b（第69図19・20）

口径10.0cm前後、底径7.0cm前後、器高約2.8～2.9cmと低い。器壁は厚く、口縁端部は丸い。ヘラ削りが施され、内底部の調整は回転ナデであると思われる。破片であるが、残存部分にはススの付着は認められない。

F－Ⅳ類

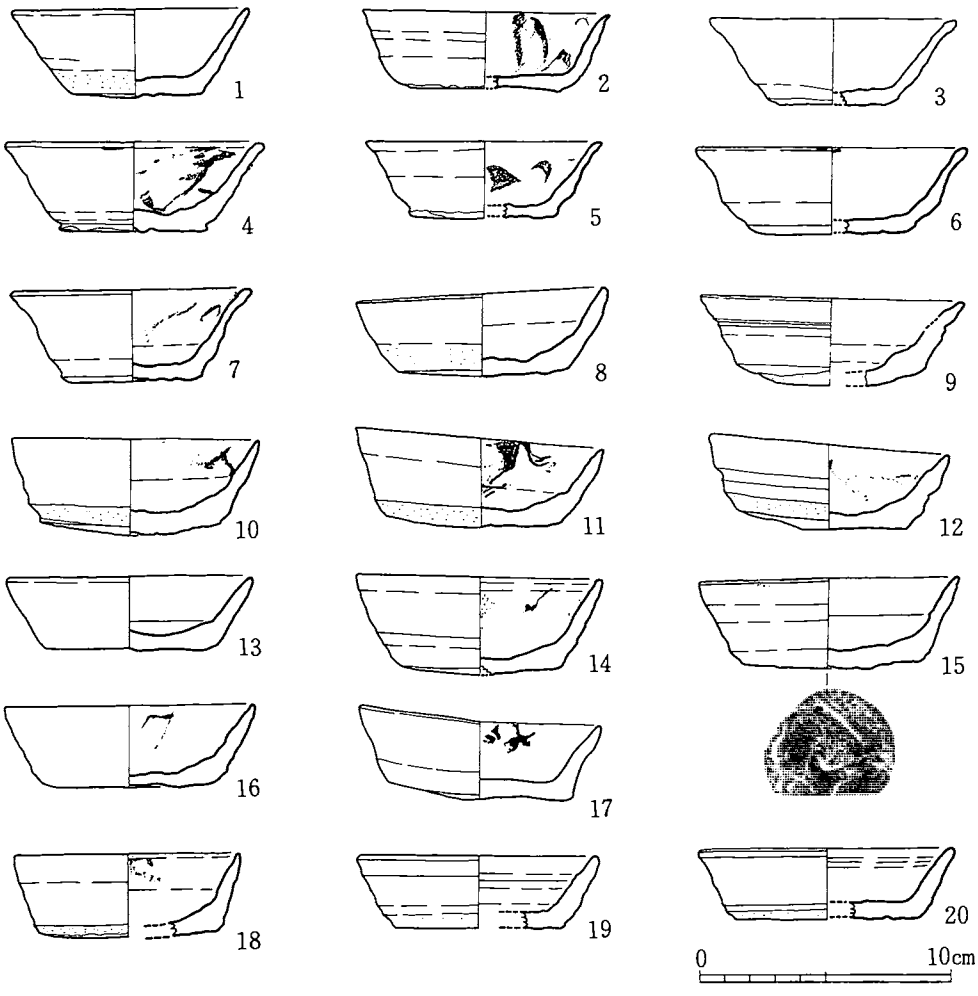
F－Ⅳ類はa・bに細分した。

F－Ⅳ類－a（第70図1～13）

口径約10.4～11.0cm、底径約5.5～6.5cm、器高3.0cm前後のものである。口径からいえば、E類とF類の境にあたる数値である。

5・13は底径が約7.0cmを越える。底部はやや上げ底気味で厚く、粘土が外側に広がっている。体部は低く丸味を持ち、外へ広がり、口縁端部は丸い。内面は底部と体部の境がない。ヘラ削りはされない。

1は外体部最下部から、内底隅に向かって焼成前の段階で穿孔されている。4～9・13は底



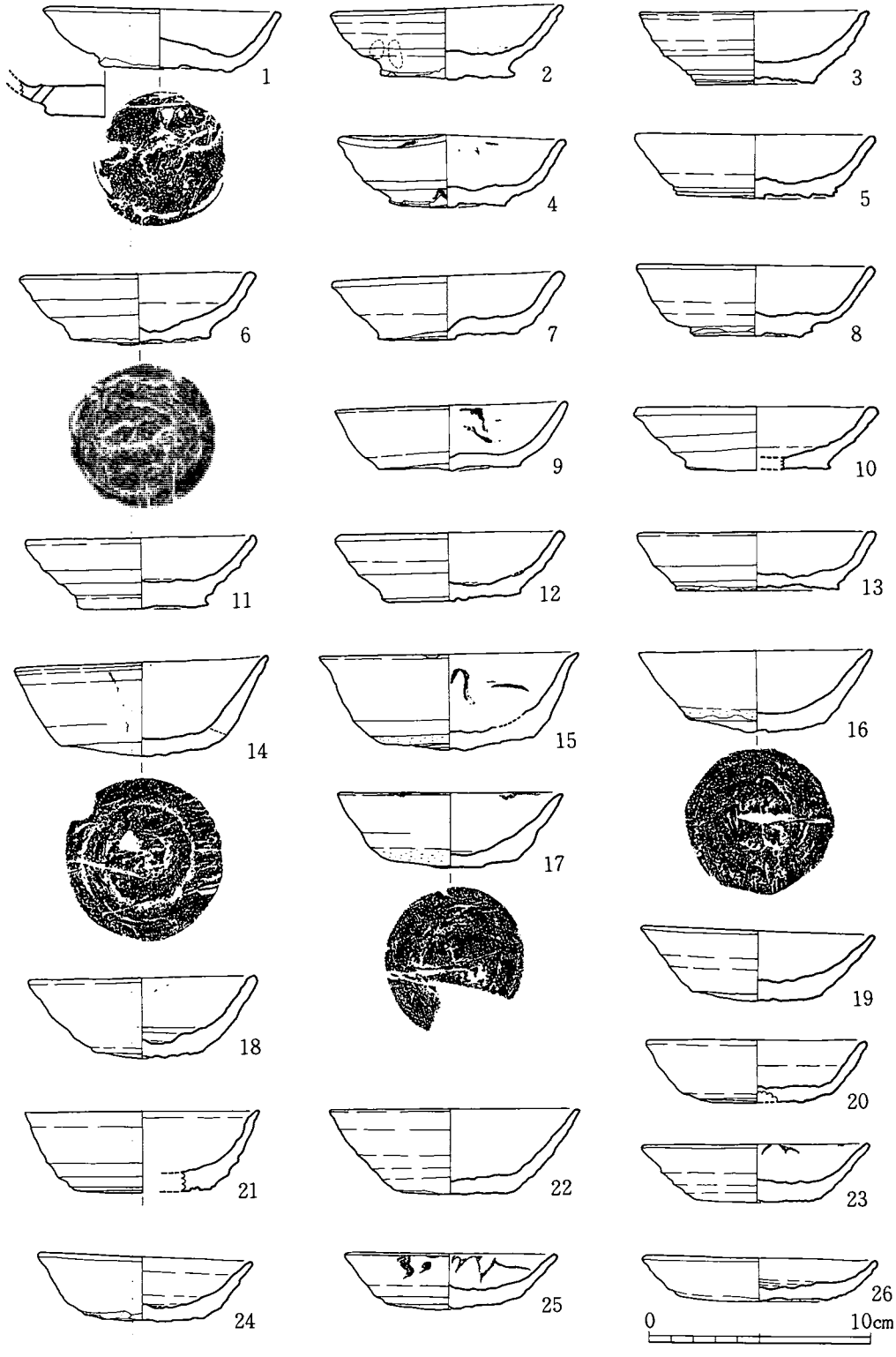
第69図　土師器実測図

部はヘラ切りされたままで、底部の製作痕が渦状に観察される。１～７は内底部中央から口縁部までロクロを用いてナデ上げたのち、内底部中央のみ、若干の指先による調整が加えられている。７は内底部中央が大きく凹んでいる。８・９は内底部の周辺を丸くナデている。10は内底部から口縁までロクロによってナデ上げた細い線状の調整痕が大きな渦巻状に残っている。11～13は内底部の中央をヘラ先で外から内に一周半ほど力強く深くナデている。

２・４・９にはススの付着が見られる。

Ｆ－Ⅳ類－ｂ（第70図14～26）

Ｆ類の中でⅠ～Ⅲ類にはうまく分類できないタイプである。14・15・22は大型で、法量から言えばＥ類に分類すべきものであるが、Ｅ類にはⅣというタイプがないため、ここにまとめている。



第70図　土師器実測図

14は底部が外に膨らんでいる。15は底部がやや尖り、口縁部は外反している。ヘラ削りが施されている。14・15の内底部の調整はナデであり、ススが付着している。16・17・19は口径10.5cm前後、底径約6.0～6.5cm、器高3.5cm前後である。底部は尖り気味で、底部と体部の境が明瞭でなく、また厚い。口縁は大きく外へ開き、口縁端部は尖る。ヘラ削りされている。16・17の内底部はナデ調整されている。16はヘラ記号↑を持つ。18も底部は尖り気味で体部は丸い。18～20は内底部全体を渦巻状に深く強くナデている。21・22は体部が丸く、21は底部が厚い。ともに内底部はナデによる調整である。23～25は器高約2.5～3.0cmと低い。ヘラ削りが施され底部は厚い。24は内底部全体が渦巻状にナデられている。25は内底部から口縁部までロクロを用いてナデられており、ナデの際の調整痕であろう細い凹線が内底部に渦巻状に見られる。26は器高約２.0cmと更に低い。やや上げ底気味で内底部はロクロを用いてナデた後、中央部のみ横ナデしている。

14・15・17・19・20・23・25にはススが付着している。

G－Ⅰ類（第71図）

小型である11・14を除けば、口径約8.5～9.5cm、底径約4.0～5.0cm。器高によって三つのグループに細分できる。体部は外へ大きく開き、口縁部へ近づくにつれて薄くなる。

１～４は器高約４.0cmと高いものである。底部が厚い。ヘラ削りが施され内底部中央から口縁部までロクロを用いてナデ上げてある。

５～10は器高約3.0～3.5cmである。底部の厚いもの（６・９）と底部は薄く、底部と体部の厚いもの（５・８・10）がある。10を除いてヘラ削りされ、６～８はヘラ記号↑を有す。５～８・10は内底部から口縁部までロクロによるナデの際の渦巻状の細い調整痕が認められ、10はナデの後に中心部のみ軽く調整されている。

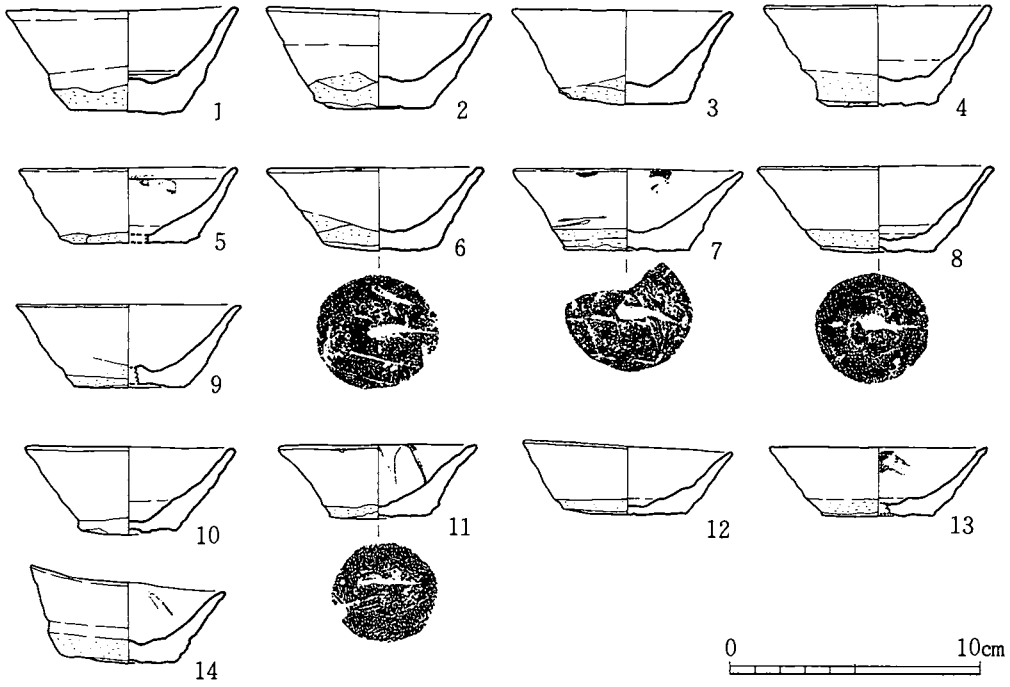
11～13は器高が約３.0cm以下の低いものである。ヘラ削りがされ、内底部から口縁部までロクロを用いてナデ上げてある。11は小型で渦巻状の細い調整痕が残り、12・13はナデの後中心部のみ軽い調整が施されている。12・13はヘラ記号↑を持つ。

14は小型で比較的器高が高い。底部は厚く、ヘラ削りが施される。内底部は口縁部までロクロで一気にナデたあと、内底部中心のみ軽くナデてある。

５～７・11・13・14にはススが付着している。

G－Ⅱ類（第72図～第75図）

G－Ⅱ類は、G類の中からG－Ⅰ類・Ⅲ類・Ⅳ類を除いたもので、器形から言えばいわばG－Ⅰ類とG－Ⅲ類の中間タイプである。しかし、法量（第９表）を見ればかなりのばらつきがあり、器形にもいくつものバリエーションが見られ、調整法も様々である。器壁、特に底部が厚



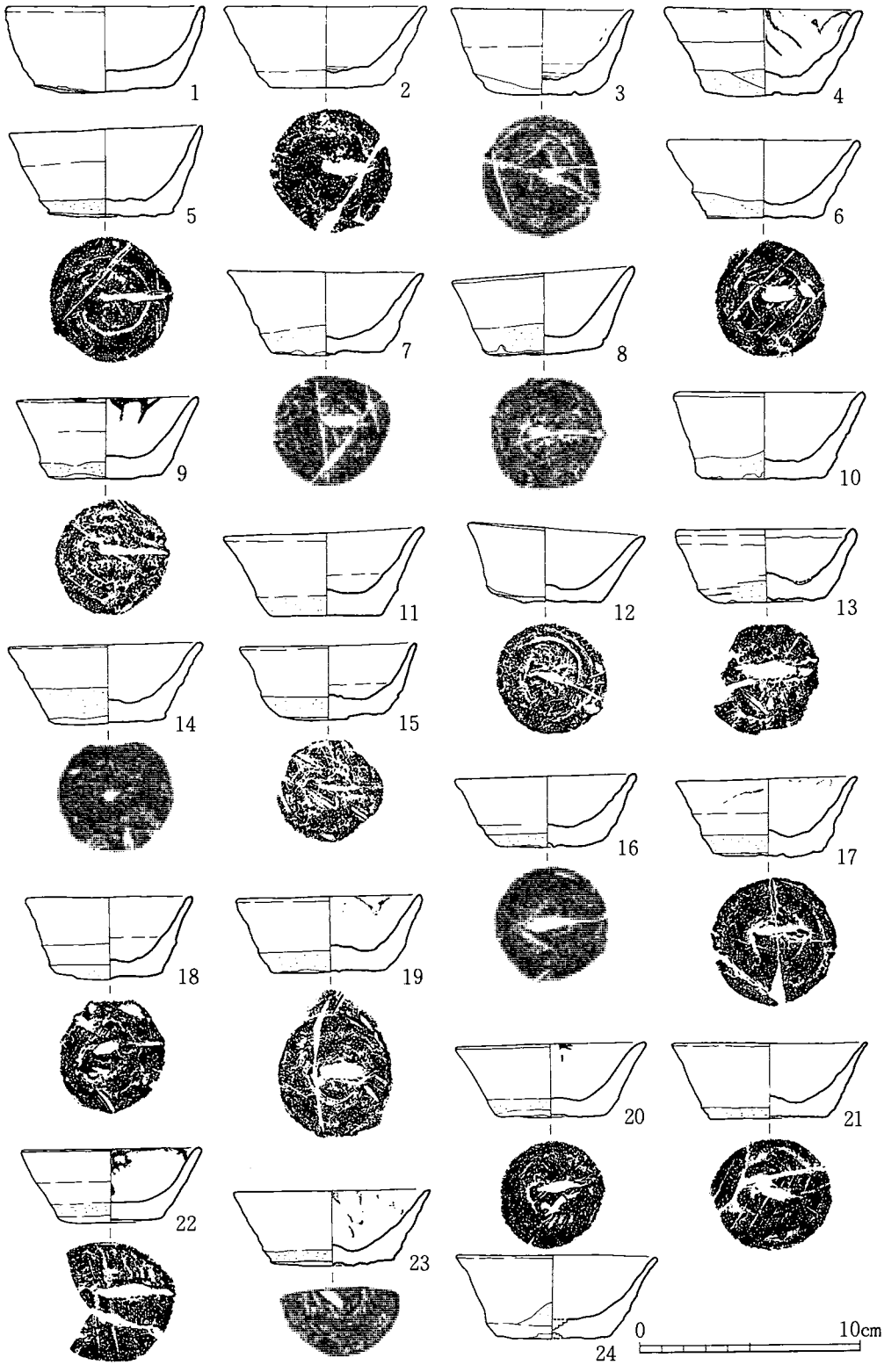
第71図　土師器実測図

目で、ほとんどがヘラ削りを施されており、胎土、焼成も総じて良好とは言えず、底部はほとんど平底である等いくつかの共通点もあるが、１つの指標のもとにくくるのはむずかしいグループである。よって、このＧ－Ⅱ類の中でより細分できる可能性もあるが、あえて細分せず、ひとつの目安として、内底部の調整に注目してみることにした。

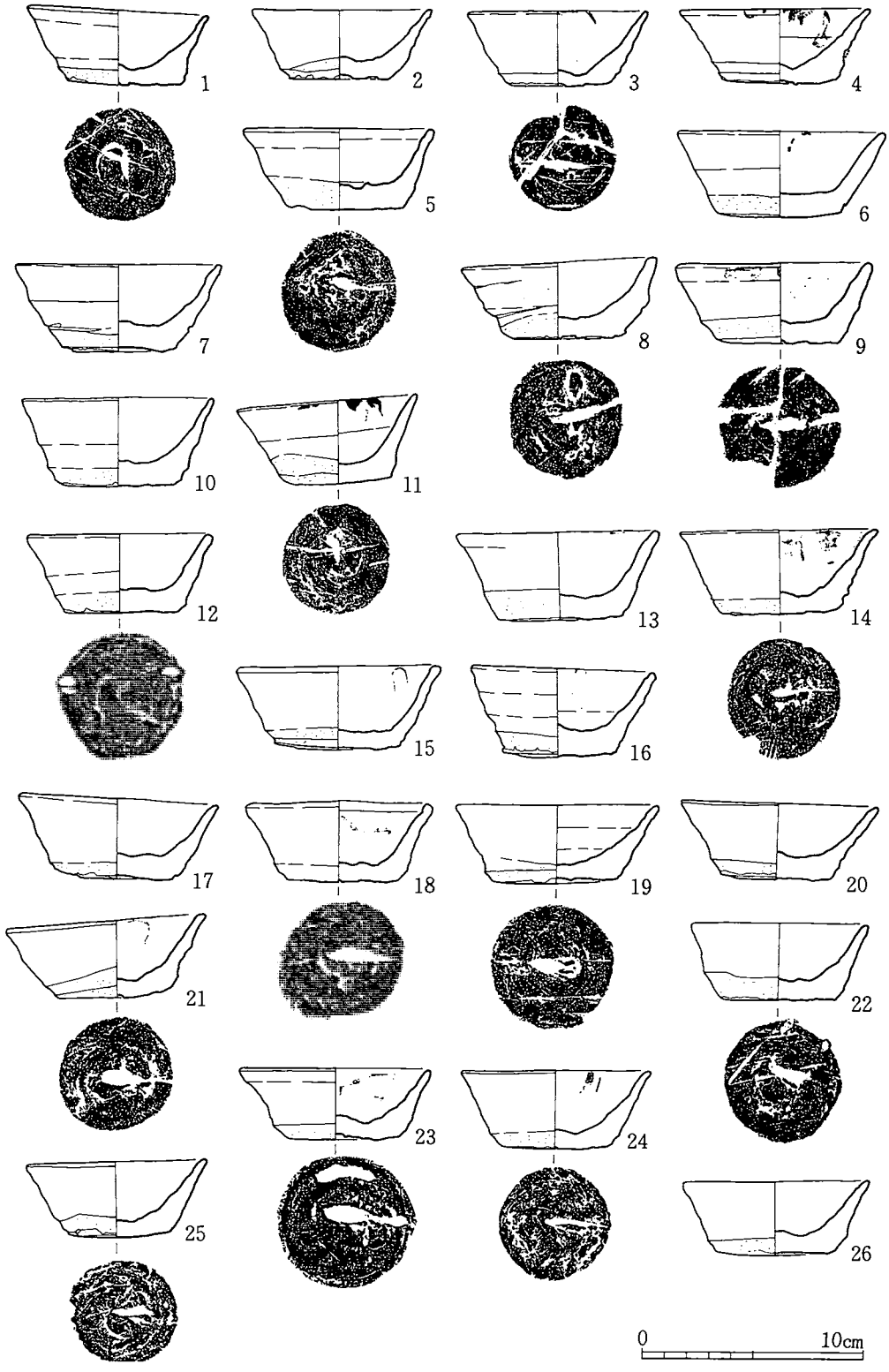
第72図１は内底部の調整はナデである。器高は高く体部はやや丸み味を帯びており、ヘラ削りは施されない。

第72図２～24、第73図１～４は、内底部中心から口縁端までロクロを使用して一気にナデ上げているものである。ナデの際の渦巻状の細い調整痕の残るもの（第72図２・３・６・12・19、第73図１・２）もある。ヘラ記号↑あるいはそれに類するものを持つものが多く、半数はススが付着している。口縁部の丸いもの（第72図２～20）と尖るもの（第72図21～24、第73図１～４）がある。第72図22、第73図４はヘラ削りされていない。

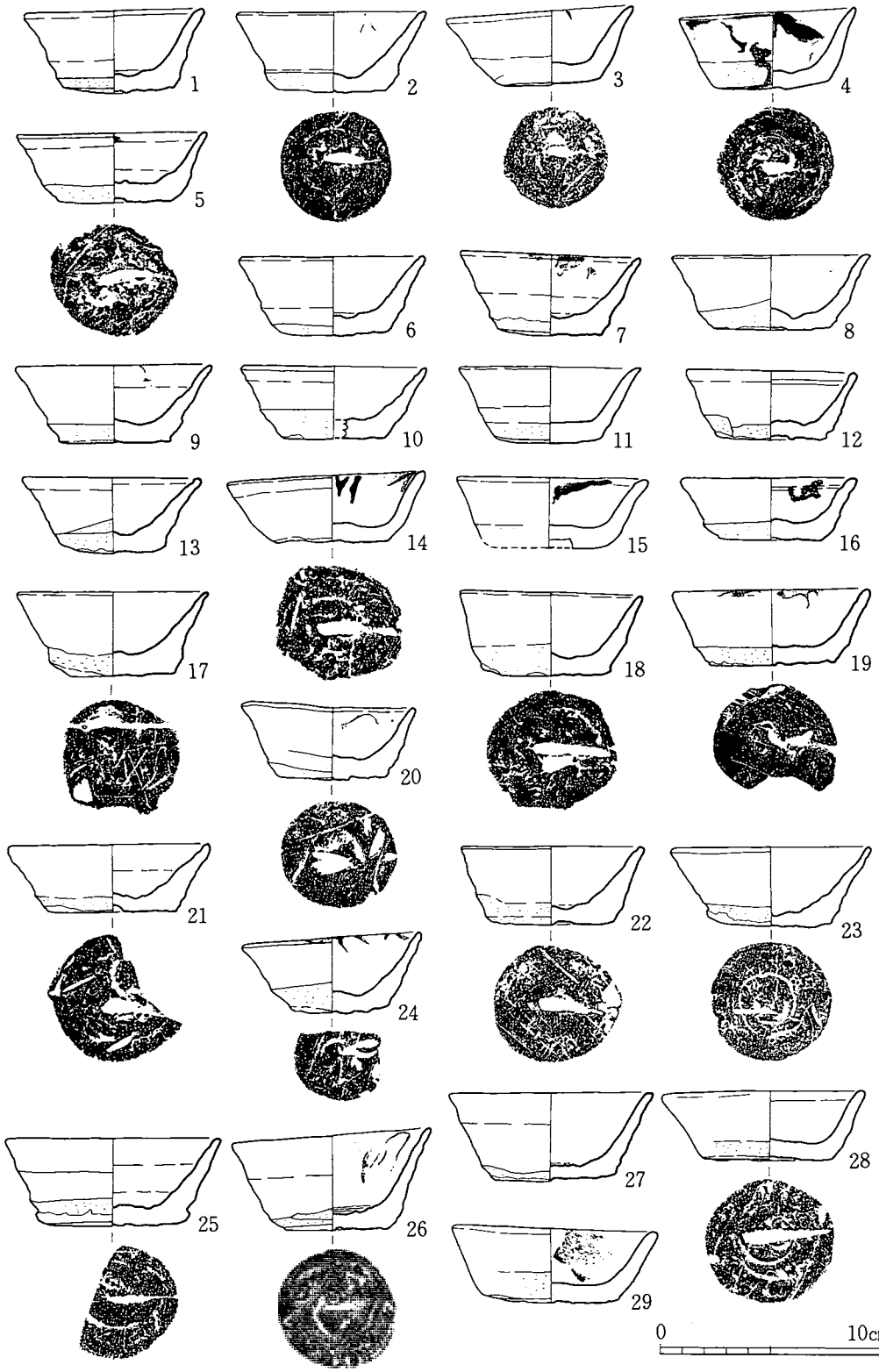
第73図５～26、第74図１～18は、内底部中心から口縁部までナデ上げた後、中央部のみ様々の軽い調整を施しているものである。第73図６・８・９は特に器壁が厚い。口縁部に向かい器壁は次第に薄くなっているが、口縁端が殊に尖っているものはない。若干器高の低いもの（第73図23、第74図５・10・12・14～16）がある。第74図13は丹が塗られた痕跡があり、部分的に赤褐色を呈している。ヘラ記号↑あるいはそれに類するものを持つものが多く、半数以上はススの付着がみられる。



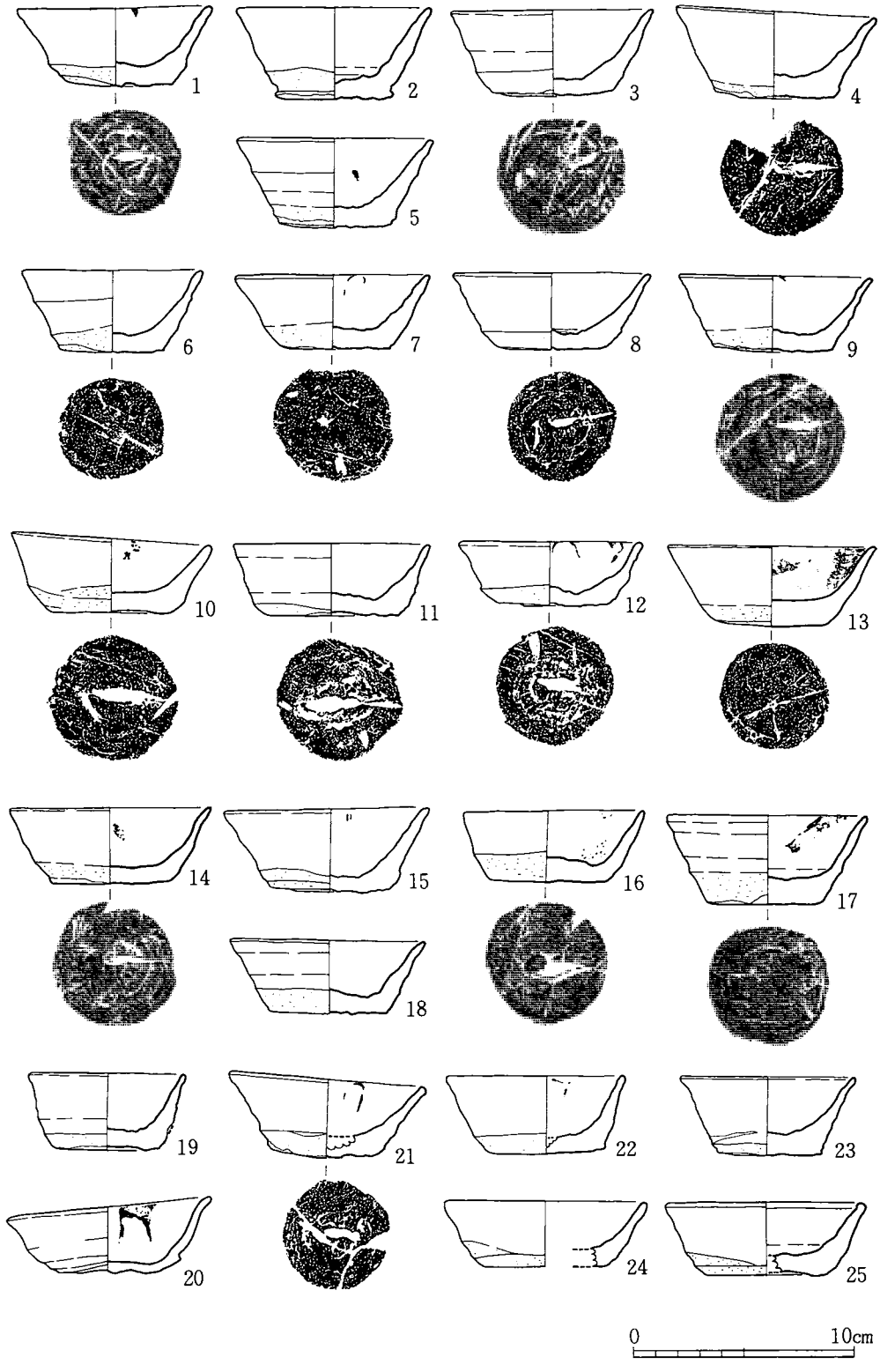
第72図　土師器実測図



第73図　土師器実測図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm

第74図　土師器実測図



第75図　土師器実測図

第74図19～24は、内底部の外周を丸くナデているものである。21には内底部中央のみナデも見られる。ヘラ記号❢）の類を有するもの４点、ススの付着しているもの２点である。

第74図25～29は、内底部全体を指先かヘラ先で渦巻状に強くナデているものである。口径はすべて約９.0cmを越え、G類の中では大型である。25～27は器高も高く、28～29は低い。25～28はヘラ記号❢あるいはそれに類するものを有する。26・29にはススが付着している。

第75図１～15は、内底部中央のみ指先かヘラ先で一周半ほど強く深く渦巻状にナデているものである。渦の両端の断面は稜をなしている。器高のやや高いもの（２～６・15）やや低いもの（７～14）がある。ヘラ記号❢の類を持つもの、ススの付着しているもの、共に多い。

第75図16～18は、内底部の調整はロクロを用いたナデのみである。17・18はやや大型で17は器高も高い。16は低い。16・18はヘラ記号❢に類するものを持ち、16・17はススが付着している。

第75図19は極小型で、内底部は外周を丸くナデられている。底部は上げ底で、ヘラ削りは施されていない。

第75図20は器壁が薄く、口縁が外反する。ヘラ削りは施されず、内底部全体が渦巻状にナデられている。他のG－II類とは形態的に異なっている。

第75図21～25は底部の欠損その他により、内底部の調整の分からないものである。すべてG－II類のバリエーションの中に含まれると思われる。

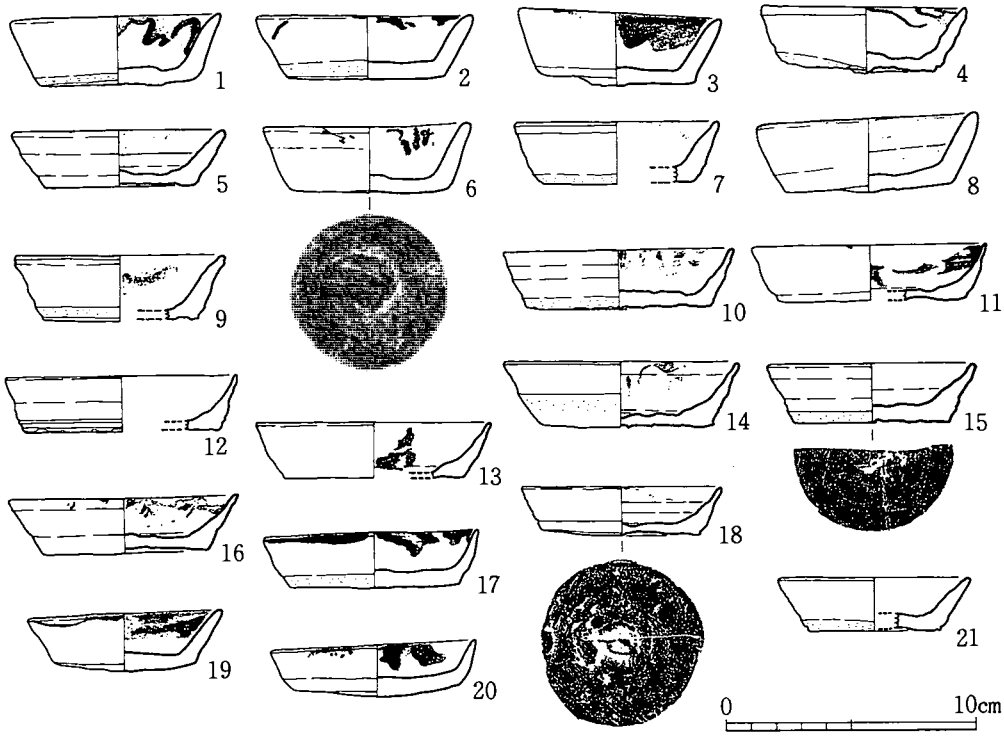
G－III類（第76図）

G類の中では器高が特に低いグループである、体部は直立気味である。１～９は口径約8.0～8.5cm、底径約6.0～6.5cm、器高約2.5～3.0cmであり、器壁が厚く、口縁端は丸い。ヘラ削りされたもの（１・２・４・９）とヘラ削りされないもの（３・５・６）がある。３・４・８は外底部中央が渦巻状に外から内へ一周半程強くナデられている。３・６・８は内底部中央から口縁部までナデ上げており、３はその後に中心部のみ軽くナデている。４・５は内底部はナデ調整されており、５は中心から外へ放射状にナデられている。６・８は内底部をロクロを用いてナデている。４は丹を塗られた痕がある。

10～17は口径約8.5～9.5cm、底径約6.5～7.5cm、器高約２.0～2.5cmでやや口が広く、より低い。底部はやや薄く、底部と体部の境が厚くなっており、口縁端部はごく薄い。16はやや上げ底である。10・14・15・17はヘラ削りが施され、内底部はロクロを用いたナデで調整されている。15はヘラ記号❢を有す。

18～21は小型である。18はやや上げ底である。19・20は底部がやや尖っている。18は10～17グループを、19～21は1～９グループを更に小型にしたものと思われる。

12・15・21を除きススが付着している。



第76図　土師器実測図

G－Ⅳ類

G－Ⅳ類はａ・ｂに細分した。

G－Ⅳ類－ａ（第77図１～20・22・23）

口径・底径・器高はG類の範疇でまちまちである。22・23は小型である。口径に比して底径は小さく、体部は丸味を持ち、体部は大きく開き、口縁端部は外反し尖る。底部中央は薄く、17～19は別に粘土で底部を補っている。底部と体部の境付近が厚く、また、底部の粘土が外に広がり不安定なすわりをささえる形となっている。内底部は、中心から口縁部までロクロを用いてナデ上げてある。５～11はナデの際の調整痕が渦巻状の細線となって内底部から体部下方にかけて残っている。12～20は回転ナデを施したのち、内底中央部だけヘラ先状のもので外から内に一周半程渦巻状にナデている。ナデが強いためナデの断面の両端は稜をなす。焼成は良好なものが多い。

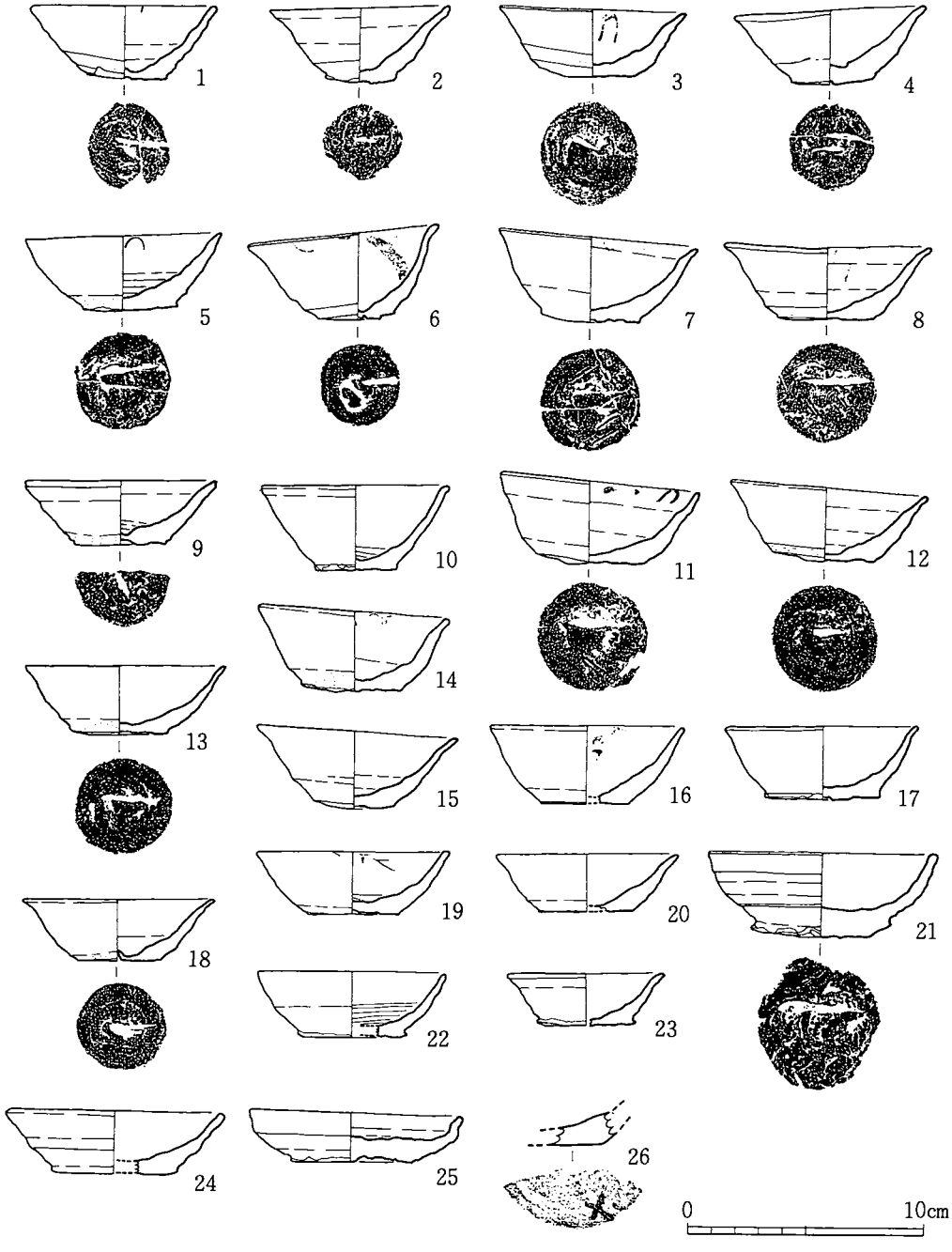
15・17・19・20を除き、ヘラ記号を有する。１・３・５～８・10～12・14・16・18・19・22・23にススが付着している。

G－Ⅳ類－ｂ（第77図21・24・25）

G－Ⅳ類－ａの範疇に入らないものである。

21はやや大型である。底部は異常に厚く粘土が多量に外へ広がっている。体部が丸く、口縁

端も丸い。底部中央から口縁端までナデ上げられており、外低は粗雑にヘラ切りされたままで、ヘラ記号！を有す。25は器高が低く底部が極端に厚い。体部は外に開く、一度ほぼ垂直に屈曲してそれからやや外反する。底部はヘラ切りされたままである。内底部中心から口縁までナデ上げられている。



第77図　土師器実測図

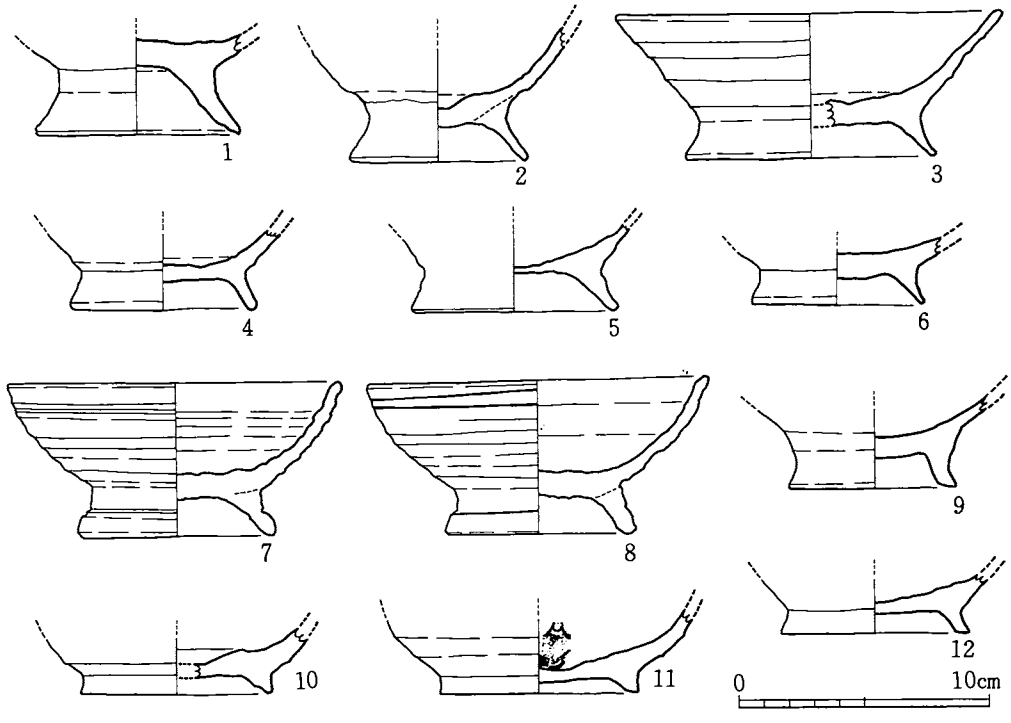
ヘラ記号を持つ土師器（第77図26）

今まで挙げてきた土師器の中で観察されたヘラ記号と思われるヘラ痕は、すべて！であった。26は底部の外周沿いに小さな×の印が見られる。！とは異なり、ごく細いヘラを用いシャープに刻んでいる。破片であり、器形の復元はできないが、器壁の厚さより、かなり大きくなると推定される。内底はナデられている。

高台付の土師器（第78図）

高台の付いた土師器は墨書土器、黒色土器として取り上げたものを除くと、実測可能なもの11点、そのうち器形まで復元できるものは3点であった。

外底は、ナデにより切り離しの痕跡の消えてしまったものもあるが、ほとんどが回転ヘラ切りであると思われる。体部内底は指おさえとナデで調整されており、胎土も焼成も良好なものが多い。高台部は貼付であろう。



第78図　土師器実測図

1は高台高が約2.8cmと高い。底部も高台部も器壁が厚く、高台端部は細く尖り気味になる。底部は平底で、高台は底部端よりやや内側に、外反するように貼り付けられている。2の体部は丸味を持ち、外へ開くと思われる。底部は丸底で、高台は底部端よりやや内側に、外反するように貼り付けられている。底部に比べて高台部は薄く、高台を貼り付けた部分の内底がやや

膨らんでいる。３の体部は直線気味に大きく外へ開く。高台は底部端に外反するように貼り付けられ、底部は平底で厚く、高台部は薄い。高台端は細く尖る。２・３は外器面と高台内面に丹を塗った痕がある。４は平底で、高台は底部に外反気味に貼り付けられている。高台端は丸く、高台内側で接地する。５は平底で器壁は大変薄い。高台は外反気味に貼り付けられ、高台端はやや細くなる。６の高台の形は３とよく似ているが、外底はやや丸味がある。

７・８の体部は丸味を持つ。平底で、高台はやや外反気味に底部に貼り付けられ、高台外側の中程に一条の凹線が巡り、段になる。底部、高台部の器壁は厚く、体部は薄い。７の外底にはヘラ記号！が認められる。９の体部は丸味を持ち、外へ開くと思われる。丸底で、高台はやや外反するように貼り付けられている。高台はやや高く、中程でくの字に折れ曲がり、端部の断面形は四角で高台外側で接地する。10・11の体部は丸味を持つと思われる。平底で、底部端に外反気味に高台が貼り付けられる。高台を貼り付けた部分の器壁がやや膨らむ。高台は低く、端部の断面形は四角に近く、高台の外側で接地する。11には内底近くにススの付着が認められる。12は、低い高台が底部にやや外反するように貼り付けられる。高台を貼り付けた部分はやや膨らむ。高台端部の断面形は四角で、高台端の平担面で接地する。

②須恵器（第79図・第80図）

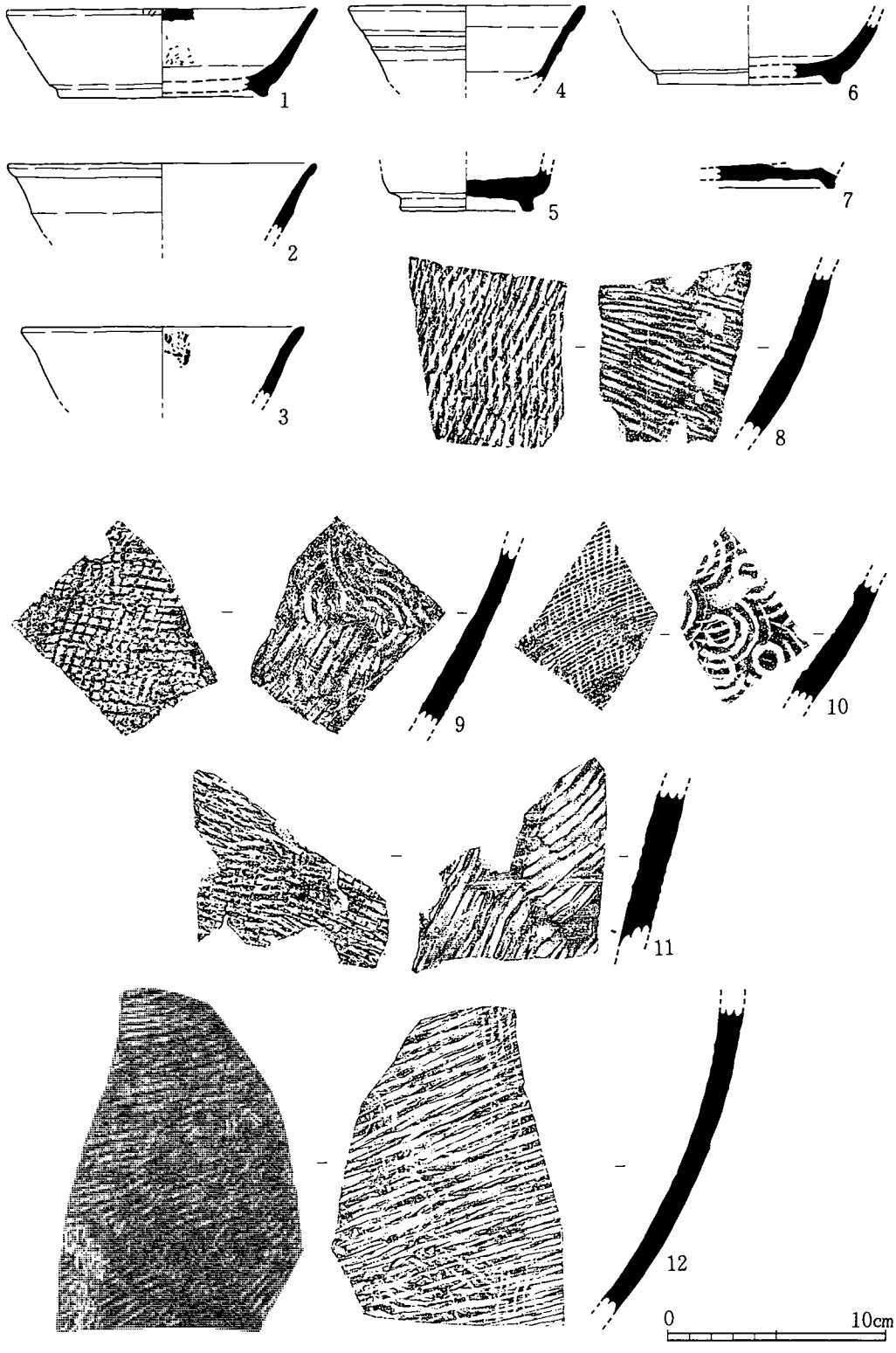
須恵器はⅡａ層より１点、Ⅱｂ層・Ⅲ層より15点が出土した。Ⅱａ層より出土した須恵器１点は、Ⅲ区の北端部に分布する。Ⅱｂ層・Ⅲ層より出土した須恵器はⅠ区の遺物集中範囲内に散在し、偏った分布状況を呈さない（第79図）。

第80図の10はⅡａ層出土である。３はⅡｂ層とⅢ層出土の両破片が接合した。４・５・７・11・12はⅡｂ層出土で、１・２・６・８・９はⅢ層出土である。

〔坏〕（１～７）

１～４は口縁部から体部・底部にかけての破片である。１には方形の断面形を呈する高台が底部と体部との境付近に付き、高台と体部との境は窪んでおり段になる。１の体部はほぼ直線的にのび、口縁端部は丸くなる。２・４の体部は内外器面に弱い稜をもちながら、ほぼ直線的にのび、口縁端部から口縁部直下にかけて僅かに肥厚して丸くなり、その部分が段を形成する。３の体部は、ほぼ直線的に口縁部寄りの部分までのび、その箇所から僅かに外反して丸い口縁端部にいたる。１の内外器面と３の内器面には、口縁部付近を中心にして、ススが付着している。

５～７は高台をもつ底部片である。５・７の高台は、断面形が方形を呈し、体部との境付近に付く。５の底径は、他と比べると小さい。６にはほぼ方形の断面形をもつ高台が体部との境付近に付き、高台と体部との境は１と同様に窪み、段になる。６は外方向にやや丸くなる体部

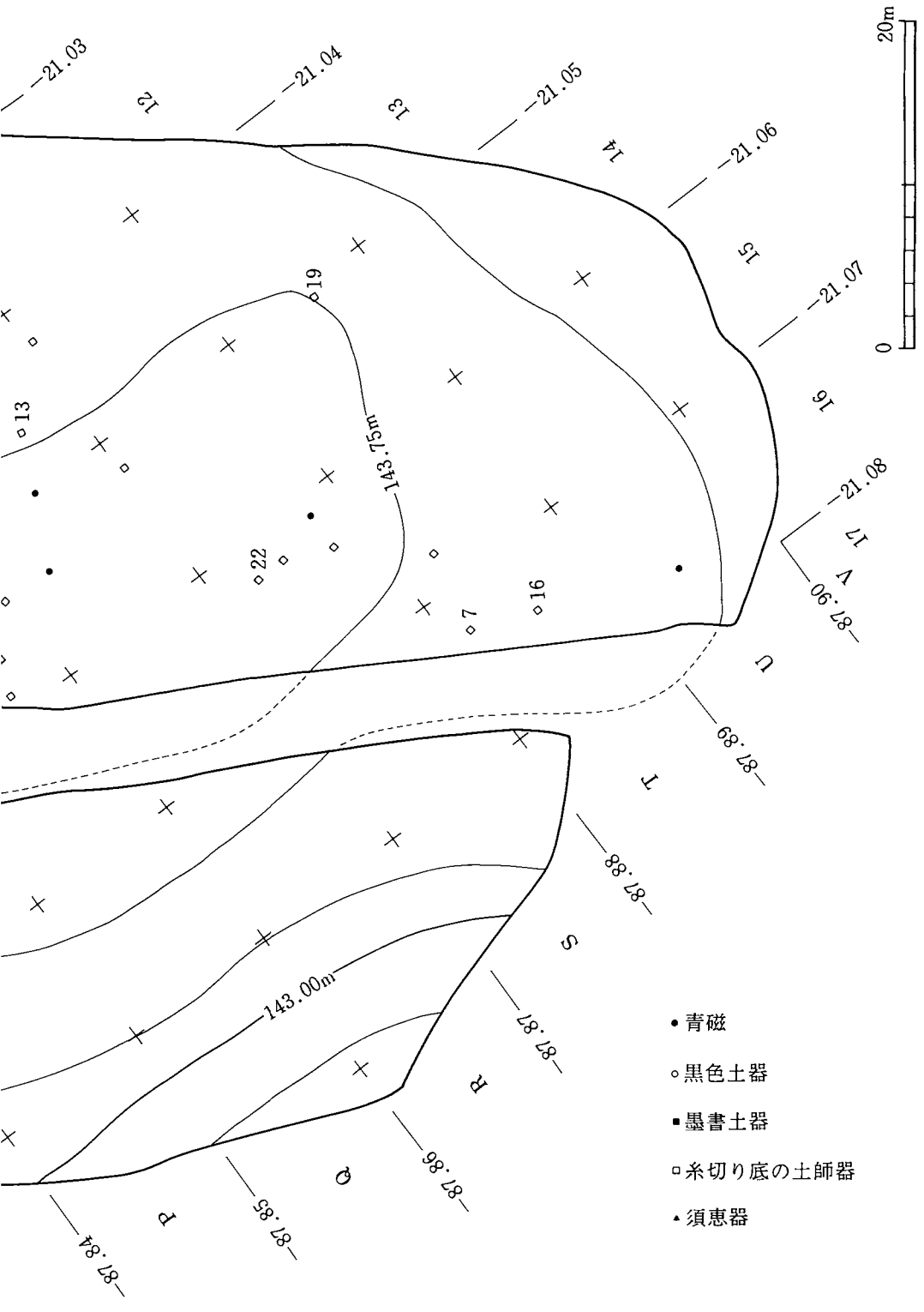


第79図　須恵器実測図

C
D
E
-87.72
-87.73
-87.74
143.00m
-20.94
-20.95
2
3
4
20
24
1
2
6
12
7
11
16
5
21

20.96
20.97
20.98
20.99
5
6
7
144.00m
145.00m
87.15
87.16
87.17
87.18
E
G
H
I
J

-87.79
K
-87.80
L
-87.81
M
-87.82
N
-87.83
O
145.00m
144.00m
-21.00
-21.01
-21.02
8
9
10
11
10
9
12
8
14
10
17
23
6
4
3



第80図　Ⅱa層・Ⅱb層・Ⅲ層出土遺物分布図

をもつ。

〔甕〕（８～12）

12は甕の胴部片である。８～11は小破片であるが、甕の胴部片であろう。８・10・12の外器面には、平行タタキが交錯している。内器面については、８が平行タタキ、10が同心円タタキを施し、12が同心円タタキを施した後、平行タタキを施している。９・11の外器面には格子目タタキを施す。内器面は、９が同心円タタキの後、平行タタキ、11が平行タタキを施す。

③黒色土器（第79図・第81図）

黒色土器は、Ｉ区のII ｂ層・III層に限って出土した。出土数は73点を数える。その分布範囲は、Ｅ－７、Ｆ－７・８・９、Ｇ－７・８、Ｈ－６グリッドである。その分布状況より、集中して出土している箇所は、大きく次の三つに分けることができる。(1) Ｇ－７・Ｈ－６グリッド。(2) Ｅ－７グリッド。(3) Ｆ－８・Ｇ－８グリッド。その中でも、(3) の箇所での出土量が最も多い。

黒色土器の接合関係を見ると、上記の (1) と (3) の範囲で出土した土器が接合している１例を除けば、(1) ～ (3) 各々の範囲内で出土した土器間に接合関係が見られる。このことは、(1) ～ (3) 各々の範囲内に強い接合関係が存在することを意味する。この黒色土器の集中出土範囲と建物跡分布箇所とを比較すると、２号・13号～16号・18号～21号建物跡が位置する箇所が黒色土器の集中出土範囲と重なる。

同じ包含層より出土した遺物の中でも、上記のように黒色土器は、限られた範囲より出土している。出土状況や接合関係より、黒色土器は (1) ～ (3) の範囲内に位置する建物跡に付随する状態で使用されたことが考えられる（第79図）。

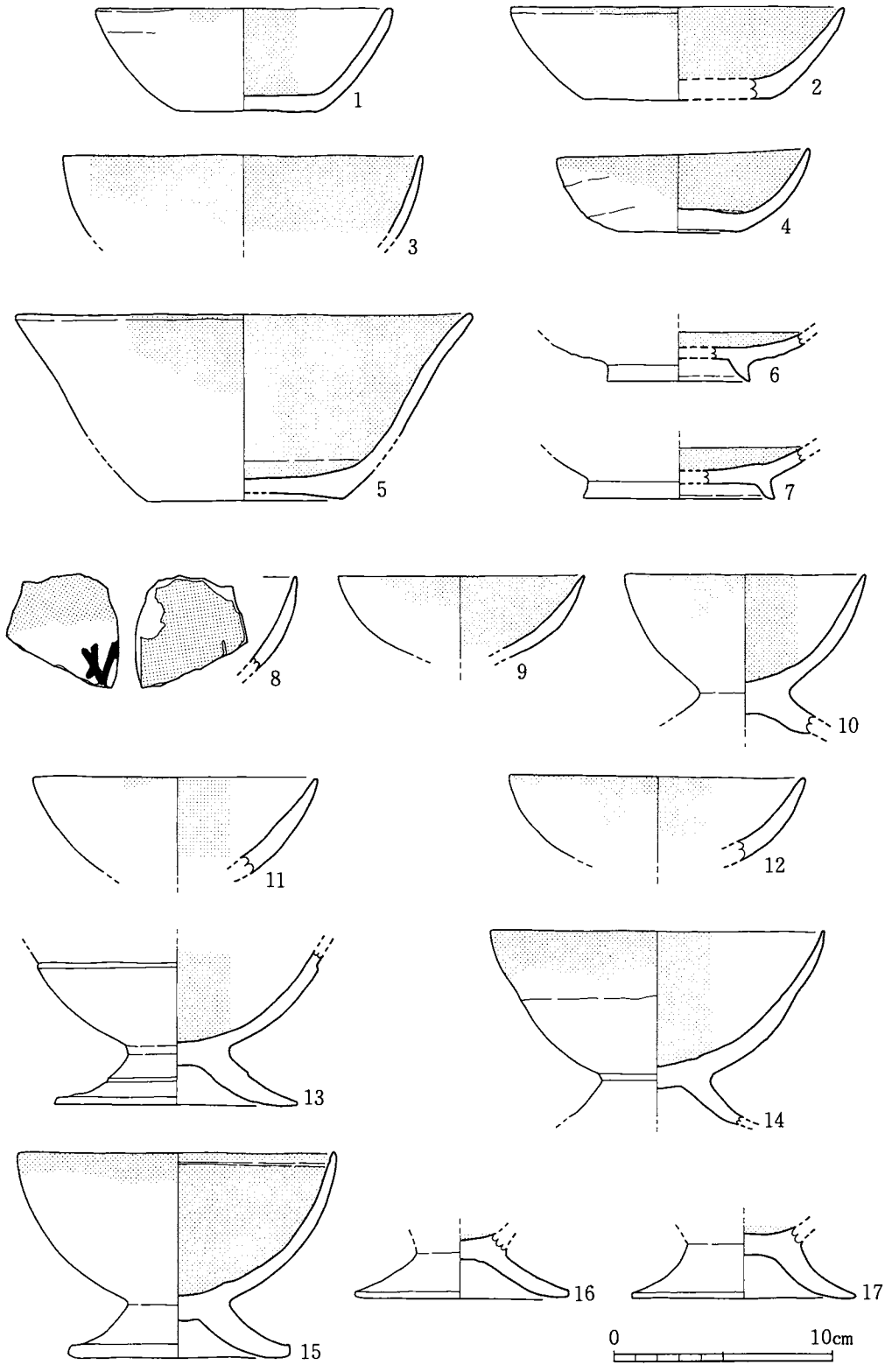
出土した黒色土器は、基本的には内器面を燻したＡ類だけである。外器面の口縁部付近が部分的に黒色を呈しているのは、内器面を燻した際に、外器面にススが付着したものである。

第81図において、２・13はII ｂ層、３・７～９・14・16はIII層より出土したものである。１・４～６・10～12・15・17はII ｂ層とIII層より出土した破片が接合した。

〔坏〕（１・２・４・６・７）

１・２の体部はほぼ直線的にのび、口縁端部は丸くなる。１は平らな底部をもつ。４の体部は内湾しながら丸く立ち上がり、丸い口縁端部までのびる。底部は弱い上げ底になり、口縁部は水平でなく僅かに斜めになる。

６・７の底部には、外側に開く高台が付く。高台は両者とも体部と底部との境付近に付く。高台端部は、６がやや尖り、７が略方形を呈する。



第81図　黒色土器実測図

〔鉢〕（３・５）

３は内湾気味に立ち上がる丸い体部で、口縁端部は丸くなる。５の体部は、口縁部下までほぼ直線的にのび、口縁部下より口縁端部までが外反し、口縁端部は丸くおさまる。底部は上げ底になる。

〔台付鉢〕（８～17）

８・９・11・12は台付鉢の鉢部、16・17は台付鉢の脚部と考えられる。８の口縁部下の外器面には墨書があるが、部分的なもので判読不可能である。

８・９・11・12の体部は、内湾しながら立ち上がって丸くなり、口縁端部は、細くなりやや尖り気味に丸くなる。

10は小型、13・14・15は大型のものである。10の脚部は大きく外に開き、体部は内湾しながら丸く立ち上がる。口縁端部は、やや尖り気味に細くなって丸くなる。13・14・15の脚部は「ハ」の字形に大きく外に開く。13の脚部外器面は、中位で段をもち、脚端部の細い断面方形の段と併せて二段になる。脚の天井部はほぼ平らである。13の体部は、内湾しながら丸く立ち上がり、外器面の中程で段を形成する。14の脚部は先端に行くほど細くなり、脚天井部はほぼ平らである。体部全体は内湾しながら丸く立ち上がって、口縁端部は細くなり僅かに尖る。体部外器面のほぼ中位がやや窪み、弱い段になる。15の脚部は端部が方形の断面形になり、その部分が段になる。脚の天井部はほぼ水平にのびる。体部全体は内湾しながら丸く立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。体部内器面には、口縁部直下と内底面近くに段をもつ。

16・17の脚部は大きく外側に開き、「ハ」の字形を呈する。両方とも端部は細くなり、断面形がほぼ方形になり、段を形成する。両者の脚天井部はほぼ平らである。

④墨書土器（第79図・第82図）

出土した墨書土器は、すべてが土師器であり、20点を数える。その殆どは、Ⅰ区のⅡｂ層・Ⅲ層より出土した。墨書土器は、黒色土器の出土範囲とほぼ同様な所より出土しており、限られた出土範囲をもつ。その中でも、黒色土器の（3）の出土範囲（Ｆ－８・Ｇ－８グリッド）に、墨書土器が集中して出土した。その（3）の出土範囲内より出土した墨書土器には、強い接合関係も存在する。黒色土器の場合と同じように、墨書土器も（3）の範囲内に位置する建物跡に付随する状態で使用されたと考えることができる（第79図）。

第82図の７はⅡｂ層、１～４・８・12はⅢ層より出土した。６・９・11・13はⅡｂ層とⅢ層より出土した破片が接合している。５はＯ－13グリッドにあるピット覆土、10は層序横転の箇所より出土した。

墨書土器の中で、底部が残存している５～13は、ヘラ切りの底部をもつ。墨書土器は墨書し

てある内容で、大きく次の二つに分けることができる。(1) 円を記号的に墨書してあるもの。(2) 文字を墨書してあるもの。(2) は文字の違いでａ・ｂの二つに細分できる。

(1) について（１～４）

４は円の墨書が明確には残っていないが、点として残存している墨書部分を復原すると、円になる。１～３は欠損して部分的なものもあるが、円を基本にして墨書していると思われる。

２は円と思われる部分に直線を書いた箇所が部分的に残っている。

(2) －ａについて（５）

５は墨書部分より推察すると、「西」の字を墨書していると思われる。この墨書部分の向かって右側付近に、墨書と思われる箇所がある。しかし、この箇所に重複してススも付着しており、ススと、墨書のどちらか良く分からない部分もあり、墨書内容を判断できない。

(2) －ｂについて（６～13）

６～９・12・13には、「井」の字が墨書してある。13には「井」の下方に「上」の墨書がある。13の「上」の字と比較すると、６・７にも「上」の字が墨書してあると思われる。６には「井」と「上」と思われる文字の間にカタカナの「ノ」の字様の墨書がある。10・11は残存している墨書部分より、「井」の字が墨書してあると考えられる。

また、以上のものを墨書してある部分は、外底部と体部の外器面の２箇所に分けることができる。外底部に墨書してあるものは、４・７～13で、体部の外器面に墨書してあるものは、１～３・５・６である。

墨書土器の器形については、次のようになる。２・11・13の体部は、ほぼ直線的にのびる。

２の口縁端部は丸くなる。11の口縁端部は、内器面側がまっすぐにのびず、外方向に傾斜して開き、丸い先端部になる。13の口縁端部は細くなって、先端が丸くおさまる。１・３の体部は、口縁部直下まで丸くなってのび、そこから外方向に僅かに屈曲する。口縁端部は丸くなる。

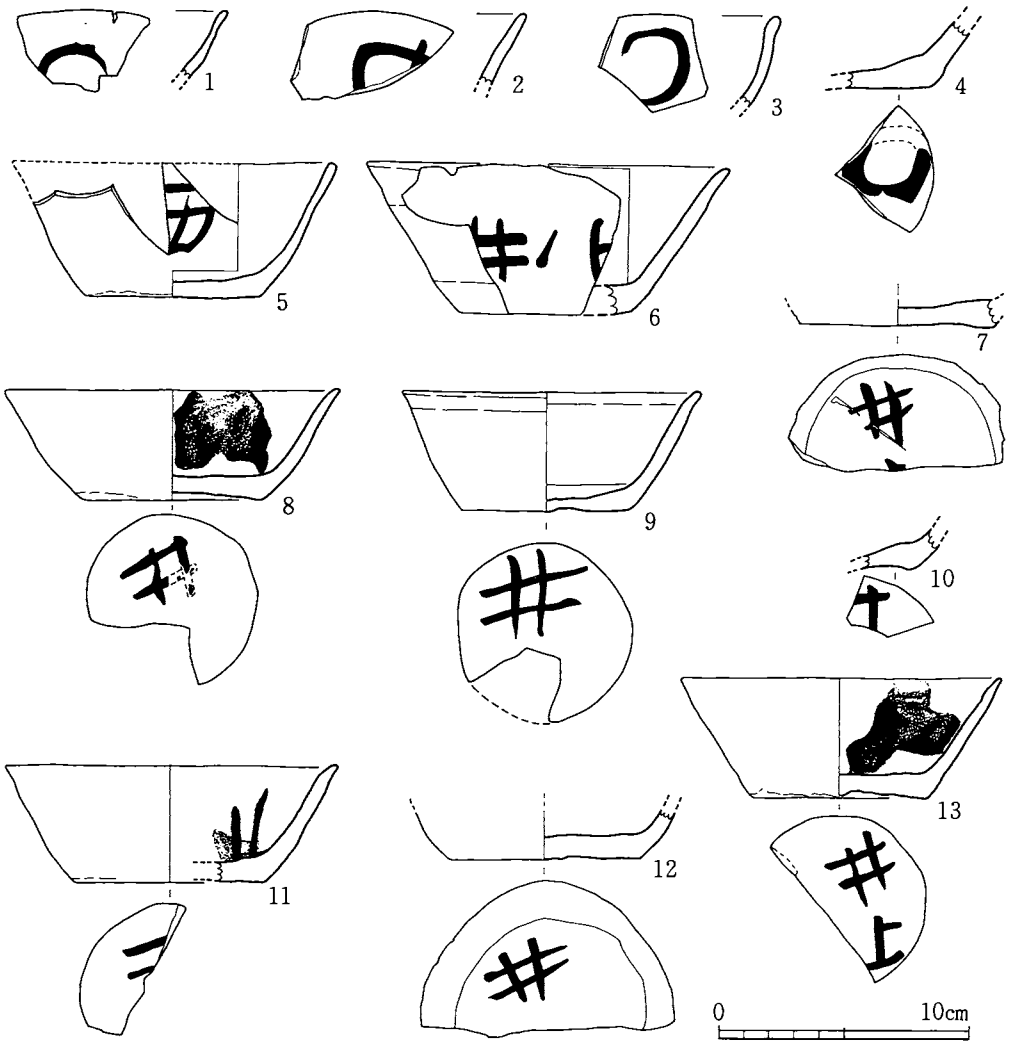
６・８・９の体部は、口縁部直下までほぼ直線的にのびる。口縁端部付近は、外方向に僅かに屈曲し、先端部は丸くおさまる。５の体部は、中程でやや窪み、他の部分はほぼ直線的にのびる。口縁端部の両端は角をもち、先端部は丸くなる。４～７・11の底部は、ほぼ平らである。

９・12の底部は、中央部付近で弱い凹凸がある。８・10・13の底部は、上げ底になる。

５以外にススが付着しているものは、８・11・13である。付着箇所は、内器面の底部から口縁部にかけての部分である。

⑤青磁・白磁（第79図・第83図）

包含層より出土したものは、青磁だけである。青磁はⅢ区・Ⅳ区のⅡ層、Ⅰ区のⅡｂ層・Ⅲ層より出土した。



第82図　土師器（墨書）実測図

Ⅲ区・Ⅳ区のⅡ層より出土した青磁は10点で、その殆どが小破片である。その分布状況は、Ⅳ区に１点、Ⅲ区に９点が散在し、集中した状態でない。（第79図）。

Ⅰ区のⅡｂ層・Ⅲ層より出土した青磁は、小破片が多く、11点を数える。これらは、Ⅰ区の遺物集中出土範囲内で、散在状態を呈して分布する。黒色土器・墨書土器が密集して出土した範囲（Ｆ－８・Ｇ－８グリッド）では、青磁が出土していない。青磁は、黒色土器・墨書土器とは異なった分布傾向を示す。黒色土器・墨書土器の集中出土箇所より西側方向に約35～40m離れた地点（Ｆ－５・６、Ｇ－５、Ｈ－５・６グリッド）に、Ⅱｂ層・Ⅲ層より出土した青磁の多くが分布する（第79図）。

〔青磁〕（１～６・８）

３・４・６はⅡｂ層より出土した。１はⅡｂ層とⅢ層より出土した破片が接合している。５・

8はⅡb層・Ⅲ層中での攪乱層、2はⅠ層より出土したものである。

1～6・8は、龍泉窯系青磁である。出土した青磁の殆どが小破片である中において、1の椀は、器形のほぼ全体が復原できた唯一の資料である。1の体部は僅かに外方向に膨らみ、口縁部下で弱い窪みをもつ。口縁部には輪花があり、口縁端部は丸くおさまる。底部は、体部に比べて非常に厚い。釉は緑青色を呈する。高台の畳付及び外底部は露胎である。内底部見込みには、太い線と細い線で描かれた曲線文がある。残存している体部内器面には、間延びしたS字様の曲線文と飛雲文を施す。他の遺跡の出土例より、1はS字様の曲線文で体部内器面を等分割し、その間隙に飛雲文を描いたと考えられる。

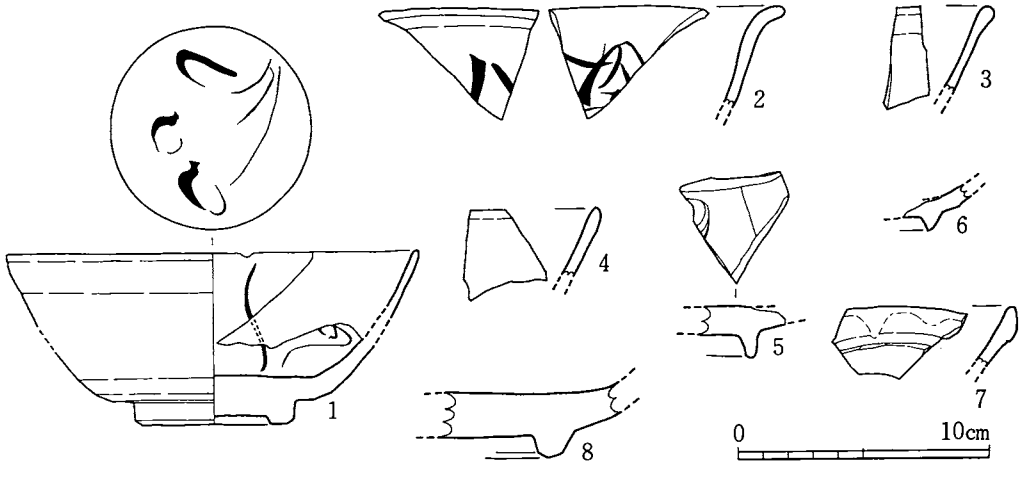
2～4は口縁部片であり、釉は緑青色である。2の口縁部は強く外反し、端部は丸くなる。体部の内外器面には、曲線文を描く。3の体部は口縁部下までほぼ直線的にのび、口縁部は僅かに肥厚し、端部は丸くなる。4は口縁部までほぼ直線的にのびる体部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。

5・6・8は高台をもつ底部片であり、釉は緑青色を呈する。5の高台は器壁が薄く、端部がやや丸くなる。内底部見込みに曲線文がある。6は断面形が三角形をした短い高台をもつ。

8の高台は、畳付の中央部が僅かに突出したほぼ四角形の断面形を呈する。底部の器壁は厚い。5・8の外底部の中央部付近は露胎であり、施釉部との境目が赤色に発色している。

〔白磁〕(7)

7はⅠ層より出土した口縁部片である。釉は灰白色を呈する。口縁部の玉縁はやや大きめであり、その部分に釉の垂下が見られる。

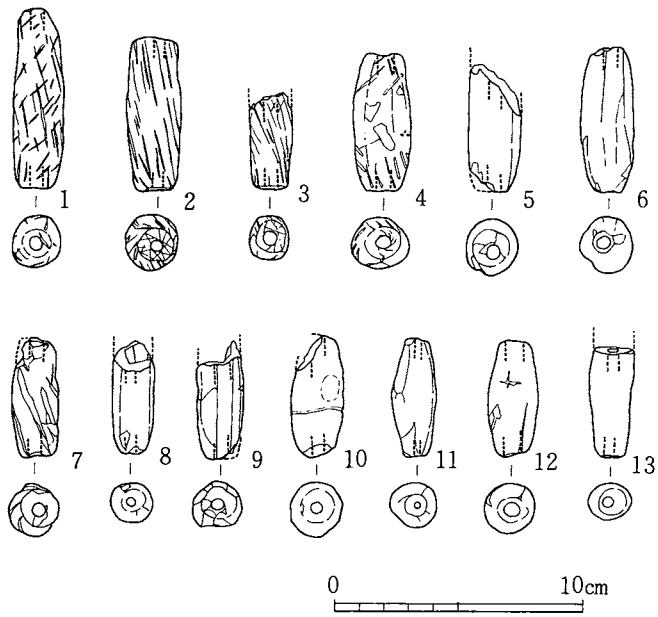


第83図　青磁・白磁実測図

⑥土錘（第84図）

総数で17点出土しており、Ⅰ層からの出土が多く、８・９がⅡ層、11がⅡｂ層、12がⅢ層からの出土である。すべて土師質の管状土錘である。欠損品が多く、全体を復元できないものが多い。大型のもの（１～６）とやや小型のもの（７～13）があると思われる。すべて胴部の中央に最大径を持つが、胴部の膨らみ具合は異なる。すべて胎土、焼成、ともに良い。

１は最も長く、7.1cmである。１～４は、胴部にヘラ先による細い凹線が幾筋も刻まれている。文様風に調整を施したものであろうか、１・４は斜格子状に、２・３は斜めに粗く刻まれ、また、２・３には両端の小口面にもかすかに放射状の細線が見られる。７も似たように、斜めに太い凹線が長く深く刻まれている。５・６・８～13はナデ調整されているが、８・９・11・12はヘラ削りされた痕跡がある。５・13もわずかに稜が認められるため、ヘラ削りが施されていた可能性がある。10には指先による調整痕があり、胴部に一条の凹線が巡っている。



第84図　土錘実測図

第10表　遺物観察表

観察表凡例

法量……（　）内は復元値を示す。
胎土……示した量は砂粒である。
調整……ヘラ削り…外器面の底部との境の体部のヘラによる調整。
　　圧痕……板状圧痕及び類似のもの。△は弱いもの。
　　ヘラ記号…△は弱いもの。調整痕の可能性もある。
　　内底……a　…内底部中央から口縁端までロクロ調整のみ。
　　a’…aと同じであるが渦巻の調整痕残る。
　　b　…aの後中央部のみ軽い調整有。
　　c　…aの後中央部を指先かヘラ先で外から内に一周半ほど渦巻状に調整。
　　c’…cと似ているが渦の幅が広い。
　　d　…内底部不定ナデ。
　　e　…内底部外側を丸くナデ。
　　f　…指かヘラで内底部全体を渦巻状に調整。
　　g　…内底部のみ別にロクロ調整。
　　切り離し…◎は特に顕著でその後未調整。

第10図

No.	遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外内)	調整	焼成	備考
16	SX09				密・不純物なし	透明釉		良好	蓋
〃	〃				〃	〃	外底部は露胎	〃	身
17	SX09				一部貫入有 密・不純物なし	透明釉		良好	蓋
〃	〃				〃	〃		〃	身

第15図

No.	遺構	法量(cm) 口径	底径	器高 高台高	胎土	色調(外内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	切り離し 糸	外底	外底 圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
3	SD−03	9.0	6.8	2.5	密・雲母・赤色粒・砂粒・微	茶褐色	−		○		○		g	良	○	土師器
1	SD−03		2.9	0.8	不純物なし	灰白色釉								良好		白磁
2	SD−03				不純物なし	白色釉	高台底部は露胎							良好		白磁
5	SD−03				砂粒・極微	茶褐色釉								良好		
4	SD−03				密・砂粒・極微	淡黒灰白色								良好		瓦

第20図

No.	遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	切り離し 糸	外底	外底 圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	SX01				雲母・赤色粒 砂粒・微	赤褐色	−		○	?			?	良		土師器
2	SX01				雲母・砂粒	茶褐色	−		○				d?	良		土師器
3	SX01				雲母・砂粒・微	茶褐色 黒褐色	−		○	?	○		?	良	○	土師器
4	SX01		4.2		雲母・赤色粒・微	黒褐色 赤褐色	−		○	?			?	良		土師器
6	SX01		(9.5)		雲母・砂粒・微	淡茶褐色	−		○		○		d	良		土師器
5	SX01				砂粒・少	灰黒色								良		須恵質 摺鉢

第22図

No.	遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	SK−50	7.9	4.8	2.6	密・雲母・砂粒・極微	明茶褐色	○		○		○		g	良好		
2	SK−50	7.6	4.2	2.2	密・雲母・白色粒・砂粒・極微	明茶褐色	−		○		○		g	良好		
3	SK−50	7.6	4.7	2.5	密・雲母・砂粒・極微	明茶褐色	○		○		○		g	良好	○	
4	SK−50	7.9	4.8	2.6	密・雲母・砂粒・極微	明茶褐色	−		○		○		g	良好	○	
5	SK−50	12.5	8.4	3.7	密・雲母・白色粒・砂粒・極微	明茶褐色	−		○		○		d＋g	良好		
6	SK−50	12.6	6.0	4.6	密・雲母・白色粒・砂粒・極微	明橙茶褐色	−		○		○		d＋g	良好	○	
7	SK−50	12.2	7.0	3.9	密・雲母・砂粒・極微	明茶褐色	−		○		○		d＋g	良好		
8	SK−50	12.8	7.4	4.2	密・雲母・砂粒・極微	明茶褐色	−		○		○		d＋g	良好	○	
9	SK−50	12.1	7.0	3.7	密・雲母・砂粒・極微	明茶褐色	−		○		○		d＋g	良好	○	

第26図

No.	グリッド層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	G−5 IIb		(9.0)		砂粒・微	赤褐色			○				d？	良		
2	F−6 IIb		(7.5)		密・砂粒・微	明茶褐色	？		○				g	良	○	
3	Q−14 I		(7.1)		雲母・砂粒・微	明茶褐色	−		○		○		d	良	○	
4	Q−14 II				密・赤色粒・砂粒微	赤褐色	−		○		○		d	良		
5	I−11 II		(6.2)		雲母・砂粒・微	黒褐色	−		○		○？		e	良		
6	Q−14 II		(6.1)		雲母・砂粒・微	赤褐色	−		○				d	良好		
7	T−16 II		(6.5)		赤色粒・砂粒・微	赤褐色	−		○				g	良好		
8	Q−11 II		(6.2)		雲母・砂粒・微	明茶褐色 灰褐色	−		○	？			？	良		
9	P−13 II				雲母・砂粒・微	明茶褐色			○	ナデ			g	良		
10	Q−13 II	6.9	4.5	1.9	密・雲母・砂粒・微	赤褐色	−		○		○		d	良好		
11	F−8 IIb		(3.4)		密・砂粒・微	赤褐色	−		○		○		d？	良		
12	Q−12 II				雲母・砂粒・微	明茶褐色	−		○	？			？	良		
13	R−13 II				密・赤色粒・砂粒微	赤褐色	−		○				g	良		
14	P−13 II				雲母・砂粒・微	赤褐色	−		○		○		d	良好	○	
15	H−6 IIb				雲母・砂粒・微	明茶褐色	−		○			？	g	良		
16	T−16 II				密・雲母・砂粒・微	赤褐色	−		○	？			？	良		
17	Q−13 II				雲母・砂粒・微	赤褐色	−		○		○		d	良		
18	F−4 IIb				雲母・砂粒・微	赤褐色	−		○	？			？	良		
19	T−14 II				雲母・砂粒・微	淡褐色	−		○				g	良		
20	G−5 IIb				雲母・砂粒・微	赤褐色	−		○	？			g？	良		
21	H−6 IIb				雲母・赤色粒・砂粒・微	明茶褐色	−		○		○		g	良		
22	S−15 II				雲母・砂粒・微	赤褐色	−		○				g	良		
23	Q−13 II				雲母・砂粒・微	明茶褐色	−		○		○		？	良	○	
24	Q−5 IIb				砂粒・微	赤褐色			○	？			d	良		
25	J−9 I	(10.6)	(7.7)	3.1	雲母・砂粒・微	淡赤褐色 淡茶褐色	−		○				g	良好		
26	I−11 I	(9.6)	6.6	2.3	密・雲母・砂粒・微	明茶褐色	−		○		○		g	良好		
27	IV区 I		5.5		雲母・砂粒・微	暗赤褐色 明茶褐色	−		○		○		g	良		
28	F−7 I	(9.0)	(6.2)	2.4	密・雲母・砂粒・微	淡褐色	−		○				g	良		
29	I−11 I		(6.1)		雲母・砂粒・微	赤褐色	−		○				e	良		
30	表土	6.6	4.5	2.0	雲母・砂粒・少	明茶褐色	−		○				g	良		
31	F−8 I	(6.1)	(3.8)	2.5	密・赤色粒・砂粒・微	淡赤褐色	−		○				g	良		
32	M−13 I	7.6	4.8	1.7	雲母・砂粒・微	淡灰褐色							b	良	○	

第30図

No.	グリッド 遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	切り離し 糸	外底	外底 圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
	G－7 2号建物跡		6.0		密・雲母・砂粒・少	淡茶褐色		○		ナデ	○		b	良		

第54図

No.	グリッド 遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	切り離し 糸	外底	外底 圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
	E 7 1号ピット	10.2	5.7	3.4	砂粒・微	淡茶褐色 橙色	○	○		ナデ	○		d	普	○	丹塗

第56図

No.	グリッド 遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	切り離し 糸	外底	外底 圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
2	H－8 道路跡				雲母・砂粒・微	赤褐色	○		○				g？	良		土師器
3	H－7 道路跡				雲母・砂粒・少	茶褐色		○		？			？	良		土師器
1	H-7 道路跡				砂粒・極微	青緑色釉 貫入有								良好		青磁

第61図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	切り離し 糸	外底	外底 圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	F－7 Ⅲ	(11.8)	6.0	4.7	石粒	淡黄褐色	○	○			○		d	良		
2	G－6 Ⅲ	(11.9)	6.0	5.2 ～4.9	赤色粒・白色粒・砂粒・微	淡赤黄褐色	○	○		ナデ	○？		d+e	普		
3	G－7 Ⅲ	(12.1)	6.2	4.7 ～5.4	密 砂粒・極微	淡茶褐色	○	○			○		d？	良		
4	H－5 Ⅱb	(12.8)	6.1	5.1	赤色粒・砂粒・少	淡赤褐色	－	？			？		d	普	○	
5	F－8 Ⅲ	(12.3)	6.4	4.8	砂粒・少	淡茶褐色	○	○		軽いナデ			d	普		
6	F－7 Ⅲ	(12.0)	(6.3)	4.5	雲母・赤色粒・石粒・少	淡黄橙色	○	○		○？			d	良	○	
7	H－5 Ⅱb・Ⅲ	(12.9)	6.2	4.3 ～4.8	雲母・赤色粒・砂粒・微	淡赤黄褐色	○	○			△	△	f	普		
8	F－7 Ⅱb	12.6	6.5	4.3	粒砂・微	淡茶褐色	○	？			○	△	f	普		
9	F－8 Ⅲ	(13.5)	6.8	4.6	雲母・角閃石・小石粒・砂粒・中	淡茶褐色	○	○		ヘラ			f	普	○	
10	G－8 Ⅱb	(13.8)	8.1	4.2 ～4.7	白色粒・石粒・砂粒・中	淡黄褐色 淡茶褐色	－	？			○		d	普		
11	F－8 Ⅲ	(13.4)	6.6	(4.5) ～5.0	雲母・砂粒・中	淡赤褐色	－	○		？			d	普	○	
12	G－8 Ⅲ	(13.3)	6.2	4.8	砂粒・中	濃黄橙色	－	○			○		d	普		
13	G－7 Ⅱb・Ⅲ	12.5	6.1	4.7	雲母・砂粒・微	淡黄橙色	－	○			△		d	普	○	
14	F－8 Ⅲ	(13.5)	5.9	4.8	砂粒・微	淡赤茶褐色	○	○			○？		d	良		
15	F－8 Ⅱb・Ⅲ	12.3	7.2	5.0 ～5.2	雲母・砂粒・少	淡赤褐色	－	○		ナデ			d	良	○	
16	F-8・G-8 Ⅱb	(13.6)	6.8	4.3	砂粒・極微	灰色濃灰褐色	－	○			○		d	良好	○	
17	F－8 Ⅲ	(13.8)	(6.2)	4.3	赤色粒・白色粒・小石粒	淡茶褐色	○	○		ナデ			d	普		
18	F－7 Ⅲ	13.1	6.6	4.2	雲母・角閃石	黄褐色	－	？			○		d	普	○	
19	F－8 Ⅲ	13.6	6.2	4.3 ～4.5	雲母・赤色粒・砂粒・少	淡茶褐色	－	○		？			b	普		
20	G－7 Ⅱb	(12.6)	7.4	4.2	雲母・石粒・砂粒・微	淡黄橙色	－	○			△	○	d+e	良		
21	G－7 Ⅱb	(13.4)	(6.1)	4.8	密・雲母・石粒・砂粒・微	褐色 淡茶褐色	－	○		？			？	良好		
22	H－6 Ⅲ	(12.1)	(7.0)	2.7	砂粒・少	淡茶褐色	－	？		？			d	良		

第62図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	G－8 Ⅱb・Ⅲ	12.5	7.2	4.8	砂粒・微	褐色	○	○			○		d	良	○	
2	G－7 Ⅱb・Ⅲ	(12.4)	(6.7)	5.0	密・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			?		d	良	○	
3	F－8 Ⅲ	12.8	7.5	4.9	石粒・砂粒・微	淡黄褐色	○	?			△		d	普	○	
4	F-8・F-9 G-8 Ⅱb・Ⅲ	14.0	7.9	5.2	雲母・角閃石・砂粒・少	淡茶褐色	○	○			△		d	普	○	
5	G－8 Ⅱb	12.8	7.2	4.9～5.2	白色粒	淡茶褐色	○	○					g	良	○	
6	G－8 Ⅲ	(13.3)	(7.6)	4.3	砂粒・微	淡黄赤褐色	○	?					d	良	○	
7	G-8・F-8 H-8 Ⅱb・Ⅲ	(13.3)	7.3	4.7	雲母・赤色粒・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			△		a+e	普	○	
8	G－8 Ⅱb	(13.0)	7.5	4.5	砂粒・少	淡黄褐色	○	○			△		d	普		
9	G－8 Ⅱb	(13.2)	(8.4)	4.0	白色粒・砂粒・少	淡茶褐色	－	?		?			d ?	良	○	
10	F-8・G-3 Ⅲ	(13.0)	(7.0)	4.3	赤色粒・砂粒	白黄褐色	－	○		○			d ?	良		
11	G－8 Ⅱb・Ⅲ	(12.6)	(7.3)	4.1	密・砂粒・微	濃黄褐色	－	?		?			d ?	良好	○	
12	G-8・F-8 Ⅱb・Ⅲ	(12.6)	7.4	4.1	砂粒・微	淡黄白色	○	○			△		d	良	○	
13	G－8 Ⅲ	(13.4)	8.3	4.4	砂粒・少	淡黄橙色 淡黄褐色	－	○		ナデ			g	良	○	
14	G-8・F-8 Ⅱb・Ⅲ	(13.4)	7.5	4.6	密・赤色砂粒・砂粒中	白褐色	－	○			○		g	良		
15	F－8 Ⅱb	12.4	7.1	4.3	雲母・石粒・砂粒・極微	黄褐色	－	○			○		g	良		
16	G－6 Ⅲ	(12.9)	(7.5)	4.3	密・砂粒・極微	淡白茶褐色	?	○			○		g	普	○	
17	G－6 Ⅲ	12.6	5.9	4.3	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	－	◎					g ?	良	○	
18	F-8・G-8 Ⅱb・Ⅲ	(12.3)	(7.3)	4.0	密・混入物特になし	淡赤褐色 濃赤褐色	－	○		軽いナデ			d	良好		外円塗?
19	G－8 Ⅲ	(13.2)	7.4	4.3	赤色砂粒・砂粒	白褐色	－	○			△		d	良	○	
20	F－8 Ⅲ	(12.7)	7.4	4.2	雲母・白色粒・砂粒・極微	明茶褐色	－	○			△		g	良	○	
21	F-8・G-6 Ⅱb	(13.5)	(8.1)	3.7	密・砂粒・極微	明灰褐色 明褐色	－	?		?			f	良好	○	
22	G－8 Ⅲ	(12.0)	(7.3)	3.6	雲母・砂粒・中	赤褐色 茶褐色	－	○					g	良	○	
23	G－8 Ⅲ	(12.5)	(7.6)	3.4	砂粒・微	淡茶褐色 明褐色	－	○		軽くナデ			?	良	○	
24	H－7 Ⅱb	(14.6)	(9.4)	3.6	密・砂粒・極微	淡赤茶褐色	－	○		ナデ			g	良好		

第63図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	G-8・F-8 Ⅱb	(12.8)	8.4	5.4	角閃石・砂粒	淡茶褐色	－	○		軽くナデ			d+e	普	○	
2	G－6 Ⅲ	(13.2)	(9.0)	5.4	砂粒・微	淡赤褐色 淡茶褐色	○	○		?			?	良	○	
3	G－6 Ⅱb・Ⅲ	(12.0)	(7.9)	5.0	砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○		d	良	○	
4	G－8 Ⅱb・Ⅲ	(12.3)	8.1	4.9～5.2	角閃石・砂粒・微	茶褐色	－	○					d	良	○	
5	G－8 Ⅲ	(11.8)	6.9	4.4	石粒・砂粒・極微	淡茶褐色～明淡赤褐色	－	○?		○			d	普	○	
6	G－7 Ⅱb	12.6	8.1	4.6	雲母・石英・白色粒	淡茶褐色	－	○		ナデ			d	良	○	
7	H－8 Ⅱb	(13.8)	8.8	5.0	雲母・角閃石・石英白色粒・赤色粒・砂粒中	淡茶褐色	－	○		?			d+e	良	○	外器面丹塗
8	F－7 Ⅱb・Ⅲ	13.4	8.5	4.4～5.3	角閃石・石英・砂粒・少	淡茶褐色	○	○		?			d ?	普		丹塗
9	F-8・G-8 Ⅰ		7.8	4.4	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	○	◎					e	普		
10	F－9 Ⅲ	(12.8)	8.0	4.2～5.1	密・赤色粒	淡黄褐色	－	○		?			g	良好	○	
11	G－7 Ⅱb・Ⅲ	(12.8)	7.8	4.0～4.4	密・砂粒・極微	淡黄茶褐色	－	○					g	良好		
12	G－8 Ⅲ	(12.3)	(8.6)	4.6	密・混入物特になし	淡白褐色	－	○			△		g ?	良好	○	
13	G－8 Ⅱb・Ⅲ	(12.8)	(7.7)	3.8	密・砂粒・極微	淡灰褐色 淡白黄褐色	－	○			○		?	良	○	
14	H－8 Ⅱb	(12.1)	8.2	3.8	密・混入物特になし	淡茶褐色	－	○		軽いナデ			e	良	○	
15	G－8 Ⅲ	(12.5)	8.8	3.5	雲母・石英・白色粒・砂粒・中	淡茶褐色	－	○	ナデ	軽い			d	良	○	
16	F－8 Ⅲ	(12.3)	8.6	3.5	雲母・角閃石・小石粒・砂粒・少	明茶褐色 茶褐色	－	?		ナデ			?	良	○	

第64図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	G－6 Ⅱb・Ⅲ	(15.2)	(7.7)	6.8	密・角閃石・砂粒・微	淡茶褐色 淡灰褐色	○	?		ナデ ?			d	良好	○	
2	G－6 Ⅱb・Ⅲ	15.7	6.7	6.4	密・砂粒・微	茶褐色	○	○			○		d	良好	○	
3	F-5・F-6 E-5 Ⅲ	(13.5)	6.1	5.1	白色粒・赤色粒・砂粒・少	淡赤褐色	－	○			○		d	普		
4	F－6 Ⅲ	14.0	6.2	4.7 ～4.8	雲母・赤色粒・白色粒石粒・砂粒・多	淡黄赤褐色	○	○			○		d	良	○	
5	G－6 Ⅲ	(13.2)	(7.5)	4.8	密・砂粒・極微	淡白茶褐色	－	○		ナデ			d ?	普	○	
6	G－8 Ⅲ	(13.1)	6.6	4.5	雲母・赤色粒・砂粒・少	茶褐色	－	○					d	良好	○	
7	F－9 Ⅲ	(13.8)	(7.9)	4.4	白色粒・砂粒・微	淡茶褐色	－	○		ナデ			d	普		
8	E-5・E-6 Ⅲ	(13.8)	6.5	4.0	赤色粒・砂粒・中	淡褐色	－	○			○		d	良		
9	G－8 Ⅱb	(13.3)	(8.1)	3.7	雲母・赤色粒・砂粒・少	淡赤褐色 淡黄灰褐色	－	?			?		d	良	○	
10	G－8 Ⅲ	(12.5)	(7.1)	3.0	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	－	?		?			d ?	良	○	
11	H－9 Ⅲ	13.8	7.0	4.5 ～4.8	石粒・砂粒・少	淡赤褐色 ～淡茶褐色	○	○		ナデ			d	良	○	
12	G－7 Ⅲ	(13.1)	6.1	5.1	密・雲母・砂粒・少	淡黄橙色	○	○					d	良		
13	F－8 Ⅲ	(13.1)	6.8	5.5	雲母・赤色粒・砂粒・極微	淡茶褐色	○	○		ナデ	○?		d	普	○	
14	G－7 Ⅱb	13.0	6.6	5.2	砂粒・微	淡黄橙色	－	○			○		d	良	○	
15	F－8 Ⅲ	12.6	6.1	4.8 ～5.8	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	－	○		ナデ			d ?	普		
16	F－8・E－8 Ⅱb・Ⅲ	(13.1)	(7.7)	5.1	雲母・角閃石・小石粒・砂粒・多	淡黄茶褐色	○	?			?		d ?	良	○	
17	F－8 Ⅱb・Ⅲ	(13.7)	(8.9)	5.8	密・雲母	淡茶褐色	－	○					?	普		
18	G－7 Ⅱb	(12.5)	(7.1)	4.3	密・石粒・砂粒・極微	淡緑褐色	－	○					g	良好	○	
19	F－8 Ⅱb・Ⅲ	12.0	6.8	4.2	密・砂粒・極微	淡緑褐色	－	○		ナデ			g	良好		

第65図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	G－7 Ⅲ	12.4	6.6	5.1 ～5.5	密・砂粒・極微	淡茶褐色	－	○			○	○	d+g	良		
2	G－7 Ⅲ	11.8	5.9	4.8 ～4.9	密・混入物特になし	淡黄橙色 黒茶褐色	－	?			○?		f	良		
3	G－7 Ⅱb・Ⅲ	(11.6)	6.5	4.9	密・雲母・砂粒・微	淡赤橙色	－	○				?	e	良		
4	H－7 Ⅲ・V	(11.7)	6.1	5.3	密・雲母・砂粒・微	淡茶褐色	－	○				○	f	良		
5	G－7 Ⅱb・Ⅲ	(12.2)	7.0	5.0	密・雲母・砂粒・微	淡黄橙色 淡茶褐色	－	○			○?		g	良好		
6	H－6 Ⅱ b	(11.0)	(6.5)	4.7	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	－	○		ナデ			d	良		
7	G－7 Ⅲ	(10.8)	(6.0)	4.8	雲母・赤色粒・微	淡茶褐色	－	○			○		d	良		
8	G－7 Ⅱb・Ⅲ	(11.1)	6.6	4.5	赤色粒・砂粒・微	淡茶褐色	－	○			△		d	良好		
9	H－7 Ⅲ	(11.2)	6.4	4.7	雲母・赤色粒・砂粒・中	淡茶褐色	－	◎			○		d	良好		
10	H－7 Ⅱb	(11.3)	(6.8)	4.0	石粒・砂粒	淡黄赤色 淡黄褐色	－	○			?		d ?	良	○	
11	H－7 Ⅱb	(11.4)	5.9	4.2	雲母・赤色粒・砂粒・少	淡茶褐色	－	○			○		d	普		
12	H－7 Ⅲ	(12.2)	(6.0)	4.1	雲母・赤色粒・砂粒・微	淡茶褐色	?	○			○		d	普		
13	H－7 Ⅲ	(11.3)	5.4	4.8	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	－	◎					f	良好		
14	G－7 Ⅲ	(10.9)	5.5	4.6	雲母	淡茶褐色	○	○			○		f	良	○	
15	H－7 Ⅱb	(12.1)	6.7	4.1	雲母・赤色粒　少	淡茶褐色	－	○			○		g	良		
16	G－7 Ⅱb・Ⅲ	12.2	5.6	4.4 ～4.8	雲母・砂粒・極微	淡黄赤褐色	○	?			?		d	普		

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
17	G－7 Ⅱb・Ⅲ	11.9	5.6	4.3	雲母・砂粒・微	淡赤橙色	○	?			○		d	普		
18	F－7 Ⅱb・Ⅲ	(13.2 ～10.8)	6.4	4.0	密・砂粒・極微	明茶褐色	○	○			△		d+g	良好	○	
19	F－7 Ⅲ	(11.0)	6.0	3.5	雲母・砂粒・微	淡灰褐色	○	○		軽いナデ			d+g	普	○	
20	E－7 Ⅱb・Ⅲ	(10.6)	(6.4)	2.8	密・混入物特になし	淡黄褐色	○	?			?		d	良好		
21	E－7 Ⅲ	(11.4)	(6.4)	2.8	雲母・砂粒・微	淡赤褐色 淡茶褐色	○	○			?		d ?	良好		
22	G－8 Ⅲ	(10.6)	(6.9)	2.8	雲母・赤色粒・砂粒・少	茶褐色	－	○			○		?	良	○	
23	G－8 Ⅲ	(11.0)	(6.4)	3.0	雲母・砂粒・少	淡赤褐色	－	○		ナデ	○?		d+e	良好	○	
24	H－6 Ⅲ	(10.5)	(5.4)	2.8	雲母・赤色粒	淡茶褐色	－	○			?		f	良		
25	K－10 Pit	(10.4)	(5.5)	1.6	密・赤色粒・白色粒	淡茶褐色	?	◎			○		d	良		

第66図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外圧	圧痕	ヘラ記号	内底	焼底	スス	備考
1	F－7 Ⅲ	(10.6)	(6.2)	3.6	雲母・角閃石・砂粒・少	淡黄橙色	○	○			○	△	f	良		
2	H－8 Ⅱb	(11.6)	(7.2)	3.6	密・砂粒・極微	明褐色	－	○		ナデ?			e ?	良	○	
3	E－7 Ⅲ	(11.6)	(7.5)	3.3	雲母・粒砂・微	淡黄褐色	○	○			○		d+e	良	○	
4	E－7 Ⅲ	(11.7)	(7.3)	3.6	密・混入物特になし	淡茶褐色	－	○		軽いナデ			d+e	良好	○	
5	G－8 Ⅱb	(11.6)	(7.6)	3.6 ～4.0	雲母・石粒・砂粒・少	淡茶褐色 淡灰褐色	－	○					d ?	良	○	
6	G－8 Ⅱb・Ⅲ	(10.9)	(5.6)	3.4	密・雲母・砂粒・極微	赤褐色	○	○?					d ?	良		
7	G－8 Ⅲ	11.7	7.1	3.8 ～4.1	雲母・砂粒・中	赤褐色 灰褐色	－	○		ナデ			d	良	○	
8	G－8 Ⅲ	12.0	7.3	3.8 ～4.0	雲母・粒砂・中	赤褐色	－	○			△		d	良	○	
9	G－8 Ⅱb・Ⅲ	(12.0)	(7.3)	3.8	赤色粒・砂粒・少	淡茶褐色	○	○			?		?	良		
10	G－8 Ⅱb・Ⅲ	12.5	8.0	4.0	雲母・砂粒・中	茶褐色	－	○			?		d	良	○	
11	H－8 Ⅱb・Ⅲ	(11.9)	7.2	3.7	密・砂粒・極微	茶褐色	－	○		軽いナデ			d	良		
12	G－7 Ⅱb	(12.2)	(7.2)	3.8	密・混入物特になし	茶褐色	－	○		ナデ			d ?	良好		
13	G－8 Ⅱb	(11.8)	(7.2)	3.7	砂粒・極微	淡赤褐色 明褐色	－	○		ナデ			?	普	○	
14	G－8 Ⅱb・Ⅲ	(11.6)	(6.8)	3.5	密・石粒・砂粒・極微	茶褐色	－	?					?	良	○	
15	F－8 Pit	(11.3)	(7.0)	3.6	角閃石・白色粒・砂粒・少	淡茶褐色	－	○		軽いナデ			d ?	良	○	
16	G－8 Ⅲ	11.1	7.6	3.4	雲母	白黄褐色	－	○			○		d	良	○	
17	G－8 Ⅱb	11.0	6.9	3.3	白色粒	淡茶褐色	○	○			△		d	良	○	
18	F－8 Ⅱb・Ⅲ	(11.9)	7.0	3.6	砂粒・極微	淡茶褐色	－	○		ナデ			d+g	普	○	
19	G－7 Ⅱ・Ⅲ	(11.6)	6.8	3.8	密・混入物特になし	茶褐色	－	○					g	良好		
20	G－8 Ⅱb・Ⅲ	(12.0)	6.5	3.7	密・砂粒・微	赤褐色	－	○			△		g	良	○	
21	G－8 Ⅲ	(11.2)	7.1	3.9	密・混入物特になし	淡黄白褐色 淡橙白色	－	○		ナデ			g	良	○	
22	F-8・G-8 Ⅲ	(11.3)	(7.3)	3.6	密・混入物特になし	明茶褐色	－	○					g	良好	○	
23	H－8 Ⅲ	(12.2)	(8.0)	3.6	密・雲母・砂粒・少	赤褐色	－	?			△		g	良	○	
24	G－8 Ⅲ	11.6	7.7	3.9 ～4.3	雲母・砂粒・少	赤褐色	－	○			△		d	良好	○	
25	G－8 Ⅱb	(11.9)	7.6	4.0	雲母・砂粒・微	淡茶褐色 灰褐色	－	○		軽いナデ			d	良	○	
26	G－8 Ⅰ・Ⅲ	12.0	8.1	4.0	密・混入物特になし	淡黄白褐色 淡灰白褐色	－	○		ナデ?			d	普	○	
27	G－8 Ⅱb・Ⅲ	(11.9)	7.6	4.0	雲母・砂粒・微	淡茶褐色 灰褐色	－	○		?			d+g	良	○	
28	G－8 Ⅱb	(11.7)	(7.8)	4.1	雲母・角閃石・砂粒・少	淡茶褐色 灰褐色	－	○		軽いナデ			d ?	普	○	
29	G－8 Ⅱb・Ⅲ	(11.3)	(7.7)	3.8	白色粒・砂粒・微	明褐色 淡茶褐色	－	?			?		?	良	○	

第67図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	F－7 Ⅲ	(10.4)	5.5	3.9	雲母・角閃石・砂粒・少	淡黄橙色 淡茶褐色	○	○			?		f	普		
2	H－6 Ⅲ	(10.5)	5.5	3.6 ～3.9	砂粒・微	淡白黄褐色 白灰褐色	－	○					a	良	○	
3	F－7 Ⅲ	9.5	5.0	3.9	雲母・粒砂・少	淡赤褐色	○	○			○		c	普	○	
4	F－8 Ⅲ	10.2	5.2	4.0	砂粒・微	淡赤黄褐色	○	○			○	○	c	普	○	
5	H－6 Ⅲ	10.8	5.4	3.6 ～4.4	密・砂粒・微	淡褐色	－	○			○		c	普	○	
6	E－7 Ⅲ	9.6	5.0	4.1	角閃石・砂粒・微	淡黄褐色	○	○			○?		c′	良	○	
7	E－7 Ⅲ	(9.9)	(5.5)	3.7	雲母・角閃石・石英砂粒・微	淡黄褐色	○	○		ナデ			c′	普	○	
8	SX13	9.8	5.0	3.2 ～4.3	砂粒・微	淡赤褐色 赤褐色	○	○			△	△	c′	良		
9	F－7 Ⅲ	(10.4)	(5.5)	3.4	砂粒・極微	淡橙色	○	○			○		b	普		
10	F－6 Ⅲ	(10.4)	5.8	3.8	砂粒・微	淡赤褐色	○	○?			△		d	普	○	
11	F－8 Ⅲ	10.8	5.2	3.5 ～3.7	角閃石・白色粒・砂粒・微	明茶褐色	○	○			○		d	良	○	
12	F－8 Ⅲ	10.4	5.2	3.4 ～3.6	砂粒・少	明黄赤褐色	○	○					d	普		
13	E－7 Pit	(10.6)	(5.2)	3.2	雲母・白色粒	淡茶褐色	○	○			○		d	普	○	丹塗
14	E－7 Ⅲ	(10.8)	5.6	3.4 ～3.7	石粒・砂粒・微	淡茶褐色 明褐色	○	○				△	d	良	○	下半丹塗
15	E－7 Ⅲ	(10.8)	(6.1)	3.4	雲母・砂粒・多	淡茶褐色	○	○			○?		?	普		丹塗
16	F－7 Ⅲ	10.0	5.2	3.6	砂粒・微	赤褐色	○	○			△		g	普	○	丹塗

第68図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	F－8 Ⅲ	9.4	5.4	4.2	雲母・砂粒・微	淡褐色	○	○			△		a	良	○	丹塗
2	F－8 Ⅲ	(10.3)	5.9	3.3	砂粒・極微	淡茶褐色	○	○			△	○	a	良		
3	G－8 Ⅲ	(10.2)	(5.5)	3.7	密・混入物特になし	濃赤橙色	－	○		ナデ			a	普	○	
4	E－7 Ⅳ	(9.8)	5.8	3.9	雲母	淡黄褐色	○	○			○	○	c	良	○	
5	E－8 Ⅲ	9.5	5.6	3.9	砂粒・微	赤褐色	○	○			△		f	普	○	
6	E－8 Ⅲ	9.9	6.0	3.8	角閃石・砂粒・微	淡赤褐色	○	○			○	△	f	普	○	
7	SX13	9.3	5.4	3.9	雲母・砂粒・少	明赤褐色	○	○		ナデ			e	良		
8	H－10 撹	9.9	6.5	3.2 ～3.5	雲母・粒砂・少	淡黄褐色 淡茶褐色	○	○			○	△	e	普	○	
9	E－7 Ⅲ	9.7	5.6	3.0	砂粒・中	淡黄褐色	○	?			?	○	e	良好		
10	G－8 Ⅱb	(9.5)	(6.1)	3.7	砂粒・極微	淡茶褐色	○				△		d	良好	○	
11	G－8 Ⅲ	(9.7)	5.7	3.5	雲母・砂粒・微	赤褐色	○	○			○		d	良	○	
12	E－7 Ⅲ	(10.1)	(5.5)	3.7	白色粒・砂粒・微	明茶褐色	○	?		ナデ			d	良		底丹塗
13	E－7 Ⅲ	(10.4)	5.7	3.6 ～3.7	白色粒・砂粒・少	明褐色	○	○?		ナデ	△		d	普		底丹塗
14	G－7 Ⅲ	(9.8)	5.3	3.9	密・雲母・粒砂・少	淡黄橙色	○	○					d	良	○	

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
15	F－8 Ⅲ	10.5	5.7	3.4 ～3.8	雲母・砂粒	黄橙色	○	○		ナデ			d	良	○	
16	E－7 Pit	(10.0)	5.6	3.4	砂粒・極微	淡黄褐色 ～赤褐色	○	○		軽いナデ			d	普		
17	G－8 Ⅲ	(10.6)	(6.4)	3.3	砂粒・少	淡茶褐色	○	?		ナデ	○	○	d	良	○	
18	G－8 Ⅲ	9.8	6.4	2.8 ～3.2	雲母・砂粒・少	茶褐色	○	○		ナデ	○	○	d	普		
19	F－7 Ⅲ	(9.6)	5.5	3.3	砂粒・極微	淡赤褐色	○	○			○		d	良		
20	G－8 Ⅲ	(9.9)	6.4	3.6	砂粒・微	濃黄橙色 濃黄褐色	○	○			△	○	d	良	○	
21	F－8 Ⅲ	(10.4)	(6.4)	3.2	雲母・角閃石	淡茶褐色	○	○			○		d	普		
22	H－6 Ⅲ	(9.6)	6.0	3.1	赤色粒・砂粒・極微	淡赤黄褐色	－	○		ナデ		△	d	良好		
23	G－8 Ⅰ	(10.4)	(6.5)	3.4	密・混入物特になし	明褐色	－			ナデ?			d?	普	○	
24	F－8 Ⅰ・Ⅲ	10.2	6.4	3.2 ～3.4	白色粒・砂粒・極微	淡茶褐色	○	○			○		d	良	○	
25	F－8 Ⅲ	9.4 ～9.8	6.0	3.8 ～4.4	雲母・砂粒・微	淡赤褐色 淡黄赤褐色	○	○			△	○	g	良		
26	F-7・F-5 Ⅲ	(9.9)	5.8	3.5	砂粒・極微	淡黄橙色	○	○			△?		g	良		
27	E－7 Ⅲ	(10.2)	5.7	3.4	砂粒・中	淡赤褐色	○	○			○		?	普	○	

第69図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	E－7 Ⅲ	(9.5)	5.2	3.5	角閃石・砂粒・微	明褐色	○	○			△		d+g	普		
2	G－8 Ⅱb	(10.0)	(6.2)	3.1	砂粒・微	淡茶褐色	－	○		ナデ?			d+g	良	○	
3	F－7 Ⅱb・Ⅲ	(9.8)	(4.3)	3.4	砂粒・中	淡茶褐色	○?	?			?		d+g	普		
4	H－6 Ⅲ	(10.4)	(6.0)	3.5	砂粒・微	淡茶褐色	－	○			○		d+g	良	○	
5	E－7 Ⅳ	(9.6)	(6.1)	3.0	雲母・角閃石・赤色粒・砂粒・少	淡白褐色	－	◎					g?	普	○	
6	E－7 Ⅲ	(10.8)	(6.8)	3.4	雲母・赤色粒・石粒・砂粒・少	淡茶褐色	－	○			?		d+g	普	○	
7	E－7 Ⅲ	(9.7)	5.0	3.6	雲母・赤色粒	淡茶褐色	－	○			△		c?	良	○	
8	G-8・H-8 Ⅱb・Ⅲ	10.2	5.9	3.0 ～3.5	石粒・微	淡茶褐色	○	○			○		d	普		
9	G－7 Ⅱb	(10.6)	(7.6)	3.4	密・混入物特になし	淡茶褐色 淡橙褐色	○	○			△		d?	良		
10	G－7 Ⅱb	(9.9)	7.3	3.8	雲母	淡茶褐色	○	○			△		d	良	○	
11	G－6 Ⅲ	10.0	7.0	3.1 ～4.0	砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○	△	d	良好	○	
12	G-7・G-8 Ⅲ	9.6	6.7	2.9 ～3.8	密・砂粒・極微	淡茶褐色	○	○			○		d	良	○	
13	G－8 Ⅲ	(9.9)	(6.7)	3.8	雲母・砂粒・少	淡褐色	－	○			○		d	良		
14	G－8 Ⅱb・Ⅲ	10.0	6.6	3.8 ～4.1	雲母・赤色粒・砂粒・中	淡茶褐色	－	○		軽いナデ			d?	普	○	
15	G-8・F-8 Ⅱb	10.4	7.6	3.4 ～3.8	砂粒・微	淡茶褐色	－	○			△		d	良	○	
16	F－8 Ⅱb	(10.0)	(7.0)	3.2	雲母・赤色粒・砂粒・微	淡茶褐色	－	○		ナデ	△	○?	d	普	○	
17	G－8 Ⅱb	9.7	7.5	3.3	砂粒・微	明白黄褐色	－	○			○	△	d	良	○	
18	F－8 Ⅰ・Ⅲ	(9.0)	(7.1)	3.4	密・混入物特になし	淡茶褐色	○	○			○		?	良	○	
19	F－6 Ⅱb	(9.8)	(6.8)	2.9	砂粒・少	淡茶褐色	○	○					g?	良		
20	E－7 Ⅰ	(10.2)	(7.3)	2.8	雲母・石英・砂粒・少	淡茶褐色	○	○?			△		g	良好		

第70図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	H－6 Ⅱb	(10.8)	5.5	2.7 ～2.9	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	－	○			○		b	良		穿孔有
2	G－7 Ⅱb	10.7	6.2	3.1 ～3.4	雲母	淡茶褐色	－	○			○		b	良	○	
3	H－7 Ⅲ	(10.4)	(5.5)	3.3	赤色粒	淡赤褐色	－	○		ナデ		△	b	良好		
4	H－6 Ⅱb	10.5	5.4	2.9 ～3.2	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	－	◎					b	良好	○	
5	H－6 Ⅲ	(10.9)	(7.2)	2.9	雲母	淡茶褐色	－	◎			△		b	良		
6	H－6 Ⅱb	(10.7)	6.4	3.2	密・雲母・赤色粒	淡黄褐色 淡茶褐色	－	◎			○		b	良好		
7	H－7 Ⅲ	10.7	6.5	2.7 ～3.1	雲母・赤色粒・砂粒・極微	淡茶褐色	－	◎			△		b	良		
8	F－6 Ⅱb	(10.3)	5.6	3.2	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	－	◎			△		e	普		
9	H－6 Ⅱb	10.5	6.4	3.2	密・雲母	淡褐色	－	◎			○		e	良	○	
10	H－7 Ⅲ	11.0	6.6	2.8	雲母・赤色粒	淡茶褐色	－	○		ナデ			a'	良好		
11	H－7 Ⅱb・Ⅲ	(10.4)	5.9	3.2	密・混入物特になし	淡褐色	－	○		ナデ	○		c	普		
12	H－6 Ⅱb・Ⅲ	(10.6)	6.4	3.1	密・雲母・砂粒・赤色粒・微	淡褐色	－	○			△		c	良好		
13	H－6 Ⅱb	(10.8)	(7.4)	2.7	密・雲母・赤色粒 砂粒・微	淡茶褐色 淡白黄褐色	－	◎					c	良		
14	G－8 Ⅱb	11.5	7.4	4.2	密・砂粒・極微	明黄褐色	－	○			○	△	d	普	○	
15	G－8 Ⅱb・Ⅲ	(11.9)	7.0	4.3	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	○	○			○		d	良	○	
16	F－7 Ⅲ	(10.6)	6.4	3.6	雲母・砂粒・中	淡褐色	○	○			○	○	d？	良		
17	G－8 Ⅲ	(10.4)	6.2	3.4	砂粒・微	淡黄白色 淡黄橙色	○	○		ナデ			d	普	○	
18	H－7 Ⅲ	10.4	5.1	3.7	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	－	○		軽いナデ			f	良		
19	I－6 Ⅲ	10.6	5.9	3.0 ～3.5	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	－	◎					f	良	○	
20	H－6 Ⅱb	(10.0)	(5.5)	(3.8)	密・雲母	淡茶褐色	－	○			△		f	良好	○	
21	H－7 Ⅲ	(10.1)	(6.1)	3.7	雲母・石粒・極微	淡茶褐色	－	○			○		d	良好		
22	G－7 Ⅱb・Ⅲ	11.4	5.5	3.9	赤色粒・白色粒・砂粒・少	淡橙色 黄橙色	－	○			△		d	普		
23	G－7 Ⅱb	(10.3)	5.9	2.6 ～2.7	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	－	○			△		f	良好	○	
24	G－7 Pit	(9.7)	(5.8)	3.1 ～2.9	雲母・赤色粒・砂粒・微	淡茶褐色	○	○					f	良		
25	H－6 Ⅱb	9.8	5.4	2.5 ～2.6	雲母	淡茶褐色	○	○			△		a'	良好	○	
26	H－7 Ⅱb	10.6	6.7	1.9 ～2.1	赤色粒・砂粒・微	淡茶褐色	－	○			○		d+g	良		

第71図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	G－8 Ⅲ	9.2	4.6	3.9 ～4.1	雲母・砂粒・中	赤褐色	○	○			○		a	普		
2	F－7 Ⅲ	9.2	4.1	3.8 ～4.0	雲母・角閃石・砂粒・少	淡黄橙色	○	○		ナデ			a	普		
3	F－7 Ⅲ	(8.6 ～8.9)	4.8	4.2	雲母・角閃石・砂粒	淡黄橙色	○	○			○		a	良		
4	G－8 Ⅲ	9.2	4.9	4.0	雲母・白色粒・極微	淡茶褐色 淡黄橙色	○	○			○		a	良好		
5	F－8 Ⅲ	(8.7)	(4.5)	3.0	雲母・砂粒・少	淡茶褐色 明灰褐色	○	？			？		a	普	○	
6	D－6 Ⅱb	(8.7)	4.6	3.3	混入物特になし	淡茶褐色 淡黄褐色	○	○？			○	○	a	良	○	
7	F－7 Ⅲ	(9.3)	5.2	3.2	混入物特になし	淡黄褐色	○	○			○	○	a	良	○	
8	E－7 Ⅲ	(9.4)	4.5	3.4	雲母・細砂・中	淡茶褐色	○	○			△	○	a'	普		
9	F－7 Ⅱb・Ⅲ	(9.0)	4.6	3.3	混入物特になし	淡茶褐色	○	○			？		？	良		
10	F－8 Ⅲ	(8.4)	4.0	3.5	雲母・角閃石・砂粒・中	淡褐色 灰褐色	－	○					b	普		
11	F－8 Pit	8.0	4.2	2.9	雲母・砂粒・極微	淡黄褐色	○	○			○？	○	a'	良	○	
12	G－6 Ⅲ	8.4	5.0	2.5 ～2.9	密・雲母・砂粒・微	淡茶褐色	○	○		ナデ		○	b	良		
13	G－7 Ⅱb	(8.7)	(4.4)	2.9 ～3.9	雲母・砂粒・極微	淡茶褐色	○	○			○？		b	良好	○	
14	F－9 Ⅲ	7.8	4.4	2.9 ～3.9	雲母	淡黄橙色	○	○			？		b	良	○	

第72図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	F－8 IIb	9.1	6.4	3.9	雲母・砂粒・極微	淡茶褐色	－	○			○	△	d	良		
2	F－7 IIb・III	(9.3)	5.4	3.7	角閃石・砂粒・少	淡黄橙色	○	○			○	△	a′	良		
3	F－7 III	(8.4)	5.2	3.9	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○	△	a′	良	○	
4	E－8 III	9.0	5.2	3.8～4.1	雲母・砂粒・極微	淡茶褐色	○	○			△		a	普	○	
5	F－7 III	(8.8)	5.3	3.5	雲母・砂粒・極微	淡黄褐色	○	○			○	△	a	良	○	
6	F－7 III	8.8	5.7	3.7～4.1	角閃石・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○	○	a′	良	○	
7	F－7 IIb	9.0	5.1	3.6～3.8	砂粒・微	淡黄褐色	○	○			○	△	a	良		
8	F－7 IIb	8.3	5.0	3.9	砂粒・極微	淡赤黄褐	○	○			○	○	a	良		
9	H－5 IIb	8.2	5.0	3.7	角閃石・砂粒・少	明赤黄褐色	○	○			○	○	a	良	○	
10	F－7 III	(9.2)	5.8	3.9	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			△		a	良		
11	F－8 III	9.1	5.0	3.7～4.0	砂粒・中	灰褐色 茶褐色	○	?			?		a	普		
12	F－7 IIb	8.0	5.0	3.7	雲母・角閃石・砂粒・中	淡褐色	○	○			○		a′	良		
13	G－8 IIb	(8.2)	4.9	3.2～3.4	角閃石・砂粒・微	淡赤黄褐色	○	○?			○	○	a	良		
14	F－7 III	(8.9)	5.1	3.6	砂粒・極微	淡黄茶褐色	○	○			○		a	普		
15	H－8	8.1	4.8	3.3～4.4	雲母・角閃石・赤色粒・砂粒・中	淡茶褐色	○	○			○	○	a	良好		
16	E－8 III	8.3	5.0	3.1～3.3	砂粒・極微	淡茶褐色	○	○?		ナデ		○	a	良		
17	G－7 III	(8.2)	5.0	(3.4～3.6)	砂粒・極微	淡黄褐色	○	○			?		a	良好	○	
18	E－7 III	(7.4)	4.8	3.7	砂粒・極微	淡黄褐色	○	○			○	△	a	良		
19	F－8 III	8.6	5.4	3.4	混入物特になし	淡黄褐色 淡茶褐色	○	○			○	△	a	良	○	
20	E－7 III	8.6	4.9	3.5	雲母・角閃石・砂粒・少	黄褐色	○	○			○	○	a	良	○	
21	F－7・S－13 III	(8.9)	5.4	3.4	砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○	○	a	普		
22	G－7 III	9.4	5.3	3.6	黒色粒・極微	淡黄灰色	－	?			○	○	a	良	○	
23	E－8 III	(9.0)	(5.6)	3.4	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	○	○?			○?	△	a	良	○	
24	F－7 III	(9.2)	5.3	3.8	砂粒・微	淡黄茶褐色	○	○			○		a	普		

第73図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	F－8 III	8.2	5.2	3.1～3.6	砂粒・微	淡黄褐色	○	○			○		a'	普		
2	F－7 III	(8.3)	4.7	3.1	雲母・石粒・砂粒・微	淡白褐色	○	○			○		a'	良		
3	F－8 III	(8.2)	4.5	3.3	雲母	淡茶褐色 淡黄褐色	○	○			○		a	普	○	
4	E－7 III	(8.6)	5.2	3.4	砂粒・微	淡黄赤褐色 淡黄褐色	－	○			○		a	良	○	
5	E－7 III	8.8	5.4	3.7	雲母・砂粒・極微	淡灰黄橙色	○	○			○	△	b	良		
6	F－9 III	9.2	5.5	4.0	雲母・角閃石・砂粒・微	淡赤褐色	○	○			○	△	b	良	○	
7	F－7 Pit	(9.4)	(5.2)	3.9	混入物特になし	淡黄橙色	○	○		ナデ			b	良		
8	F－8 III	8.9	4.8	3.2～3.7	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	○	○				○	b	良	○	
9	F－8 III	(8.9)	5.2	3.6	雲母	淡黒褐色 灰褐色	○	○				○	b	普	○	
10	F－7 III	(8.8)	5.0	4.0	混入物特になし	淡黄褐色	○	○			○		b	良		
11	F－8 III	8.2	4.7	4.0	砂粒・微	淡赤黄褐色	○	?			○		b	良	○	
12	F－8 III	8.4	5.1	3.6	雲母	淡茶褐色	○	○			○		b	良好		
13	F－7 IIb	9.2	5.7	4.0	角閃石・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○		b	良	○	
14	E－8 IV	9.0	5.2	3.8	白色粒・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○	△	b	良	○	
15	G－8 SK62	9.4	5.8	3.7～3.8	雲母・白色粒	淡灰橙色 淡茶褐色	○	○			○		b	良	○	
16	F－8 III	8.4	5.3	3.7～4.2	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	○	○			△		b	普	○	

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
17	G－7 Ⅲ	9.1	5.2	3.8 ～3.5	砂粒・極微	淡茶褐色 淡黄橙色	○	○		ナデ	○		b	良		
18	F－8 Ⅲ	8.6	5.0	3.5	雲母・砂粒・微	淡茶褐色 淡黄橙色	○	○			○	△	b	良	○	
19	S X13	9.1	5.7	3.6	砂粒・極微	淡黄褐色	○	○			○	△	b	普		
20	F－8 Ⅲ	(9.0)	5.0	3.4	雲母・角閃石	淡茶褐色	○	○			○?		b	良		
21	F－8 Ⅲ	(9.1)	5.2	3.2 ～3.7	雲母・砂粒・中	淡茶褐色	○	○			△	△	b	良	○	
22	F－7 Ⅲ	(8.0)	5.3	3.5	混入物特になし	淡黄橙色	○	○			?	△	b	良		
23	F－8 Ⅲ	(8.8)	5.1	3.2	砂粒・極微	淡黄茶褐色	○	○		ナデ	○?	○	b	普	○	
24	F－7 Ⅲ	(8.6)	5.0	3.6	混入物特になし	淡黄褐色	○	○			○	○	b	良	○	
25	S X13	(8.2)	4.7	3.4 ～3.5	砂粒・少	淡茶褐色	○	○				△	b	普		
26	F－7 Ⅲ	8.5	5.4	3.3 ～3.4	雲母	淡黄褐色	○	○			○	△	b	良		

第74図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	E－8 Ⅲ	(8.2)	5.1	3.7 ～3.9	砂粒・極微	淡黄褐色	○	○			○	△	b	良		
2	F－7 Ⅲ	(8.7)	5.0	3.6 ～3.7	雲母	淡茶褐色	○	○			△	○	b	良	○	
3	E－7 Ⅲ	8.5	4.5	3.6	角閃石・砂粒・微	淡黄赤褐色	○	○			△	△	b	良	○	
4	F－8 Ⅲ	7.9	5.0	3.7	砂粒・微	淡褐色	○	○			△	△	b	良	○	
5	F－8 Ⅲ	8.6 (～) 9.2	5.2 ～ 5.8	3.1	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	○	○?				○	b	普	○	
6	G－8 S K62	(8.6)	5.0	3.5	雲母・赤色粒・砂粒・少	淡黄褐色	○	○			○	△	b	普		
7	E－8 Ⅲ	(8.3)	4.8	3.5 ～3.8	赤色粒・砂粒・微	淡茶褐色	○	○?			○?		b	普	○	
8	F－7 Ⅲ	9.0	5.4	3.3 ～3.4	雲母・砂粒・微	淡黄褐色	○	○			○	△	b	良	○	
9	F－8 Ⅲ	(9.0)	5.1	3.5	雲母・角閃石・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○		b	普	○	
10	F－8 Ⅲ	(8.5)	(4.7)	3.2	角閃石・砂粒・微	淡茶褐色	○	?		ナデ	○		b?	普	○	
11	Ⅱ区 Ⅰ	8.2	4.5	3.5	砂粒・微	淡黄褐色	○	?		ナデ			b	良		
12	F－8 Ⅲ	7.8	5.0	3.2 ～3.3	砂粒・微	淡黄褐色	○	○			○	△	b	普	○	
13	E－7 Ⅲ	(8.1)	4.7	3.4	砂粒・微	淡黄褐色	○	?			○		b	普	○	丹塗
14	G－7 Ⅱb	8.9	5.2	3.2	砂粒・微	淡黄褐色	○	○?			○	△	b?	良	○	
15	E－8 Ⅲ	9.5	3.6	2.9	砂粒・微	赤褐色	○	○			△	△	b	普	○	
16	E－8 Ⅲ	(8.0)	4.7	2.8	石粒・砂粒・微	淡黄褐色	○	?			○		b	普	○	
17	F－7 Ⅲ	(8.8)	5.7	3.8	角閃石・砂粒・微	淡黄褐色	○	○			○		b	普		
18	G－8 Ⅲ	(8.4)	5.9	3.9	砂粒・微	淡黄橙色 淡黄白色	○	○				○	b	普		
19	G－8 Pit	(9.0)	5.7	3.4	雲母・角閃石・砂粒・微	淡黄褐色	○	○			○		e	良		
20	F－8 Ⅲ	8.0	5.0	3.3 ～3.5	砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○	△	e	普	○	
21	F－8 Ⅲ	(9.2)	5.1	3.1	雲母・角閃石・砂粒・少	淡茶褐色	○	○		ナデ		○	d+e	普		
22	E－8 Ⅲ	8.4	5.5	3.5 ～3.6	雲母・砂粒・極微	淡茶褐色	○	○			○	△	e	普		
23	G－7 Ⅱb	(9.1)	5.6	3.6	砂粒・微	淡黄茶褐色	○	○			○		e	良		
24	F－8 Ⅲ	8.2	4.3	3.1 ～3.7	砂粒・極微	淡黄褐色	○	○			○	○	e	良	○	
25	G－8 Pit	(9.8)	(6.7)	4.0	白色粒・砂粒・微	淡黄褐色	○	○			○	○	f	良		
26	E－8 Ⅲ	9.2	4.7	4.0 ～4.6	雲母・角閃石・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○?	○	f	普	○	
27	E－7 Ⅲ	9.4	5.8	3.9 ～4.0	白色粒・砂粒・微	淡黄赤褐色	○	○			○	△	f	良		
28	G－8 Ⅱb	9.0	5.8	3.2	雲母・砂粒・微	明黄褐色	○	○			○	○	f	良		
29	G－8 Ⅱb	9.0	6.4	3.6	角閃石・砂粒・微	明褐色	○	○			△		f	良	○	

第75図

No.	グリッド層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	E－8 Ⅲ	(8.8)	4.9	3.5	砂粒・極微	淡黄褐色	○	○			○	○	c	良	○	
2	表採	(9.0)	5.5	4.1	砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○	○	c	普		
3	F－9 Ⅲ	(9.2)	5.5	3.9	雲母・角閃石・白色粒・砂粒・少	淡赤褐色	○	○			○		c	普		
4	F－7 Ⅲ	9.0	5.5	3.7～4.1	混入物特になし	淡黄褐色	○	?			△	△	c	普		
5	H－7 SK84	(9.0)	5.3	4.1	雲母・砂粒・極微	淡茶褐色	○	○			○	△	c	普	○	
6	F－7 Ⅲ	8.2	4.8	3.7	混入物特になし	淡黄橙色	○	○			○		c	良		
7	F－7 Ⅲ	9.0	5.1	3.3～3.4	雲母	淡茶褐色 淡黄褐色	○	○			△	○	c	良	○	
8	F－7 Ⅲ	(9.0)	4.9	3.4	砂粒・極微	淡黄茶褐色	○	○			○	○	c	良		
9	F－8 Ⅲ	(8.8)	5.5	3.4	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○	△	c	普	○	
10	E－7 Ⅲ	8.8	5.4	2.7	雲母・砂粒・少	淡黄褐色	○	○			○	△	c	良	○	
11	F－7 Ⅲ	(9.0)	5.8	3.3	雲母・砂粒・極微	淡黄橙色～淡黄茶褐色	○	○			○	○	c	良		
12	G－8 Ⅲ	8.4	5.0	2.9	雲母・砂粒・微	淡茶褐色 淡黄橙色	○	○			○	○	c	普	○	
13	G－7 Ⅱb	8.2	4.9	3.3	雲母・黒色粒・極微	淡橙色	○				○		c′	普	○	
14	G－8 Ⅲ	(9.2)	5.3	3.4	砂粒・微	淡黄橙色 濃黄橙色	○	○			○	○	c′	普	○	
15	F－6 Ⅱb	(9.4)	5.5	3.6～3.9	雲母・白色粒・赤色粒・微	淡赤褐色～淡黄褐色	○	○			○		c	良	○	
16	G－8 Ⅲ	8.2	5.3	3.0～3.3	雲母・赤色粒・砂粒・少	赤褐色	○	○			○	○	g	普	○	
17	F－8 Ⅲ	(9.0)	5.2	4.0	赤色粒・砂粒・少	茶褐色	○	○		ナデ	○		g	良	○	
18	E－7 Ⅰ・Ⅳ	(9.0)	5.4	3.2～3.4	白色粒・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○	△	g	良		
19	F－8 Ⅲ	(7.1)	4.8	3.5	砂粒・微	淡茶褐色	○	○		ナデ			e	普		
20	F－8 Ⅲ	9.2	5.9	3.5	雲母・砂粒・少	淡褐色	－	○			○?			普	○	
21	F－8 Ⅱb・Ⅲ	(9.1)	4.3	3.4～3.8	砂粒・微	淡茶褐色	○	○?		ナデ		○	?	良	○	
22	F－8 Ⅲ	(8.2)	5.4	3.6	雲母・角閃石・砂粒・極微	淡茶褐色	○	○			△		?	普	○	
23	F－8 Ⅲ	8.0	4.8	3.6	雲母・砂粒・極微	淡黄褐色	○	○			○		?	良		
24	F－7 Ⅲ	(9.2)	(5.5)	2.9	角閃石・砂粒・極微	淡茶褐色	○	?			?		?	普		
25	E－7 Ⅲ	(9.2)	5.5	3.3	雲母・赤色粒・砂粒・少	淡黄褐色	○	?		ナデ			?	普		

第76図

No.	グリッド層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	G－8 Ⅱb	8.1	6.2	2.8	雲母・砂粒・少	淡黄褐色	○	○			△		c	良	○	
2	F－8 Ⅱb	8.4	6.2	2.6	雲母・砂粒・少	淡灰褐色	○	○			△		c	良	○	
3	E－7 Ⅲ	8.0	6.3	3.2	角閃石・砂粒・少	淡赤黄褐色	－	○			○	○?	b	良	○	
4	G－8 Ⅱb	8.2	6.0	2.5～2.7	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○		d	普	○	丹塗
5	E－7 Ⅲ	(8.6)	(6.0)	2.3	雲母・角閃石・砂粒中	淡茶褐色～茶褐色	－	○			○		d	良好	○	
6	G－8 Ⅱb	8.0	6.4	2.8	石英・砂粒・少	淡茶褐色	－	○			○		g	良	○	
7	F－8 Ⅲ	(8.2)	(5.9)	2.5	砂粒・少	淡茶褐色	○	?			?		?	良	○	
8	G－8 Pit	8.6	6.6	3.2	雲母・粒砂・少	淡灰褐色	?	○			○		g	良	○	
9	F－8 Ⅲ	(8.4)	(6.2)	2.6	角閃石・砂粒・中	淡茶褐色	○	○			?		?	良	○	
10	G－8 Ⅱb・Ⅲ	(9.3)	7.4	2.3	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	○	○			○?		g	良好	○	
11	E－7 Ⅲ	(9.4)	(7.5)	2.2	砂粒・極微	淡茶褐色	－	○			?		?	良	○	
12	G－7 Ⅲ	(9.3)	(7.7)	2.2	砂粒・極微	淡黄茶褐色	－	○			?		?	良好		
13	E－7 Ⅲ	(9.5)	(7.3)	(2.2)	砂粒・極微	淡茶褐色	－	○			?		?	良	○	
14	F－8 Ⅲ	9.5	6.9	2.6	雲母・砂粒・中	淡茶褐色	○	○					g	良	○	
15	L－10 撹	(8.4)	6.2	2.3	密・雲母・赤色粒・極微	淡茶褐色	○	○		ナデ		○	g	良好		

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
16	G－8 Ⅲ	(9.1)	(6.5)	2.7	雲母・砂粒・少	赤褐色	－	○			○		g	良好	○	
17	G－8 Ⅲ	8.6	6.8	2.3	砂粒・微	明赤茶褐色	○	○			○?	△	g	普	○	
18	G－8 Ⅲ	8.1	6.4	1.9	混入物特になし	淡黄橙色 淡黄茶褐色	－	○			○	△	g	良好	○	
19	G－8 Ⅱb	7.6	5.6	2.5	雲母・砂粒・少	淡褐色	－	○					g	普	○	
20	G－7 Ⅲ	8.2	6.7	2.3	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	－	○		ナデ			g	良好	○	
21	G－7 Ⅱb	(7.7)	(5.2)	2.1	白色粒・砂粒・少	淡橙褐色 淡褐色	○	○			○		?	良好		

第77図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	F－8 Ⅲ	(7.9)	3.4	2.7 ～3.4	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	○	◎				○	a	良	○	
2	F－8 SP02	(7.7)	3.1	3.0 ～3.3	雲母	淡灰褐色 ～淡茶褐色	○	○		ナデ		○	a	良好		
3	F－8 Ⅲ	8.0	4.0	2.7 ～3.0	雲母・石粒	淡茶褐色	○	◎				○	a	良	○	
4	F－8 SD02	8.2	3.5	2.9 ～3.4	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			?	○	a	良好		
5	F－8 Ⅲ	8.4	4.1	2.9 ～3.3	砂粒・微	淡茶褐色	○	○		ナデ		○	a′	良好	○	
6	F－8 Ⅲ	8.2	3.3	3.2 ～4.1	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	○	?			?	○	a′	良	○	
7	F－8 Ⅱb・Ⅲ	(8.6)	4.4	3.1 ～3.9	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	○	○			○	○	a′	良	○	
8	F－8 Pit	8.8	4.1	3.0 ～3.2	雲母・砂粒・中	淡黒褐色 黒褐色	○	○?			○	○	a′	良	○	
9	F－8 Ⅲ	(8.2)	(3.9)	2.8	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	○	○			?	○	a′	良		
10	F－8 Ⅲ	(8.1)	3.4	2.6	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	－	?			○	○	a′	良	○	
11	F－8 Ⅲ	(8.5)	4.6	3.1 ～3.9	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	○	○?		ナデ		○	a′	普	○	
12	F－8 Ⅲ	(8.3)	4.4	2.8 ～3.4	雲母・角閃石・砂粒・少	淡灰褐色	○	○		ナデ		○	b	普	○	
13	F－8 Ⅲ	(8.6)	5.2	2.9	雲母・角閃石・砂粒・少	淡茶褐色 淡黄褐色	○	○		ナデ		○	b	良		
14	F－8 Ⅲ	8.2	4.3	3.1 ～3.7	雲母	淡灰褐色 灰褐色	○	○			?	○	b	良	○	
15	E－7 Ⅲ	(8.6)	3.5	3.0 ～3.5	雲母・砂粒・少	淡茶褐色	○	○			○?		b	良		
16	F－7 Ⅲ	(8.3)	(3.8)	3.3	混入物特になし	淡茶褐色	○	○?		ナデ	○	○	b	良好	○	
17	F－7 Ⅲ	(8.2)	4.9	3.1	雲母	淡茶褐色	－	○			△		b	良好		底部粘土で補
18	G－7 Ⅲ	8.2	3.6	2.6	雲母・砂粒・極微	淡黄褐色 灰褐色	○	○			○?	○	b	良好	○	
19	F－7 Ⅲ	(8.3)	3.9	2.7	雲母・砂粒	淡灰茶褐色 淡茶褐色	○	○		ナデ	○		b	良	○	底部粘土で補
20	F－7 Ⅲ	(7.9)	(4.1)	2.4	角閃石・雲母・少	淡茶褐色	○	○			?		?	良		
21	H－6 Ⅲ	(9.7)	6.0	3.5	雲母・砂粒・極微	淡茶褐色	－	◎			○	○	a	良	○	
22	F－7 Ⅰ・Ⅲ	(8.0)	(4.6)	2.8	雲母・砂粒・中	淡茶褐色 淡灰褐色	－	○			△		a′	良好	○	
23	F－8 Ⅲ	(6.8)	4.2	2.2	雲母・砂粒・微	淡茶褐色	－	?		ナデ			?	良	○	
24	F－6 Ⅱb	(9.3)	(5.3)	2.7	雲母・微	淡茶褐色	－	○			○		?	良		
25	H－6 Ⅱb	(9.2)	5.3	2.0 ～2.2	密・雲母・赤色粒・砂粒・極微	淡茶褐色	－	◎					a′	良		
26	F－8 Ⅲ				雲母・砂粒・微	淡茶褐色	－	○			○		d?	良		ヘラ記号×

第78図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	器高	高台径	高台高	胎土	色調(外/内)	調整 切り離し	外底	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	E－8 Ⅲ			(8.0)	2.8	密・雲母・砂粒・少	淡茶褐色		ナデ		d	普		
2	G－7 Ⅱb			(7.2)	1.4	雲母・角閃石・砂粒・極微	淡赤褐色 淡茶褐色		ナデ		d	良		丹塗
3	G－7 Ⅱb	(15.4)	5.7	(10.0)	1.3	密・砂粒・極微	赤褐色 淡茶褐色		ナデ		?	良好		丹塗
4				(7.2)	1.1	雲母・砂粒・微	淡灰褐色	ヘラ	ナデ 圧痕?		d	良好		

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	器高	高台径	高台高	胎土	色調(外/内)	調整 切り離し	外底	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
5	H－6 Ⅲ			8.4	2.4	雲母・角閃石・砂粒・中	淡茶褐色	ヘラ	テ　デ		d	良好		
6				6.8	1 ～1.2	密・砂粒・微	淡白褐色		ナ　デ		d	良好		
7	H－7 Ⅲ	13.4	6.0 ～6.1	7.9	1.8	密・雲母・砂粒・極微	淡白褐色		ナ　デ	△	d	良好		
8	H－6 Ⅱb	13.8	6.0 ～6.2	7.7	1.8	密・雲母・砂粒・極微	淡白褐色	ヘラ	ロクロ ナ　デ		d	普		
9	H－5 Ⅱb			6.7	1.2	赤色粒・砂粒・中	淡茶褐色	ヘラ	ナ　デ		d	良		
10	Q－13 Ⅱ			(7.8)	0.8	赤色粒・砂粒・中	淡黄褐色	ヘラ	ナ　デ		d	良		
11	F－9 Ⅲ			8.0	0.5	砂粒・少	淡赤黄褐色 淡褐色	ヘラ	ナ　デ		d	良	○	
12	F－8 Ⅲ			7.5	0.9	雲母・砂粒・微	淡黄褐色	ヘラ	圧　痕		d	良		

第80図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整	焼成	備考
1	G－6 Ⅲ上	(14.2)	(9.6)	4.0 (0.6)	砂粒・微	灰白色	ナデ	良好	
2	G－6 Ⅲ下	(14.2)			砂粒・微	灰白色	ナデ	良	
3	G－8 Ⅱb・Ⅲ	(13.0)			砂粒・微	灰色	ナデ	良好	内・スス
4	F－8 Ⅱb	(11.0)			砂粒・微	灰白色	ナデ	良	
5	G－8 Ⅱb		(6.2)		砂粒・微	灰色	ナデ	良好	
6	G－6 Ⅲ		(8.4)	(0.5)	砂粒・微	灰白色	ナデ	良好	
7	G－8 Ⅱb				砂粒・微	灰白色		良好	
8	G－7 Ⅲ				砂粒・微	灰白色	平行タタキ	良	
9	H－9 Ⅲ				砂粒・微	灰黒色 灰色	外・格子タタキ 内・同心円タタキのあとナデ	良好	
10	O－13 Ⅱ				砂粒・微	灰褐色	外・平行タタキ 内・同心円タタキ	良好	
11	H－6 Ⅱb				砂粒・微	灰色	外・格子タタキのあとナデ（？） 内・平行タタキ	良好	
12	G－7 Ⅱb				砂粒・微	茶褐色 灰色	外・平行タタキのあとナデ 内・平行タタキ	良好	

第81図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径 高台脚径	器高 高台脚高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	G－8・F－8 Ⅱb・Ⅲ上下	13.4	6.5	5.0	砂粒・微	淡茶褐色 黒色							ヘラ 磨き	良		ヘラ 磨き
2	G－8 Ⅱb	(15.2)	(8.6)	4.1	雲母・砂粒・微	赤褐色 黒色				ナデ				良好		ヘラ 磨き
3	G－8 Ⅲ上	(16.4)			砂粒・微	淡褐色 黒色										ヘラ 磨き
4	G－8 Ⅱb・Ⅲ下	(11.5)	5.4	3.3 ～3.7	砂粒・少	灰褐色 黒色		○		ナデ			ヘラ 磨き	良		外・ヘラ削り 内・ヘラ磨き
5	G－7・H－6 Ⅱb・Ⅲ上	(21.0)	9.0	8.4	雲母・砂粒・微	淡茶褐色 黒色		○		ナデ			d＋ ヘラ磨き	良		内・ヘラ磨き
6	F－7 Ⅱb・Ⅲ上		6.5	1.1	赤色粒・砂粒・微	淡茶褐色 黒色				ナデ			ヘラ 磨き	良		内・ヘラ磨き
7	F－8 Ⅲ上			(8.6)	雲母・砂粒・微	淡茶褐色 黒色				ナデ			ヘラ 磨き			内・ヘラ磨き
8	F－8 Ⅲ下				雲母・砂粒・微	赤褐色 黒色								良		ヘラ磨き 墨書
9	F－8 Ⅲ上・下	(11.4)			雲母・砂粒・微	赤褐色 黒色								良		ヘラ 磨き
10	F－8・G－8 Ⅱb・Ⅲ上下	(11.0)			赤色粒・砂粒・微	赤褐色 黒色				ヘラ 磨き			ヘラ 磨き	良		ヘラ 磨き
11	F－8・G－8 Ⅲb・Ⅲ上下	(13.0)			雲母・砂粒・微	赤褐色 黒色										ヘラ 磨き
12	E－7 Ⅱb・Ⅲ上	(13.6)			雲母・砂粒・少	赤褐色 黒色								良		ヘラ 磨き
13	G－8 Ⅱb		(11.0)	2.5	雲母・砂粒・微	赤褐色 黒色				ヘラ 磨き			ヘラ 磨き	良		ヘラ 磨き
14	F-8・G-7・8 Ⅲ上下	(15.2)			雲母・砂粒・微	赤褐色 黒色				ナデ			ヘラ 磨き	良		ヘラ 磨き
15	F－8・F－9 Ⅲ上	(14.6)	10.1	9.4 2.5	雲母・砂粒・微	赤褐色 黒色								良好	○	ヘラ 磨き
16	G－8・F－8 Ⅲ上下		(9.9)		砂粒・微	赤褐色 黒色							ヘラ 磨き	良		ヘラ 磨き
17	F－8・9 Ⅱb・Ⅲ上		(10.1)		砂粒・微	茶褐色 黒色				ナデ			ヘラ 磨き	良		ヘラ磨き 脚外円墨

第82図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 ヘラ削り	切り離し ヘラ	糸	外底	圧痕	ヘラ記号	内底	焼成	スス	備考
1	G－7 Ⅲ下				雲母	淡茶褐色								良好		
2	H－6 Ⅲ				雲母・赤色粒	赤褐色								良		
3	H－6 Ⅲ上				角閃石・赤色粒	灰褐色								良好		
4	F－8 Ⅲ上				雲母・砂粒	淡褐色	○	○		ナデ?			d?	普		
5	O－13 P. 9	(13.0)	7.0	5.3	密・雲母・赤色粒	淡茶褐色	○	○			△		g	良	○	
6	G－8 Ⅱb・Ⅲ上	(14.6)	(7.0)	5.9	雲母・砂粒・微	赤褐色	○	○?					d	普		
7	E－7 Ⅲb		(7.6)		密・雲母・角閃石・赤色粒	淡茶褐色	○	○				○	d	良		
8	G－8 Ⅲ下	(13.4)	(7.0)	4.4	密・雲母・角閃石・赤色粒	淡茶褐色	○	○			○		g	良	○	
9	G－8 Ⅱb・Ⅲ上	(12.0)	6.7	4.7	密・雲母・赤色粒・砂粒・微	茶褐色 灰褐色	○	○		ナデ			d	良		
10	I－10 地層横転				密・砂粒・微	淡褐色	○						g	良		
11	G－8 Ⅱb・Ⅲ下	(13.2)	7.3	4.6	密・雲母・赤色粒	淡茶褐色	－	○					d	良	○	
12	G－8 Ⅲ上		(7.7)		雲母・角閃石・赤色粒	淡茶褐色	－	○					g	良	○	
13	G－8 Ⅱb・Ⅲ下	(12.6)	(6.9)	4.7	雲母・角閃石・赤色粒	淡茶褐色	○	○					d	良	○	

第83図

No.	グリッド 層	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整	焼成	備考
1	G-5・G-5 Ⅱb・Ⅲ	(16.4)	6.3	6.9	密・不純物なし	緑青色釉	高台底から外底部は露胎	良好	青磁椀
2	H－5 Ⅰ				密・不純物微	粱緑青色釉		良好	青磁
3	H－6 Ⅱb				密・不純物なし	緑青色 貫入有		良好	青磁
4	F－5 Ⅱb				密・不純物なし	緑青色釉 貫入有		良好	青磁
5	F－7 Ⅱ・Ⅲ・攪				密・不純物なし	緑青色釉	外底部露胎	良好	青磁
6	F－6 Ⅱb				密・不純物なし	緑青色釉		良好	青磁
7	Ⅰ				細砂粒・微	灰白色釉		良好	白磁
8	G－7 Ⅱ・Ⅲ・攪				密・不純物なし	淡青緑色釉		良好	青磁

第84図

No.	グリッド 層	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	胎土	色調(外/内)	調整	焼成	備考
1	Ⅲ区 表土	7.1	2.0	0.5	24.24	密・雲母	明茶褐色	ナデのあと線刻	良	
2	Ⅱ区 Ⅰ	6.1	2.2	0.45	26.11	密・雲母・白色粒	淡赤褐色	ナデのあと線刻	良	
3	Ⅲ区 表土	(3.8)	1.75	0.55	9.54	密・雲母	淡茶褐色	ナデのあと線刻	良	
4	Ⅱ区 Ⅰ	5.4	2.35	0.45 ～0.6	22.82	密・雲母	淡茶褐色	ヘラ削りのあとナデ、線刻	良	
5	V－15 攪	(5.0)	2.15	0.5		密・砂粒・微	淡茶褐色	ヘラ（?）のあとナデ	良	
6	M－13 Ⅰ	5.7	2.15	0.5		密・雲母	淡茶褐色	粗いナデ	良	
7	Ⅱ区 Ⅰ	4.7	1.9	0.5	13.81	密・雲母	明淡褐色	ナデのあと線刻	良	
8	Q－13 Ⅱ	(4.45)	1.7	0.4	10.83	密・雲母・砂粒・極微	淡茶褐色	ヘラ削りのあとナデ	良	
9	R－14 Ⅱ	(4.7)	1.95	0.5	11.42	密・雲母	淡茶褐色	ヘラ削りのあとナデ	良	
10	Ⅲ区 表	4.9	2.2	0.5	17.90	密・雲母	淡茶褐色	ナデ	良	
11	H－7 Ⅱb	4.7	1.9	0.25	12.54	密・白色粒	淡茶褐色	ヘラ削りのあとナデ	良	
12	R－12 Ⅲ	4.7	2.0	0.65	15.40	密・雲母	淡茶褐色 ～灰褐色	ヘラ削りのあとナデ	良	
13	Ⅳ区 Ⅰ	(4.4)	1.95	0.4		密・雲母・砂粒・微	淡茶褐色 ～淡灰褐色	ヘラ（?）のあとナデ	良	

第Ⅳ章　まとめ

第１節　江戸時代の調査について

１．遺構分布

検出した遺構は、１号土壙・２号土壙・１号不明遺構・１号溝跡～５号溝跡である。これらの遺構は、調査区の全体に広がるのでなく、ある程度限られた範囲に分布する。遺構の分布範囲は、調査区全体のほぼ中央部である。この部分は、Ｉ区の南西端部から東端部にかけての箇所であり、調査区の中で最も標高が高い所にあたる（標高約144.25～145.50m）。

遺構各々の分布状況を見ると、遺構分布範囲の中で、最も低い東側端部に位置するのが１号不明遺構である。逆に、最も高い南西端部に５号溝跡が位置する。この１号不明遺構寄りに分布するのが１号溝跡であり、５号溝跡に近接して４号溝跡が分布する。１号不明遺構と５号溝跡のほぼ中間地点に位置するのが、２号溝跡・３号溝跡・１号土壙・２号土壙である。また、溝跡と土壙の位置関係から見れば、１号溝跡と３号溝跡とに挟まれた箇所の３号溝跡寄りに、１号土壙が位置する。２号土壙は３号溝跡に近接して分布する。

２．１号土壙について

１号土壙より、和鏡（懐中鏡１）、銅製品（鍵金具・蝶番片・飾り金具・縁金具・棒状製品）[(1)]、鉄製品（小刀１）、磁器（蓋付き小椀１・合子１）、紙片、布片が一括して出土した。

銅製品の金具類の一部には、木質が付着している。このことより、出土した金具類は、木箱などの木製品に付属する部品と思われる。これらの遺物の他に、木炭や炭化物を土壙内より検出した。一括出土の遺物に火を受けた痕跡があること、遺物の種類、遺物の検出状況を合わせて判断すると、土壙内で出土遺物を収めた状態の小箱を燃やしたと考えられる。磁器２点は江戸時代初期のものであろう。

３．その他の遺構と遺物について

１号土壙以外に、３号溝跡より時期を判断できる遺物が出土した。３号溝跡より出土した遺物のなかで、最も新しいものは江戸時代中期～後期頃のものである。また、１号不明遺構の覆土より、江戸期の陶磁器の小破片が出土した。

遺構の覆土を比較すると、１号土壙以外の遺構覆土は、１号土壙の覆土に類似する。出土遺物の時期と遺構の覆土が類似することを考えれば、２号土壙・１号不明遺構・１号溝跡～５号溝跡は、江戸時代初期から江戸時代中期にかけて作られ、江戸時代後期まで一部が存続したと考えられる。

上記の遺物以外に、Ⅰ層より出土した空風輪（室町時代～江戸時代）、台地平坦面の南西端部より出土した元禄１５年の銘をもつ板碑、その板碑の台座（文明６年の銘をもつ地輪を再利用）がある。

註（1）　同一製品としての同定が困難なため、銅製品の正確な個体数は、不明である。

第２節　平安時代～鎌倉時代の調査について

検出した遺構は、覆土より大きく（1）・（2）の遺構群に分けた。（1）の遺構群は、Ⅱａ層とほぼ同一か類似した黒色砂質土・淡黒色砂質土を覆土にする遺構とⅡａ層をベースにした覆土をもつ遺構で構成される。（2）の遺構群は、Ⅲ層とほぼ同一か類似した暗褐色土・黒褐色土を覆土にする遺構よりなる。

１．（1）の遺構群について

この遺構群は、Ⅱａ層が存在する範囲とほぼ重なるⅢ区・Ⅳ区に限って分布する。遺構群は、１号竪穴住居址・１号～６号土壙・１号炉穴・ピット79基で構成される。

これらの遺構は、分布状況より、２グループに分けることができる。それらは、１号竪穴住居址とそれを中心にして分布する２号～６号土壙・ピットで構成されるグループと１号炉穴・１号土壙・ピットで構成されるグループである。（1）の遺構群では、前者のグループの方が遺構数が多く、中心的なグループと言える。後者のグループは、前者のグループの南側に離れた状態で分布し、孤立的な存在である。

１号竪穴住居址

住居址の東壁にはカマドがある。住居址の断面形は深い皿状になり、床面の硬化状態は顕著でない。覆土は上下２層に分かれ、上層より遺物の殆どが出土した。出土遺物には、糸切りの底部をもつ土師器坏・皿類や須恵質の擂鉢などがあり、小破片が多い。

１号土壙

土壙内の壁面及び床面直上より、９個体の土師器坏・皿類が一括出土した。出土地点は、大きく土壙内の北側・西側・南側の３箇所に分かれる。出土した土師器は、すべて糸切りの底部をもち、法量からＡ類・Ｂ類に分けることができる。Ａ類は口径約12.35～13.20cm、底径約6.0～8.4cm、器高約3.65～4.60cm。Ｂ類は口径約7.80～8.10cm、底径約3.80～4.80cm、器高約2.20～2.55cm。

２号～６号土壙

各土壙の平面形は、楕円形もしくは略楕円形である。断面の基本形は、深い皿状であり、中

には床面よりさらにピットを掘り込んでいるものもある。２号～６号土壙に伴う遺物は、出土していない。

１号炉穴

１号炉穴は、不整楕円形の平面形で、断面形は浅い皿状になる。土壙の覆土より、焼土と木炭片が出土した。

２．IIａ層出土の遺物について

IIａ層より出土した308点の土師器坏・皿類は、殆どが小破片であり、底部が確認できるものは、すべて糸切りである。その分布は、大きく次の四つに分けることができる。(1) １号竪穴住居址北側部分のＯ－14・15グリッド。(2) Ⅳ区南西隅のＱ－17・18、Ｒ－17・18グリッド。(3) Ⅰ区南西部の標高が最も高い部分。(4) Ⅲ区の北東部を除いたほぼ全域。以上の四箇所の中で、出土遺物の分布密度が高いのが (1) ・ (2) の範囲で、低いのが (3) ・ (4) の範囲である。

出土した糸切り底の土師器坏・皿類は、小破片であるため、実測可能なものが少ない。法量を計測できたものはさらに少なく５点であり、それを分類した。３点は先述した１号土壙出土のＢ類とほぼ同じであり、２点が新しくＣ類に分類できた。Ｃ類は口径約9.10～9.60cm、底径約6.20～6.60cm、器高約2.30～2.50cmである。

底径（復元底径）と器高の各々１項目だけが計測できる破片を１号土壙出土のＡ類・Ｂ類と比較してみた。底径が計測可能なものの中で、10点はＡ類の底径とほぼ同じで、１点がＢ類とほぼ同様な底径であった。Ａ類よりやや大きい底径をもつものが１点ある。器高が計測可能なものの中で、１点がＡ類の器高とほぼ同じで、２点がＢ類の器高とほぼ同一であった。

３．(2) の遺構群について

(2) の遺構群の殆どは、4142基のピットよりなる。ピットは調査区のほぼ全域に分布するが、その中でも、Ⅰ区北東部の緩傾斜地にピットが密集する。この密集するピットの中で、３号～23号の掘立柱建物跡が確認でき、これらの掘立柱建物跡のほぼ中央部に礎石を伴う２号建物跡を検出した。掘立柱建物跡の柱列以外に、ピットの底にヘラ切り底の土師器坏１点を置いた１号ピットを確認した。これらの遺構の他に、７号～17号の土壙と１本の道路跡がある。土壙は掘立柱建物跡が分布する範囲内に存在する。道路跡は、２号建物跡、18号・19号掘立柱建物跡と22号掘立柱建物跡のほぼ中間地点にあり、北西方向から南東方向にのびる。

２号建物跡

２号建物跡は３間×２間の総柱建物跡である。礎石と礎石を据えた穴を検出した。検出した12基の礎石は、すべて自然石である。礎石を据えた穴の中で、Ｐ３・Ｐ11の底面より、それぞれ土師器片1点が出土した。Ｐ11出土の土師器片は小片のため詳細は不明である。Ｐ３出土の土

師器坏は、ヘラ切りの底部をもつ。

2箇所の柱列に沿って、深掘りした結果、次のことが判明した。礎石を据える穴は、その下面にあるピット肩部の上位から掘り込まれている。そのピットは、掘立柱建物跡柱列のピットではないが、それと同じ覆土をもつ。礎石を据える穴の下部の土層は、自然堆積層で、整地は行われていない。

3号～23号掘立柱建物跡

掘立柱建物跡を規模別にまとめると次のようになる。

4間×3間：9・11号掘立柱建物跡。

3間×3間：6・13・14・16号掘立柱建物跡。

3間×2間：8・12・15・17・19～23号掘立柱建物跡。

2間×2間：5・7・10・18号掘立柱建物跡。

3間以上×3間：3号掘立柱建物跡。

2間以上×2間：4号掘立柱建物跡。

1号ピット

ピット底面のほぼ中央部に、土師器坏が口縁部を上にした状態で置かれていた。この坏は、ヘラ切りの底部で口縁部の一部を欠いている。体部・底部の内外器面には丹塗りの痕跡がある。口唇部から口縁部直下にかけて、ススが付着している。

道路跡

道路跡はⅢ層上に形成されており、硬化面が顕著である。道路跡がのびる方向より、道路跡は、遺跡が立地する台地を横切る状態で存在したと考えられる。硬化面より、龍泉窯系青磁片・土師器坏・皿類片などが出土した。土師器坏・皿類の底部は、ヘラ切りと糸切りの両者がある。

7号～18号土壙

これらの土壙を平面形で分けてみる。

円形：13号土壙。

楕円形：10号土壙。

略楕円形：7・14・16～18号土壙。

不整形：8・11・12・15号土壙。

9号土壙は、二つの土壙が重複しており、東側の土壙が西側の土壙を切っている。東側の土壙は不整形、西側の土壙は円形を呈する。

以上の土壙を大きさ（大・中・小）でみると次のようになる。

小形：7・9・11・13～15号土壙。

円形な土壙は径約0.85m。楕円形な土壙は約1.00～1.05m×約0.70～0.75m。不整形な土壙は最大長約1.30～1.70m、最大幅約0.95～1.15m。

中形：８・10・12・16・18号土壙。

楕円形な土壙は約1.40～2.50m×約1.15～1.80m。不整形な土壙は最大長約2.05～3.30m、最大幅約1.45～1.90m。

大形：17号土壙。

17号土壙は略楕円形で約3.90×約2.90mを測る。

以上の７号～18号土壙からは、土壙に伴う状態の遺物は出土していない。

４．遺物について

ヘラ切り底の土師器

ヘラ切り底の土師器としてＤ～Ｇ類に分類したものは、器形でいうならばいわゆる坏と皿と椀である。しかしながら土師器に関しては、器形が必ずしもある一定の概念を示すとは限らないため、記号を付して呼ぶことにした。

さて、今回分類するにあたり基準としたのは、各々の土器の法量であり、もちろん復元値も含んでいる。口径によりＤ～Ｇ類、それに底径との関係を考慮してⅠ～Ⅳ類に、更に調整法等の要素を加えて分類した各グループの特徴の概略を述べてきた。これに器高との関係を加味して作成したのが次頁の表である。資料数の不足、あるいは分類の不備のため、データが充分でないものもあるが、大まかな傾向は把えることができる。

ここで、土器の調整について、個々の説明で述べることのできなかったことについて若干の補足をしてみたい。

体部下半を回転ヘラ削りする技法は、八代市の洗切遺跡出土の一連の土師器の中に見ることができる。(1) 古代（奈良時代後期～平安時代前期）に属するもので、器形は坏と皿で、その中の一部がヘラ削りを施されている。当天道ケ尾遺跡のＤ類よりも口径は大きいものが多い。しかし、時期的にも、ほとんどが体部の底部近くのみをヘラ削りしている状態も、天道ケ尾遺跡と似ている。また、太宰府では、底部糸切りの土師器に伴い、鎌倉時代中期頃から、底部近くのみヘラ削りを施されている坏が量を増し、室町時代の土師器坏には、全面にヘラ削りの残っているものも多いようである。(2) 天道ケ尾遺跡で出土した糸切り底の土師器にはヘラ削りされているものはないので、ある時期には断絶してしまう技法であるのではないか、と考えている。具体的な時期等については結論はでないが、糸切り底の出現以前であることは間違いなかろう。天道ケ尾遺跡でのヘラ削りは、口径の大きなものより小さなものに多く見られる。またＤ類では、グループ内でも器高の高いものに多いが、Ｇ類ではヘラ削りのないものは、ごくわずかである。Ｅ・Ｆ類はグループによってまちまちである。

ヘラ記号については、Ｇ類に特徴的に見られる。天道ケ尾遺跡の土師器底部に見られるヘラ記号は、「ヘラ記号を持つ土器」として別項で取り上げたもの（第77図26）以外は、全て❗であ

る。細いヘラで、外底部をシャープに半分割するようなものもあるが、多くは外底の中心部近くから、押さえるように幅広く強く始まり、外に向かって次第に細くなり、底径の1/2～1/3程度の長さで自然に消える。遺物観察表に△印を付しているものは、記号と呼ぶには太く、浅く、弱いものである。あるいは記号ではなく、例えばヘラ切りの際のヘラ抜き痕のような、外底部の一種の調整痕として把えて良いものもあるのではなかろうか。

分類記号	高				中				低			
	ヘラ削り	ヘラ記号	内底調整	ススス	ヘラ削り	ヘラ記号	内底調整	ススス	ヘラ削り	ヘラ記号	内底調整	ススス
D－Ⅰ	◎	－	d	33	△	△	d・(f)	43	(－	－	d	－)
D－Ⅱ	◎	－	d	100	－	－	d・g	40	－	－	g	100
D－Ⅲ	○	－	d	100	△	－	d・g	33	－	－	種々	100
D－Ⅳ	△	－	d	66	△	－	d	50	(－	－	d	－)
D－Ⅴ	◎	－	d	57	(－	－	g	50)				
E－Ⅰ－a	－	○	種々	－	(◎	－	d＋g	100	○	－	d	40
E－Ⅰ－b	－	－	d・(f)	18	△	△	d・(g)	74				
E－Ⅰ－c	(◎	－	d	－)	－	－	d	100				
E－Ⅱ												
E－Ⅲ												
F－Ⅰ	◎	△	c・d など	69	◎	△	a・d	56				
F－Ⅱ－a					－	○	d＋g	80				
F－Ⅱ－b					△	－	d	100				
F－Ⅲ－a	◎	－	d	63								
F－Ⅲ－b									◎	－	d	－
F－Ⅳ－a									△	－	b・c e	23
F－Ⅳ－b	(											)
G－Ⅰ	◎	－	a	－	◎	○	a	50	◎	◎	a・b	66
G－Ⅱ	(				◎	◎	種々	53				)
G－Ⅲ									○	△	c・d g	88
G－Ⅳ－a					◎	◎	a・b	68				
G－Ⅳ－b	(											)

◎ほとんど、◎多い、○半分、△わずか、－なし　※ススの数字は百分率(%)

内底部の調整の違いは、器形とも関連があると思われる。口径の大きなものは、必然的に底部は広くなり、その分底部を補強する必要がある。底部が小さく、その割に底部の厚いものは、底部に特に調整を必要としない。よって、D～F類は内底部に別にナデ（d）調整を施し、G類は、底部から口縁部までロクロを用いてナデ上げる（a・b）のみなのである。そのためG類の内器面は、底部と体部の境がなく丸くなっているものが多い。ただし、G類に特に多く見

られる、指先かヘラ先様のもので、稜ができる程強く渦巻状にナデる技法については、説明し難い。内底部全体をナデるもの（ｆ）と内底部中央のみ外から内へナデるもの（ｃ）があるが、近くに類例を認めることができなかった。ナデることにより確かに底部は強化されるであろうが、稜のために内底部はかえって凹凸になる。内底部が凹凸であっても使用には支障はなかったのであろうか。底部の調整にこだわったのか、それとも逆に簡略的な手法であろうか。

さて、この表によってこの項のまとめとしたいが、前述したように、分類の指標はあくまで机上の数的処理に依っている。そのためこれらのグループはどんな意味を持つ、あるいは持たせることができるのかという問題は考察編に譲ることにする。

最後にこれらの土器についての時間的問題である。土器のほとんどはⅡｂ層かⅢ層、あるいはピット覆土（つまりⅡｂ層・Ⅲ層類似層）からの出土である。多くの土器はⅡｂ層・Ⅲ層間で接合しているため、層によって時間の相異を把えることは難しく、別の方法を採らねばならないと思われる。

註（1）　佐藤伸二　『洗切遺跡調査報告』　八代市洗切遺跡調査団　1982年

註（2）　前川威洋　『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』　第２集　福岡県教育委員会　1975年

須恵器

須恵器は、Ⅱａ層より１点、Ⅱｂ層・Ⅲ層より15点が出土した。Ⅱｂ層・Ⅲ層での須恵器の分布状況は、Ⅰ区の遺物集中範囲内で散在状態を呈する。

出土した須恵器は、坏・高台付坏・甕である。

黒色土器

黒色土器は、Ⅰ区のⅡｂ層・Ⅲ層より73点が出土した。その分布範囲は、Ｇ－７・Ｈ－６グリッド、Ｅ－７グリッド、Ｆ－８・Ｇ－８グリッドの三箇所に大きく分かれ、これらの中で、Ｆ－８・Ｇ－８グリッドでの出土量が最も多い。黒色土器の分布範囲と建物跡分布箇所を比較すると、２号・13号～16号・18号～21号建物跡が位置する部分と重なる状態で、黒色土器が分布する。

黒色土器には、上記の三箇所の各々の範囲内で強い接合関係が存在する。黒色土器は、限られた範囲で出土し、その接合関係や建物跡分布箇所との比較より、２号・13号～16号・18号～21号建物跡に付随する状態で、使用されたと考えられる。

出土した黒色土器は、内器面を燻したＡ類だけで、坏・鉢・台付鉢の器形がある。

墨書土器

出土した墨書土器20点は、すべてが土師器坏である。それらの殆どは、Ⅰ区のⅡｂ層・Ⅲ層より出土し、黒色土器と同様な分布状況を呈する。

墨書土器の中で、底部が残存しているものは、ヘラ切りの底部をもつ。墨書部分は、外底部

と体部外器面の二箇所である。墨書内容は、円を記号的に書くものと、「西」・「井上」・「井ノ上」の文字を書くものがある。

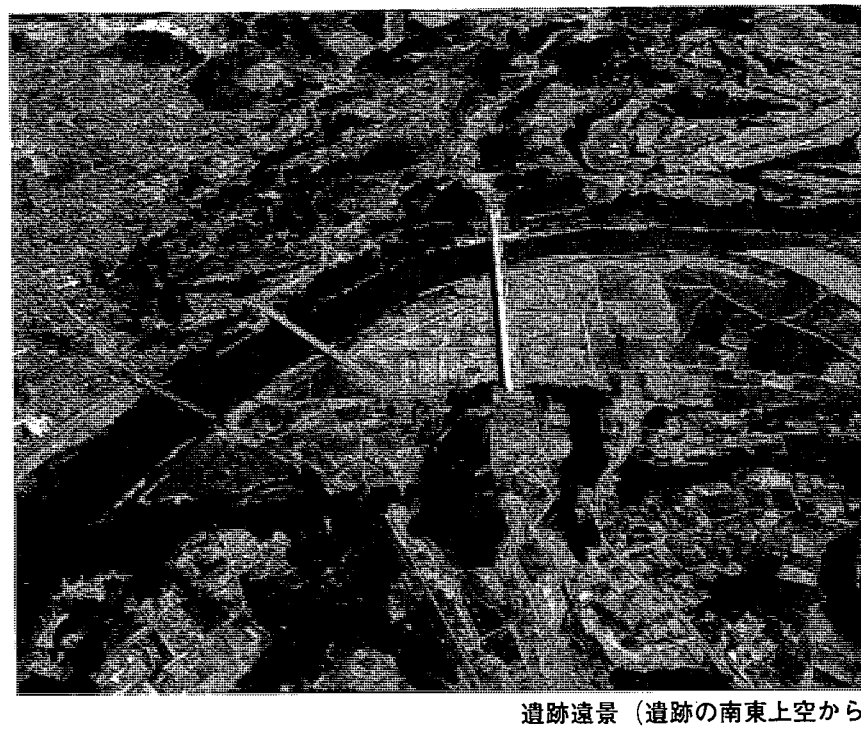
青磁・白磁

白磁はⅠ層より出土した。青磁は龍泉窯系青磁であり、Ⅲ・Ⅳ区のⅡａ層より10点、Ⅰ区のⅡｂ層・Ⅲ層より11点が出土した。これらの殆どは小破片で、Ⅱａ層とⅡｂ層・Ⅲ層での分布状況は、集中した状態を呈さない。青磁の分布範囲は、黒色土器・墨書土器の分布範囲とは異なる傾向を示す。

土錘

土錘はすべて土師質の管状土錘で、17点出土している。Ⅱ層より２点、Ⅱｂ層より１点、Ⅲ層より１点が出土し、その他はⅠ層より出土したものである。

出土した土錘の中には、胴部や上下端部の小口面に凹線文が施されているものがある。土錘に文様は不用であるため、文様をもつ土錘は実用品とは考えられない。



遺跡遠景（遺跡の南東上空から）

第Ⅴ章　考　　察

第１節　江戸時代の調査について

１．１号土壙出土遺物について

１号土壙より出土した遺物は、和鏡・銅製品・鉄製品・磁器・紙片・布片である。

和鏡

和鏡の左端部には、「木瀬大和守藤原信喜」の鏡師銘がある。この鏡師銘に類似したものに、「木瀬大和守藤原信善」[1]と「木瀬大和守藤原信嘉」[2]がある。「信善」と「信嘉」は、明暦年間（1655年～1657年）の鏡師名である。和鏡と共伴している磁器は、江戸時代初期頃のものであり、磁器の年代を考慮すれば、この和鏡の製作年代も「信善」・「信嘉」とほぼ同じ明暦年間の年代が考えられる。鏡の背面中央部には、丸に剣梅鉢の家紋がある。この家紋は相良家の家紋であることより、鏡の所有者は、相良家の人か相良家に関係ある人であろう。また、鏡の背面には、布片が付着している。この布片は、懐中鏡を携帯する入れ物の布片が付着したものと思われる[3]。

銅製品

銅製品の裏面にある鋲の一部に、木質が付着していることより、銅製品の中で、鍵金具・蝶番・飾り金具・縁金具は、木製品に付属する部品と考えられる。その木製品は、出土した遺物を収めるための箱状のものであろう。後述する出土遺物の性格を考えると、木製品としては、鏡台類が考えられる。江戸時代の鏡台は、鏡かけの部分と化粧道具を入れる化粧箱の部分からなる[4]。出土した鍵金具・蝶番・飾り金具・縁金具は、主に鏡台の化粧箱の部分に使用されたと思われる。

以上の銅製品の他に、棒状製品がある。これは、薄い銅板を曲げて環状にしたもので、内部は空洞になっている。この棒状製品は、空洞部分に何かを挿入して使用したと考えられる。その他の遺物の性格を考えると、化粧道具としての製品を考えるのが理解しやすい。化粧道具の棒状製品としては、紅筆・羽楊枝が考えられる。羽楊枝は歯黒めの時に使用するものである。

歯黒めは、羽楊枝に温めた鉄漿水を浸けて、何回も歯面に塗りつける[5]。羽楊枝は、鳥の羽や胸毛を材料として用いる。鳥の羽や胸毛は、鶴・雉・おしどりのものが使われ、それを三つ程束ねて先を揃える[6]。当時の化粧としては、紅よりも歯黒めの方が重要視されているため[7]、出土した棒状製品は、空洞部分に鳥の羽や胸毛を挿入した羽楊枝と考えた方が妥当性がある。

鉄製品

出土した鉄製品は小刀である。化粧道具としての小刀を挙げれば、剃刀・爪きりが考えられる。剃刀は本来、髪を剃るものであったが、眉を剃るのにも使われた[8]。

磁器

磁器は蓋付きの小椀と合子がある。この両者を化粧道具として考えてみる。蓋付きの小椀は、香を入れる容器、「花露」等の髪油を入れる容器、鉄漿水を入れる漿子が想定できる[9]。合子は軽粉（白粉）を小分けして入れておく容器等が考えられる[10]。

紙・布片

紙は化粧に使う化粧紙や懐紙が考えられる。布は鏡・磁器・小刀等を包むのに用いたのであろう。

以上、1号土壙より一括出土した遺物を製品ごとに検討した結果、和鏡・銅製品（金具類を除く）・鉄製品・磁器・紙片・布片は、化粧道具と考えることができ、その化粧道具は化粧箱等に収納してあったと思われる。

2．1号土壙・2号土壙の性格

1号土壙・2号土壙の性格を考える上で、参考になるのは、Ⅰ層出土の空風輪と台地平坦面の南西端部で出土した板碑である。夫が先に亡くなった妻を供養するために建てた板碑や空風輪の性格を考えれば、調査区が位置する台地の一部は、江戸時代には墓地的性格を有すると思われる。

2号土壙

2号土壙の中央部に配置した大型の礫は、台座として使用したものと考えられる。2号土壙と板碑・空風輪の出土地が離れているために、断定的なことは言えないが、2号土壙の台座と考えられるものの上に、板碑や五輪塔を据えた可能性がある。そうなれば、2号土壙は、墓としての性格をもつことになる。

1号土壙

1号土壙内より一括出土した遺物は、火を受けた痕跡があり、土壙覆土には、微細な炭化物が多量に含まれる。また、銅製品の鋲には、木質が付着した状態であった。このような遺物の出土状態を考えると、土壙内で和鏡・銅製品・鉄製品・磁器を収めた小箱を燃やしたと考えられる。1号土壙は、土壙内より一括出土した遺物より、江戸時代初期頃のものである。一括出土した遺物は、先述したように女性の愛用品と考えることができ、その女性は和鏡にある家紋より、相良氏に関連する者である。以上のことより、1号土壙の性格を考える。その際に、出土遺物を収めた小箱を燃やした者が誰なのかで、1号土壙の性格が多少変わってくる。小箱を燃やした者として次の3者が考えられる。(1) 出土遺物の所有者である女性、(2) 所有者である女性と関わりがある者、(3) 所有者である女性とは無関係の者。この (1) ～ (3) の場合について、個別に推論してみる。

(1) の場合

出土遺物の所有者である女性が小箱を燃やしたのは、自分の愛用品を燃やさなければならない一身上の都合によるものであろう。その際、女性の身の上に変化が起こった後に燃やした場合と変化が起こる以前に燃やした場合が考えられる。

(2) の場合

所有者である女性と関わりがある者を仮に夫とすれば、元禄15年（1702年）の銘をもつ板碑が参考になる。夫が先に亡くなった妻を供養するために板碑を建てた点に着目すれば、夫が亡くなった妻の愛用品を見るのが忍びなく、または、妻を供養するために愛用品を小箱に収めた状態で、土壙内で燃やしたものと推論することができる。1号土壙の出土遺物は江戸時代初期頃のものであり、元禄15年（1702年）に造立した板碑と関連させても、年代的に矛盾はない。

(3) の場合

所有者である女性とは無関係の者が燃やしたとすれば、色々なことが推論できる。例えば、第3者が何らかの証拠を無くすために燃やしたと仮定できる。

以上 (1) ～ (3) の場合について推論してみたが、調査区の状況を総合的に判断すると、(2) の場合が最も妥当性があるようだ。ただ、1号土壙の位置と板碑の出土地点が離れている点が問題になる。しかし、板碑は出土状況より原位置を移動しているのは事実であり、1号土壙と板碑を関連させた推論は妥当性が高いと考える。

また、1号土壙より一括出土した化粧道具の中に、歯黒めに使う羽楊枝と考えられる銅製品があった。歯黒めは、江戸時代になると、剃眉とともに女子の元服の徴とされていたが、後に結婚の徴となり、ついには、黒色が他の色に変化しないことから、これを両夫に仕えない貞操の表徴とされるようになった[11]。化粧道具の中に歯黒めに使う羽楊枝と考えられるものがあることより、出土した化粧道具は、結婚した女性の愛用品とすることができる。

註（1）　中野政樹　『和鏡』　日本の美術　第42号　1969年
（2）　広瀬都巽　『和鏡の研究』　角川書店　1974年
（3）　久下　司　『化粧』　ものと人間の文化史　4　1970年
（4）　村沢博人・津田紀代　『化粧文化シリーズ　化粧史文献資料年表』　ポーラ文化研究所　1979年
（5）　原　三正　『お歯黒の研究』　人間の科学社　1981年
（6）　註 (4) の中で、『女諸礼集』(1660年) の解説をした部分。
（7）　註 (3) ・註 (5) に同じ。
（8）　註 (4) の中で、『女用訓蒙図彙』(1687年) の解説をした部分。
（9）　註 (8) に同じ。
(10)　註 (8) に同じ。
(11)　註 (3) に同じ。

第２節　平安時代～鎌倉時代の調査について

１．(1) の遺構群の１号土壙

１号土壙からは、９個体の土師器壙・皿類が一括出土した。出土状況から、遺物は土壙内に投げ込まれて、廃棄されたものでなく、配置されたと考えられる。斜位状態で出土したもの１点とつぶれた状態で出土したもの１点を除けば、口縁部か底部を上にした状態で出土している。口縁部を上にしたものが５点、底部を上にしたものが２点である。土壙内で出土した遺物は、基本的に口縁部を上にした状態か、底部を上にして伏せた状態で置かれたと考えられる。さらに、その配置場所は、土壙内の北側・西側・南側の３箇所に分かれていたと思われる。

(1) の遺構群は、分布状況より２グループに分けることができた。１グループは、１号竪穴住居址を中心にして分布する２号～６号土壙・ピットで構成され、もう１グループは、１号土壙・１号炉穴・ピットで構成される。前者のグループは、後者のグループに比べて、遺構の数も多く、遺構が台地のほぼ中央部に分布する。後者のグループは、台地の平坦面端部に分布し、独立的な存在である。上述した遺構の分布や立地の点からすれば、(1) の遺構群の中では、前者のグループが中心的存在と考えられる。

１号土壙は、後者のグループに属し、中心的な前者のグループとは離れた地点に分布する。分布・立地状況を考慮すれば、１号土壙は、日常生活の衣・食・住に直接関係しないものと考えた方が理解しやすい。１号土壙の性格としては、祭祀的なものが感じられる。

２．(2) の遺構群の建物跡とその変遷について

平安時代～鎌倉時代の調査で検出した (2) の遺構群の中で、２号建物跡・３号～23号掘立柱建物跡について考える。

建物跡は、最も多いもので３棟が重複しており、３時期の変遷が考えられる。しかし、建物跡の柱穴列ピットの切り合い関係がなく、切り合いによる前後関係が把握できない。また、建物跡に伴出した遺物もなく、遺物による建物跡の時期ごとの変遷をとらえることも困難である。そこで、建物跡を建物の主軸ごとに、下記のＡ群～Ｃ群に整理してみる。

Ａ群（第85図）：南北棟の建物跡（７号・12号・13号・18号・21号掘立柱建物跡）。

Ｂ群（第86図）：建物跡の主軸が北北西～南南東、北北東～南南西であるもの（４号～６号・14号・15号・19号掘立柱建物跡）。

Ｃ群（第87図）：建物跡の主軸が北西～南東、北東～南西であるもの（２号建物跡・３号・８号～11号・16号・17号・20号・22号・23号掘立柱建物跡）。

このＡ群～Ｃ群は建物跡の分布状況により、さらに細分できる。

Ａ－１小群（第85図）：12号・13号・18号・21号掘立柱建物跡で構成されている小群。

Ａ－２小群（第85図）：７号掘立柱建物跡１棟よりなる小群。

Ｂ－１小群（第86図）：４号～６号掘立柱建物跡で構成される小群。

Ｂ－２小群（第86図）：14号・15号・19号掘立柱建物跡で構成される小群。

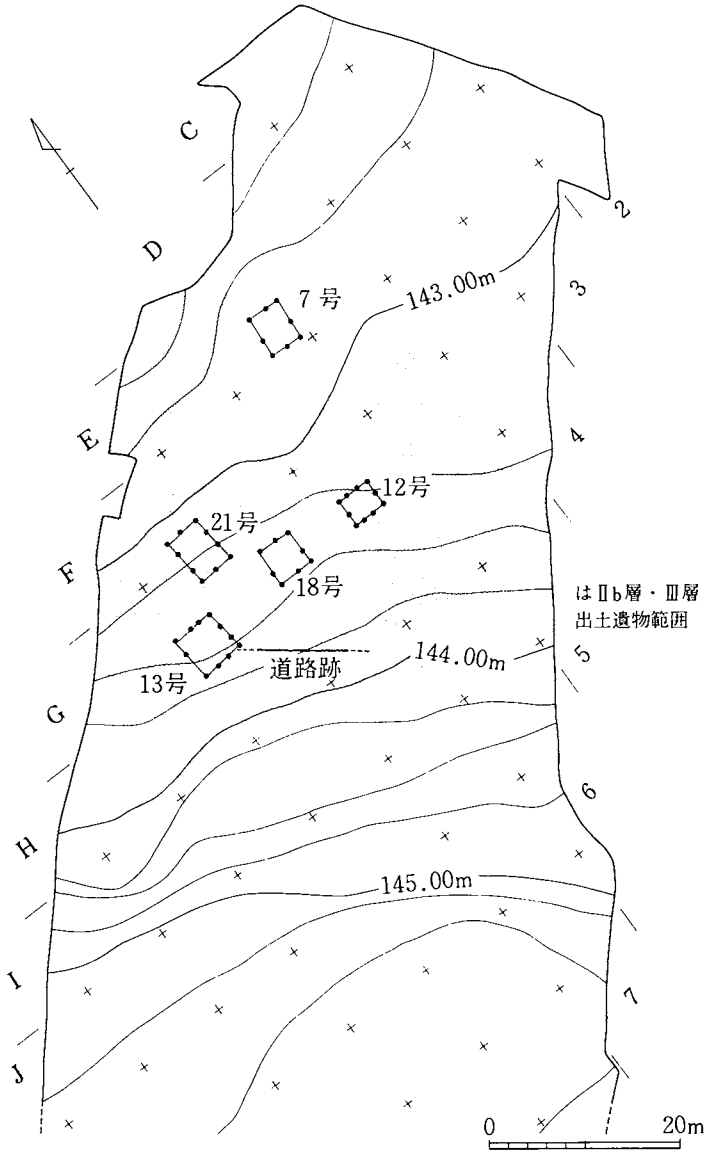
Ｃ－１小群（第87図）：８号～11号掘立柱建物跡で構成される小群。

Ｃ－２小群（第87図）：２号建物跡・16号・17号・20号・22号掘立柱建物跡で構成される小群。

Ｃ－３小群（第87図）：３号掘立柱建物跡１棟よりなる小群。

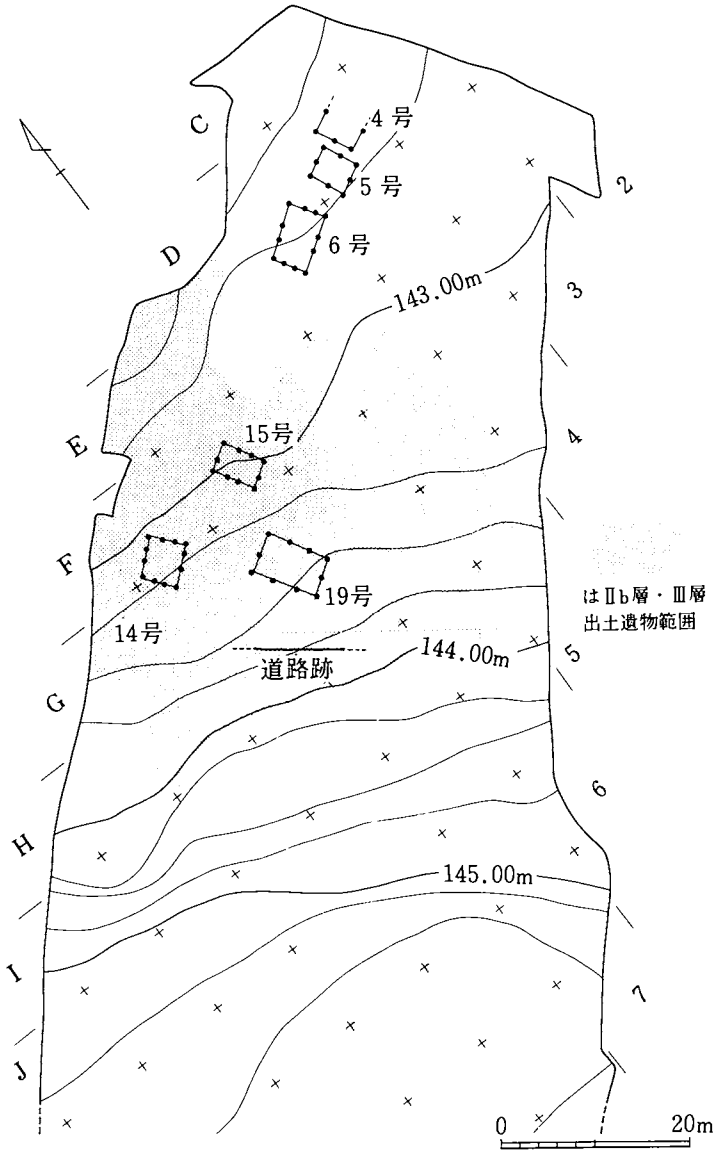
Ｃ－４小群（第87図）：23号掘立柱建物跡１棟よりなる小群。

建物跡の変遷を判断するのに、一つの手がかりがある。それは２号建物跡の礎石を据える穴がピット肩部より上位にあることである。礎石を据える穴の下部で検出したピットは、掘立柱建物跡の柱穴にはならないが、それと同じ覆土である。また、２号建物跡は、18号・19号掘立柱建物跡と重複している。礎石を据える穴とピットの上下関係より、３基の重複する建物跡の中で、２号の建物跡は、最も新しい建物跡と考えることができる。



第85図　建物跡配置模式図(1)

ここで、同じ方向の主軸をもつ建物跡が同一時期に築造されたと仮定する。すると、A群～C群それぞれを構成する建物跡は、同一時期のものであり、上述したことより、2号の建物跡を含むC群が3群の中で最も新しい建物群として位置付けられる。A群とB群との関係については、C群の建物跡が南北方向より最も振れた主軸をもつ点に着目すれば、南北の主軸をもつ建物跡が古く、新しい建物跡ほど南北方向より振れた主軸をもつという流れが想定できる。この想定に従えば、A群→B群→C群という建物群の変遷が推定できる。その時期幅としては、遺物より9世紀～13世紀前半が考えられる。



第86図　建物跡配置模式図(2)

3．建物跡と道路跡の関係

道路跡は、Ⅲ層上に形成されていることや硬化面より出土した遺物から、建物跡と同時期に考えられる。建物跡は前項のように、A群→B群→C群の変遷が推定できる。

ここで問題となるのは、道路跡はどの時期の建物群に付随するかである。建物群変遷推定を検討して、道路跡の問題を考えてみる。

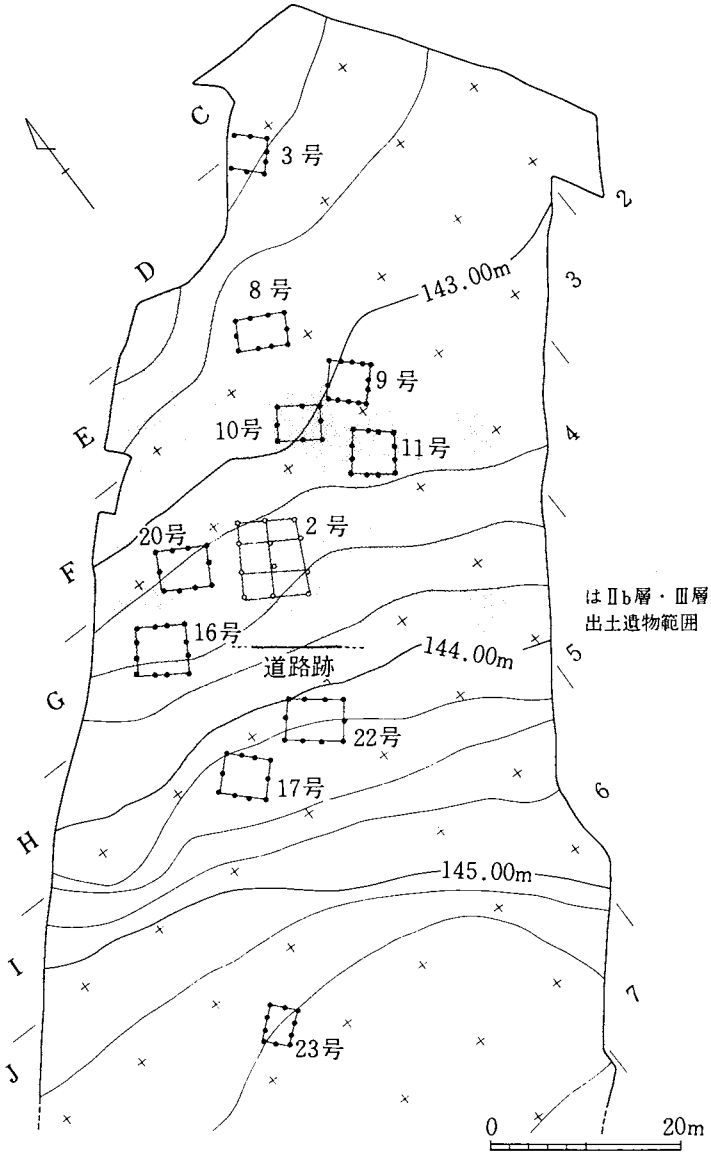
検出できた道路跡は一部である。道路跡の全体が残存していれば、道路跡は、台地を北西方向～南

東方向に横切る状態であったであろう。

Ａ群の時期については、13号掘立柱建物跡が道路跡を塞ぐ状態で存在するので、道路として機能しない。従って、Ａ群の時期には、道路が形成されていないと考えられる（第85図）。

Ｂ群の時期では、14号・19号掘立柱建物跡の南西側を道路が通る状態になる。建物跡の配置状況と道路跡がのびる方向より考えると、このＢ群の時期に道路が形成されたと想定できる（第86図）。

Ｃ群の時期については、道路跡が２号建物跡と22号掘立柱建物跡のほぼ中間地点に位置する。２号建物跡の梁行方向と22号掘立柱建物跡の桁行方向は、道路ののびる方向と一致する。このことは前段階で形成された道路ののびる方向に一致させて、建物を築造したことを意味するのであろうか。しかし、16号掘立柱建物跡の位置が問題となる。この問題については、二通りの解釈ができる。一つは、Ｃ群の構成する建物の中に多少の時期差があり、16号掘立柱建物跡が築造された時期もしくはそれ以前には、道路は機能しなくなっていたことが考えられる。もう一つは、前段階のＢ群の時期には、台地の両端から登っていた道路が、Ｃ群の時期には登口が南東端部に限られ



第87図　建物跡配置模式図(3)

たことが想定できる。

後者の立場に立てば、次のような建物配置になる。台地の南東端部よりのびる道路の正面に16号掘立柱建物跡があり、その左右に２号掘立柱建物跡と22号掘立柱建物跡が配置される。さらに、道路の正面と左右に配置された建物の空間部分に、17号・20号掘立柱建物跡を築造したことが考えられる（第87図）。

４．建物跡と遺物分布について

(2) の遺構群は、Ⅱｂ層・Ⅲ層出土遺物を取り上げ後に、Ⅲ層下面～Ⅳａ層上面で検出した。これは遺構の覆土がⅢ層と同一か類似したものであるため、遺物出土層（Ⅲ層）では、遺構の検出が困難であったためである。それで、２号～23号建物跡配置状況とⅡｂ層・Ⅲ層出土遺物分布範囲を比較してみる。

Ⅰ区の標高が最も高い部分から北～北東方向に緩やかに傾斜する箇所に、建物跡が分布する。遺物もこの緩傾斜地のほぼ中央部に分布している。全体的に見れば、建物跡分布箇所と遺物分布箇所とはほぼ一致している。

Ａ群～Ｃ群の建物群ごとに、細かく見てみる。

Ａ群について（第85図）

Ａ－１小群は遺物分布範囲のほぼ中央部に位置する。Ａ－２小群を構成する７号掘立柱建物跡は、遺物分布範囲の東端部にある。

Ｂ群について（第86図）

Ｂ－１小群は、遺物分布範囲より東側に離れた箇所にある。Ｂ－１小群の西端部に位置する６号掘立柱建物跡と遺物分布範囲の東端部との直線距離は、約５ｍを測る。

Ｂ－２小群は、Ａ－１小群と同様な所に位置し、その場所は、遺物分布範囲のほぼ中央部にあたる。

Ｃ群について（第87図）

Ｃ－１小群は遺物分布範囲のほぼ中央部から東端部にかけて位置する。Ｃ－１小群の最も東側に位置する８号掘立柱建物跡は、遺物分布範囲の東端部にある。

Ｃ－２小群は遺物分布範囲のほぼ中央部から西端部にかけて位置する。Ｃ－２小群の中で最も西側にある17号掘立柱建物跡は、遺物分布範囲の西端部にある。

Ｃ－３小群の３号掘立柱建物跡は、遺物分布範囲より、東側に離れて位置する。３号掘立柱建物跡と遺物分布範囲の東端部との直線距離は約10ｍある。

Ｃ－４小群の23号掘立柱建物跡は、遺物分布範囲より南西方向に離れた箇所にある。遺物分布範囲の西端部と23号掘立柱建物跡との直線距離は約24ｍを測る。

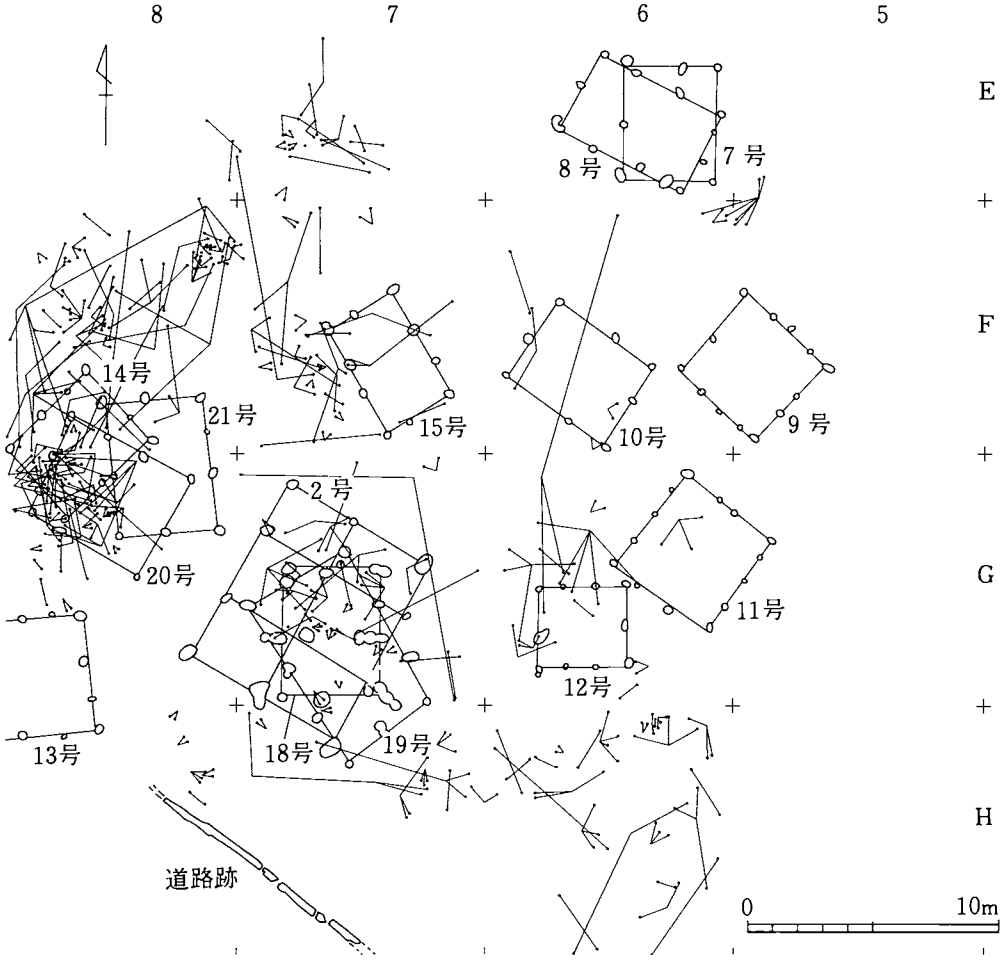
以上Ａ～Ｃの小群ごとに見てみた結果、遺物分布範囲より離れた地点に位置するのが、３号～

６号・23号掘立柱建物跡である。この中で、３号～６号掘立柱建物跡は、遺物分布範囲に近接して位置する。つまり、23号掘立柱建物跡以外の建物跡分布箇所は、遺物分布の範囲内にあるか、また、その範囲と近接した位置にある。

５．建物跡と遺物接合関係について（第88図）

建物跡の分布地点と、遺物分布範囲とを比較した結果、両者はほぼ同じ範囲にあることがわかった。そのことを詳細に検討するために、遺物の接合関係と建物跡配置状況を比較してみる。

第88図には、建物跡の配置とⅡｂ層・Ⅲ層出土遺物の接合関係を示した。Ⅱｂ層・Ⅲ層出土遺物の殆どは、ヘラ切り底の土師器坏・皿類である。



第88図　建物跡配置と遺物接合関係図

Ⅱｂ層・Ⅲ層出土遺物の接合関係が見られるのは、前述した遺物分布範囲のほぼ中央部にあたる。遺物分布範囲の周辺部では、遺物の接合関係があまり見られない。

遺物の接合関係が見られる範囲には、２号建物跡・７号～15号掘立柱建物跡・18号～21号掘立柱建物跡・道路跡がある。検出した22棟の建物跡の中で、14棟の建物跡が遺物接合関係が見られる範囲内に分布することになる。

Ｅ－７・Ｈ－６グリッドで見られる遺物の接合関係を除くと、遺物接合関係は、建物跡の近接地や周辺部で見られる。建物跡の近接地や周辺部で、遺物接合関係が顕著に見られる部分は、次の５箇所である。(1) 14号・20号・21号掘立柱建物跡の近接地と周辺地域。(2) ２号建物跡・18号・19号掘立柱建物跡の近接地と周辺地域。(3) 15号掘立柱建物跡の近接地と周辺地域。(4) 10号～12号掘立柱建物跡の近接地と周辺地域。(5) ７号・８号掘立柱建物跡の近接地と周辺地域。

この５箇所の中で、(1) 地域に最も多くの遺物接合例が見られ、これに続くものとして (2)・(3) の地域がある。(4) ・ (5) の地域での遺物接合例は、(1) ～ (3) 地域ほどではない。

前述の (1) ～ (5) 地域以外で、遺物接合例が多く見られる部分として、Ｅ－７・Ｈ－６グリッドがある。(1) ～ (5) 地域での遺物接合関係を見れば、Ｅ－７・Ｈ－６グリッドにも建物跡があってもいい。Ｅ－７・Ｈ－６グリッドについては、建物跡柱穴列の復元ができなかったか、両グリッドに見られる遺物接合関係は、両グリッド周辺に分布する建物跡と関連したものかのどちらかである。

以上のように検討した結果、Ⅱｂ層・Ⅲ層出土遺物の接合関係は、建物跡の近接地とその周辺地域で顕著に見られる。このことと前項の４で検討した結果とを合わせて判断すると、Ⅱｂ層・Ⅲ層出土遺物は、建物跡と密接に関連することが考えられる。

６．建物跡の性格について（第11表～第13表）

検出した建物跡の性格について考える際、この建物跡に伴うと考えられるⅡｂ層・Ⅲ層出土遺物の検討が必要になる。

天道ケ尾遺跡のⅡｂ層・Ⅲ層より出土した土器・磁器の組成表を見てみる。この表を作成する際、個体数を把握するのが困難であったため、出土点数を資料として用いた。

Ⅱｂ層・Ⅲ層出土土器・磁器の中で、約96.94％がヘラ切り底の土師器（坏・皿類）であり、それ以外の遺物が約3.06％を占める。その約3.06％の内訳は次のようになる。黒色土器（坏・鉢・台付鉢）約55％、墨書土器（坏）約15％、須恵器（坏・甕）約12％、青磁（椀）約12％、糸切り底の土師器（坏・皿類）約9.8％である。この遺物組成を見ると、ヘラ切り底の土師器坏・皿類が出土遺物の殆どを占め、出土遺物に偏りがあると考えられる（第11表）。それで、性格が判明している他の遺跡の遺物組成を見て、天道ケ尾遺跡の遺物組成（Ⅱｂ層・Ⅲ層）と比較

してみる。

洗切遺跡（熊本県八代市清水町）[1]（第11表）

洗切遺跡は、地方官衙か寺院に所属して、鉄器製作や漁撈活動を行っていた人々の生活址と考えられている。遺跡の中心をなす奈良時代後期～平安時代前期の遺物包含層である第4層下部～第6層出土遺物の組成を見てみる。

須恵器と土師器の個体数を対比してみると、須恵器が約41.6%、土師器が約58.4%である。

須恵器・土師器の個体別器種構成は次のようになる。須恵器では、坏・椀・蓋・皿約85%、甕約5%、坏約5%、高坏約3%、鉢約2%である。土師器では、甕約54%、坏・蓋・皿約32%、鉢約5%、竈約4%、高坏約3%、壺・甑それぞれが約1%になる。

寺尾遺跡（熊本県下益城郡松橋町）[2]（第11表）

寺尾遺跡は、官衙関連の遺跡とされている。SK101より一括出土した奈良時代後期の遺物組成を出土点数で見ると、次のようになる。土師器が約52.7%、須恵器が47.3%を占める。須恵器の内訳は、坏・椀約69.2%、甕約11.5%、長頸壺約7.9%、高坏・鉢・平瓶がそれぞれ約3.8%である。土師器の内訳は、坏・椀・皿が約75.9%、甕約20.7%、鉢約3.4%になる。

寺田遺跡（北九州市小倉南区大字貫）[3]（第12表）

寺田遺跡は、郡司層に選出されるべき在地豪族が営んだ可能性があると考えられている。10世紀前半期の遺物包含層より出土した土器の組成は下記のようになる。土師器約56.1%、須恵器約17.4%、黒色土器13.7%、緑釉陶器約6.6%、越州窯系青磁約3.9%、定窯系白磁約0.8%である。

柏原K遺跡（福岡市南区柏原字ゴソ外）[4]（第12表）

柏原K遺跡上面で検出された遺構は、中世居館址として確認できるものであり、それは入来文書に記載のある屋敷に相当する可能性が高いものである。出土遺物より、13世紀後半代～14世紀前半代の存続期間が考えられている。出土した土器・陶磁器類は、個体識別が不可能な土師質土器の皿・陶器の甕・褐釉陶器以外は、個体識別が行われている。第12表は、土師質土器の皿の個体識別が不可能であったため、出土点数を資料として用いている。

土師質土器約99.2%、磁器約0.62%、陶器約0.18%である。個体識別ができたものは、土師質土器が堝15・鉢4・火舎1、陶器が擂鉢25・黄釉盤2・鉢1、磁器が龍泉窯系青磁58・同安窯系青磁3・越州窯系青磁1・白磁46である。

草戸千軒町遺跡（広島県福山市草戸町）（第12表）

草戸千軒町遺跡は、平安時代後期～江戸時代初期の遺跡であるが、その最成期は中世であり、次の4期に分けて把握されている。I期は鎌倉時代を中心とする時期、II期は室町時代中頃までの時期、III期は室町時代後半の時期、IV期は室町時代末期～安土桃山時代頃の時期が考えられている。遺跡の性格としては、遺跡の後背地を拠点とした備後の守護長井氏一族に関係する

物資の集散地としての港町が想定されている。[5]この遺跡の遺構より出土した遺物の個体数を資料として、土器・陶磁器類の組成を見てみる。

ＳＫ775[6]・ＳＫ790[7]・ＳＫ990[8]

ＳＫ775・ＳＫ790は室町時代後半期、ＳＫ990は室町時代初期と考えられている。

三つの土壙より出土した土器・陶磁器類は、同じような組成である。土師質土器が約96％以上を占め、その他のものが陶器や磁器である。これらを器種別に見ると次のようになる。

ＳＫ775：土師質土器－椀・皿約95.3％、陶器－甕のみ。

ＳＫ790：土師質土器－椀・坏・皿約88.5％、鍋約6.8％、陶器－甕のみ。

ＳＫ990：土師質土器－椀・坏・皿約93％、鍋約3.5％、瓦質土器－鍋約0.2％、陶器－甕・壺約1.4％。

ＳＫ755[9]

この遺構は室町時代後半期の時期が考えられている。前記の三つの土壙と比べると、土師質土器が占める割合が少し減少し（約84.3％）、陶器が占める割合が増す（14.4％）。器種別に見ると、土師質土器には、椀・皿が約65.9％、鍋・釜が13.1％含まれ、陶器には、甕が約11.8％含まれる。

ＳＥ1015[10]・ＳＥ1055[11]

ＳＥ1015・ＳＥ1055は井戸跡であり、前者は室町時代初期、後者は室町時代前半頃に使用されなくなったと考えられている。両者の井戸跡より出土した土器・陶磁器類の組成は、ＳＥ1015では、土師質土器約75.7％、陶器約21.3％、磁器約３％、ＳＥ1055では、土師質土器約97.6％、陶器約1.2％、磁器約1.2％になる。器種別に見れば、ＳＥ1015出土の土師質土器には、椀・坏・皿が約54.5％、鍋が約14.1％、竈が約7.1％、陶器には、甕・壺が約16.2％含まれる。ＳＥ1055出土の土師質土器では、椀・坏・皿が約92.4％、鍋が約4.8％、陶器では甕が約0.4％含まれる。

ＳＤ760[12]

この遺構は、室町時代後半期の溝である。今まで見てきた草戸千軒町遺跡の遺構の中では、土師質土器の占める割合が最も少ない。その土器・陶磁器の組成は、土師質土器（約51.5％）、陶器（約34.1％）、磁器（約9.4％）、瓦質土器（約５％）になる。これを器種別に割合を見れば、土師質土器では、椀・皿が約65.9％、鍋・釜が約13.1％を占め、陶器では、甕が約11.8％を占めている。

一乗谷朝倉氏遺跡（福井県福井市城戸の内町）（第13表）

この遺跡は、文明３年（1471年）、朝倉孝景が越前の守護大名斯波氏を追放して、この地に城を移し、朝倉氏の本貫地として天正元年（1573年）まで栄えた所としてよく知られている[13]。この遺跡で検出された遺構ごとに、そこより出土した土器・陶磁器類の組成を出土点数を資料として見てみる。

武家屋敷（49－C地区[14]・52－7地区[15]・52－8地区[16]）

49－C、52－7・8地区は、溝等によって区画された屋敷であり、町屋と比べてその区画は大規模である。屋敷の性格としては、武家屋敷が考えられている。

49－C地区では、土師質土器が最も多く（約61.6%）、次に越前焼が占める割合が多い（約27.8%）。土師質土器と越前焼が殆どであり、その残りを中国製陶磁器（約6.83%）と瀬戸・美濃焼（約3.45%）が占める。

52－8地区は、土師質土器の占める割合が最も多く（約37.7%）、これに続くものが越前焼（約29.3%）と中国製陶磁器（約27.7%）であり、ほぼ同様な割合を示す。瀬戸・美濃焼は上記のものと比較すると極端に少ない（約4.96%）。

52－7地区では、他の地区と異なって、越前焼の占める割合が最も多く（約55.9%）、土師質土器がこれに続く（約26.5%）。その他には、中国製陶磁器（約12.5%）、瀬戸・美濃焼（約4.25%）がある。

町屋地区[17]・小規模屋敷[18]

ここで取り上げる町屋地区は、溝・石垣・道路等によって区画された小規模な屋敷6棟で構成されている。小規模屋敷であるＳＢ1550・ＳＢ1559・ＳＢ1560は、溝や石列で区画されており、町屋的性格をもつと考えられている。

6棟の小規模屋敷で構成される町屋地区から出土した土器・陶磁器の組成は、次のようになる。越前焼が最も多く（約50.8%）、その次に土師質土器（約22.9%）と中国製陶磁器（約22%）がほぼ同じ割合で含まれる。瀬戸・美濃焼が占める割合は少ない（約3.77%）。

小規模屋敷（ＳＢ－1550）では、越前焼（約48.1%）と土師質土器（約32%）が多く、両者で大半以上を占める。その他の部分を占めるのが、中国製陶磁器（約10.2%）と瀬戸・美濃焼（約6.31%）である。

小規模屋敷（ＳＢ－1559）では、越前焼が最も多く（約43%）、その次に多いのが中国製陶磁器（約29.6%）である。中国製陶磁器の占める割合が多いのが特徴になる。中国製陶磁器とほぼ同様な割合を占めるのが土師質土器であり（約21.8%）、最も少ないのが瀬戸・美濃焼である（約3.38%）。

小規模屋敷（ＳＢ－1560）の土器・陶磁器組成は、前述した2棟の小規模屋敷と異なる。土師質土器が最も多く（約42.3%）、その次に越前焼が多い（約39.2%）。この両者で殆どを占め、その残りを占めるのが中国製陶磁器（約12.5%）と瀬戸・美濃焼（約5.5%）である。

溝（49－溝1・49－溝2[19]）

この溝1・2は、武家屋敷及び町屋の建物を区画している溝である。

溝1・2より出土した土器・陶磁器の組成は、今まで見てきた一乗谷朝倉氏遺跡の遺構とは、異なる組成になる。他の遺構と比べて土師質土器の占める割合が多く、その割合は溝1が半分

以上で（約65.1%）、溝２が殆どである（約87.4%）。土師質土器以外が占める割合は、次のようになる。溝１が越前焼（約22.8%）、中国製陶磁器（約9.87%）、瀬戸・美濃焼（約1.31%）で、溝２が越前焼（約8.4%）、中国製陶磁器（約2.6%）、瀬戸・美濃焼（約1.31%）である。

次に、一乗谷朝倉氏遺跡より出土した土器・陶磁器類の器種は、下記のようになる。

越前焼：甕・壺・擂鉢・鉢など。

土師質土器：皿・羽釜・土鈴など。

瀬戸・美濃焼：椀・皿・坏・鉢・香炉など。

中国製陶磁器：椀・皿・坏・鉢・香炉など。

今まで、天道ケ尾遺跡以外の遺跡から出土した土器・陶磁器の組成を見てきた。これらの中には、日常生活に用いる食膳具・煮炊具・調理具・貯蔵具が含まれている。食膳具には坏・椀・皿・鉢など、煮炊具には甕・鍋・竈など、調理具には擂鉢など、貯蔵具には、壺・甕などがある。

これらの食膳具・煮炊具・調理具・貯蔵具の組み合わせを見ると、天道ケ尾遺跡のⅡｂ層・Ⅲ層出土遺物の組成には、日常生活に用いる器種が不足している。坏・皿類が殆どであり、坏・皿類以外の器種には、黒色土器の鉢・台付鉢・青磁の椀・須恵器の甕があるだけである。しかもこれらの器種は、数点しか出土しておらず、その占める割合は極端に少ない。つまり、煮炊具・調理具・貯蔵具が揃っていないことになる。出土遺物の組成からすると、天道ケ尾遺跡では、日常生活の煮炊・調理、貯蔵などが行われておらず、検出した建物跡は、日常生活には使われていないことになる。

註（１）　佐藤伸二　『洗切遺跡調査報告』　八代市洗切遺跡調査団　1982年

（２）　高谷和生　「寺尾遺跡調査報告」『曲野遺跡Ⅰ』　熊本県文化財調査報告　第61集　1983年

（３）　佐藤浩司　『寺田遺跡』　北九州市埋蔵文化財調査報告書　第70集　1988年

（４）　山崎純男　『柏原遺跡群Ⅲ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第157集　1987年

（５）　松下正司　「中世・近世の集落、Ｂ西国の集落」『日本歴史考古学を学ぶ（上）』　有斐閣選書　1983年

（６）　『草戸千軒町遺跡』　広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1975年

（７）　註（6）に同じ。

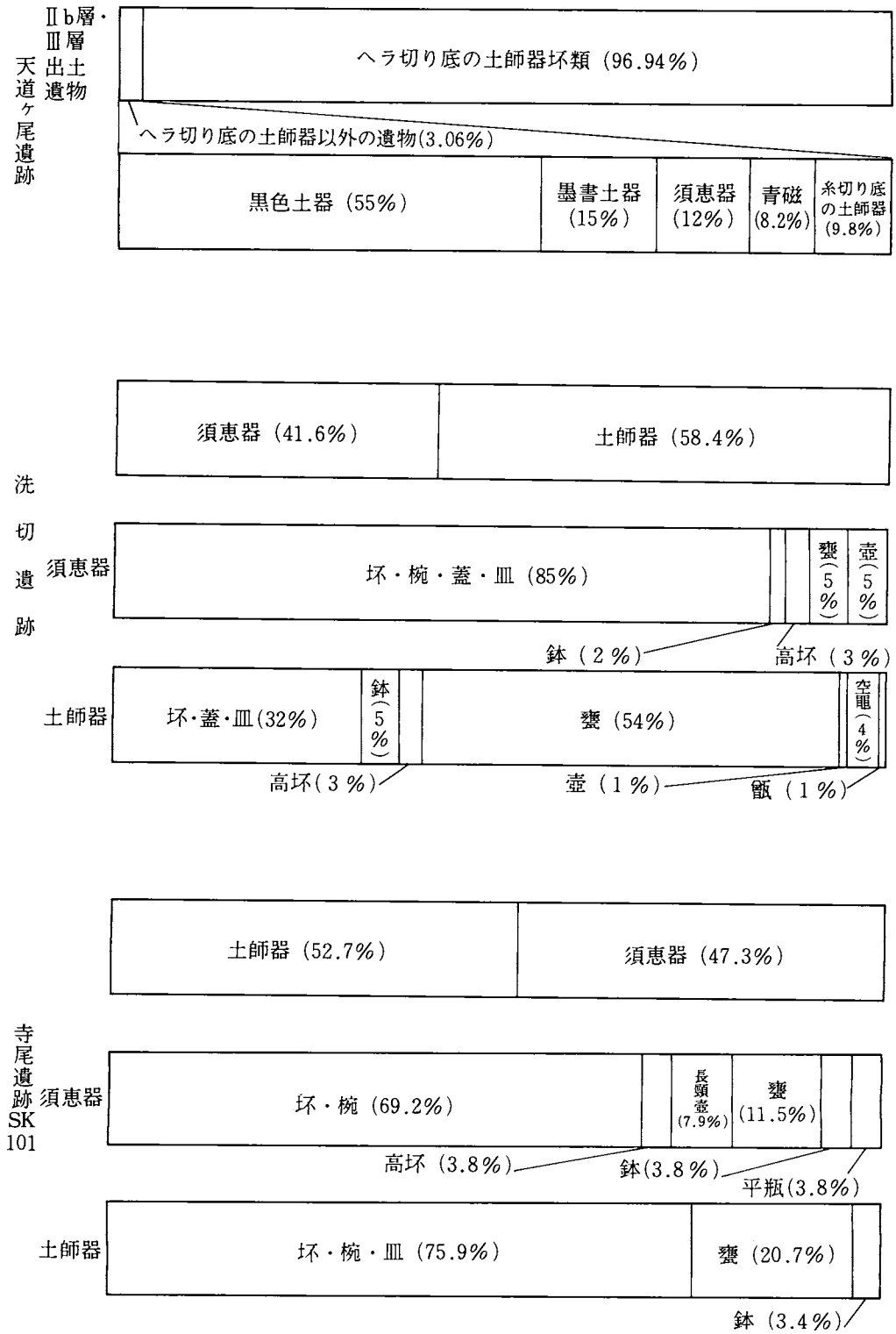
（８）　『草戸千軒町遺跡』　広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1976年

（９）　註（6）に同じ。

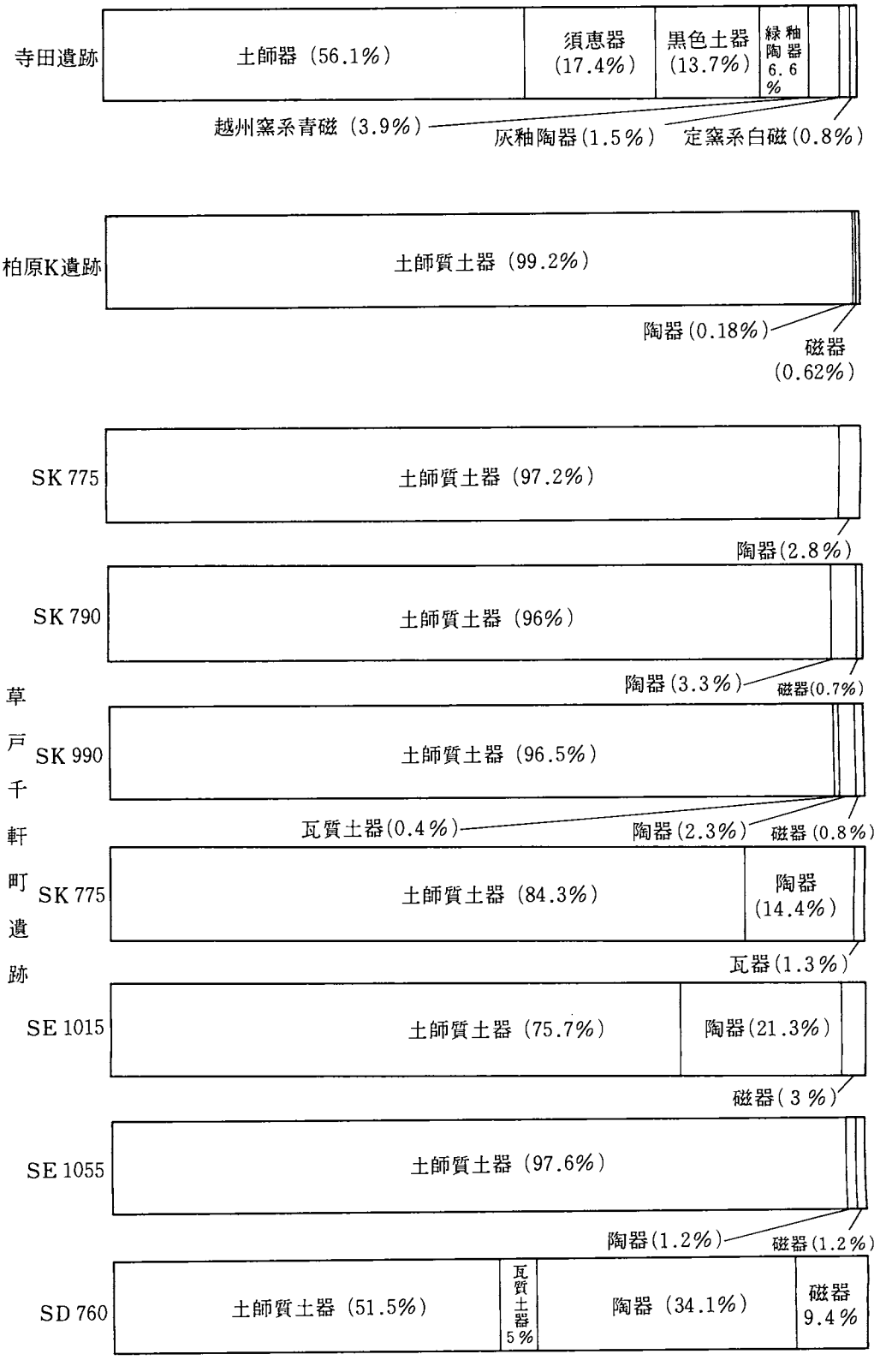
（10）　註（8）に同じ。

（11）　註（8）に同じ。

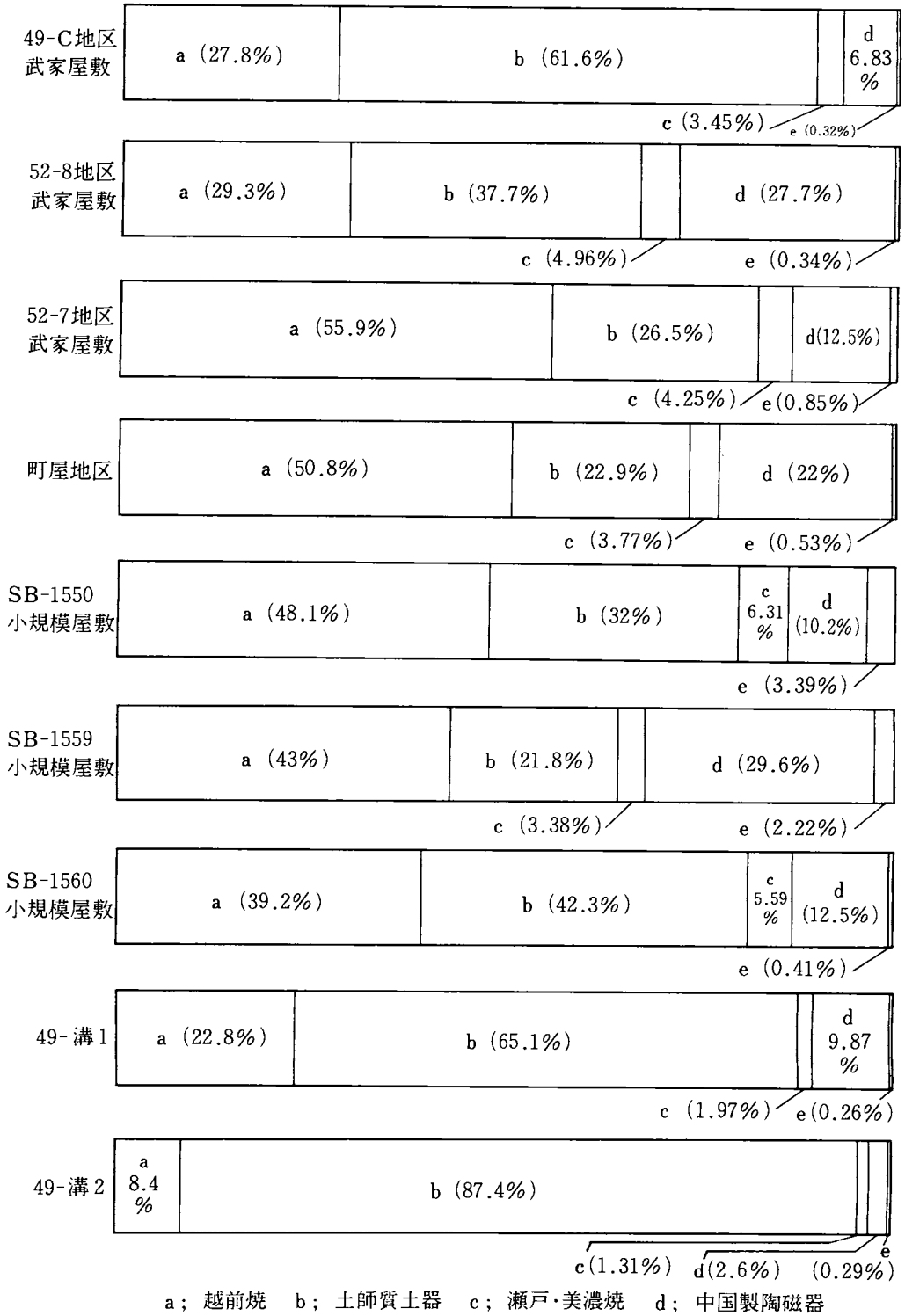
第11表　土器・陶磁器類の組成表(1)



第12表　土器・陶磁器類の組成表(2)



第13表　土器・陶磁類の組成表(3)
（一乗谷朝倉氏遺跡）



a；越前焼　b；土師質土器　c；瀬戸・美濃焼　d；中国製陶磁器
e；その他

(12)　註（6）に同じ。

(13)　水野和雄　「居館」　『日本歴史考古学を学ぶ（上）』　有斐閣選書　1983年

(14)　『一乗谷朝倉氏遺跡ⅩⅥ』　福井県立朝倉氏遺跡資料館　1985年

(15)　『一乗谷朝倉氏遺跡ⅩⅦ』　福井県立朝倉氏遺跡資料館　1986年

(16)　註（15）に同じ。

(17)　註（15）に同じ。

(18)　『一乗谷朝倉氏遺跡ⅩⅡ』　福井県立朝倉氏遺跡資料館　1981年

(19)　註（14）に同じ。

7．Ⅱｂ層・Ⅲ層出土の土師器坏・皿類のスス付着状況（第14表）

天道ケ尾遺跡のⅡｂ層・Ⅲ層より出土した土師器の坏・皿類の中で完形もしくは完形に近い341点のスス付着状況を観察した。ススが付着しているものは、223点（約65.4%）で、ススが付着しないものが118点（約34.6%）である（第14表）。

他の遺跡でのスス付着状況を見てみる。

高城跡（熊本県球磨郡山江村）[1]（第14表）

高城跡は、15世紀末～16世紀前半の短い時期が考えられている中世城である。ここより出土した115点の土師器皿の内、ススが付着しているものが14点（約12.2%）で、ススが付着していないものが101点（約87.8%）である。

草戸千軒町遺跡（ＳＤ510[2]・ＳＥ1055[3]）（第14表）

ＳＤ510は室町時代を遡らない時期が考えられている。ここより出土した完形の土師質皿Ａ650個の内、ススが付着しているのが45個（約6.9%）で、付着していないのが605個（約93.1%）である。また、土師質の坏Ｃの殆どにはススが付着していた。

ＳＥ1055は室町時代前半頃に廃絶した井戸である。この井戸より出土した完形の土師質椀Ａ・Ｂ163個の内、ススが付着しているものが10個（約6.1%）で、ススが付着していないものが153個（約93.9%）である。

一乗谷朝倉氏遺跡（Ｉ期整地層[4]・下城戸外濠[5]）（第14表）

Ｉ期の整地は、朝倉孝景が一乗谷を拠点とした文明３年（1471年）以後の比較的早い時期に行われたと考えられている。このＩ期整地層より出土した土師質皿40点のうち、ススが付着しているのが21点（約52.5%）、ススが付着していないのが19点（約47.5%）である。

下城戸外濠中から、一度に投棄されたと考えられる土師質土器が出土した。その中の187点の皿の内、108点にススが付着しており（約57.8%）、79点には、ススが付着していなかった（約42.2%）天道ケ尾遺跡以外の３遺跡（５遺構）より出土した皿のスス付着状況をみた結果をまとめると次のようになる。高城跡と草戸千軒町遺跡（ＳＤ510・ＳＥ1055）では、出土した皿に

ススが付着しているのが少ない（6.1～12.2%）。一乗谷朝倉氏遺跡（Ⅰ期整地層・下城戸外濠）では、ススが付着しているものとそうでないものがほぼ同じ割合を示す。

以上のことからすると、天道ケ尾遺跡のススが付着しているものとそうでないものの割合が約７：３となっているのは、スス付着率が高いことを意味している。つまり、灯明皿としての使用が多かったことになる。

ここで問題となるのが、前項６で検討した建物跡の性格との関連である。出土遺物の組成から、天道ケ尾遺跡では日常生活が行われておらず、検出した建物跡も、日常生活に使われたものではないと考えた。すると、建物跡と関連して使用されたと考えられる灯明皿はいったい何のために使用したのであろうか。しかも、他の遺跡と比較した結果、天道ケ尾遺跡の灯明皿は、利用度が高い。ここに新たな問題が浮かんできた。

第14表　土師器坏・皿のスス付着状況観察表

	a	b
天道ヶ尾遺跡	a（65.4%）	b（34.6%）
高城跡	a（12.2%）	b（87.8%）
草戸千軒町遺跡 SD 510	a 6.9%	b（93.1%）
草戸千軒町遺跡 SE 1055	a 6.1%	b（93.9%）
一乗谷朝倉氏遺跡 Ⅰ期整地層	a（52.5%）	b（47.5%）
一乗谷朝倉氏遺跡 下城戸外濠	a（57.8%）	b（42.2%）

a；スス付着　b；スス付着箇所なし

註（1）　大田幸博　『高城跡』　熊本県文化財調査報告　第95集　1988年

（2）　『草戸千軒町遺跡』　広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1976年

（3）　註（2）に同じ。

（4）　『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ』　福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館1988年

（5）　『一乗谷朝倉氏遺跡ＸⅠ』　福井県立朝倉氏遺跡資料館　1980年

8．墨書土器について

墨書土器研究の意義の一つとして、墨書土器により遺跡や建物跡などの性格を知ることが挙げられている。検出した建物跡がどのような性格をもつかということは、判断が困難であったり、決め手を欠くことがある。その際、墨書土器の文字は、その性格を明確にする貴重な資料となるとされている[1]。それで、天道ケ尾遺跡のⅡｂ層・Ⅲ層より出土した墨書土器を検討し、前項６・７での問題点を考える。

(1)「井」の墨書について

天道ケ尾遺跡で出土した墨書土器20点の中で、最も多いのが「井」の字、または「井」の字と思われるものを墨書しているもので、８点を数える。ここでは、この「井」の字について考えてみる。

奈良県橿原遺跡の井戸の中から「神」の字を墨書してあるものが出土している。このことは、井戸に対する信仰があったことを示し、「大井」（群馬・十三宝塚遺跡）などの墨書例から、「井」の字も井戸を信仰対象にしたものと考えられている[2]。

また、山田水呑遺跡（千葉県東金市）では、判読可能な墨書土器が104点出土した。その中で最も多い文字が「井」であり、36点を数える。しかし、この山田水呑遺跡では、井戸が検出されていない。井戸以外に水に関連するものとして、調査区の台地上に侵入した溺れ谷部の湧水がある。「井」の墨書土器７点が集中出土した121号住居址は、この谷部の西側に分布する住居址の中で最大規模をもち、最も谷部に近い地点に位置する。このことにより、121号住居址は湧水に関連する性格をもつ建物とされている。つまり、当遺跡出土の「井」の墨書土器は、この湧水を信仰対象にしたものとして位置付けられている[3]。

山田水呑遺跡の例を見れば、「井」の字は、必ずしも井戸だけを信仰対象にしたものではなさそうである。極論すれば、「井」の字は、当然のことながら井戸を信仰対象にするが、もっと信仰対象を広げて水に関係するものを信仰対象にしたものと考えられる。

次に、天道ケ尾遺跡より出土した「井」の墨書土器８点の中で、２点に「井上」、１点に「井

ノ上」と判読できるものがある。この「上」の字は当然のことながら「井」の字と関連するものである。「井上」、「井ノ上」は、「上」の字を「カミ」とし、「井」を信仰の対象にしたことを強調するものであろう。

(2) 天道ケ尾遺跡と「井」の墨書土器の関係について

天道ケ尾遺跡では、先述の山田水呑遺跡と同様に井戸が検出されていない。それで、「井」の墨書土器は、信仰対象を前節の（1）で拡大解釈したように、水と関連させて考えてみる。

天道ケ尾遺跡の立地状況を考慮して、天道ケ尾遺跡に近接した水に関連あるものには、湧水などが認められないことより、球磨川を挙げることができる。天道ケ尾遺跡が位置する台地の北～北東端部に立てば、前面に、球磨川が大きく流路を変化させて流れている状況が目にはいる。つまり、天道ケ尾遺跡出土の「井」の墨書土器は、球磨川を信仰対象にしたものと思われる。

河川を信仰対象にした遺跡として、四国の四万十川支流域に分布する遺跡がある。その中で、中村市角遺跡には、多数の「中世後半のカワラケ坏」が出土しており、中世後半の祭器に使用したものと考えられている[(4)]。

上述したことからも、天道ケ尾遺跡出土の「井」の墨書土器は、球磨川を信仰対象にしたものと考えても無理はないようである。

「井」の墨書土器について以上のように考えると、天道ケ尾遺跡で検出した建物跡は、球磨川に対して何らかの祭祀を行った際に、使用されたものであり、灯明皿もその際に、利用されたと考えられる。

天道ケ尾遺跡で検出した建物跡の柱間寸法が一定していない。このことは、建物跡が祭祀用の仮設的建物であったことに起因すると考えることができる。

註（1）　斎藤忠　「墨書土器研究の意義」『季刊考古学』　第18号　1987年

（2）　註（1）に同じ。

（3）　『山田水呑遺跡』　第１・第２分冊　山田遺跡調査会　1977年

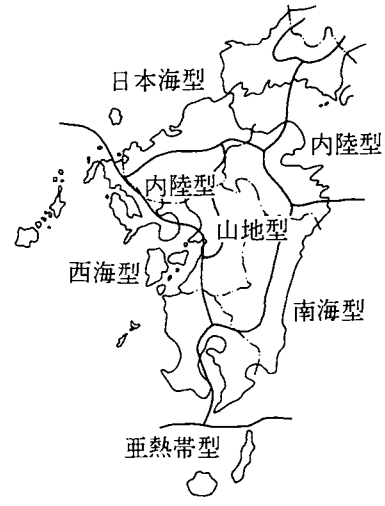
（4）　岡本健児　「四国」『神道考古学講座』　第２巻　原始神道期１　雄山閣　1972年

９．球磨川に対する信仰について

前項で、天道ケ尾遺跡において、球磨川を信仰対象にした祭祀が行われていたと考えた。ここでは、球磨川のどのようなことに対して、信仰をしたのか、その信仰内容について考えるため、球磨川について検討してみる。

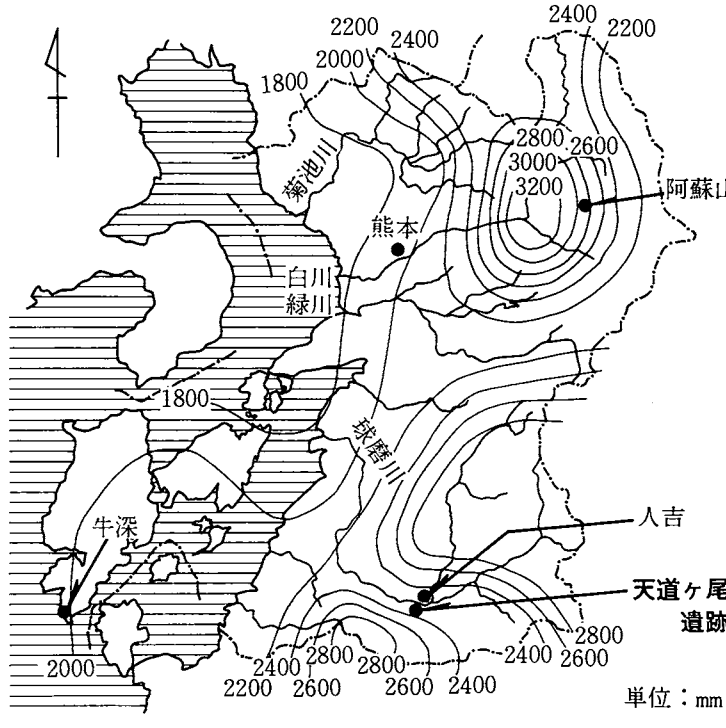
(1)人吉・球磨地域の気候と降水量について(第89図・第90図)

熊本県内気候区分には、(a)内陸型、(b)西海型、(c)山地型の３つの型がある。(a)には熊本平野、(b)には八代平野、水俣・芦北沿岸部、(c)には阿蘇地域から球磨地域にかけての山間地域が属する[1]。天道ケ尾遺跡が位置する人吉市は、(c)の山地型気候区にあたる。山地型気候区の特徴は、次のようになる。標高200m以下の地域では、年平均気温が約15℃である。降水量が多く、年間降水量が2000mmを越え、山岳地帯では3000mmを越える。降水量は夏に多く、冬に少ない状況である。山地型気候の中でも、人吉・球磨地域の範囲に限って見ると、年間降水量は2393mmである。冬期の降水量は少ないが、６月・７月の梅雨期には、915mmの降水量がある。梅雨期の降水量は、年間総量の約40％にあたる[2]。



第89図　気候区分図
(『解説業務のための現業用図表』
1977年より 福岡管区気象台)

熊本県内の年平均降水量分布図を見ると、降水量の多い地域は、大きく二箇所に分けることができる。それは阿蘇山周辺地域と市房山から白髪岳・国見山にかけての周辺地域である。後者の地域の殆んどは、球磨川流域とその支流域にあたり、この地域での降水は、主に球磨川に流れ込む状態になる。年平均降水量が多い地域を流れる球磨川の流量は、かなりの量に



第90図　熊本県の年平均降水量
(『熊本県農業気象月報・年報』
熊本県・熊本地方気象台1974年～1983年より)

なると思われる[3]。

(2) 気象災害時の雨量について

昭和44年から昭和55年までの15年間における集中豪雨や台風に起因する主な災害を見てみる。その際、災害時における27例の雨量分布図を資料として扱う[4]。

27例の災害時雨量分布図の中で、最大雨量が分布する地域を見ると、阿蘇山周辺地域と球磨川・球磨川支流域が最も多く、それぞれ９例を数える。菊池川流域が５例、天草地域が４例になる。過去27回の災害時においても、球磨川・球磨川支流域の地区は、雨量が最も多い地域に位置付けることができる。

(3) 球磨川・球磨川支流域の水害の危険性について

上述した年平均降水量と災害時の雨量より、球磨川・球磨川支流域は、県内でも最大の降雨地区の一つであり、水害の危険性が高い地域といえる。次に、県内の河川ごとに、溢水・破堤などによる水害危険区域（昭和60年度）に指定されている箇所を見てみる。水害危険箇所は、菊池川系が104、球磨川系が74、緑川系が52、白川系が33を数える[5]。水害危険箇所の数からも、球磨川・球磨川支流域は、水害の危険性が高い地域とすることができる。

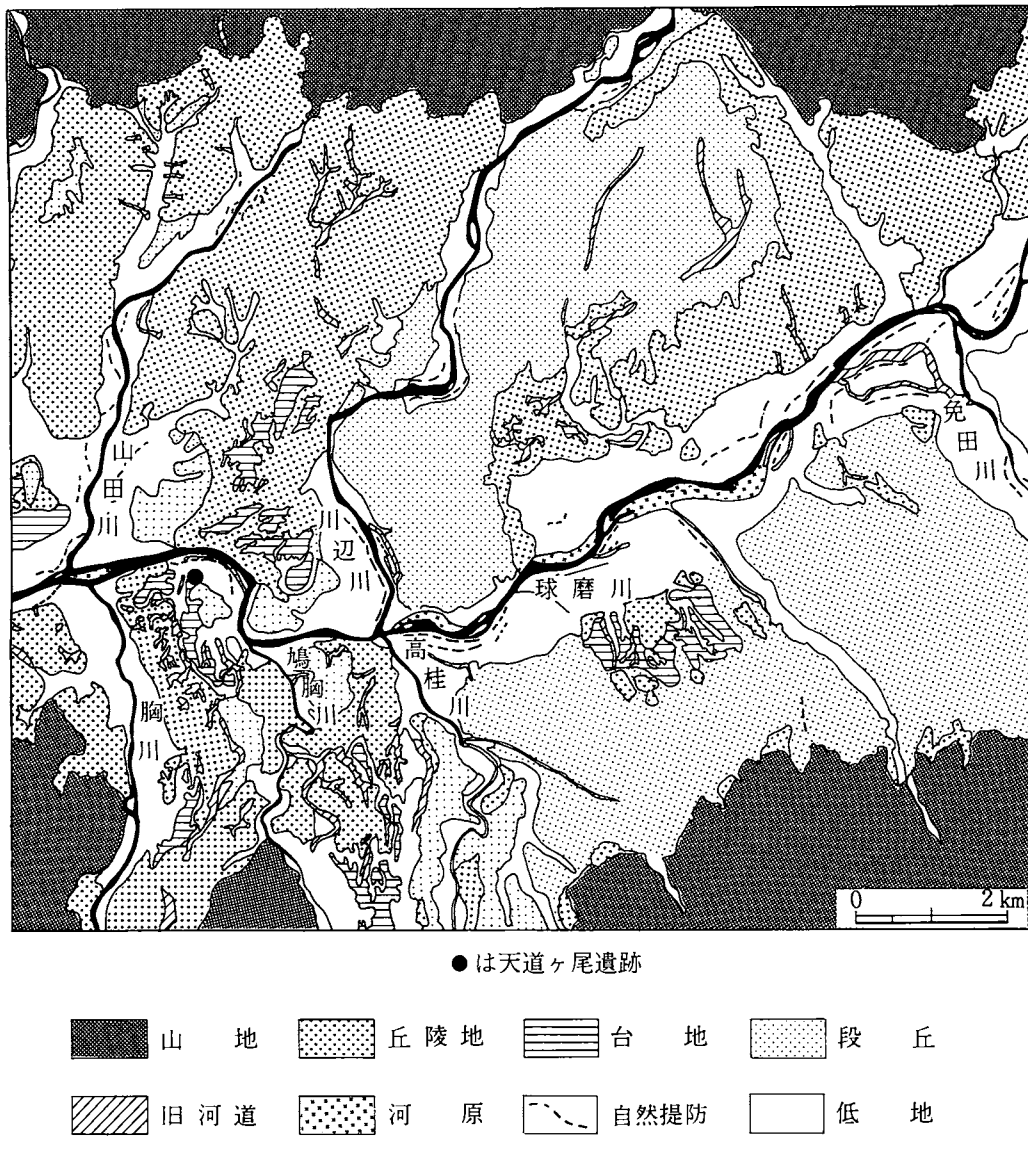
(4) 遺跡の位置と球磨川の流路について（第91図）

第91図は土地分類基本調査図[6]（地形分類図）を基本にして作成したものである。この図は、地形を大きく、山地・丘陵地・台地・段丘・低地に分けて、旧河道・河原・自然堤防も示した。

まず、球磨川の流路について見る。第91図に示した範囲でも、球磨川の流路には、かなりの蛇行がある。その中でも特に流路の変化が著しい所は、川辺川・高柱川との合流地点より約２km下流でさらに鳩胸川と合流する地点である。この地点で、球磨川は、大きく北に流路を変え、その屈曲部は直角に近い状態になる。さらにその下流で、北側に流れているのが西側に大きく流路を変える。この流路が直角に近い状態で変更する箇所には、旧河道や自然堤防が存在し、当然のことながら、洪水の危険性が高い所と考えられる。また、この地点が球磨川の主要支流である川辺川と合流する箇所の下流にある点も洪水の危険性を増すものである。

天道ケ尾遺跡は、この洪水の危険性が高い、流路が大きく変化する箇所を臨むことができる台地上にある。天道ケ尾遺跡に隣接する東下方には七地水田遺跡がある。この遺跡では、15世紀初期～16世紀頃と考えられる洪水層が確認されている[7]。また、正徳３年（1713年）７月12日～13日にかけて、人吉・球磨地域を襲った大風雨により、七地村（天道ケ尾遺跡が位置する台地の南側下方にある集落）も洪水による被害を受けた[8]。さらに、遺跡に近接した箇所の洪水の例ではなく、球磨川全体の水害を見ると、寛文９年（1669年）、寛延元年（1748年）、宝暦５年（1775年）、文政11年（1828年）、弘化４年（1847年）にも洪水が起こっている[9]。

以上（1）～（4）で検討したことをまとめると次のようになる。球磨川は県内でも洪水の危険性が高い河川である。そして、天道ケ尾遺跡が位置する台地の東側下方には、球磨川が大き



第91図　天道ヶ尾遺跡と河川関係図（土地分類基本調査図より）

く流路を変更する箇所があり、その箇所は過去に洪水による水害を受けている洪水の危険性が高い所なのである。

(5) 河川に対する祭祀について

水は飲料水や農業用水として、人間生活にはなくてはならない重要なものである。水に対する信仰は広い範囲にわたって行われており、例えば、井戸・池・湖・河川・温泉などがその対象になっている。洪水の暴威や渇水の危機などは、人間の力ではどうすることもできないものであると人々は考えた。それらの現象は、専ら神意に基づくものであると感じていた[10]。

河川に対する祭祀が行われた四万十川支流域に分布する遺跡について見てみる。四万十川の

支流である後川や東又川の流域に分布する原始神道期の祭祀遺跡は、河川に接した所に位置する。その位置は、本流の四万十川との合流地点に近い箇所である。四万十川の上流域は降雨量が多い地域であり、豪雨が降った場合、四万十川の水位は上がり、支流の水は逆流し、支流の河川流域は氾濫する。この支流域に分布する祭祀遺跡では、洪水を恐れて祭祀を行い、河の神を祭ったものであるとされている[11]。

天道ケ尾遺跡でも、前項の（1）～（4）でみた球磨川のもつ性格や遺跡をとりまく環境から、洪水を恐れて祭祀を行ったと考えることができる。天道ケ尾遺跡が位置する場所からは、球磨川が大きく流路を変化させる地点を臨むことができる。洪水を恐れての祭祀を行うのに、天道ケ尾遺跡は最適の場所に立地しているのである。

註（１）『球磨川流域地域環境利用ガイド』　熊本県　1985年

（２）註（1）に同じ。

（３）註（1）の中で、昭和53年～昭和57年の5年間の平均流量は、人吉で83.47 ㎥／secとなっている。

（４）註（1）に同じ。

（５）『熊本県地域防災計画（危険箇所編）』　熊本県　1985年

（６）『人吉・球磨地域土地分類基本調査　人吉』　熊本県企画開発部土地・地域政策課　1983年

（７）大田幸博　『七地水田遺跡』　熊本県文化財報告　第101集　1989年

（８）右山幸介　「下球磨地域」『熊本県歴史の道調査－球磨川水運－』　熊本県文化財調査報告　第99集　1988年

（９）荒川秀俊・宇佐美龍夫　「57筑紫次郎と球磨急流の水害」『災害』　日本史小百科22　1985年

（10）亀井正道　「池と沼と湖の信仰」　『季刊考古学』　第２号　1983年

（11）岡本健児　「四国」　『神道考古学講座』　第２巻原始神道期１　雄山閣　1972年

10. 土師器と祭祀について

天道ケ尾遺跡のⅡｂ層・Ⅲ層より出土した遺物の殆どは、前項７で見たように土師器の坏・皿類である。しかも、この遺物は、球磨川の洪水を恐れて祭祀を行った際に使用したと考えられる。ここでは、土師器と祭祀の関係について考えてみる。

国立歴史民俗博物館が全国の研究者に依頼して、弥生時代～奈良・平安時代の祭祀関係遺物出土地の調査を行い、その地名表を作成している。地名表を見ると、祭祀関係遺物・伴出遺物の一つとして、土師器が多く見られる[1]。

その土師器が祭祀遺物の主体となっている旧御射山祭祀遺跡を見てみる。この遺跡は、長野県霧ケ峯の山岳地帯（標高約1600m）にある平安時代～鎌倉時代の祭祀遺跡である。窪地とそれを北・東・西の三方から囲む階段状になったテラスが遺跡の中心になる。階段状のテラス部分は、斜面に土留めと考えられる列石が検出されていることより、人工的な遺構であることが確認された。中央の窪地部分の約575m²が調査され、出土した遺物の主体となるのは、約12000点の土師器坏・皿である。これらの他に、少数の青磁・常滑焼・灰釉陶器・古銭などが出土している。検出された遺構は、狭い範囲であるため遺構の全容は明らかでないが、柱穴様のピットがあり、掘立柱建物跡の存在が想定されている(2)。

この旧御射山祭祀遺跡より出土した土師器（かわらけ）を代表的な例として取り上げ、土師器（かわらけ）の性格について触れた論考がある。かわらけは、祭祀的性格の強いものであり、灯明皿や未使用のものが祭祀関係の遺跡から多量に出土する例がある。これは、かわらけが1回きりの使い捨て、もしくは未使用のままで投棄されるべき性格をもっているためであるとされている(3)。

また、かわらけは、素焼きの土器であることから、非常に汚れやすい。逆に、かわらけに汚れがないことより、未使用のかわらけであることが一目で判断できる。かわらけは、神と交渉する際に使用されるものであるからこそ、清浄さを保つことが必要である。そのために、未使用であることがが一目で確認できるかわらけを使用する。つまり、かわらけには、日常食器とは本質的に異なる呪術的な姿があり、使い捨ての器としての性格がある(4)。

天道ケ尾遺跡より出土した土師器にも、以上のような祭祀土器としての性格があると考えられる。このように考えると、天道ケ尾遺跡のⅡb層・Ⅲ層より土師器の坏・皿類が多数出土し、Ⅱb層・Ⅲ層出土遺物組成の中で、約96.94%を占めるのが理解できる。

註 (1)　『国立歴史民俗博物館研究報告』　第7集　附篇　国立歴史民俗博物館　1985年

(2)　金井典美　「長野県霧ケ峯旧御射山祭祀遺跡調査報告（第2次・第3次）」『考古学雑誌』第51巻第2号　1965年

(3)　古泉　弘　「Ⅵ鎌倉－江戸時代・2山上のまつり」『図説発掘が語る日本史』第2巻関東・甲信越編　1986年

(4)　藤原良章　「中世の食器・考〈かわらけ〉ノート」『列島の文化史』5　1988年

11．火と祭祀について

天道ケ尾遺跡のⅡb層・Ⅲ層より出土した完形もしくは完形に近い状態の土師器の坏・皿類のスス付着率は、前項7で見たように高い（約7割）。これらの灯明皿も祭祀の過程で使用されたと考えた。ここでは、火と祭祀について見てみる。

火の用途は、調理・照明・採暖・生産・防衛など広い範囲にわたっている。火は生活の中にあって、無くてはならないものである。その反面、火のもつ破壊的威力は大変恐れられ、火の発生する過程を科学的に認識できないために、火は神性化されていた[1]。

火に関する儀礼については、文献にあらわれた儀礼を検討し、次の四つに分類してある。(1) 鑽火の儀礼。(2) 火祭りの儀礼。(3) 通過儀礼における火の儀礼。(4) 火の神の崇拝儀礼。(1) は火鑽杵・臼や燧石などによる発火の方法を宗教儀礼としたものである。(2) は火を焚き、供物などを供えたり、焼いたりする農耕儀礼・雨乞い儀礼・祓禳儀礼などである。(3) は誕生・成人・婚姻などのさまざまな通過儀礼の際に、火を跨いだり、火であぶったりして心身を浄化・更新させる儀礼である。(4) は火そのものを崇拝して、火に関係する道具類を神体と見なし、供物・祈禱などの儀礼を行うものである[2]。

また、物質的な面から象徴的な面まで、火は一貫して基本的媒介としての性格をもつものである。日常生活の火としては、家族の生活を営むための要としての役割をもつ。社会的な面としては、生活を共にする人々の結合をもたらしている。また、宗教的・象徴的な火としては、神々と人間との仲介者である[3]。

このように、火は祭祀・儀礼と密接に結びつくものであり、神と交渉する際の基本的媒介としての性格をもつ。天道ケ尾遺跡での場合を考えると、洪水を恐れての祭祀は、上記の四分類の (2) 火祭りの祭祀にあたり、この祭祀で河の神（水神）と交渉する際に、神との媒介として、灯明皿に火を焚いたことが考えられる。

註 (1)　石部正志　「考古学からみた火」『日本古代文化の探究・火』　1974年
　(2)　松前　健　「文献にあらわれた火の儀礼」『日本古代文化の探究・火』　1974年
　(3)　清水昭俊　「火の民俗学」『日本古代文化の探究・火』　1974年

12. ヘラ切り底・糸切り底の土師器の年代観と建物について

天道ケ尾遺跡出土の土師器の年代はどのように把えてよいのだろうか。土師器そのものについては、熊本における編年の遅れや、地域的相違もあり、直接の時期を決定するのは難しい。そこで、同じ包含層（IIｂ層・III層）出土の須恵器・青磁の年代を検討し、それを基準にして土師器の年代を考えてみることにする。

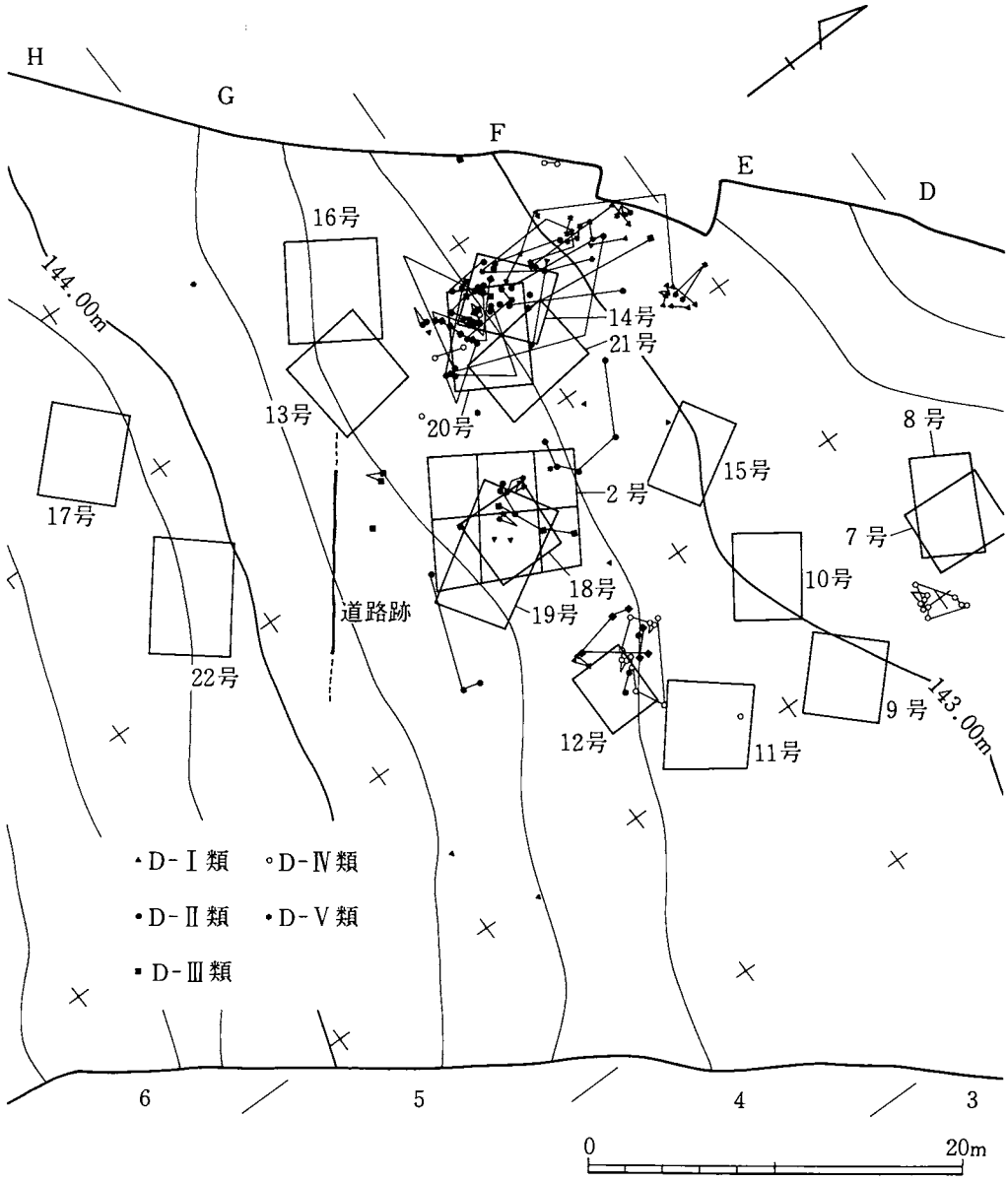
須恵器・青磁

須恵器の坏（第80図－１～３・４・６）は、下り山８号窯跡出土のものと胎土・器形などに類似点があり、下り山８号窯跡とほぼ同じ頃（９世紀）と考えられる[1]。出土した青磁の中で、器形全体が復元できた龍泉窯系青磁椀（第83図－１）は、13世紀前半の前後頃の年代が与えられる[2]。

ヘラ切り底の土師器と糸切り底の土師器

Ⅱｂ層・Ⅲ層では、ヘラ切り底の土師器が主体となり、糸切り底の土師器が少量含まれる。Ⅱａ層からは、糸切り底の土師器のみが出土する。

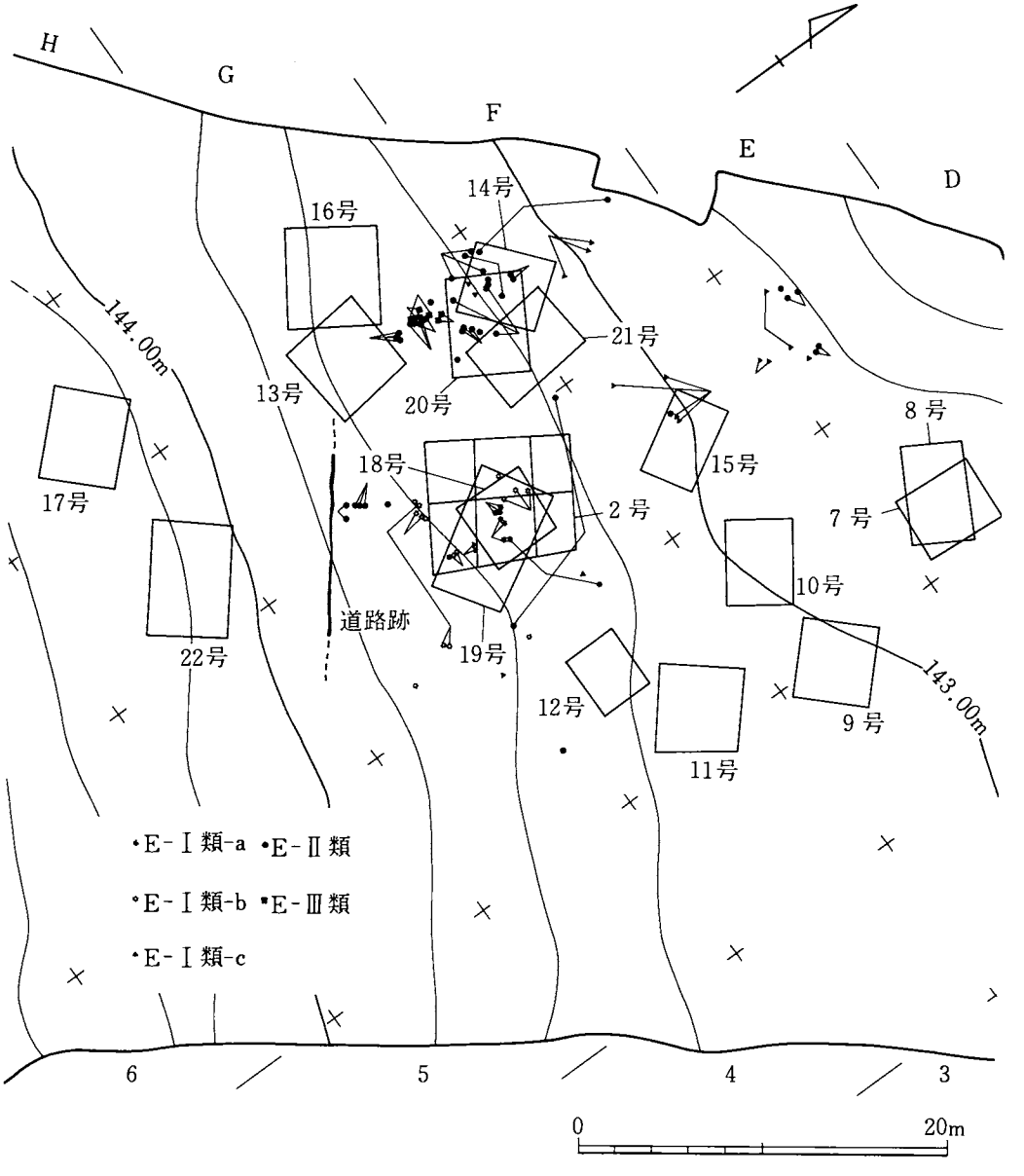
上述した須恵器・青磁の年代より、Ⅱｂ層・Ⅲ層に包含される遺物の時期幅が把握できる。おおよそ９世紀から13世紀前半の前後という時期幅のなかに、ヘラ切り底の土師器が含まれる。層位的に捉えていないが、13世紀前半の前後頃に、糸切り底の土師器が出現し、ヘラ切り底と糸切り底の土師器が混在すると考えられる。Ⅱａ層から出土する糸切り底の土師器やⅡａ層を



第92図　ヘラ切り土師器タイプ別分布図(1)

ベースにした層が覆土になる１号土壙（(1) の遺構群）より、一括出土した９個体の土師器は、13世紀前半の前後頃より後の段階のものということになる。

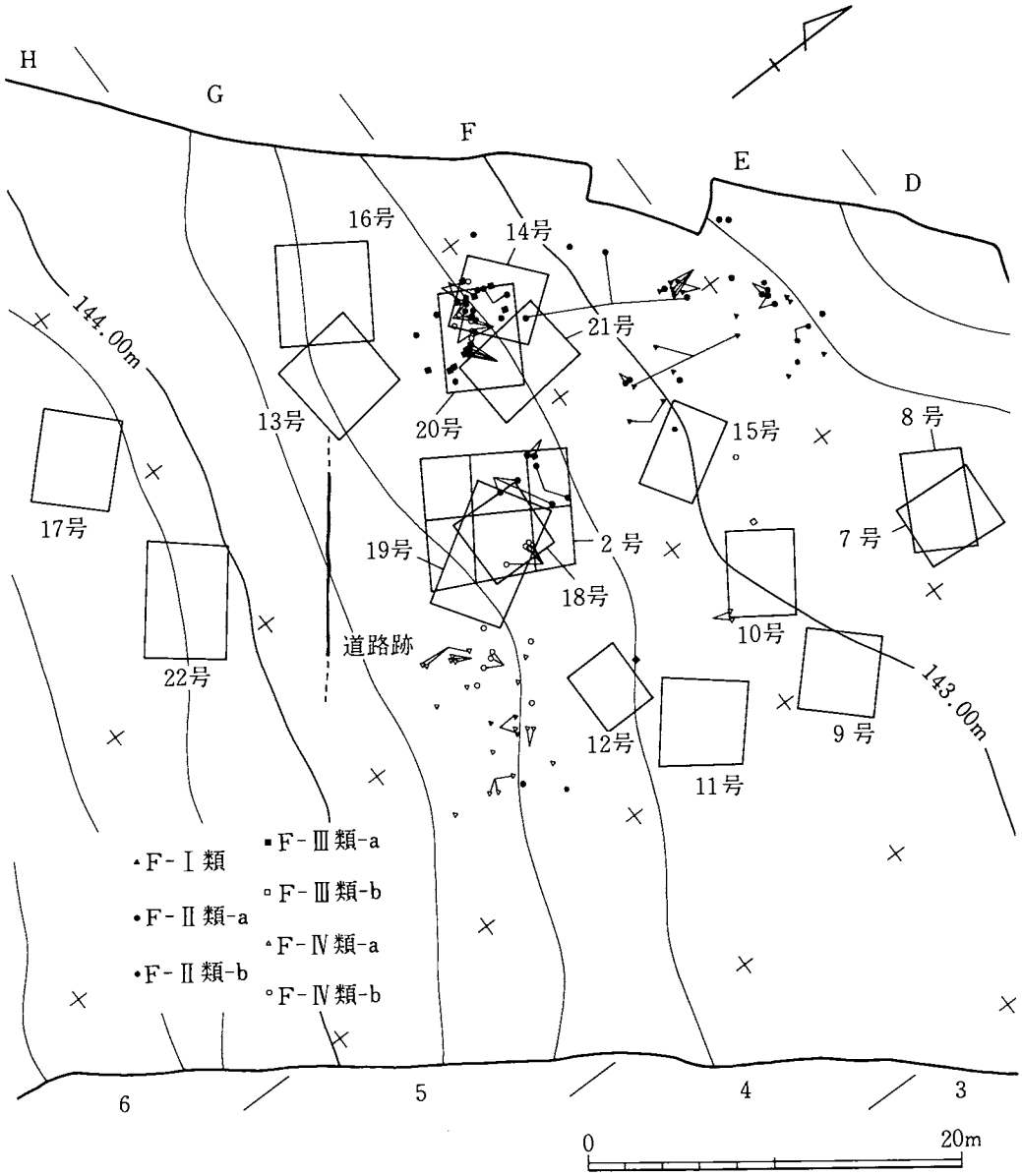
９世紀から13世紀前半の前後という時期幅の中で、ヘラ切り底の土師器について考えてみたい。最も古い形式と考えられるのはＤ－Ｖ類（Ｉ期）である。器形は定まっておらず、口径が大きく器高が高い。胎土、焼成はあまり良くない。これに類似する資料として、球磨郡錦町の下り山４号窯跡出土の一連の須恵器坏がある。これらは「焼成不十分で赤褐色の土師質を呈し、軟弱」[3]であり、土師器と見紛うばかりである。Ｄ－Ｖ類とは、法量やロクロによるナデ痕が顕



第93図　ヘラ切り土師器タイプ別分布図(2)

著な点に共通性がある。下り山４号窯跡のものには、Ｄ－Ⅴ類にしばしば見られるヘラ削りの技法は明確に認められない。しかし、下り山４号窯跡のものは、体部の底部との境を別に整形したものが多く、稜が認められる。この整形は、よりヘラ削り技法に近いものと考えられよう。とすれば地理的関係も考慮して、[4]Ｄ－Ⅴ類と下り山４号窯跡の資料は近似していると思われ、具体的な年代を与えるならば、下り山４号窯跡とほぼ同じ９世紀頃となり、先に示した土師器の時期幅の上限とほぼ一致する。

このＤ－Ⅴ類に形態や技法が近いものが、Ｄ－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の器高の高いタイプであろう（Ⅱ

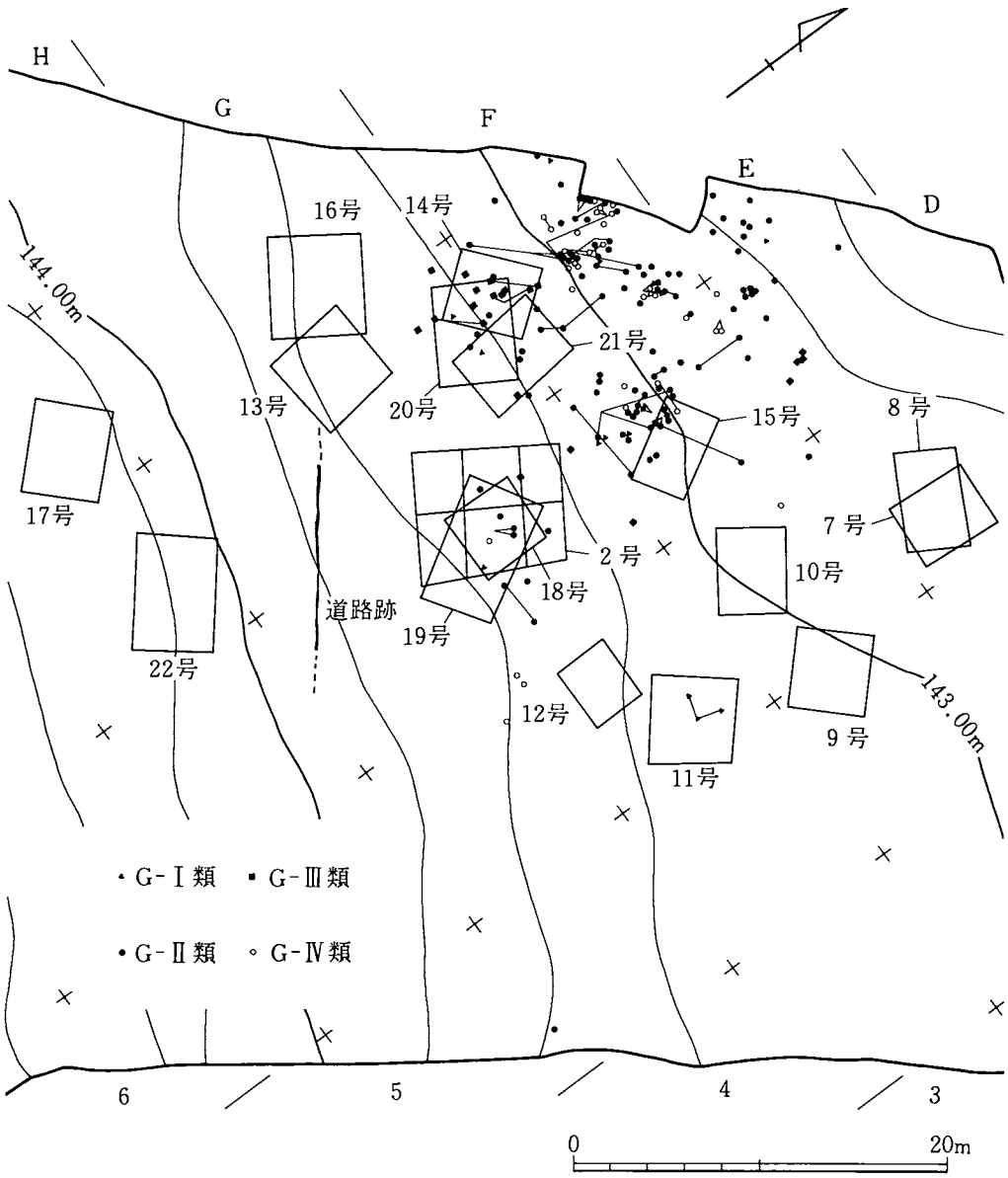


第94図　ヘラ切り土師器タイプ別分布図(3)

期)。口径はD－Ⅴ類よりやや小さいが、器高は大差なく、ヘラ削りが施されている。同じく器形や技法より、これに続くものはD－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の中間の器高のタイプであると考えている（Ⅲ期)。器形が規格化し、胎土・焼成の良いものが増え、ヘラ削りされたものは減ってくる。

糸切り底の土師器は、ヘラ切り底の土師器の新しい時期のものを考える際、ひとつの指標となろう。糸切り底のA類と法量的に近いものは、D－Ⅱ・Ⅲ類の中間の器高のタイプである。

ここでD－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の中間の器高のグループを詳細に見てみたい。内底の調整はD－Ⅰ類は主に不定ナデ（d）と内底全体の渦巻状のナデ（f）数例で、D－Ⅱ・Ⅲ類は調整dとロ



第95図　ヘラ切り土師器タイプ別分布図(4)

クロによる回転ナデ（g）である。そして調整gのものにはヘラ削りは伴わない。前述した糸切り底のA類は、ヘラ削りがなく内底は調整gである。するとD－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の調整dのもの（Ⅲ期a）とD－Ⅱ・Ⅲ類の調整gのもの（Ⅲ期b）に大別でき、前者が後者に先行するのではないかと考えることができる。そして、後者がヘラ切りの土師器の時期幅の下限に近いのではなかろうか。

今までヘラ切り底の土師器の中でも、「坏」に相当するものを取り上げてきたが、天道ケ尾遺跡では所謂「小皿」[5]という器形がない。小型のものとしてはG類があるが、法量を比較すれば[6]小皿ではなく小型の坏という感じを受ける。この坏と小型の坏という組合せは、天道ケ尾遺跡周辺の地域では時代が下がっても継続されたようで、当遺跡の1号土壙（(1) の遺構群）の他、大丸・藤ノ迫遺跡の10号土壙[7]や、中世城である高城跡[8]、里の城遺跡[9]等でも、この組合せが見られる。

今把えたD類における器形や技法の変化を基に、G類の中で古い要素を持つものを考えると、G－Ⅰ類とG－Ⅳ類となろう。G－Ⅰ・Ⅳ類は、器高は高く、ヘラ削りを施し、内底部の中心から口縁端までナデ上げることを基本（a・b）としている。G－Ⅲ類は器高が低く、ヘラ削りされたものの割合は減り、内底部は別に調整が施されている。形態的には後出する糸切り底の土師器のB類、C類と類似しているため、時代は下がるであろう。また、G－Ⅱ類は形態や内底の調整にG－Ⅰ・Ⅲ類両者の要素が混在しており、Ⅰ類からⅢ類への過渡的なもので、細分可能であると考えている。

さて、このG類の出現の時期はいつであろうか。大宰府では10世紀前半に小皿が出現する[10]。

G－Ⅰ類は、D－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の器高の高いタイプ（Ⅱ期）に形態や技法は近いようである。もしもこのタイプから派生したとすれば、G－Ⅰ類は遅くともD－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の中間タイプ（Ⅲ期）の時期に先行するであろうから、その出現を10世紀により近い時期として把えることは可能である。しかし、天道ケ尾遺跡のG－Ⅰ・Ⅳ類[11]と大宰府の小皿を分離する時期の土師器を比較するならば、時期差が認められる。

以上、D・G類を取り上げて、その時期差を推論してみた。それ以外のE・F類の中では、F－Ⅰ類、E－Ⅱ・Ⅲ類は、「坏」の変化の段階のひとつとしてよいと考えているが、どの段階であるかは決め難く、また、D・G類のバリエーションの中に含まれてしまうタイプもあると思われる。F－Ⅱ類－a・b、F－Ⅳ類－a、E－Ⅰ類－a・bは他に類例の少ない器形で、後述するようにその分布は限られた建物跡付近に集中している。そのため、各タイプの時期が明らかになれば、建物跡の時期が想定できる可能性もあるのだが、今のところ，9世紀～13世紀前半頃という時期幅内に納まるとしか明言できない。

以上のことをまとめて、Ⅰ期が9世紀頃、Ⅱ期が10世紀頃になり、Ⅲ期が11世紀～13世紀頃と考えている。

ヘラ切り底の土師器と建物跡について

ヘラ切り底の土師器の出土地点を、各タイプ毎に示したのが第92図～第95図である。

最も土器の集中しているのは、14・20・21号建物跡が重複している地区周辺である。ここには、D－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の器高の高いタイプ、D－Ⅱ・Ⅲ類の器高の中間と低いタイプ、E－Ⅱ類、E－Ⅲ類、F－Ⅱ類－a、F－Ⅲ類－aが見られ、墨書土器、黒色土器も集中している。

これらは、21号の西側、14号と20号の建物跡内部とその周辺に密集しており、21号の建物跡内部からは出土していない。ところがG類のうちG－Ⅲ類は21号建物跡の外側にかなりの割合で集中しているが、他のものは建物跡内にも若干見られる。またE－Ⅲ類は３つの建物跡の外側に分布している。ヘラ切り底の土師器全体の分布を見ても、21号建物跡内の土器の分布は、建物跡外の集中度に比べて希薄である。建物跡検出面と遺物出土面が異なるため、[12]即断することはできないが、この出土状況は21号建物跡の性格となんらかの関連があるのであろう。

この14・20・21号地区の北側には、D－Ⅴ類、D－Ⅰ類の器高が中間のタイプ、G－Ⅱ・Ⅳ類が集中して出土する地区（A地区とする）がある。D－Ⅴ類は14・20・21号地区の土器との接合関係を持つものが多く、14・20・21号建物跡に伴うものかもしれないが、A地区に建物の類があった可能性もある。

次いで土器が集中しているのは、２・18・19号の建物跡が重複している地区周辺である。ここでは、各種の土器が建物跡内部から外まで散在している。E－Ⅰ類－a・bタイプはすべてこの地区からの出土である。

この２・18・19号地区の東南部にF－Ⅳ類－a・bが点々と出土している。土器の集中度は低いが、何らかの意味のある場所であろう。

15号建物跡の西側部分からは、G－Ⅲ類を除いたG類がまとまって出土する。他はE・F類がわずかに見られ、D類はない。

15号の北西部にもF－Ⅰ類を中心として、E・F・G類が出土している地区があるが、地形的に15号との関係と、建物の類のあった可能性の両方が考えられる。

12号建物跡の北側部分には、D－Ⅰ・Ⅲ類の器高の高いタイプが見られる。また、２点出土しているD－Ⅳ類は口径15cmを越える大型のものである。ここではD類のみしか見られない。

以上、大まかな土師器のタイプ別の分布状況を追ってみたが、これを先述したグループ間の時期差を併せて、建物跡間の時期差を検討してみたい。

D類の分布傾向をまとめてみる。A地区にD－Ⅴ類（Ⅰ期）とD－Ⅰ類の中間タイプ（Ⅲ期a）がある。12号にD－Ⅰ・Ⅲ類の高いタイプ（Ⅱ期）がある。14・20・21号地区にはD－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の高いタイプ（Ⅱ期）とD－Ⅱ・Ⅲ類の中間タイプ（Ⅲ期a・b期）がある。　すると、A地区→12号と14・20・21号→A地区・14・20・21号の順に建物が使われたこととなる。また、G類の分布傾向をまとめると、A地区にG－Ⅱ・Ⅳ類がある。15号にG－Ⅰ・Ⅱ類があ

る。14・20・21号地区にＧ－Ⅲ類がある。つまり、Ａ地区・15号→14・20・21号という順序となる。

Ｄ類とＧ類の時期的関係を考えると、Ａ地区のＩ期の段階は、Ｇ類は出現していない。すると、Ａ地区のⅢａ期の段階とＧ類のＡ地区の段階とが対応することとなり、Ａ地区→12号と14・20・21号→Ａ地区と15号→14・20・21号という順序となる。

さて、前に建物跡の主軸の方向によって、建物跡を３つの時期に分け、その新旧を推定した際[13]、12号の含まれるグループは15号の含まれるグループより古いと仮定した。土器の分析によってもこれと同じ結論に達したため、この仮説が正しいとすると、14・20・21号建物跡は21号→14号→20号という順序で建てられたことになる。これを推定した建物跡間の時期差に当てはめれば、Ａ地区（Ｉ期）→12号と21号（II期）→Ａ地区と15号（Ⅲａ期）→20号（Ⅲａ・ｂ期）という順序が考えられる。12号・15号は伴うと考えられる土器の数も種類も少ないため、建物の存続期間は短いと思われる。

2・18・19号地区では時期を判断でき得る資料が少なく、ここで多く出土するＥ－Ｉ類－ａ・ｂはススの付着していない土器を多く伴うため[14]、前掲した建物跡群とは多少異なる性格の建物跡を考えてよいのではないかと思っている。

註（１）　松本健郎　『生産遺跡基本調査報告書II』　熊本県文化財調査報告　第48集　1980年

（２）　前川威洋　『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』　第８集（下）　福岡県教育委員会　1978年

青磁椀はII－２類の土師器共伴の磁器として編年してあり、12世紀終末～13世紀前半とされている。

横田賢次郎・森田　勉　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４　1978年

青磁椀は龍泉窯系青磁椀のＩ－４類に分類され、12世紀中葉～13世紀初頭の年代が考えられている

（３）　註（1）に同じ。

（４）　直線距離で５km、同じ盆地内にある。

（５）１．前川威洋　『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』　第８集（下）　福岡県教育委員会　1978年

２．１によれば小皿の初現的なものは、口径11cm前後、底径８cm前後、器高２cm前後である。

（６）　法量的には、註（5）の１の分類の特小皿や九州歴史資料館による分類のⅢｂに近いが、これは大宰府では14世紀頃に普遍的に見られるようになる器形で、時間的にＧ類とは別のものである。

（7）　球磨郡山江村

木﨑康弘　『大丸・藤ノ迫遺跡』　熊本県文化財調査報告　第80集　1986年

（8）　球磨郡山江村

大田幸博　『高城跡』　熊本県文化財調査報告　第95集　1988年

（9）　球磨郡多良木町

大田幸博　「里の城遺跡」『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告書』　熊本県文化財調査報告　第51集　1980年

(10)　註（5）の1に同じ

(11)　G－Ⅳ類は、D・E・F－Ⅳ類との関連性を考えるべきであろうが、今回は、そこまで検討を行っておらず、技法的にG－Ⅰ類とほぼ同時期であることが想定できるのみである。

(12)　ここでは、建物跡分布と遺物分布との距離的関係により両者の関係を考えた。建物跡が重複している場合は、どの建物跡にどのタイプの土器が伴うかということまでは基本的にはわからない。

(13)　本文150～154P。

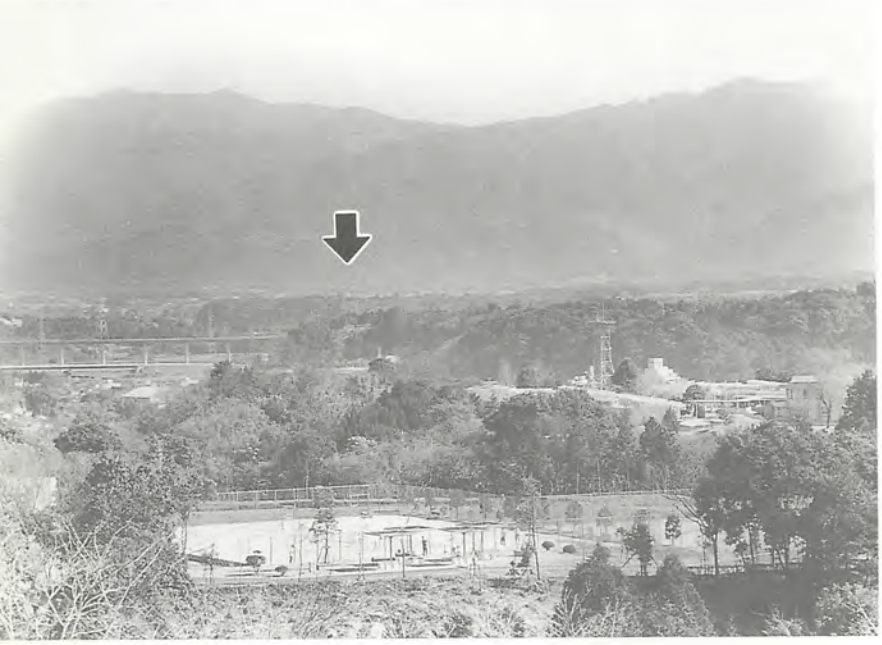
(14)　本文144P。また、本文171～173Pでススの付着していた土師器は、祭祀用であると推定している。土器は必ずしも完形品ではないので、欠損部にススが付着していた可能性はある。

図　　版

遺跡航空写真（下端が北側）
（共立航空提供）

図版 2

遺跡遠景
（東側上空から）



遺跡遠景
（西から）

遺跡近景
（西から）

実測地点①の基本土層（東から）

実測地点②の基本土層（東から）

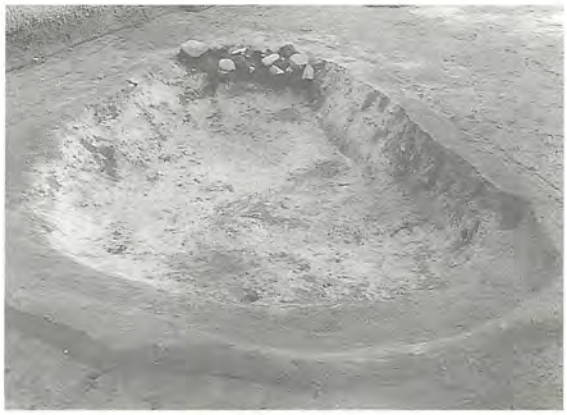
江戸時代の調査

1 号土壙検出状況（北東から）

1 号土壙完掘（北から）

2 号土壙検出状況（東から）

2 号土壙完掘（東から）



1 号不明遺構完掘（北から）

3 号～ 5 号溝跡検出状況（北東から）

図版 4

平安時代
〜
鎌倉時代
の調査

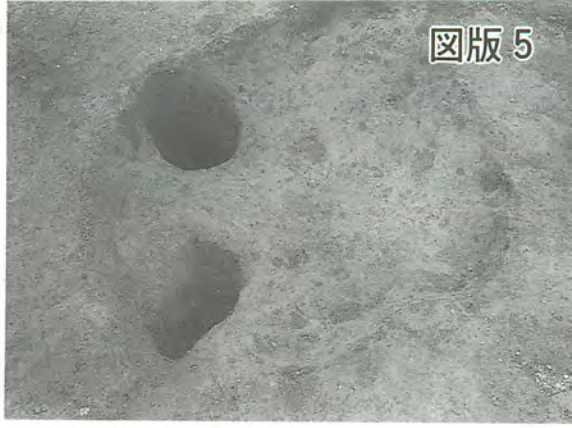
Ⅲ区遺構
検出状況
（北から）

Ⅳ区遺構
検出状況
（北東から）

1 号竪穴住居址遺物出土状況（北西から）

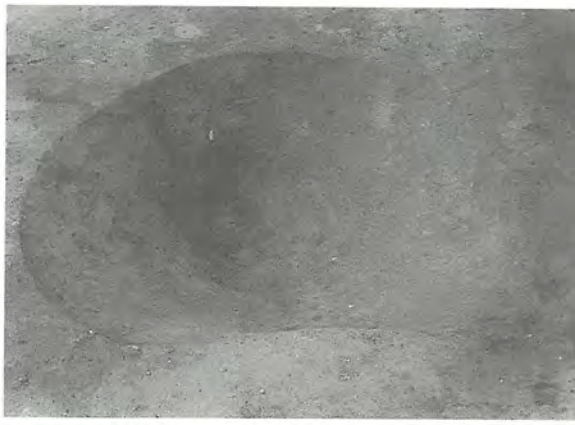
1 号竪穴住居址完掘（西から）

1 号土壙遺物出土状況（南から）

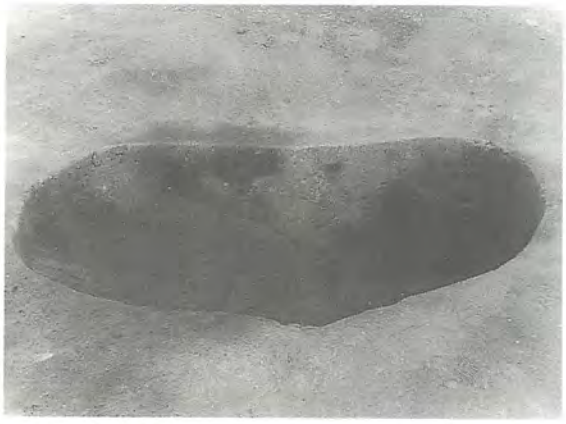


1 号土壙完掘（北東から）

2 号土壙完掘（北西から）



5 号土壙完掘（南東から）



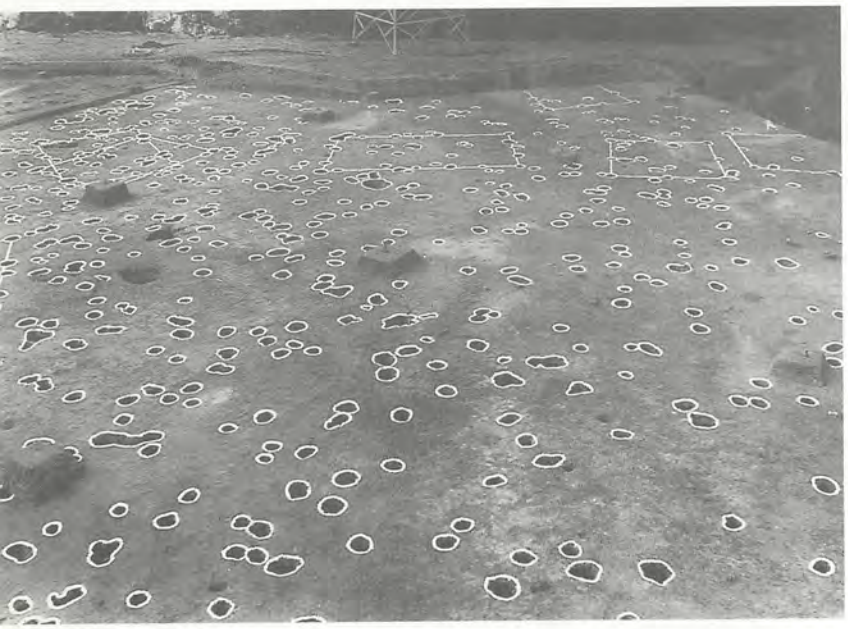
6 号土壙完掘（南西から）

1 号ピット遺物出土状況
（西から）

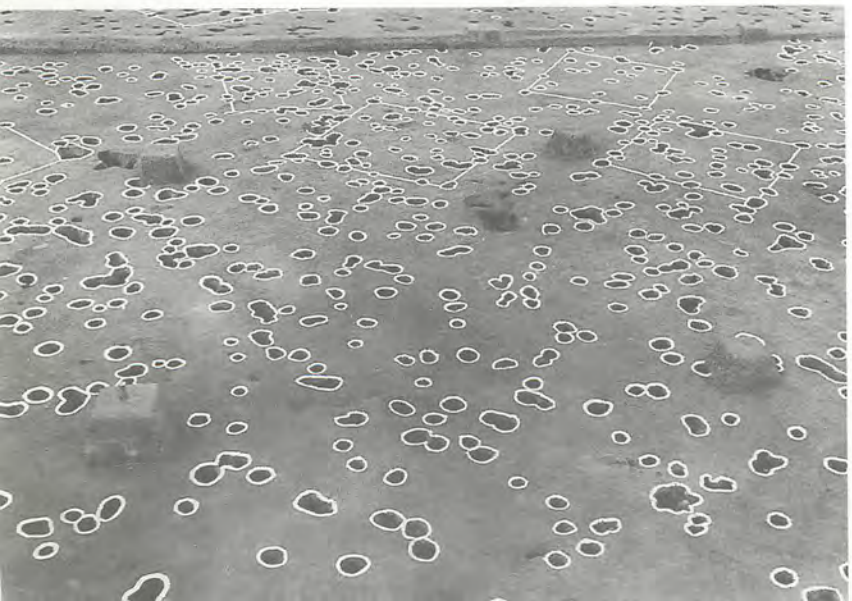
2 号建物跡（南西から）

図版 6

Ⅰ区遺構
検出状況
（南西から）



3号～8号掘立柱
建物跡とピット群
（南東から）



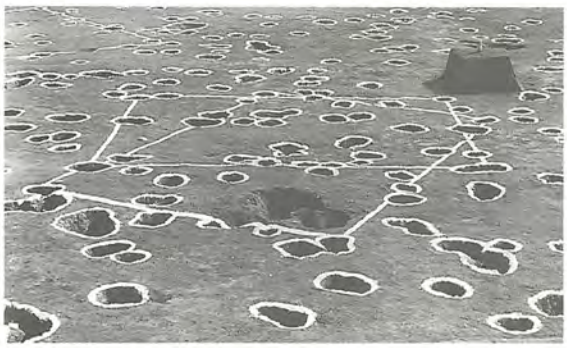
9号～12号掘立柱
建物跡とピット群
（東から）

3 号掘立柱建物跡（南東から）

4 号掘立柱建物跡（南東から）

5 号掘立柱建物跡（南東から）

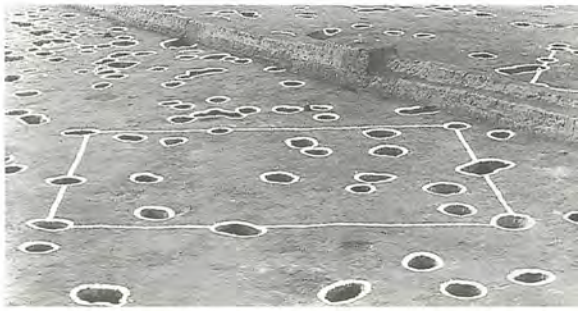
6 号掘立柱建物跡（南東から）



7 号掘立柱建物跡（西から）

8 号掘立柱建物跡（北東から）

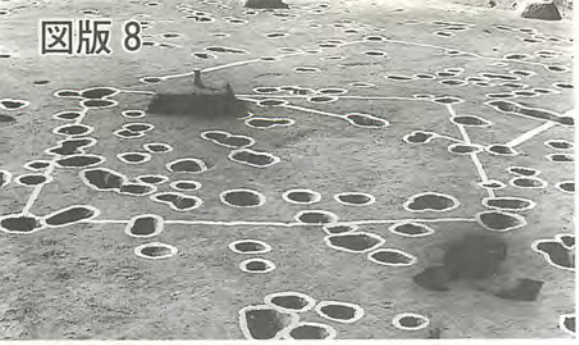
9 号掘立柱建物跡（北東から）



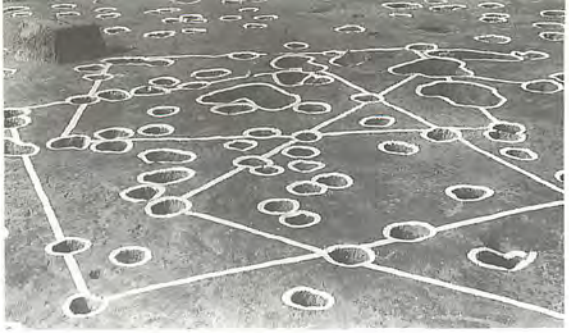
10号掘立柱建物跡（北東から）

11号掘立柱建物跡（南西から）

12号掘立柱建物跡（西から）

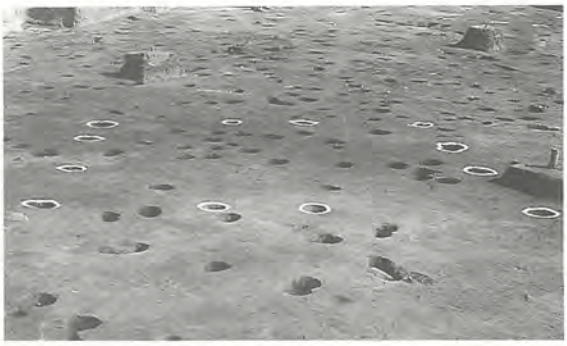


13号掘立柱建物跡（北東から）



14号掘立柱建物跡（南東から）

15号掘立柱建物跡（南西から）



16号掘立柱建物跡（南西から）

17号掘立柱建物跡（南西から）

18号掘立柱建物跡（西から）

19号掘立柱建物跡（南西から）

20号掘立柱建物跡（南西から）

21号掘立柱建物跡（西から）

22号掘立柱建物跡（南西から）

23号掘立柱建物跡（北東から）

7 号土壙完掘（東から）

8 号土壙完掘（東から）

9 号土壙完掘（南東から）

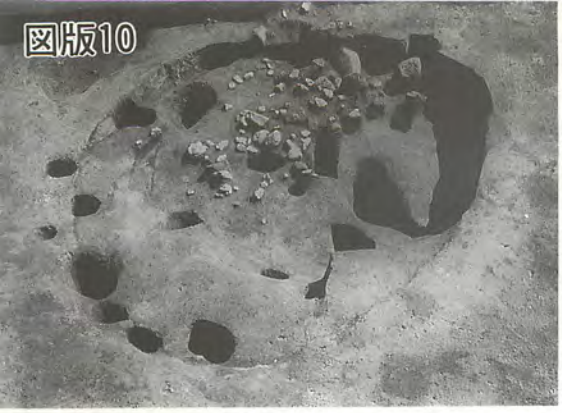
11号土壙完掘（北から）

12号土壙完掘（南から）

13号土壙完掘（東から）

16号土壙完掘（北から）

図版10



17号土壙完掘（西から）

18号土壙完掘（北西から）

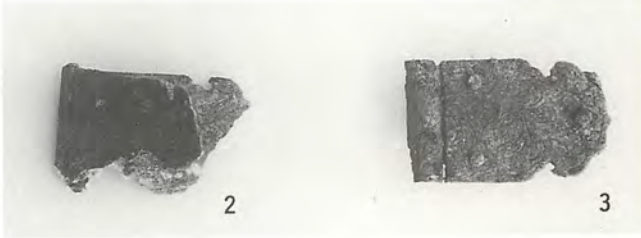
Ⅱ区
Ⅱb層・Ⅲ層
遺物出土状況
（東から）

F・G-8グリッド
Ⅱb層・Ⅲ層
遺物出土状況
（南東から）

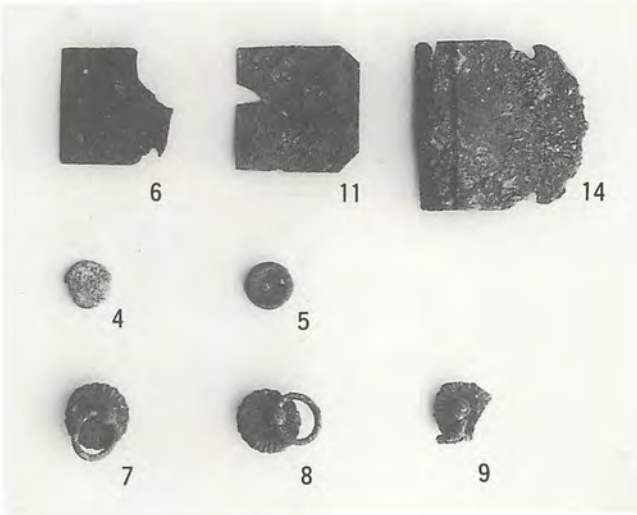
F・G-8グリッド
Ⅱb層・Ⅲ層
遺物集中区
出土状況
（南から）

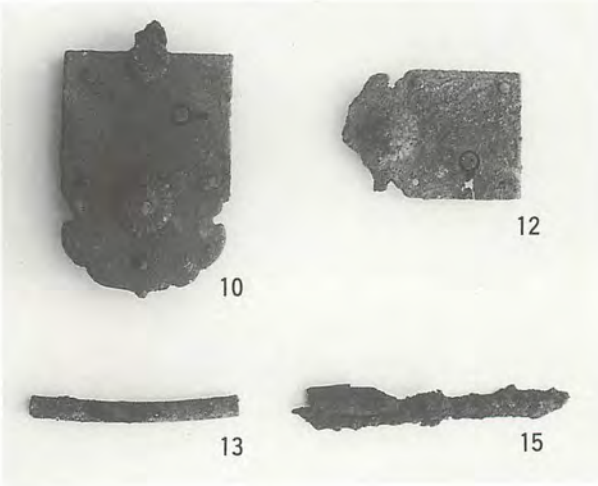
G-7グリッド
Ⅱb層・Ⅲ層
遺物集中区
出土状況
（南から）

F-8グリッド
Ⅲ層土師器
出土状況近景
（南から）

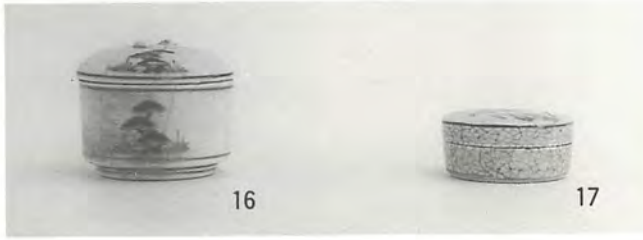


江戸時代の調査



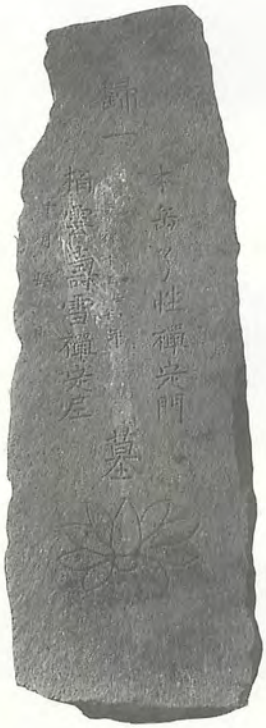


1 号土壙出土遺物



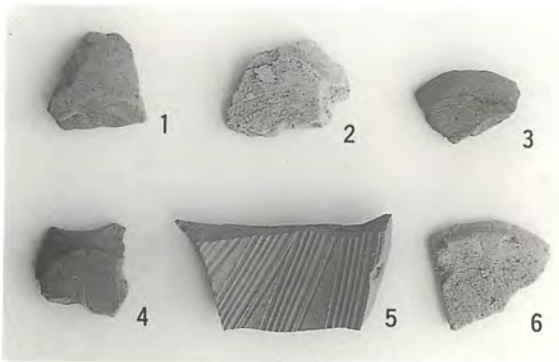
3 号溝跡出土遺物

空風輪



板碑

平安時代～鎌倉時代の調査

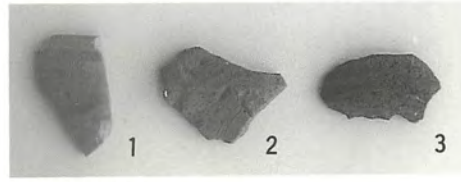


1 号竪穴住居址出土遺物

1 号ピット出土土師器

2 号建物跡Ｐ３出土土師器

1号土壙出土遺物



道路跡出土遺物

Ⅱa層出土土師器

Ⅱb層・Ⅲ層出土土師器D-Ⅰ類

61-4

61-8

61-13

61-18

D-Ⅰ類

62-2

62-4

62-5

62-12

62-13

62-15

D-Ⅱ類

63-11

63-14

D-Ⅲ類

63-4

63-6

63-3

D-Ⅲ類

63-8

64-1

64-2

64-3

64-4

64-10

D-Ⅳ類

64-6

64-11

D-Ⅴ類

64-13

64-14

64-15

D-Ⅴ類

64-19

65-1

65-2

E-Ⅰ類-a

65-10

65-13

E-Ⅰ類-b

65-16

65-17

E-Ⅰ類-c

66-5

66-17

E-Ⅱ類

66-7

66-10

66-16

66-8

E-Ⅱ類

66-24

66-25

E-Ⅲ類

66-26

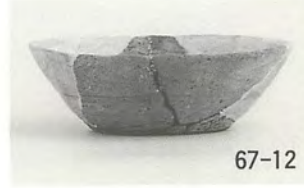
67-3

67-4

67-5

67-6

67-11


67-12

F-Ⅰ類

68-1

68-7

F-Ⅱ類-a

68-6

68-9

68-15

F-Ⅱ類-a

68-24

68-25

F-Ⅱ類-b

69-4

69-7

69-8

69-9

69-12

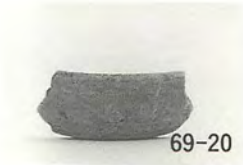
F-Ⅲ類-a

69-14

69-17

F-Ⅲ類-b

69-19


69-20

F-Ⅳ類-a

70-1

70-7

70-10

70-2

70-4

70-9

F-Ⅳ類-a

70-14

70-15

70-17

70-18

70-19

70-26

F-Ⅳ類-b

71-2

71-4

71-8

71-12

71-14

71-10

G-Ⅰ類

72-8

72-12

72-20

73-11

74-28

74-29

G-Ⅱ類

76-2

76-3

76-6

76-8

76-17

76-19

G-Ⅲ類

77-1

77-5

77-6

77-8

77-14

77-18

G-Ⅳ類-a

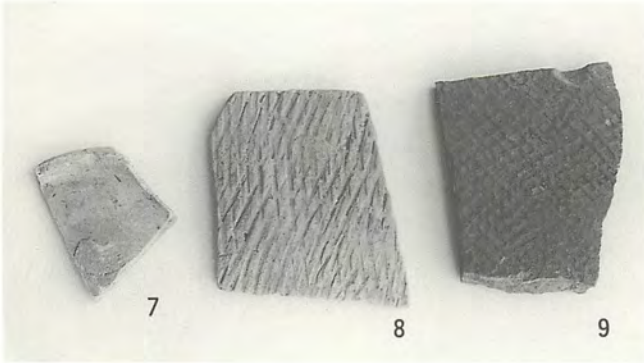
78-3

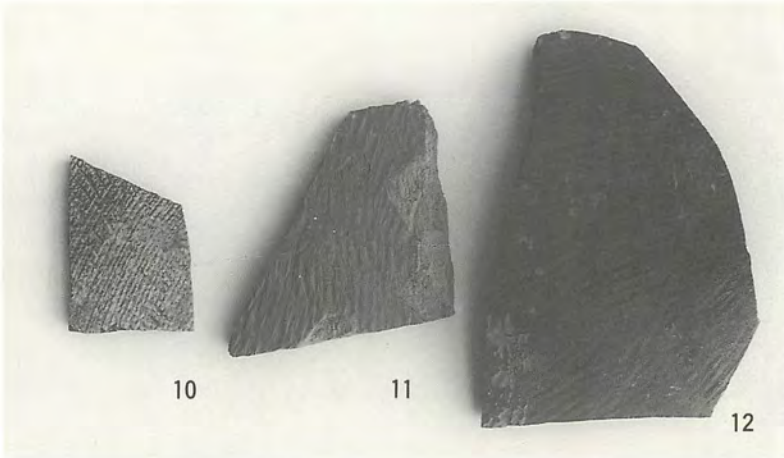
高台付土師器

78-7

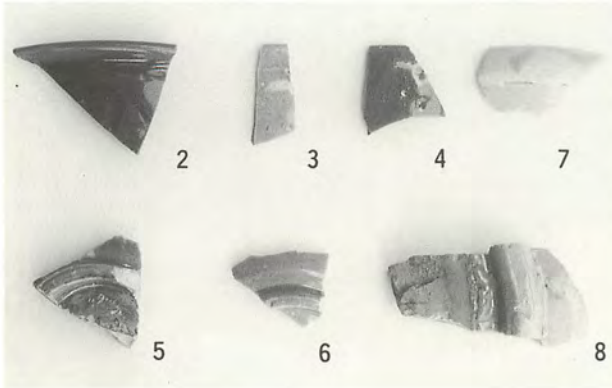
78-8

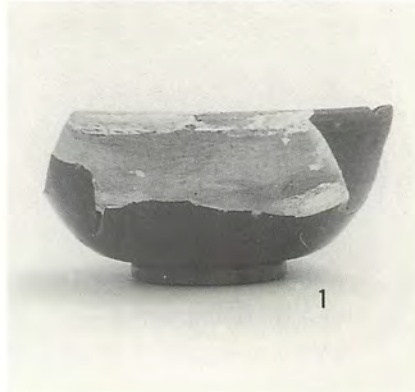
須恵器





須恵器

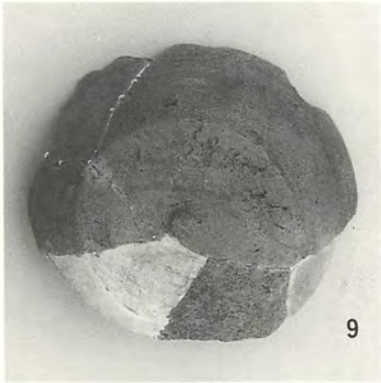




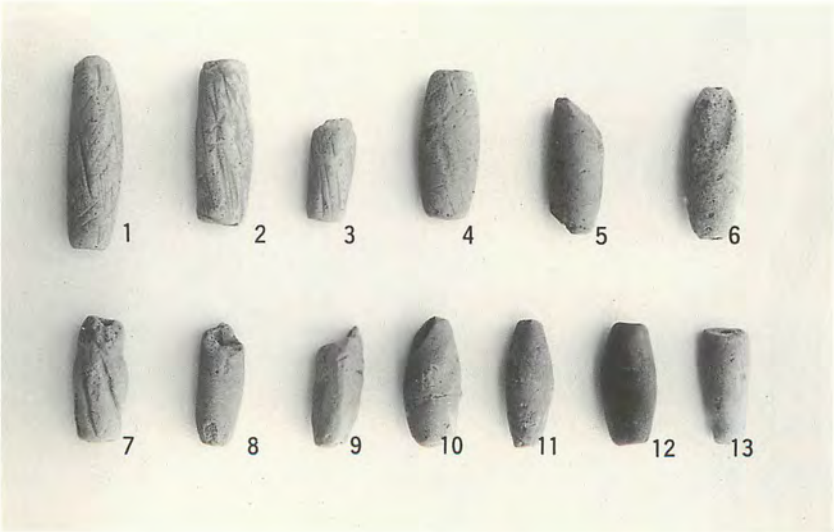
青磁・白磁

黒色土器

墨書土器



墨書土器



土錘

あ と が き

ようやく、天道ケ尾遺跡の報告書（Ⅰ）を作成することができた。発掘調査の現場では、真夏の炎天下や真冬の霜柱の立つ中、つらい仕事をしなければならなかった。この報告書に提示した調査の成果は、このような調査の過程を経てきて、得られたものである。また、遺物の整理では、水洗・注記・接合・復元など根気のいる仕事を続けてもらった。報告書の遺物実測図などは、遺物整理の基本的作業の成果によるものである。

発掘調査から報告書作成までのさまざまな過程で、色々お世話になった方々のご芳名を記して、感謝の意を表したい。

発掘調査　大槻正義・石工　強・福島敬証・松村　弘・村山時成・丸尾義介・青木タケ子・松村ハツ子・犬童輝子・山口ひとみ・緒方逸子・渡辺テル子・東　キリ・増田キヨ子・高田ユリ子・東けさ子・久本さつ子・山口カメ子・福口山マサ子・平原アサ子・中村キヌヨ・丸尾富美子・澤見すま子・澤見袈義・西村キクエ・一岡英子・荒毛ヒロ子・上原チズ子・中村正好・井川静香・石工タット・尾園スソエ・勝原カノエ・勝山タツ・勝山ミサ子・勝山良子・加村キミ子・迫田チフ・迫田初子・深水トシ子・松舟妙子・豊永京子・稲留チズ・新町いつ子・中島鶴義

遺物整理　吉長都美子・笠間いつ子・渕上慶子・永広絹代・水本寿美子・重永照代・塩田喜美子

熊本県文化財調査報告　第103集
天道ヶ尾遺跡

1989年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

63 教委・教文
② 004

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 103 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：天道ヶ尾遺跡 1
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/